神の愛した白い唄

紫羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の愛した白い唄

【Ｎコード】
Ｎ２２９２Ｋ

【作者名】
紫羽

【あらすじ】
其の歌声を持つ者、万の傷を癒す伝説の歌姫――。それは、神の大陸、ラルスヴァーナでの伝説の一つ。　希少な能力を持ち、故郷も記憶も失ったルイリ。次期皇帝を約束されながら、己の存在を見出すことの出来ないイアン。ある時ルイリはひょんなことからイアンの側室となり、彼の心に巣食う闇を知る。秘めた傷に触れようとする彼女を、彼は拒絶するが……。やがてこの二人の出会いは、大陸全土を、過去と未来を、神と人間を巻き込んだ、強大な事態へと発展していく――。　『諧謔曲』連載中。ようやく更新再開で

す。

0．　或る一族の最期（前書き）

初めまして、紫羽と申します！

初めてこちらで小説を書かせていただきます。とてもどきどきしております。

まだ未熟者ですので、見るに堪えない文章表現や誤字脱字等が多々あるかと思いますが、どうぞ温かい目で見てやってください。少しでも楽しんでいただければ幸いです。

タイトルは、序曲（オーヴァチュア）とお読み下さい。

※冒頭から残酷表現が飛び出します。苦手な方はご遠慮ください。

（２０１１．１０．２２．　数箇所微妙に修正）

0. 或る一族の最期

――燃える。

地面を染めていた赤黒い液体よりもなお濃い炎が、燃え上がっていた。

この一帯を、世界を、生命（いのち）を燃やし尽くすように、いたぶるように地面を侵食していく。

誰しもが見落としそうなほどちっぽけな集落は全て炎に包まれて、数多の命と共に黒煙を噴き上げていく。

月明かりもない真っ黒な夜空へと、更に黒い煙が、舞い上がる。

その光景を、彼女は見下ろしていた。ほっそりとした身体は倒れる様子もなく、崖の上に佇んでいる。

翻る長い髪は、今こそ輝きを失ったものの、見るものを惹きつけてやまない亜麻色（あまいろ）の髪。炎を反射して煌めく瞳は、海の底の底を映したかのような碧の色。白く美しい面差しは業火に照らされ、まるで神話に出てくる炎の女神のごとく神々しい。

「……」

彼女の瞳に浮かんでいるのは憂い、そして静かな怒りだった。

これほど距離を置いているのに、下から噴き上げる炎の熱は嫌と言うほど伝わった。夜の冷涼とした空気を打ち払う炎熱（えんねつ）は、容赦なく彼女の頬を叩く。それは炎自体の威力なのか、それともその中に

散った命ゆえか。

きっと、後者だ。

あの炎の中に、どれほどの尊い命が飲み込まれたことか。何の罪もなく、世界の片隅で密やかに生きてきた彼女達は、理不尽な理由で全てを奪われたのだ。

――やめて、助けて……！

――よせ、そいつは俺の妻なんだ！　殺さないでくれ！

――せめて子供だけは、見逃してっ！！

――いやだぁっ！　たすけてっ、おとうさん、おかあさん！！

そう懇願しては、無残に切り捨てられていった仲間達。

男は胸を幾つもの剣で貫かれ、女は散々陵辱（りょうじょく）された後に心臓を抉られ、老人はじわりじわりといたぶられた末に苦痛の果てでとどめを刺され、子供は全ての指を折られて泣き叫びながら息絶えた。

地獄だ。

彼女は声に出さずそう呟く。

「……かあさま……」

舌足らずで高い声が、か細く彼女を呼んだ。

視線を落とすと、まだ十にも満たない子供が、彼女と同じ碧の瞳を不安で潤ませながらじっと見つめている。薄汚れた服を掴む手は小さく、頼りない。幼い顔立ちはしかし愛らしく、将来を約束された美貌であることを物語っている。

彼女は薄く微笑み、目線を合わせるように膝を折った。少し湿った草が、膝にあたる。

「ルゥ。あなたのことは全てヴィンとシェルカに任せてあります。……どうか私の分まで生き延びて」
「いや……いや！　かあさまといっしょじゃないと、いや！！」

さらさらの亜麻色の髪を激しく横に振って、小さな子供は駄々をこねる。彼女は慈愛に満ちた眼差しで、そのすべすべとした頬を撫ぜた。

「我が儘を言わないで、私のルゥ。大丈夫、一人じゃないわ。ヴィンも、シェルカもいるのだから」
「いやっ！　るぅは、かあさまと、とうさまといっしょにいるっ！」

父様。

自分を、そして愛しい我が子を逃がす為に目の前で絶命した夫を思い出し、彼女は目を伏せた。

「父様のところへは帰れないわ」
「――奥方様」

低い女性の声にはっとして振り返ると、そこには十代半ばの少年と初老の女性が立っていた。

少年は短く切った亜麻色の髪を泥に汚して、何かをこらえたような表情をして唇を噛み締めている。精悍で端整な顔立ちをしているが、この状況においてそれを賞賛するものなどいなかった。

初老の女性は丸みの強い身体をした優しげな風貌。茶色の髪を後ろで結い上げて団子にしていると、実年齢よりも若々しく見える。

両者、衣服のところどころに赤黒い液体がこびりついていた。しかし彼女は、彼らが最も信頼の置く二人だと認識して、肩の力を抜く。

「あぁ良かった、間に合ったのね。ヴィン、私達の＜王＞。どうか、ルゥを……私達の＜姫＞を、守って」
「分かっています」
まだ幼さの残る顔立ちに似合わない殊勝な面持ちで、少年ははっきりとうなずいた。彼女はゆっくりと視線をずらす。
「シェルカも。まだ未熟な＜王＞を、導いてやってね」
「奥方様のご命令なれば、必ず……」
深々と腰を折った初老の女性の頬は、涙で濡れていた。
彼女は視線を戻し、大きな瞳からぽろぽろと涙をこぼす小さな娘を、最後とばかりに抱きしめた。
「愛しているわ、私の可愛い娘。私だけじゃない。一族全員があなたを愛してる。あなたは、神に祝福されて生まれてきたのだから」
「かあさま……！」
きゅっとしがみついてくる細い腕に、思わず涙が滑り落ちる。このまま離れずにいられたらどれほど幸せか。溢れ出るあらゆる感情を体現するように、腕の中の愛しい存在（むすめ）をきつく抱きしめた。
「どうか生きる希望を捨てないで、人を信じる心を忘れないで。……どんなに絶望的な出来事に直面しても、決して負けないで……」
「わからない、そんなのわからないっ！　るぅは……るぅは、かあさまといたいのっ！！」
聡い娘。彼女は微苦笑を浮かべた。
普段ならすぐに聞き入れて、素直に応じるだろう。だがそれをし

ないのは、恐らくこれが、永遠の別れだということを認識しているからだ。泣いてしまえば宥めてくれる。一緒にいる時間が長くなる。それを分かった上で、あえて駄々をこねているのだ。

「どうか聞き入れて……愛しい娘。あなたは一族（わたしたち）の希望。あなたが生きる未来を、私達が諦めるわけにはいかないのよ」

小さな身体に背負った運命（さだめ）はどれほど重く、娘にどれほどの苦痛を強いるだろう。同時に、その運命の引き寄せる無限の可能性と希望も計り知れない。

それを見届けることが出来ないことが、何よりの心残りだ。

「ルゥ。辛い時はね、唄を唄って」
「うた……？」

そうよ、と頷く。涙に濡れた頬を優しく拭う。潤んだ碧は、何よりも鮮やかだ。

「母様が唄っていた唄を思い出して、唄ってちょうだい。あなただけじゃない、皆を癒すことが出来るから」
「わたしがうたえば……みんなしあわせになる？」
「えぇ、もちろんよ。あなたの唄はこの世界の誰にも負けないわ。本当よ」

それは、紛れもない事実。
娘の歌声は、言葉どおり万人を癒すことになるだろう。

「奥方様、敵が――すぐそこに！」

シェルカが悲鳴に似た声をあげた。声の先にあるのは暗黒を体現したかのような深淵の森。そこからは何の足音も聞こえなかったが、シェルカが言うならば間違いない。

すぐにさっと顔を上げて、縋りついてくる身体を引き剥がす。

「すぐに此処から逃げなさい。少しだけでも、私が食い止めます」

「いやっ、かあさま、かあさま！！」

いきなり引き離されたことで不安感が膨らみ、子供は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、金切り声を上げて母を呼ぶ。彼女はあえてそちらには視線を向けないで、手に持っていた小刀で自分の髪を何房か切り取った。そして、少年に差し出す。

「これを。……少しは、資金の足しになるでしょう」

「でも、」

その逡巡を遮るように、少年の身体を抱き寄せた。いつの間にか彼の背は、自分のそれを越えていた。

「ヴィン、……いえ、ヴィンセント。生き延びるのよ。何が何でも、生き延びて。そして、ルゥを守ってちょうだい」

「……はい。一族の誇りに懸けて、この身と一生を懸けて守り抜くと、ここに誓います」

「ありがとう、ヴィン。後は任せたわね」

少年は強くうなずき、暴れる子供の腕を掴み、半ば引きずるように歩かせた。

「ルゥ、来い！　すぐに追っ手が来るぞ！」

「いやだぁ、るぅはかあさまととうさまと、みんなといっしょにい

るっ……！」

少年は痛むような表情をして、細い肩に両手を置く。

「もう分かってるはずだろう？　皆はもう死んだんだ。誰も残ってない。残ってるのは……おれ達だけなんだよ」

「ちがう……ちがうよ。みんないきてるもん。るぅをびっくりさせようとしてるだけだよ」

「――っ、いい加減にしろ！　皆の犠牲を無駄にしたいのか！！」

目を吊り上げ、苛立ちを隠そうともせずにそう叫ぶ。いつもは穏やかな少年が怒鳴ったことが衝撃だったのか、幼い少女は僅かに呆けた。

「さぁ、行って！」

彼女が声を張り上げると同時に、少年は小さな身体を抱きかかえて敵が向かって来る方向とは違う森林へと走り出した。シェルカがその後を追う。

「いやぁ！　とうさま、かあさま、みんなッ！！」

泣き叫ぶ娘の声が、少しずつ遠ざかる。三人の影はまるで、森林が自ら隠すように溶け込む。

聞こえるのは、幼い泣き声。

あぁ、もっと目に焼き付けていたいのに。もっと見ていたいのに。これが最後だなんて、思いたくないのに。

彼女はこぼれる涙を拭いもせずに、見えなくなる愛しい子供に向かって声を張り上げた。

「生きて、ルイラシエル！！」

一族の、唯一の光。
どうか、生き延びて――。

切なる願いを託した光は、やがて見えなくなり――、彼女は近づいてくる足音に、毅然と顔を上げた。手にした小刀に力をこめ、美しい容貌を鋭くした。

視界に映るは、鉄の鎧。彼女が崖に立っているお陰で、少年達が逃げたことには気付いていないらしい。
背後で、ごうごうと燃える炎の音が聞こえる。背中を焼くような熱を感じる。風に乗って、死体が焼ける匂いさえ漂ってくるようだ。

少し目を通すだけでも、森から現れた甲冑（かっちゅう）の軍隊は二桁を優に超える。
勝ち目はない。

だが。

「私達の誇りを、汚させはしないわ」

彼女は極限まで己の内に眠る能力（ちから）を研ぎ澄まし、言い放った。
ただ一つの存在のために、立ち向かう。

純情で、無垢で、優しい＜歌姫＞の為に。

―――――――――――――――

糸のような月が昇る夜だった。

神に愛され、人間に憎まれた、ある一つの一族が、滅んだ。

それは全ての序曲（オーヴァチュア）。

0.　或る一族の最期（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました！
プロローグだと言っていながらとても長ったらしいですね。もっとコンパクトにしたいですが……！
こんな話ですが、感想、誤字・脱字等をいただけましたら泣いて喜びます。飛び跳ねます。

ついでにちょろっと蛇足補足。
序曲……オペラの開幕前の音楽。また、一連の事柄の始まりの意。
オーヴァチュア（某百科事典抜粋）

1．　死の淵に響く（前書き）

タイトル読みは前奏曲（プレリュード）です。どうぞよしなに。

（２０１１．１０．２２．　四千年→二千年に修正）

1. 死の淵に響く

かつて、人間と神は共生していた。

神は人間を愛し、人間は神を敬った。

しかし欲深い人間は、いつしかこの世界を自分達だけで統べようと考えた。

邪魔者となった神を追い出すべく、人間は彼らに刃を向けた。

神は怒った。

大地は鳴動し、海は荒れ狂い、天は割れた。

それが、『天地の怒り』と呼ばれる伝説。

いつしか神々は地上から姿を消し、残ったのは神が残した人外の能力（ちから）。

神の加護を受ける大陸、ラルスヴァーナはそこから歴史が始まったのである。

月日は二千年後へと流れる。

―┼―┼―┼―┼―┼―┼―┼―┼―

……血の臭いがする。

どこまでも濃く深い、闇の臭気。鼻どころか、全身にまとわりついて離れない忌まわしいモノ。内臓まで腐りきっているかのような臭いに、吐き気がする。身体が動かせない。全身が鉛でできているかのように重い。まるで沼に沈み込んでいくようだ。

彼は荒い息を吐きながら、埋め尽くされていくどろりとした液体に舌打ちした。じくじくと痛む傷口に反比例しつつ、遠ざかる意識。

血の臭い。　吐瀉（としゃ）物の臭い。　闇の臭い。

――死の臭い。

なるほど、死とは案外あっけないものだ、と虚ろな頭で考えた。そうするとあれか、今までの人生が一気に流れる走馬灯とやらもあるのではないだろうか。

紗のかかる視界でゆっくりと目を閉じてみるが、頭の中で広がるものは皆無だ。今まで自分が過ごしてきたこと、見てきたもの、聞いてきたもの、感じてきたもの……、何一つ、脳内にめぐらない。

……あぁ、俺はここまで空っぽだったんだな。

乾いた嘲笑を浮かべた。

後数分の命なのだから、何も考えまい。彼は考えることを放棄してただ瞳を伏せようとした。

微かに人の気配がして、細く息を呑む音が聞こえるまでは。

長年培われてきた本能が身体を突き動かし、彼は理性が追いつく前に瞳を見開いた。手近にあるであろう愛刀に手を伸ばそうとする。

「……っく……！」

しかし身体に刻まれた深い傷はその動きに従うことができず、痛みを容赦なく引き起こした。低い呻(うめ)きが唇から漏れ、成すすべもなく膝をつく。

足音は近づき、やがて彼の目の前で止まった。歯噛みする。霞む意識を必死に組み上げながら、漸(ようや)く彼は前を見た。

目の前に、翡翠のように深い碧が、一対。絹糸の如き艶(つや)やかな亜麻色。花弁のような桃色。

（何だ。……魔物、か？）

はっきりとした輪郭は分からないが、彼よりも小柄な人間の形(なり)を

しているということは分かった。人に化けることができるのは上級の魔物だけだ。下等な魔獣がそのようなことをできる筈も無い。もし目の前にいるのが本当に魔物ならば、この傷で応戦するのは不可能に近い。

くそ、と毒づく。出血多量で死ぬのも嫌だが、魔物に襲われて死ぬなど、己の矜持（きょうじ）を地に落とすようなものだ。何としてでもいたぶられて殺されるのは避けなければならない。

せめて相討ちに持っていければ……と、頭の中で目の前の『敵』を始末する段取りをめぐらせている彼の上に、ふっと影が落ちる。

――突如、血の臭いにまじって、甘い香りが漂った。

「――大丈夫ですか？」

冬の凍りついた湖に、水晶の鈴を落としたような音……否、声がした。血の臭気が充満するこの空間には、およそ不釣合いの声だ。ひどく透き通っていて、混じりけの無い……例えるなら白い声。

普段の彼であれば、それを即座に不審に思うだろう。いや、実際彼は不審に思っていたのだが、脳内に血が足りずにそれ以上考えるのが面倒くさかったのだ。代わりに、

「……この、傷で……、平気な訳、……あるか」

息も絶え絶えに、毒づいた。もはや痛みすらも麻痺してきた。目の前が霞む。思惟が混濁する。手足の感覚がなくなる。

今度こそ――、と思った彼の耳に。

「……そうですか」

水晶の鈴が、転がるような音がして。

一陣の、清涼な風が吹き抜けた。微かに、しかしはっきりと空気を震わせ耳に届くそれに、目を瞠る。

それは、唄だった。

薄暗い夜の道を照らす淡い月光のようで、優しい風のようで、煌めく宝石にも似て……凛とした花を思わせる歌声。その唄は、真綿で包み込むように穏やかに、優しく彼の全身を抱擁する。

突然視界が明瞭になる。耳鳴りがしていた聴覚は、鋭敏な感覚を取り戻した。破裂せんばかりに不規則に早鐘（はやがね）を打っていた心臓が、急速に鎮まる。光で包まれたような奇妙な感覚がした。

天にまで響くかと思われた美しい歌声は、やがて空気に溶けるようにして終わった。呆然とそれを聞いていた彼は、次いで己の身に起きた異変に驚愕する。

傷が、塞がっていた。死に際の魔物の爪に抉られたあの深い傷が、かさぶたも何も残さずなくなってしまっている。驚いて傷跡を探してみるが、見当たらない。申し訳程度に残ったのは、床に流れた血液だけだ。

これは一体何だ。

歌を聴いた瞬間、致死量の血液が止まり、深く刻み込まれた傷すら塞がり、そしてむしろ――はじめよりも、体力と魔力が戻っている。

これはどういうことだ。
あの唄が、一体なんだったというんだ？

（魔術、か……？）

ありえない。彼はすぐに否定した。この大陸に魔術はごまんと存在するが、治癒の術を使う者は見たことがない。それこそ大陸中を探しても、いるはずがないだろう。治癒の術はこの大陸において唯一にして致命的な欠落で、止血や痛み止めはできてもそれを治すことはできない。
違う、いるはずがないのだ。何故なら、それを使っていた唯一の一族は。

首をめぐらせて、目の前の人物をはっきりと見た。

そこにいたのは――、

1．　死の淵に響く（後書き）

亀更新と言っていた割には早い……（笑）　でも初めのうちはさくさく進めていきたいです。願望です。

う……、でもちょっとぐだぐだですね。すいません。ようやっと主人公登場です。

ちょろっと蛇足補足。

前奏曲……歌劇や組曲などのはじめに演奏される楽曲。俗に、大事件の起こることを予想させる小さな出来事の意にも用いられる。プレリュード。

前奏曲と序曲は被るかなぁと思ったんですが、そこは時間軸が違うというご愛嬌で。

2. 偶然の気まぐれ

――そこには、

息を呑むほど儚い印象を受ける少女がいた。

何物も侵せないほどの白さを放つ頬はいっそ病的なまでに青白い。灰色がかった淡い黄の髪は……亜麻色の髪、という表現が相応しい。簡素なワンピースの袖から覗く細い手首。薄く色づく花びらのような桃色の唇。

そして、けぶるような長い睫毛の奥にある、深い海の底を写したような碧（みどり）の双眸。

その空間だけがまるで神聖不可侵の領域であるかのように、少女は静かに佇んでいた。むしろ、彼女が本当にいるのかどうかも曖昧なほど、危うい存在に見えた。実際、細い身体の周りにはほんの少し姿を霞ませる仄かな燐光（りんこう）が取り巻いている。透明な美貌は、触れようとすれば瞬く間に消えてしまうと錯覚してしまうほど。

まさに、幻の名を体現しているかの如く、少女はそこにいた。

「……」

彼はしばし、目の前の細い立ち姿を凝視していた。なぜそうしたのかは分からない。もっともらしい理由をつけるとすれば、その儚くも確かな存在感と、深い碧の瞳に見入ったから。

しかし、途中から別の理由が介入する。

彼の眼は自覚があるほど鋭く切れ長で、その上、非常に奇異な色だ。

恐らく十人中十人が彼を見て第一印象は『怖い』と言えるほどのはず。普通の女性であれば見惚れる前に恐れおののくのが常である。

だが、少女の視線が逸らされることはない。漣(さざなみ)一つ立たない水面(みなも)のように、翡翠色の双眸が彼を見つめる。表情もなく、静かに、それでも穏やかに。

徐々に不審に思い始めたころ、唐突に、桃色の唇がゆっくりと弧を描いた。

「……朝焼けみたい」

水晶の鈴の声。静かな水面に一つの雫が落ち、波紋を作っていくように、耳に残る声。間違いなく、先ほどの歌声と一致する。

「……何？」

「綺麗な紅(くれない)の色」

驚きを通り越して呆気に取られた。

こちらの瞳の事を見て言っているのだろうか、彼女は？　自分自身(それ)が最も嫌うこの色彩を、綺麗だとでも？

どうかしている。

「……そういうお前は……、海の底(お)みたいな色だな」

なぜそう口走ったかは分からないが、意識するまえに口から出てしまっていた。少女は微かに目を瞠った。

「そもそも何でこんな所にいる。ここは……」

言おうとして、自分がどういう場所にいるか把握していないと悟った。怪我で意識が朦朧としていたり目の前に幻だか現実だか分からない正体不明の少女が出てきたりでまだ状況を整理できていなかったのだ。

情けない、と内心で溜息を吐き、彼はようやく自分が座り込んでいた場所を悟った。

魔物を討伐していた森林のすぐ近くにあった簡素な廃屋だ。腹を抉られて身体を半ば引きずりながら辿り着いたんだったか。曖昧な記憶を掘り起こしてそう結論づける。

どちらにせよ、このような少女が来るところではない。

「……若い女が来るような場所ではないはずだ。お前は何者だ？」

やはり魔物か。

彼は警戒を強くして、手元にあった愛刀を握る。この傷の完治も、この少女も、全て幻なのかもしれない。上級の魔物ならばそういうこともやってのけるだろう。隙を見せてはいけなかった。

再度目元を険しくした彼を、少女はきょとんと首を傾げて見返した。

「貴方は誰？」

「……は？」

「貴方は、誰ですか？」

もしや、言葉がわからないのだろうか。どう考えても先に質問したのはこちらのはずだ。

文句を言おうとしたが、真っ直ぐに彼を見つめる碧の瞳に何もいえなくなる。その二つの光は、不思議と引き込まれるような何かがあった。

貴方は、誰。

俺は――俺は。

「……俺は、」

『――殿下、イアン殿下！！』

名乗ろうとした彼――イアンの声は、脳内に直接響いてくる【声】に遮られた。きぃんという耳鳴りと共に、頭を鈍器か何かで殴られたかのような衝撃が奔る。思わず耳を押さえて低く唸る。

少女はいきなり目の前の男が頭を押さえだしたので、困ったようにイアンを見つめている。無論彼女には何も聞こえていないし、頭痛もしない。

これは脳へと直に声を送る、奴特有の能力である。

『殿下！　……まさかホントに死んだりしたのか？』

『そんな訳があるか』

奴にしては珍しく焦っているのか、能力の広げ方が若干雑だ。イアンはその雑さに乗っかり、同調する。

『おっと殿下！　死んでないみたいですね良かった。で、どこにいます？』

『やかましい。まず感度を下げろ。うるさくてたまらない』

『おっとすいません。……いやー、結構【声】飛ばしてたんですけ

どね。ようやく引っかかってくれましたねー。で、どこにいます？』
『森林近くの廃屋だ。森に入る直前の』
『あぁ、はいはい。こっちからでも確認できますよ。つか殿下、そんなに魔力使ってて大丈夫ですか？　腹に穴空いてるでしょ？』
『来てから言え』

面倒くさかったので、接続を断つ。ちなみに今の会話は、音として発せられた会話ではない。
すると数分と経たないうちに、朽ちかけた廃屋の扉が思いっきり開かれた。それはもう思いっきり開かれたので、傍らの少女の肩がびくりと跳ねた。

現れたのは茶髪の青年。褐色の肌に幾つもの切り傷を作っているものの、顔のつくりは端整で育ちのよさを強調させる。無駄な筋肉を削ぎ落とした体は決して軟弱な印象は与えない。さながら、豹のようなしなやかさを持っていると言えるだろう。
側近の青年はイアンの姿を認めるやいなや、大袈裟気味に溜息をついた。

「やれやれ、こんなところにいましたか。とりあえず生きてて何より。で、お怪我は……――って、え！？」

灰色の瞳は、イアンの姿を見て真ん丸に見開かれた。それもそうだろう。先ほどまで腹に風穴（かざあな）をあけて血にまみれていたのに、今や傷すらすっかり塞がりぴんぴんしているのだから。

「で、殿下……お怪我は？」
「治った」
「治った、って……あの傷そんな短時間で治る代物でしたっけ？」
「治ったモンは治った」

「はぁ……。……っと、あれ？」

呆れたような、釈然としない返答を返した青年は今度はイアンの横の見覚えのない少女を見て声を上げる。

廃屋と少女。あまりにも場違いな組み合わせを不審に思ったのは同じのようだ。

「こちらのご令嬢は？」

「っ、」

翡翠の双眸が萎縮したように震えた。イアンはちらりと少女を横目で見て、ゆっくりと息をつく。

さて、どうしたものか。このまま捨て置くのも一つの選択肢だ。だが、彼女には不審な点が多すぎる。亜麻色の髪といい、先ほどの能力といい、どう考えても普通の人間ではないだろう。

ではどうするか。小間使いとして傍に置くのも一手。他にあるとすれば……。

「レン」

「はい」

「彼女はオレの側室だ」

「はい。……。……――はいっっ！！？」

素直に返事を返そうとした青年、すなわちレンは、たっぷり二呼吸分の間を置いて素っ頓狂な声を上げた。

「ちょ、ちょっと待ってください殿下！　そ、側室！？　どう考えても今が初対面じゃないですか！」

「今までの側室もそういうものだっただろう」

「そうですけど……ってそうじゃなくて！　あからさまに彼女の意思は全面無視だろ!?　その場の流れで決めるなって!!」
「説教するな、やかましい」
「謝るよすいません。……で、まだ続けるけど、皇后陛下に何て言うつもりだ！　またお小言喰らうに決まってるじゃんか!?」
「そこはお前が何とかしろ」

いつの間にか敬語が取れてしまっている説教に、五月蠅(うるさ)そうに応じる。だが、レンの抗議は火を吹くごとく留まりを知らず。

「恐れながら世の中には何とかできることとできないことがあるって知ってるか？　ていうかそんな小細工御免被(こうむ)る！　俺、まるっきりくたびれもうけじゃないか!!」
「そうか、ではこいつはこのまま見捨てておくとしよう」
「う、それは……」

女には優しいと専(もっぱ)らの噂であるレンは返答に行き詰まり、居心地悪そうに少女に視線を流した。彼からすれば、こんながんぜない少女を見捨てるのはとても後ろめたいのだろう。当の少女は、声も出せない様子でイアンを見ている。

「……殿下？」
「……シェリング皇国第三皇子兼皇太子、イアン＝シェリング。これが俺の名だ」
「皇太子、様……？」

イアンは、どこかぼうっとしている少女の瞳を覗きこんだ。

「名は何と言う」
「……ルイリ＝……レティシア」

（……レティシア？）

脳裏で、何かがちらつく。先ほどから浮上してくる可能性が、徐々に輪郭を帯びてくるように。

ではなおさら、この選択肢を変えずに済むようだ。

「では、ルイリ＝レティシア。お前はたった今から、このイアン＝ルシアディス＝シェリングの側室だ」

少女の瞳が、微細に動いた。それは戸惑いのようであり、諦めのようであり――、安堵のようであった。心なしか、微かに瞳の色が明るくなった気がする。先ほどの碧というよりも、若葉の緑と言った方が相応（ふさわ）しいかもしれない

少女はしばらくイアンを見つめていたが、やがて瞼が落ちたかと思うと、華奢な身体は糸が切れたように崩れた。イアンはその身体を難なく受け止める。傍目（はため）から見て細い身体は、思ったとおり軽かった。

「どっか打ってたのか？」

「緊張の糸が切れたか、単なる衰弱だろう」

「あ、そう。てか、本当に珍しいな。行きずりの少女を側室にするなんて。初めてだろ？　そういうこと」

陛下だったら普通にしてそうだけどさ、と呟くレンを一瞥して、素っ気無く言う。

「……別に。ただの、気まぐれだ」

死んだように気を失った少女の身体を横抱きにしてから、身を翻す。骨と皮と言ってもいい肢体はひどく貧相だった。

「行くぞ」
「行くってドコに」
「俺は重傷を負ったことになっているんだろう？　早く宮殿に帰ると色々面倒だ」
「あぁ、なるほど。屋敷に運ぶのか」
合点（がてん）がいった様子で頷いてから、仄かに疑惑の視線を向けてきた。
「それにしても、何で怪我治ってるんだ？　今回の傷は遠目から見てもかなり深かっただろ？」
「言ったはずだ、治ったものは治った」
「はぐらかさないでいただきたいモンなんだけど。……あ、もしかしてそのお嬢さんと関係があったりする？」
ぴくり、とイアンの表情が動く。それを敏感に察知したレンは、若干嬉しそうに笑った。
「あ、図星だ。どうなったんだ？　あんな短時間で、お嬢さんがお前に何してくれた？」
「無闇な詮索をするな」
ぴしゃりとレンの追及を跳ね除けてから、腕の中で眠る寝顔を見つめた。
透き通る歌声。その後に完治した傷。何か……何だっただろうか。いつか、どこかでそれを。
――其の歌声を持つ者、万（よろず）の傷を癒す……

（……まさか、な）

頭の中に浮かんだ他愛もない予測を打ち消して、イアンは彼女を抱く力をほんの少し強めた。

――＋――＋――＋――＋――＋――

少女は青年に出逢った。少女は一人だった。

青年は少女に出逢った。青年は孤独だった。

二人の役者が舞台へ向かう。

さぁ、狂乱の前奏曲（プレリュード）を奏でよう。

2．　偶然の気まぐれ（後書き）

今日中に投下できましたやったー！！
出来る時にやっとかないと、ホント放置しちゃいそうなので。

今更ですが、序曲とか前奏曲とかは一種の『第～部』だと思ってください。序曲は自分的には第０部です。

感想、誤字・脱字のご報告等、引き続き大歓迎でございます！
もちろんダメ出しでも大歓迎です！

（２０１１．１０．２２．　レンの発言の「レディ」を「ご令嬢」とか「お嬢さん」に変更）

2．5．　白い闇

白い闇がいた。
どれほど深い暗黒すらも飲み込んでしまう、真っ白な闇だった。

闇は泣いていた。
何が悲しいのかわからないほど、訳も分からず泣いていた。

――会いたい

何に。

――逢いたい

誰に。

孤独な問いかけに答える声は無い。

あぁ、悲しい。
あぁ、哀しい。
あぁ、愛(かな)しい。

純白の闇は、ただひたすらに泣いていた。

だがある時、ふと蠢く。

それは、ある音を聴いて。

それは、ある声を聴いて。

――あぁ

闇は万感の思いを吐き出した。

――ようやく、見つけた

長年焦がれて、ずっとずっと求めていたもの。

――私の可愛い、小鳥

闇はくすくすと笑った。闇はくすくすと嗤った。

迎えに行くよ。

直ぐに行くよ。

その唄を、ずっとずっと待っていた。

3.　夢の逢瀬、現の邂逅（前書き）

譚詩曲（バラード）と読みます。

それとタイトルは、夢の逢瀬（おうせ）、現の邂逅（うつつ　かいこう）です。

3. 夢の逢瀬、現の邂逅

ルイリは歩いていた。

暗いような、明るいような。
浮いているような、そうではないような。
広いような、狭いような。

そんな、曖昧な空間を。
これは……夢なのだろうか。

ふと、頭上から声が降ってきた。

『そう、これは夢だ。起きればすぐに泡沫（うたかた）のごとく消えゆく、一瞬の幻想（まぼろし）』

春先の雨のように、ゆっくりと心にしみこんでいくような声だった。低い声。温かい声。

――大好きな声。

「あなたは……？」

知ってる。
この声を、知っている。

「これは……私の夢なの？　それとも、あなたの夢？」
『どちらも同じだ。夢は繋がっている。今回は運良く、夢の回廊が開いたから助かった。もっとも、お前が能力を使ったのも加勢したのだろうけれどね』
「……あなたは、私を知ってるの？」

純粋な疑問を投げると、声は少し寂しそうに笑った。

『迂闊なことは言えない。私の一言で、お前は辛いことを思い出してしまうかもしれない』
「辛いこと？」
『何も知らなくていい。知る必要のないことだ』

ルイリは必死で辺りを見回す。だが不安定な空間には誰かの姿どころか影すら見受けられない。遠いような近いようなところから、声はどこからともなく響いてくる。

『この夢のことも、醒めればすぐに忘れるだろう。お前が気にかけることは、一つもないよ』
「待って、置いていかないで。……一人にしないで」

知らない声のはずなのに。喉の奥が震えるほどの懇願を、ルイリは絞り出すように零した。

すると、その不安を拭い去るように、何か温かいものがふわりとルイリを包んだ。馴染みない、しかし落ち着く香りが全身を包容して、思わず力が抜ける。？何か温かいもの？は、ゆっくりルイリの背中をさする。

『お前の泣く姿を見たくはない。苦しむ姿はもっと見たくない。本

当なら誰よりも傍にいるべきなんだが……』

声が、苦渋に満ちる。

『……『向こう』の動きが不確かな分、下手に動けない。……許してくれ』

「私は、……あなたの、何？」

抱きしめてくれている腕は優しくて、決して束縛しようとする力ではなかった。まるで、壊れ物を扱うかのように穏やかだ。

ふわ、と髪を優しく梳かれて、耳元に低い声がゆっくりと落ちる。

『お前は私の唯一であり全て。私が生涯を懸けて守ると誓った、無二の存在だ』

その言葉を聞いた瞬間、ふうっと全身が温かなもので満たされた。唇が思わずほころび、ルイリは見えない相手に向かって笑いかける。すると、向こうも笑った。

『そうやって笑っている方がいい。美しさに磨きがかかる』

「……お世辞でも……嬉しい」

『世辞なものか。お前は本当に美しくなった。悪い虫が寄り付いてしまいそうなほど』

手放しで賞賛されたのが気恥ずかしくて、ルイリは俯いた。

すると。

『……まずいな。そろそろ夢の回廊が閉じられる』

「え？」

緊迫した口調に聞き返そうとした途端、急激に、目の前に紗がかかった。

「っ……？」

声も出ないくらい体から力が抜けていく。ぐにゃりと空間が歪んで、何か別のものが外から急激な圧力をかけてきているようだった。す、と。大きい何かが頬に触れた。

『また……運が良ければ回廊は再び交わるだろう。今回のことは全て忘れなさい』

穏やかな笑み。優しい口元。

額に感じる、柔らかで温かい感触。

『愛しているよ、私のルゥ』

そして、自分と同じ――

「……あ、」

あなた、は――……

意識がゆっくりと浮上していく。ルイリは瞼を開いた。
目に飛び込んだのは、見たこともないような豪奢な天蓋（てんがい）。

「え……？」

微かに漏れた声は掠れていて、まるで自分の声ではないようだった。起き上がろうとしても、主軸となる腕に力が全く入らない。仕方なく狭い視野の中を彷徨わせてみれば、辺りはほの暗く、近くで薪がぱちりと爆ぜる音がした。ふかふかとした毛布もかぎ慣れない清潔な香りで、ルイリをますます困惑させた。

「目覚めたか」

低く落ち着いた声が、ゆっくりと耳に滑り込んでくる。それは紛れもなく男性の声で、ルイリは口から飛び出しそうになる悲鳴をおさえた。
気づけば、ルイリの視界は二つの赤と鈍く光る金に覆われていた。

「あ……」

呆然と、目の前の人物に魅入った。
二十代の半ば程度の、若い男。襟足辺りまで伸びている鮮やかな

金髪。すっと通った高い鼻梁（びりょう）、薄い唇。はっきり言えば人間とは思えない美貌だ。着ているものは飾り気のない漆黒の部屋着（へやぎ）だったが、それも上質な生地でできていることが見受けられる。

そして、逸らすことなくルイリを見ている双眸は、どんな赤よりも鮮烈な、紅。

まるで芸術品のようなその男の表情は、ぴくりとも動かない。

「ここ……は……」

相変わらず掠れた声しか出なかった。青年はその様子に一瞬眉をひそめたが、何事もないように言葉を紡ぐ。

「シェリング皇国の首都、ウィスリン。……此処は俺の屋敷だ」

「や、しき……？」

状況把握ができない。

皇国？　首都？　屋敷？　なんでそんなところに……私が？

身体が動かなくて焦れるルイリを見かねてか、青年は片手で軽く制する。

「お前の身体は過度の貧血で衰弱している。無闇に動かそうとするな」

まるで幼子（おさなご）に言い聞かせるように言われたので、ルイリはそのまま従った。

「わたしは……どのくらい……？」

「丸一日……といったところか。目覚める様子はなかったから放っておいた。まさかここまで寝るとはな」

ということは、何度か様子を見に来ていたらしい。ルイリは恥ずかしさに、顔の上までシーツを手繰った。青年はその意図を察したか否か、興が逸れたように彼女から視線を外した。

改めて、傍らに座る青年を見やる。唯一の光源である暖炉の篝火（かがりび）に照らされた青年の顔は深く影を落としていて、静かな表情とも相まって無言の凄みが醸し出されていた。とはいっても人間ではないような美貌は暗がりにも明らかで、女性には困っていないだろうとルイリはぼんやりと考えた。

……そうだ、そういえば、彼は。

「あの……、皇太子……殿、下……でしたよね？」

静かな紅の色が、微細に動いた。それが何の感情なのかは分からなかったが、ルイリが言い募ろうとする前に彼の口が開く。

「昨夜（ゆうべ）も言ったと思うが。俺はイアン＝ルシアディス＝シェリング。此処、シェリング皇国の第三皇子にして皇位後継者だが、これで満足か？」

あまりにもぞんざいな自己紹介に、しばらくの間返す言葉に逡巡（しゅんじゅん）した。第三皇子というだけでも身分が高いのに、その上皇太子だという。皇太子というのは次期皇帝と同義語だ。そのようなやんごとない身分の御方が、何故目の前に。

というかそんな高い身分を持っているのに、そういう紹介の仕方はどうなんだろうか。ルイリの固定観念からすれば、貴族や皇族はもっと自分の身分に誇りを持っているものかと思っていたのだが……。

未だ混乱の抜け切らないルイリを見やり、イアンは小さく息をつ

いた。

「他に質問は」

「い、いえ……何も」

というか、そんな言葉の裏に圧力をかけられたら質問があってもそう言えない。そうか、と青年は小さく呟く。

「では今度はこちらから質問させてもらう」

その言葉を聞いた刹那、首元に冷たさを感じた。

それが細身の懐剣だと気づいた時には、イアンはルイリの上に覆いかぶさり、冷酷な視線で彼女を射抜いていた。

―――――――――――――――

夢をみた。

起きればすぐに忘れてしまうと分かっていても、ずっと逢いたかった人に逢った。

現（うつつ）をみる。

鮮やかな紅が、私を射抜いていた。

そして奏でる。

夢と現に捧ぐ譚詩曲（バラード）を。

3. 夢の逢瀬、現の邂逅（後書き）

やっと更新できました……ふう。
すいませんお待たせしました。……すいません言ってみたかっただけです（土下座）っ！
どんどん分からなくなってきてる気が……気のせいですねきっと。

そして蛇足補足。
譚詩曲……物語的、文学的な雰囲気の器楽曲。ロマンチックで物語的な短い楽曲。バラード。

4.　褥の上の尋問（前書き）

褥（しとね）、とお読みくださいませ。

4. 褥の上の尋問

それは傍目から見れば、恋人同士の夜の戯れに見えたことだろう。
男は女の顔の横に手を突き、今にも口付けをしそうなほどに顔を寄せている。対する女はと言えば、拒みもせず、ただ来るべき口付けを従順に待っている。

あくまで、傍目から見れば――だ。

現実はそんな甘やかな想像とは程遠い、殺伐とした空気が流れていた。

まず違うことといえば、男の片手には細い短剣が握られ、その刃先が首筋に、ぴったりと女の首筋に密着している。それを掴む手は震えてもいなければ躊躇いもない。つまり、何か妙な動きをすればすぐにでも首を掻っ切ってやろうという意志が如実に伝わってくる状況なのだ。

そして、女……否、少女は従順に動かないのではなく、男の醸し出す途方もない威圧感に動けずにいるだけ。男を見つめる碧の瞳は、ただその強力な眼光に逸らせずにいるだけ。

こくり、と喉を鳴らす。その微かな動作でも億劫だった。

「な……に……？」

「何？　……こちらの台詞だ」

感情の無い、無機質な声。だというのに、真っ赤な瞳は夜目にも鮮やかで、目を逸らすことができない。薄い唇から零れる言葉は一

つ一つが重厚な密度を持っていて、ルイリに何かを言わせることを許さない。

「お前は何者だ？」

純粋な水でできた氷のような、背筋が凍りつきそうな声。

イアンは己の下で怯える少女を冷然と眺めて、鋭く目を細めた。

「あの時俺は瀕死の重傷を負っていた。己で死を覚悟したほど、だ。……だがお前が唄った瞬間」

チャキ、と冷徹な金属音が耳に響く。

「血が止まった。傷跡すら跡形も無く消えた。……まるで怪我などしていなかった時のように」

至近距離の紅の瞳が、怖い。何の表情も浮かべていない、だからこそ。

「言え。お前は何者だ？　何故俺を助けた？　それにその亜麻色（あまいろ）の髪と碧の瞳……。この大陸のどこを探してもそんな色合いを持った人間はいない。お前は……」

その言葉を口にするのは躊躇われた。まだ何の証拠も揃っていない中、不確定要素を口にするのは命取りだ。だがどうしてか、イアンはそれを口にする。

「……『失われた一族』、か？」

『失われた一族』。

それが何をするのか、ルイリにはまるで分からなかった。

だってルイリのなかには、なんのきおくものこっていないのだから。

けれどその単語はきっと……？彼？に繋がることなのだろう、と思う。

硬直した少女に、イアンは畳みかけるように懐剣を握る手に力を込めた。

「答えろ」

「っつ、！」

細い首筋に、刃先が食い込む。微かな痺れの後、首筋から液体が滲むのを感じた。

「姿を変えるのは簡単だ。亜麻色の髪と碧の瞳など、変換術でいくらでも装える。だが」

彼は、ルイリの首筋から流れる血液は気にしないようだ。

「能力（ちから）はそうもいかない。……治癒の能力（ちから）を持っている者は、この大陸に一人もいない。可能性があるとすれば」

「知りません」

感情の一切を廃した言葉が、唇から漏れ出た。深紅の双眸が、微かに瞠（みは）られる。ルイリは自分でも奇妙に思うほど、心が凪いでいた。

暴かれてはいけない。気づかれてはいけない。本能が警鐘を鳴ら

す。

彼は――？彼？だけは、守らなければ。

「私は、自分が何者かが分かりません。これは……唄を唄うと傷が治る力は、生まれつきのもので、よく分かりません」

「……」

「貴方を助けたのは、あの場に貴方がいて、私がいたからです。貴方は先ほど、死を覚悟したと仰った。死を望んだわけではない」

紅い瞳は揺らがない。

「……それが、お前の答えか」

唸るように、彼は言った。ルイリは静かに肯定の意を示した。

「……はっ、そんな理由で俺を助けたのか。大層な偽善だな」

端整な唇に、歪んだ嘲笑が浮かぶ。刃を握る力が僅かに揺れた。

「確かに望んではいなかった。だが、覚悟はした。お前はその覚悟を易々と無下にしてくれた訳だ。その行為がいかに自尊心を傷つけるか分かっているか？」

そのあからさまな嘲り（あざけ）に、ルイリは不快感よりも違和感を覚えた。どうしてここまで負の言葉を並べる必要があるのだろう。

「中途半端な同情はかえって相手を底へ追いやる。……誰かに学ばなかったのか」

「……同情をした覚えは、ありません」

「では、自己満足か？　目の前の死にかけの人間を救って神気取り

か？　大したご身分だ。世が世なら、お前は今頃神として崇められているだろうな」

満たされる緊張感に、焦る。駄目だ。これ以上は……駄目だ。

――言葉は、言霊（ことだま）

誰かに、そう教わったことがある。誰だったかは分からない、けれどとても大切だった人に。

言葉は言霊。口から紡がれた言葉はその瞬間から意志を持ち、時に人の魂すらも縛ってしまうほどの効力を持つ。口から出した台詞は取り戻せない。だから、注意して扱うべきだと。

ルイリはその焦燥を気取（けど）られないように息を吸って、慎重に言葉を選びながら口を開いた。

「この能力がいかに奇異であるかは、よく分かっています。けれど、それを持て余すつもりはありません。目の前に救える命があるのならば、私はそれを救うだけ」

「ご高説真に結構。神に命を捧げたつもりか」

「……では、何故貴方は見捨てなかったのですか」

「何……？」

紅の瞳が、怪訝そうにすがめられた。

「私を救っても、何の利益もなかったはず。あのまま捨て置けば良いものを、何故貴方はここに連れてきたのですか？」

「利用価値の可能性。それだけだ」

「でしたら、側室などという高い身分ではなく、ただの奴隷として傍に置けばよろしいではありませんか。どうして私を、側室に？」

「……見た目に反して、五月蝿い女だな」

彼の切れ長の目が、更に鋭くなる。ルイリはその目の奥に、冷たさとは違う、何かを見た気がした。
何だろう。それはまるで……
――苦悩のような。

とっさに手が動いた。
今まで身体が動かなかったことが不思議なほど、ルイリは素早く手を伸ばし、首筋に当たる懐剣を、掴んだ。左手に、先ほど首筋に感じたものよりも強い痺れ、そして疼くような痛みを覚える。暖炉の炎を反射して赤く揺らめいていた刀身は、なお濃い色で、染まる。

「！　何を」
「……理由なんてないです」

手に食い込む刃。滴り落ちる赤い雫。
そして、そんなものよりも綺麗で峻烈（しゅんれつ）な、紅い双眸。

「人が人を助けるのに、理由なんて必要ないんだと、思います」
「……」

イアンはルイリを睨むように凝視した。それは己の内の動揺を見透かされたくないが故に、厳しい視線を送ったようにも感じた。
対するルイリは、不自然なほどに静かな目で、その真っ赤な瞳を見ていた。

4.　褥の上の尋問（後書き）

更新です！
そんなこんなで、二人の出会いは最悪ですね！笑

5. 褐色の従者

永劫（えいごう）にも等しい沈黙が、流れる。
紅と碧の光はほの暗い篝火が照らす中で静かに火花を散らす（もっとも、ルイリは散らしたつもりは無かったが）。

初めに折れたのは、紅だった。
やがて彼は諦めたように溜息をつき、懐剣を握るルイリの手を丁寧にほどいた。赤い液体が白い手首を伝い、真っ白なシーツの上に薔薇の花弁のような斑模様（まだら）が広がる。

「女が、簡単に傷を作るな」
「……申し訳ありません……」

確かに、軽率だったと思う。
斜めに朱が走り、じくじくと疼く掌をぼんやりと眺めていると、皇太子は不思議そうに目を眇（すが）めた。

「歌えば治せるんじゃないのか」
「……自分の傷には効かないんです」

弱々しく笑みを浮かべると、ますます深い溜息をつかれた。
イアンは指先を空中に向け、ちらりとひらめかせた。するとどこからともなく小ぶりの救急箱らしきものが漂ってきて、当然と言わんばかりに彼の手の内に収まる。その光景に驚いて呆然としているルイリの手を取り、慣れた手つきで包帯を巻きだした。

「なら、尚更だ。もう少し考えろ」
「……すみません」
「いちいち謝らなくていい」
「すみま、……」

謝罪しようとして、きろりと睨まれたので慌てて口を噤む。
……というか、この状況ってもしかすると多分きっと間違いなく物凄く畏れ多いことなのではないだろうか。一国の皇子に包帯を巻いてもらっているなんて、まず有り得ないことなのに。
人間離れした端整な顔立ち。ルイリはそれを直視できず、必死で目を逸らしながら口を開いた。

「殿下も……魔術をお使いになられるのですね」

ぴくり、と彼の手が止まった。何かものいいたげな空気が流れ、思わず冷や汗が流れる。何か気に障ることを言ってしまったようだ。打ち首で済むだろうか。
どこかずれた考えをめぐらせるルイリに、イアンは何事も無かったかのように作業を再開する。

「……あぁ。気に入ってはいないが」
「そ、……うなんですか？」

見たところ、空気か何かを操る能力のようだ。とても便利そうに思えたのだが。だが、その理由を聞くのは何だか躊躇われた。それは辺りに満ちる静寂からか、彼の瞳に気味が悪いほど表情が浮かばないからか。どちらにせよ、ルイリはそれ以上聞くのをやめた。
一通り手の平の包帯を巻き終えてから、イアンは次に少女の細い首に視線を滑らす。首筋には縦の線がはしり、少しだけ赤いものが滲んでいる。

「当然だが、首もだろうな」
「……はい」

イアンは静かに、長い指先で朱色の線に触れた。
ひやりとした感覚がして、ルイリは思わず身を震わせる。それは指先自体の冷たさとは他の、身体の内側から震え上がるような。その反応に、首に添えられた指が微かに強張った。指はすっと離れ、代わりに白いガーゼが傷口を覆った。

ほっと息をついたのも束の間、次は髪に何かが触れる感覚に身体を固まらせた。
起き上がれば腰を超える長さまで伸びている亜麻色の髪。くせがなくまっすぐなそれは、薪(たきぎ)の仄かな明かりに煌(きら)めきを放つ。彼の長い指先が、それをもてあそぶように絡めている。

「あ、の……。……殿下？」

全身が紅潮していくのが分かる。耳まで熱い。
しばらくルイリの髪で遊んでいた（と、ルイリには見えた）皇太子殿下は、ふいにその長い髪に顔を近づけようとして、

「あっのぉー……そろそろそっち行ってもいいですかね？　いいですよねぇ」

やけに間延びした声が、のんびりと響いた。
すぐさま、髪に触れていた手が離れる。思わぬ横槍に感謝しながら、ルイリは首を動かして声の主を見た。

彼と同じくらいの歳の青年だった。
茶色の髪と、少しくすんだ灰色の瞳。ただ、イアンよりも肌の色が浅黒い。彫りの深い端整な顔立ちにほんの少しの粗雑さが混じって、まるで肉食獣のようなにやにやとした笑みすら絵になる。ドアに腕を組んでもたれかかっている身体は引き締まり、そんな体勢ながら隙がない。

「早かったな」
「これでもゆっくり来たんだぜ？　お楽しみの最中だったら申し訳ないと思って」
「冗談じゃない」
「だろうな」

人を食ったような笑顔はそのままに、青年は軽い動作でベッドまで歩み寄った。その足取りはあまりに軽快で、ルイリでは足音すら聞き取れなかったほどだ。

「顔色、だいぶよくなりましたねぇ。何か会った時にはなかった包帯が気になりますけど、コイツがなんかしましたか？」
「え、あの……」

彼は確か、気を失う前に見た気がする。しかしどういう名前だったのかは全く覚えていない。疑問の視線を感じ取ったのか、青年は先ほどとは打って変わった柔和な笑みを浮かべた。

「初めましてですね。俺はレン＝スヴェイン。そこの皇太子サマの側近で彼とは長年の付き合いで今ではシェリング一の仲良しって呼ばれて」
「無い事を言うな」

「何言ってんだ、ホントのことじゃん」

レンはにやりと笑いを浮かべた。ルイリはぱちりと瞬きをした。側近ということは、レンは間違いなくイアンの部下だ。だというのにこの砕けた態度。しかもその態度を、彼は咎める様子もない。

「初めまして……ルイリ＝レティシアです」

「ご丁寧にありがとうございます。ルイリ様、ね。綺麗な名前だ。貴女のそのお美しさにもぴったりですね」

「そんな」

甘やかな笑みと手放しの賞賛を貰って、ルイリは赤面する。？彼？も同じような事を言ってくれた。

そこまで考えて、硬直する。

？彼？？

？彼？とは、誰だ？

分からない。どうして今、自分がそのことを考えたのか。？彼？なんて知らない。

けれどそう思った瞬間に、心の中でもどかしさが生まれた。違う、知らないわけじゃない。ただ『覚えていない』だけで……

「ルイリ様？　大丈夫ですか？」

どこか虚ろな視線になったルイリを心配したのか、レンが気遣わしげに顔をのぞきこんできた。それでようやく我に帰り、大丈夫ですと弱く返す。

「それから、あの、」
「何か？」
人当たりの良い微笑を貼り付けた褐色の青年に、ルイリはしばし視線をうろつかせてから口を開いた。
「その、……様付けは、やめていただけませんか。私はそんな高い身分ではないですし……」
おずおずと申し出ると、レンは思いっきり目を瞠った。鳩が豆鉄砲どころか実弾をくらったような顔だ。
「ですが、貴女は仮にも皇太子（こいつ）の側室なんですよ？」
「とは言いましても……。ごめんなさい、我が儘（まま）とは分かっているんですけど」
「えーっとでは……ルイリ嬢、でよろしいので？」
「はい、そちらの方が気が楽……です」
最後はどんどん声量を落とした。言っているうちに恥ずかしくなったからだ。本当だったら呼び捨てでも構わないのだが、それはさすがに気が引けた。
しかし対照的に、その？お願い？をされたレンはさも面白いものを見つけたといわんばかりに口の端を吊り上げた。
「了解しました。ルイリ嬢ですね。で、ルイリ嬢はここがどこだかご存知なんでしょうか？」
「は、い。シェリング皇国の首都ウィスリン、……殿下の、屋敷だと」
「そうですねぇ。正確には隠れ家ですけど」
「え？」

隠れ家という単語はあまり良い意味ではないような気がする。疑問に思ったが、その前に彼が恐ろしく物騒な視線をレンに送った。

「いい加減、その舌引っこ抜いてやろうか」

「おっと勘弁。……で、貴女は彼の側室になったんですよ」

「……はい、分かっています」

見落としがちになったその事実。側室とはつまり皇族の愛人……妾（めかけ）と解釈していいだろう。ルイリは自分自身に噛み含めるように、レンに向かってうなずいた。

「まだ体調が万全ではないようなので、明日から三日間はここに滞在してもらいます。その後、こいつの実家に行きます。貴女はそこで生活するんです。いいですね？」

「……」

問いかけと言うよりは、確認。ルイリは無言で肯定を示した。元より、拒むことなどできはしない。皇太子殿下の申し出を拒否することは、極刑を意味する。たとえ気まぐれであるにしても、側室と言われたならばなるしかないだろう。

反応の無いルイリを見て、レンが息をついた。

「もう少し、期間が必要と思うんだけど？」

提案はルイリではなく、隣の主に向けて言われたものだ。しかし当の本人は波紋の浮かばない湖面のような静かな表情をして、それをあっさりと切り返す。

「充分譲歩した上での三日の滞在だ。それにもう向こうにもそう伝

達したんだろう」
「そうだけどさ……いーや、いいです。もう何にも言いませんよー」
歯切れの悪い言葉を払拭して、レンはひょいっと肩を竦めた。
「それから、この後のことは手配しているんだろうな？」
「もうしてるよ。俺を誰だと思ってるんだ」
しれっと返す。イアンは微かに頷き、レンからルイリに視線を戻した。どれほど鮮やかな花も劣る、鮮烈な紅の色。魅せられるようにそれを見つめるルイリを、彼は無感動に見下ろした。
「明日には医者もここに呼んである。……今夜はこのまま寝ろ」
それだけ言い置いて、足早に部屋を去って行った。レンも一礼して、彼の後を追う。
「……はぁ」
誰もいなくなった部屋で、ルイリはようやく大きく息を吐き出した。恐らく彼らは意図していないのだろう。だが、二人の醸し出す威圧感は肩に圧し掛かってくるほど重みがあった。無意識に全身が緊張してしまっていた。痺れてしまった指先を開閉しつつ、もう一度息を吐く。
レンは、言った。貴女はそこで『生活』するのだと。つまり、そこがルイリの家になるということ。
そんなの。
「……い……」

帰りたい。

でも、どこに？　あったのかも分からない、誰がいたのかも分からない、不確かなもの。

けれど、瞼を閉じてみれば。

あの笑顔だけは、思い出せるから。

「……あの人、は」

考えれば考えるほど、ルイリの頭の中から彼（か）の人物は零れ落ちていった。まるで指の間を零れる砂のように。掴めるはずの無い風のように。

「……」

ゆっくりと顔を両手で覆い、深く息を吐き出した。

覚えていないはずなのに。忘れてしまったはずなのに。

――愛しているよ

その言葉だけは、はっきりと耳に残っていた。

5.　褐色の従者（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！
ところで、ふとアクセス解析を見ましたら……な、なんと５００アクセスも！？
ものすごく驚いて飛び跳ねました！本当に嬉しいです！！
こんな駄目駄目な駄文を読んでくださるお方がいるのかと思うだけで号泣ものです。
それだけで励みになります、ありがとうございます！

6.　一日遅れ（前書き）

※Ｒ１５的な表現があります。苦手な方はご遠慮下さいませ。

6. 一日遅れ

「面白いお姫様だなぁ」

部屋から離れ、廊下を歩いているとレンがぽつりと呟いた。イアンは特に表情も動かさず視線をやって、そのまま続きを促す。

「だってさ、普通いきなり側室になるとか言われたら、混乱して半狂乱になるかふんぞり返って喜ぶかのどっちかだろ？」

「随分両極端な反応だな」

「実際そうじゃんか。どっちかというと後者か？　特にお前の側室の人達なんか、凄いしな。どうやったらお前を虜にできるかだけを考えてああやって着飾ってんだぜ？　ま、無駄な努力だけど」

揶揄(やゆ)よりも皮肉の強い口調をイアンは聞き流した。こいつのお喋りにいちいち付き合っていても時間の無駄だ。しかしレンはお構いなしである。

「可哀想だと思わないか？　むしろ奴隷にしてやった方が良かったと思うけど。あんな毒の塊みたいな所に、何で彼女を放り込む真似するんだ？　それこそ、昨日会ったばっかなのに」

「レン。……それを説明する義務が、俺にあるのか」

極力感情を押し殺した声。レンは意図せず息を呑んだ。

静かな声とは裏腹に、深紅の瞳は飢えた獣のようにぎらついている。

もし目の前の彼が視線で人を攻撃する能力をもっていたならば、

既にレンは串刺しになっていることだろう。その視線の鋭さたるや、他に例えようがない。

「いや……、……ないですね。申し訳ありません」

他の者が持ちうることのない、独特の威圧感。その途方もない圧倒を前にすれば成すすべもない。昔なじみとはいえ、所詮は主人と従者なのだ。彼はその瞳の輝きそのままに、口を開く。

「他の女と違うのは当然だ。あれはどうやら記憶が無いらしい。事の重大さを分かっている訳がない」

「は？　記憶って……え？　記憶喪失、ってことか？」

「本人が言っている。まず間違いないだろう」

成程、道理で動揺が薄いわけだ。

「でも能力（ちから）のことは分かってるみたいだった、けど……？」

「ウィスリンや俺の名前を出しても分かっていないようだった。皇太子がどういうものかは分かっているようだが」

「うーん……どこまでが欠落してんのかがよく分かんねぇなぁ。かと言って、単刀直入に聞くのも気が引けるし」

腕組みをして唸る従者を一瞥。

「医者と共に、リーファも呼び寄せている……多少は態度も軟化するだろう」

「へぇ、リーファまで。親切だなぁ。……と言いたいところだけど、お前ってやっぱりあくどいよな」

「善人だと主張した覚えはない」

それだけ言って、イアンは今度こそその場を立ち去った。

†　†　†　†　†

むせ返るような甘い香り。

「お待ちいたしておりましたわ、皇太子殿下」

美しい女は、大輪の花が咲き誇ったかのごとく微笑む。

その笑みだけで男達はこぞってその心を射止めようと躍起（やっき）になるだろうが、イアンはちらとも感慨を抱かなかった。こんなことで動く心など、いらない。

女が身につけているのは、果たして衣服と呼べるのかも疑問なほどの布一枚である。部屋の中に足を踏み入れると、脳の一部が麻痺するような甘ったるい臭いが嗅覚を刺激した。室内はほの暗く、その中で女の白い肌が誘うように光っている。

「確かに、準備は万端そうだ。……レンの差し金、か？」

「仰るとおりですわ。殿下が私（わたくし）を所望してくださっていると、スヴェイン様が」

女は艶やかに微笑みながら、彼をぐいと引き寄せる。イアンは別段拒みもせず、力の方向に身体を動かした。高級娼館で随一という矜持のためか、その一挙一動が妙に艶めかしく、男を誘う色香を漂

わせた。

「最近いらっしゃらなかったのでしょう。とても寂しかったのよ」
「この辺りでは仕事がなかったからな」
「あら、つれないお方。私は仕事のついでと仰るの？」

まさしくその通りだ、とは言わなかった。

しかしそれを伝えるとさらに面倒なことになるのは分かっているので、さっさと女をベッドへ押し倒す。肉感的な肢体を組み敷いて、慣れた手つきで衣服を肌蹴ていく。女は嫌らしく唇を歪めた。笑ったつもりなのかもしれないが、イアンから見るとそれはひどく醜悪に見えた。

「今夜は随分と性急ですのね」
「だから何だ」
「いいえ、文句など何も。いつもの……素敵な殿下でしてよ」

イアンの首に腕を絡めて、女はゆっくりと口付けてきた。濃厚な口付けでさえもイアンに何の感情も与えない。湧き上がるのは、とにかくこの熱をぶちまけたいという衝動。

元からイアンを誘うために身につけていた衣服を取り去り、曝け出された肌を冷めた瞳で眺めた。事務的な動きで指を滑らせ、すぅっと膝の裏を撫で上げる。

「……っ殿下……ぁっ……んぅっ」

耳障りな嬌声を、イアンは唇で塞いだ。媚びる声など聞きたくない。男を誘う淫らな声など、必要ない。必要なものは、柔らかく熱い肢体。やりようの無い熱を吐き出す、ただの器。

魔獣を斬った後は、全身が猛る。血が逆流したように熱くなり、

身体がまだ足りないと暴れる。
持て余した力の捌け口として、女を抱く。それだけのことだ。

しかし今回は、少しだけ状況が違う。
本来ならば、イアンは魔獣を斬ったその日のうちに、このような場所へ足を運ぶ。ぐずぐずしていれば、所構わず剣を振り回して周りを無差別に攻撃してしまうから。まして魔物となれば、その直後に行くのは当然だ。
しかし魔物を斬ったのは昨晩で、実に一日という時間を費やしてからイアンはここへ来た。普段の彼ならばまずありえないことなのである。よくぞ保ったものだ。

「……」

ふと、ここに来る前に様子を見に行った、あの少女を思い出す。
ひどく細い身体をしていた。何も知らない、弱く、脆く、がんぜない娘。しかし、時々あの碧の瞳に宿る光の、深さと強さ。

――何故貴方は見捨てなかったのですか

細い声。しかし芯の通った、凛とした声。何故、見捨てなかったのか？

（そんなもの……ただの気まぐれだ）

思い出す。躊躇い無く懐剣を掴んだ白い手。滴る血液。甘い理屈。気まぐれに指に絡めた、亜麻色の髪。

試しに、目の前の名前も知らない女の髪に指を差し込んでみた。
丹念にカールされた髪は、見た目こそ艶やかさがあるものの、触り

心地がいいとはお世辞にも言いがたい。
柔らかく、まっすぐだったあの髪。一体どんな感触だっただろうか。思い出そうとしても、思い出せなくて。

白い首筋。そこに走る、朱色の筋。
傷口に、あの細い首筋にほんの少し指を触れさせた、あの一瞬。
少女は全身で恐怖を体現するかのように体を強張らせた。慣れていないと主張しているようなものだ。
……きっと、彼女は知らない。男がどのような生き物なのかを。
女を目の前にして血が滾り、その全てを暴こうと欲望を露にする、魔物よりも厄介な獣だということを。

あの無垢な瞳は、どうしてやれば砕けるのだろう。

ざわり、と鳴りを潜めようとした嗜虐心が疼く。
しかし、一瞬の内にそれを嘲笑して切り捨てた。くだらない。あんな痩せ細った魅力のない身体に、どうして欲情できる。

「殿下……っ、……あっ……はぁ……ん」

わざと男が扇情的になるような声をあげる女は、更にイアンを呼び込むように喘ぐ。そこから特別な感情を見出すことはできない。
が、イアンはあえてその誘いに乗った。今は全てが面倒くさかった。

亜麻色の髪と碧の瞳の陰影を塗りつぶすように、柔らかい女の身体をきつく抱きしめた。

6.　一日遅れ（後書き）

今回は若干早めの更新でございます。少し短いですね。

ふと思ったのですが、今までのタイトルって全部「の」が付いていましたね……。「白い闇」除く。

別にわざとではないです．笑

次は新キャラが何人か出てきます。

7.　新しい出会い（前書き）

練習曲（エチュード）です！　有名どころの響きでしょうか……。

7.　新しい出会い

近づく。
真っ白いものが。

近寄る。
真っ白いものに。

足を進めるたびに、足元で光る波紋が広がり、リン……と音が響いた。

誰？

眩（まばゆ）いばかりの何かが、目の前にある。

それは今まで見たことのある白いものの中でも抜きん出て、白い。純白という言葉はこれのためにあるのだろうな、とぼんやりと思った。

泣いているの？

問いかけには答えない。そもそも人間ではない気がする。だけど、その白が泣いているように思えてならなかった。

神聖をそのまま表したような姿は、触れることを躊躇うほどに神々しい。

刹那。

――見つけた

全身が緊張する。その音は身体を内側から壊してしまいそうなほどの威力を持っておきながら、思わず聞き惚れずにはいられない魅力をも兼ね備えていた。

――ずっとずっと、待っていた……

無邪気な少女のようで、妙齢の女性のようで、精悍な男性のようで、老人のような声は笑みを含んでそう言った。

――おいで

優しげで、決して拒絶を許さない声音。

白い塊は甘い声で、手招きをするように輝いた。

駄目。これ以上、この声を聞いてはいけない。

本能はそう警鐘を打ち鳴らすのに、

――此処へ、おいで

その声が耳に入るたび、魅せられるように足が動く。一歩、一歩と。少しずつ、けれど確実に、距離は縮まる。

駄目、駄目、駄目。
行っては、駄目。

頭が必死にとどめようとするのと反比例するかのごとく、身体が動く。
まるでこの身体が、自分のものではないような感覚。ふらふらと足を進める様は、さながら操り人形。

――此方（こちら）へ

抗いようのない声がそう命じる。言われるがままに手を伸ばす。

――そう……良い子だ

ぼうっと純白を見つめていて、ふと気が付いた。

あぁ、これは――白い闇だ。

ようやくそう察して……指先が触れようとして。

――目を醒ませ、ルゥ！！

「っ……！」

目を見開くと同時に、ひゅっと息を吸い込む。

ほんの少しぼやけた視界に入るのは、忘れたくても忘れられない豪奢な天蓋。

「あら、お目覚めになられました？」

そして、見覚えのない女性だった。

「え……？」

「まぁ、ひどい汗。どうぞこれでお拭きになって」

ふんわりとした笑みと共に、薄い桃色のハンカチを差し出された。

しかし未だに寝ぼけて周りの状況分かっていないルイリは、そのハンカチと女性の手を交互に見比べるだけである。

あぁ、と女性は母性に溢れる笑みを浮かべて小首を傾げた。

「ご挨拶もなしに、申し訳ございません」

そう言って、ベッドから少し離れた。

歳は二十二、三といったところだろうか。もう少し上かもしれないが、それは彼女の全身から溢れる全てを包み込むような温かい雰囲気のせいだと思われた。

黒よりも藍に近い髪は横髪を垂らし、後ろは高く結い上げられ、淡い色の髪飾りが鮮やかに彩る。朗らかに細まる瞳は藤色。着ているものは簡素な意匠の……どういう服と表現すればいいのか、ルイリはよく分からなかった。

瞬きを繰り返すルイリを穏やかに見つめ返して、女性は優雅に足を引き、頭(こうべ)を垂れた。髪飾りがしゃらりと音を立てる。

「お初に御目文字(おめもじ)仕ります、ルイリ＝レティシア様。私(わたくし)は本日より貴女様の侍女を仰せつかりました、リーファ＝フィレルと申します。どうぞよろしくお願いいたします」

「侍、女……？」

侍女というのは、あれだろうか。貴族の令嬢や姫君の周りを囲んで、身の回りの世話をしたり話し相手になったり時には姫君達を着飾ったりする……あれ？

そんなひとが、なぜ自分の前にいるのだろう？

「ご用の際は、なんなりとお申し付けくださいませね」

無害な笑みを浮かべて微笑むリーファ。ルイリはと言えば、まだ状況を飲み込めていない。

「侍女……ですか？」

「えぇ」

「私に？」

「その通りでございます」

「……何で……ですか？」

ひどく幼稚な質問にも、リーファは嫌な顔一つせずに（むしろますます笑みを深めて）答えてくれる。

「答えは一つですわね。貴女様がイアン＝シェリング皇太子殿下の側室様であらせられるから。側室様に侍女が就くのは、当然のことでございましょう？」

と言われても、貴族の出身でもなければ王族の出身でもないルイリには全く理解できない。

つまり、この女性はルイリの下に傅（かしず）くつもりのようだ。

「あの、」

「あぁ、すっかり忘れておりました。お目覚めになられたら御典医（ごてんい）を呼ぶようにと言われていたんだったわ。呼んできますので、しばしお待ちを」

進言しようとした声を遮って、侍女は柔らかい笑みと共に部屋を去った。足取りはひどく軽そうだった。

ひとり残された部屋で、ルイリはゆっくりと起き上がる。そして、リーファが手渡してくれたハンカチを軽く握り締める。

確かに握った手には汗がじっとりとにじんでいた。額の辺りに手をやってみると、そこも湿った感触。ほのかに熱く感じる息を吐いて、目を閉じた。

「……」

何だろう。

何か、途轍（とてつ）もない……何かを見た気がする。ひどく甘美で、魅力的で、けれどどこまでも空恐ろしい何かを。

それが一体何であったのか、少しも思い出すことが出来ない。印象だけが心に残って、姿形も何もかも、分からなかった。

それはとても懐かしくて――とても哀しいものだった気がする。

そういえばもう一つ、聞きたかった声を聞いたような。

靄（もや）のかかった記憶はそれ以上掘り起こそうとしても不可能だった。

しかも起き抜けの頭ではどうも考えがめぐらない。ルイリは溜息をつき、それ以上考えることをやめた。

しばらくしてから、リーファが二人の男性を伴って戻って来た。

一人はリーファの腰ほどしか身長がなく、白髪と真っ白な髭（ひげ）をたくわえた老人で、もう一人は薄い茶の眼と髪を持った細身の青年だった。二人共白衣を着ている。

「ルイリ様。こちらは宮殿の御典医を務めておられます、ダイエン様とイゼル様でございます」

リーファが丁寧に紹介すると、紹介された二人は深く頭を下げた。

「お初にお目にかかります、ルイリ＝レティシア様。儂（わし）は宮殿の典医を務めさせていただいておるダイエンというもの。どうか、お見知りおきを」

「弟子のイゼルと申します。よろしくお願いします」

ダイエンと名乗った老人は、目元の皺をますます深くして笑った。

その傍らに立つイゼルも柔和な笑みを浮かべる。ルイリも慌てて頭を下げた。

「初めまして。寝ているままで申し訳ありません。ルイリ＝レティ

シアです。どうぞよろしくお願いします」

挨拶は大事だ。身体の根底に刷り込まれている条件反射も同然である。なるべく失礼のない言葉を選びながら挨拶をすると、二人は目を丸くしてルイリを見つめていた。

また何かやってしまったのかもしれない。ルイリは自分の行動を悔やみながら、恐る恐る口を開く。

「あの、私……何か、妙な事を言ってしまったでしょうか」

「あ、いえ。そうではなく」

不安そうな表情に、イゼルが慌てて否を唱える。困ったような表情から、すぐに穏やかな表情に変えた。

「側室のお方からそんなご丁寧な挨拶をいただけるとは思っていなくて。普通、側室の姫君は敬われて当然の顔をしてらっしゃいますから」

「……ごめんなさい。私」

「いや、いや。非難したわけではございませんぞ。ルイリ様は、まこと心の美しい方であらせられますな」

ダイエンは呵呵(かか)と豪快に笑う。

「さて……早速ではありますが、診察をさせていただいてもよろしいか？」

「はい」

まだふらつく身体をリーファに支えてもらい、ダイエンに自分の手を差し出す。老医の、皺の刻まれた骨ばった手がルイリの手を取り、ひねったりひっくり返したりイゼルに何か呟いていたり唸った

りしている。
ルイリはその会話を聞くともなしに聞きながら、ぼんやりと白い手を眺める。

細い。
老人の手の上に乗っている自分の腕は骨と皮だけでできたように細くて、周囲が羨(うらや)むというよりも哀れんでしまいそうな。これは、衰弱という言葉に値する。

「……ふぅむ。過度の貧血と栄養失調でありますな。余程、無理をしてきたと思われる」
「無理、ですか」
「その調子だと、もしかして此処に来る以前の記憶がおありにならない？」

助手であるイゼルは存外勘がいいらしく、ずばり言い当てた。まさにその通りだったのだが、何だかそれはとても恥ずかしい気がして俯いてしまう。

恥ずかしいのではない。情けないのだ。何も覚えていない自分が。今まで『ルイリ＝レティシア』という人間を培(つちか)ってきたモノを覚えていないということが。
ここにいるということは、確かに生んでくれた親がいたのだろう。ここまで歳を重ねているという事は、誰かが育ててきてくれたに違いない。

それなのに、関わりをもった人全てをルイリは忘れてしまっている。
それはとても恥知らずであると思えてならなかった。

「そんなに自分を責めては駄目ですよ」

悄然と顔を下げるルイリに、イゼルが労わるようにそう声をかける。

「記憶を失くす患者さんなんてしょっちゅうです。先生だって最近物忘れが激しくて、そろそろボケの末期かと心配するくらいですから」

「余計なことを言うんじゃない、青二才」

「いてっ」

へらりと笑う青年の頭を、ダイエンはしたたか殴りつけた。

「痛いですよ先生。ただでさえ馬鹿力なんですから手加減してください」

「そうやってお前に手加減してきたのを、儂は激しく後悔しておる」

「いやだなぁ。それじゃまるで僕が出来の悪い助手みたいじゃないですか」

「そう言っておろうが！　いい加減その無駄口を閉じんか！」

「冷たいこと言わないで下さいよ。これも患者さんの緊張を和らげる一種の方法ですから」

「……のう、たまになぜお前を助手にしたのか悩む時があるのじゃが」

「僕が優秀すぎてすぐに抜かれそうだからですか？」

額に青筋を浮かべながら叱責するダイエンと、のらりくらりとそれをかわすイゼル。その会話に、瞬きをする。それは子気味良くて、とても穏やかで。ルイリは自然とそれに身を委ねて……。

「あら」

「うむ？」
「おや」

その様を見て、三人が三様の反応を見せた。共通していることは、全員がこれでもかと目を見開いている事くらいか。それは不快な視線ではなかったので、純粋に不思議に思って首を傾げる。

「……そうですな。表情も、これからゆっくりと取り戻していけばよろしいでしょう。怒り方や喋り方や泣き方……」
「笑い方とかね。あ、ちなみにさっきの笑顔はすごく綺麗でしたよー」

いいところを全てかっさらっていった助手に、ダイエンは皺の奥から鋭い視線を送った。ルイリはしばし硬直したまま、その言葉の意味を咀嚼（そしゃく）した。どうやら、さきほど自分は笑っていたらしい。恐らくたどたどしく、不器用に。

そういえば長いこと笑っていなかった気がする。記憶が曖昧なのでよく分からないが、それでもこの数日間は確かに笑えていなかった。笑うのもいいな、と心の中で呟いた。

「あぁちなみに、記憶のことは殿下は？」

殿下。少し考えて、昨夜の金髪の青年に行き着く。

「知って……、ご存知のはずです。詳しくは、説明していませんが……」
「うむ、そのほうがよろしいでしょうな。はじめは我々医師に説明していただいて、それを殿下にお伝えしておきますゆえ」

説明というのは、どういうことをすればいいのか。ほんの少し眉

をひそめるルイリを安心させるように老人は笑う。

「五、六の質問をさせていただくだけです。よろしいですかな？」

ルイリはゆっくりと、うなずいた。

―――――――――――――――

新しい朝が来たと思った。

何も変わらないような朝だったけれど。

これから始まるのは、新しい日常への練習曲（エチュード）。

7.　新しい出会い（後書き）

お久しぶり（？）です、ようやく更新できました……！
新キャラが出てきましたね、モグラのように！（笑）
個人的には全員好きなんですが。特に助手……（笑）　腹黒ではありませんよ？

さて、蛇足補足。
練習曲……演奏技術や表現力の向上を目的とした楽曲。または難度の高い特殊な技術を表現手法とした楽曲。エチュード。

8. 不可解な欠落

こほん、と老人は咳払いをした。

「はじめに……ルイリ様はご自分の名前を知っていらしたのですな？」

自分の名前。

すなわち、？ルイリ＝レティシア？という名前。

「はい」

「それも、ためらいなくあっさりと言ったと」

「はい、その通りです」

「なぜでしょうな？」

それとなく探るような口調に、ルイリは純粋に首を傾げた。

「分かりません。けれど、何となく……偽名ではないと思っています。上手く、説明できませんが……」

彼に誰何（すいか）された時、自然とその名が口に出た。

それは苦し紛れに名乗ったものでもなければ、どこか後ろめたいことがあって偽りの名を名乗ったものでもないと感じた。この名前は正真正銘自分の名前なのだと、どこか確信を持って言えた。

「なるほど。では……うぅむ、女性にお聞きするのは不躾（ぶしつけ）ながら、お歳は？」

再度首を傾げる。歳。そういえば考えたこともなかったけれど……

「十七、です」

またもや口が先に動いた。ほぼ無意識の言動に戸惑うが、違和感はない。

「まぁ。ではルイリ様は、私と四つしか違いませんのね」

リーファが意外そうに声を上げた。ルイリも意外そうに口を開く。

「……二十一歳なんですか？」

「えぇ。とは言っても、長い間侍女(このような仕事)をやってきていますので、実年齢よりも上に見られることが多いですけれど」

そう言って苦笑する彼女を見ながら、静かに同意した。確かに……二十三くらいだと思っていた。それは決して老けているという意味ではなく、彼女が備えている母性的で温和な雰囲気のお陰だろう。

ふと、紅(くれない)の瞳が脳裏を掠めた。

そういえば、彼は何歳なんだろうか。暗がりでしかまだ相対していないから明確には分からないが、確実にルイリよりは年上だ。奇妙な落ち着きと、冷たいまでの無表情は一見すれば二十代後半。しかし均整の取れた身体や長い指先、紅い双眸には若々しさがあった。とすれば、二十代半ばに差しかかった頃かもしれない。

「さて。……質問を進めてもよろしいですかな？」

ダイエンの穏やかな声で、現実に引き戻される。あらぬ方向を眺

めて思想にふけっていたルイリは慌ててこくりとうなずいた。

「愚問かとは存じますが……此処に来る以前の記憶がないのでしたな？」

先ほどイゼルが問うた質問と同じようなものだった。しかしそれは問いかけというよりは、確認。

ルイリはゆっくりと目を閉じる。

今まで過ごしてきたはずの十七年間。生まれた場所も、育った環境も、何もかも……名前と年齢のように、すんなりと口から零れるのかと思った。けれど、それは無駄な期待に終わる。記憶の海は皆無に等しく、心の中にはただ空虚な砂漠が広がっているだけだ。

気づいたらあの森の中にいた。そして近くの廃屋に入ってみると、血に塗れた青年がいた。

もしや、十七年間ずっとあの森林の中を彷徨っていたのだろうか。よく生き永らえたものだ、というところまで考えて、いや生身の人間が十七年もあんなところでふらふらとしていられるわけがないと考え直す。せいぜい保って一ヶ月かそこら。

だがそれらの経緯を言うと更に追及されそうだったので、簡潔に答えることにした。

「はい。いつから無いのかは、……よく分かりません」

「つまり、覚えているのはご自分の名前と、年齢だけ」

「……多分、そうだと思います」

ふむ。と、老医師は関心をこめて呟いた。

「それでは……シェリング皇国という国の名前は聞き覚えが？」

「名前……ですか？」
「もちろんここではなくとも。隣国のヴィクトール王国やギルゼム公国でも……とにかく、どこかの国名は？」

沈黙。
繊細な美貌には似つかわしくない皺を眉間に刻んで、ルイリは考え込んだ。その真剣な表情と沈黙の長さで察したのか、ダイエンはあぁ、と呟く。

「どうやら無いようですのぅ」
「……ごめんなさい」

どこまで情けないのか。己の不甲斐なさに脱力するルイリを見て、ダイエンは慌てて言いつのった。

「いや、いや、責めているわけではありませんぞ。あくまでも記憶の無い度合いを調べているだけゆえ、どうか気を楽にしてくだされ」
「はい……」

気を取り直すように、ダイエンはまた大きな咳払いをした。

「では次に。国名を知らないということは、シェリング皇国を始め数々の大国、小国を抱えるこの大陸の名も覚えていらっしゃらない？」

ルイリは細い指先を顎に添えて、少し考える。

大陸の名。
この大陸の――この世界の、名。

「……ラルスヴァーナ、ですか？」

あ、とルイリは自分で声を漏らす。まただ。また意図せずに口が勝手に動いた。

その呟きをどう受け取ったのか、イゼルの目つきが鋭くなった。それは記憶を失くした者を労わる視線というよりもむしろ、記憶を偽っている者に対する不審の視線。

「案外すんなりと出て来ましたね。何ででしょうか？」

探るような視線と口調。その言い方は、ダイエンによく似ている。やはり師と弟子というのは似るものなのだろうな、と呑気に考えた。己にかかっている嫌疑には気づかずに。

とりあえずその思考は放っておいて、イゼルの質問に答えようと首をひねった。どうしてどの言葉はあっさりと出てきたのだろう。

そう、確か、頭の奥底で、旋律が響いて……。

二対の視線が注がれる中、己の喉に手を当てた。すうっと息を吸い込んで。

混沌の世界（たいりく）に光が満ちた
神という名の光が満ちた

神は全知全能で
次々に生命（いのち）を息吹かせていった
植物や動物を息吹かせていった

それでも神は退屈で
ある時自分の姿とそっくりな生き物を作った
神はそれを人間（ヒト）と名付け
どの生命（いのち）よりも慈しんだ

やがて欲にまみれた人間（ヒト）を憂い
神は天へと帰っていった

荒れ果てた地上に残ったのは
神の残した小さなひかり

それは神が人間（ヒト）に与えた
最初で最後のおくりもの

神の大陸ラルスヴァーナ
女神の加護が護りし世界

短く、端的な内容の唄。単調な旋律で飾り気のない、素朴な音色。けれど彼女が歌った途端、それは壮大な世界を広げた。その場にいたリーファ達は、まるで清らかな風が吹き抜けたような錯覚を感じた。澄んだ歌声は誰も知らない森の奥にある聖なる泉のように涼やかに流れ、それでいて童歌（わらべうた）のように軽快に弾む。

生気を失っていた若葉色の瞳は急激に深みを帯びて、深い翡翠色に転じる。寝台（ベッド）に起き上がっている彼女との距離はほぼ無いというのに、途方もない距離感を感じた。

透明な旋律はやがて空気に溶けゆくように余韻を残して消えた。そこには先ほどと同じ、痩せ細った少女がいるだけだ。

しばし呆けていた面々だが、立ち直りの早いイゼルが口を開いた。

「……どこかで聞いたんですか？」

ふっと、ルイリの瞳が曇る。その色彩は元の若葉色に変わっていた。

「いえ、曲名も覚えていません。ただ、頭に残っていて……」

「それは、？はじまりのうた？と呼ばれる唄ですわね。大陸（ラルスヴァーナ）に住む民（たみ）なら、知らない者はいないはずですわ」

実際私も幼少の頃から母に聞かされていましたから、とリーファ。ダイエンは眉間の皺を深くして腕を組んだ。

「ふぅむ……。……妙ですな」

「妙ですね」

イゼルも軽くうなずいた。

「妙、とおっしゃいますと？」

二人の医師の様子を不審に思ったリーファが、説明を促す。

「う……む。何と説明すれば良いのやら……。まず、ルイリ様がご存じないのは、己の出自（しゅつじ）、この辺りの国史はもちろん、国名。……

大陸（ラルスヴァーナ）に住む民ならば、なくてはならない常識でありましょう？」
「逆に伝統的な唄や能力（ちから）のことは分かっているように見受けます。これも大陸（ラルスヴァーナ）の常識ですよね。つまり、失っているものと残っているものが不釣合いなんですよ。あまりにも、矛盾している。普通の記憶喪失なら、ありえないことですよね」
「それは……っ！　つまり、貴方方はルイリ様が己が記憶喪失であると偽っているとでもおっしゃりたいのですか！？」

リーファが柔らかい藤色の瞳を吊り上げた。イゼルは片眉を上げる。

「人聞きの悪い。そんなことを言いたいわけじゃありません。第一、ルイリ様がそんな卑小な行為をするお方でないことくらい僕でも分かります。フィレルさんもそう思うでしょう？」
「当たり前でございましょう！　ルイリ様を疑うだなんて、どうかしてるわ！」

かちん、とどこかで音がした。恐らくイゼルの何らかが切れる音だ。ルイリは無意識に身を竦ませた。

「だから、誰も疑ってるなんて言ってないでしょう！　そもそもフィレルさんだってさっきルイリ様に会ったばっかりじゃないですか！　全幅の信頼を置くのは早すぎるんじゃないですか？」
「何ですって？」
「まぁ、まぁ。落ち着いてくださされ」

若者二人が口論に発展しそうになった絶妙な間合いを見計って、老人は飄々（ひょうひょう）と制止の声を挟んだ。

「先生？」

「ダイエン様！」
「フィレル殿の憤慨もごもっとも。しかしどうか最後まで聞いていただきたい」
「最後まで？」
怪訝（けげん）そうな侍女の声に、典医は左様とうなずいた。
「ですのでどうか落ち着いて。ほれ、ルイリ様が怯えておられる」
その言葉に二人ははっとして、慌てて傍らの少女を見た。翠緑の瞳はこわばり、微かに手が震えている。
「ルイリ様……！　申し訳ございません！」
「すいません、つい頭に血が……」
「いえ……。……こちらこそ、ごめんなさい」
「「え？」」
いきなりリーファとイゼルに謝った少女を見て、謝られた対象は目を見開く。少女は苦しげに眉を寄せた。
「私の記憶が、あいまいだから……だから混乱させてしまうんですよね。ごめんなさい」
思いがけない謝罪の理由に、イゼルは絶句する。まさか、今の口論（一歩手前）が、自分のせいだと思っているのか？
「けれど、本当なんです。……私の記憶は、これが全てなんです」
すっと、ルイリが視線を上げた。

「信じて、ください」

まだ会って間もない相手に対して……彼女はどこまでも真っ直ぐな視線を向ける。見たことのない、翠色の瞳。イゼルはそれに捕らわれたように立ち尽くした。

どうして……どうして一瞬でも、この少女を疑ったりしたのだろうか。そんな行為をするわけがないのは、分かっていることじゃないか。これほど愚直なまでに純粋な心を持った少女が、なぜ偽ったりできる？

答えは決まっている。

「……信じます。もちろん」

「ありがとうございます」

少女はほっと瞳を和らげた。

「全く、早トチリしおってこの馬鹿弟子がっっ！！」

「い〝っ……！」

先ほどよりもだいぶ強い鉄拳が後頭部に飛んできて、イゼルはそのまま声もなくうずくまった。

「こんのド阿呆が！　勝手な憶測を進めるなとあれほど言っておろうがっ！　医師失格じゃぞ！！」

「……すいません先生……」

今回ばかりは弁解の余地はない。

「さて、こやつは放っておいて……説明させていただいてもよろしいですかな？」

皺だらけの顔が穏やかにほころんだ。ルイリは緊張しつつ、うなずく。

「まず簡潔に言わせていただくと、ルイリ様の記憶の欠落は普通の記憶喪失ではないのは確かであります。通常のものとは、あまりにも欠落が異質すぎますのでな。……まるで誰かがそう仕組んだように」

言葉の意味を受け取るのが少し遅れた。リーファが息を呑む。

「まさか」

「フィレル殿の推測通りでしょうな。恐らくルイリ様の記憶は、

――何者かによって意図的に失くされたのでありましょう」

8. 不可解な欠落（後書き）

久しぶりですこんにちわ。
助手がヘタれました。ルイリは歌いました。それにしてもセンスのない歌詞……。

次の更新は確実に二十三日以降です。少々お待ちを。

それでも感想、誤字・脱字のご指摘等、引き続き大歓迎でございます！

9. 凍てついた紅

静かな室内である。

「……」

「……」

無人ではない。部屋には、二人の人間がいた。

前者は限りない『無』の表情で沈黙していた。後者は果てしなく困惑した表情で沈黙していた。

ルイリは俯いていた視線を少しだけ上げる。その瞬間、鮮やかな紅の瞳とかち合って、慌てて頭を下げた。そして再び流れる沈黙。

「……、」

目の前の青年には気づかれないように、そっと溜息をつく。

一体どうしてこんな事になったのか。

事は三十分前に遡（さかのぼ）る。

†　†　†　†　†

「ルイリ様の記憶は、何者かによって意図的に失くされたのでありましょう」

突拍子もない宣言をされて、反応が遅れた。

「意図的に……？」

ルイリの気持ちを代弁するかのように、リーファが驚愕した声をあげた。

意図的ということはつまり、誰かがわざとルイリの記憶を失わせた、と考えていいだろう。しかし、一体誰が、何のために。

自分のことながら理解ができないルイリは、更なる質問を求めようと口を開いた。

「あの、それはどういう――……」

しかし。

声は、扉の開く音によって強制的に遮られてしまった。

室内にいたルイリ達はその音に驚くよりも早く、流れ込んできた空気に身体をこわばらせた。それは清涼な水の涼やかさというよりも、背筋の凍りつく氷の冷ややかさ。同時にその空気は密度が濃く重く、ベッドに腰かけるルイリ以外の全員がその場で礼を取った。

コツ、と。

硬質な靴が床を踏みしめる音が響いた。長靴（ちょうか）の音が近づくごとに、

身動きがとれなくなる。まるでその音に全身の自由を根こそぎ奪われていくようだ。周囲の温度が急激に下がった感覚がする。顔は見えない。見ることができない。それでも肌を刺すように感じる畏怖。

靴音は、ベッドの脇、丁度ダイエンの隣の辺りで止まった。視界の隅にちらつく、黒衣。ルイリは微かに震えさえもする頭を必死で動かして、上を見た。

「……ぁ」

長身の影。襟足までのぞく金色の髪。まるで夏に咲き誇る花のようで、燃え上がる炎のようで、毒々しい血液のような真っ赤な双眸。均整の取れた鼻梁、形の良い薄い唇。

彼はまるで、神の御手によって創造された人間ならざるものなのではないかとまで思った。人間という範疇を超越した美貌は、女性ならばすぐに頬を紅潮させるだろうに、ルイリはちっともそうならなかった。逆に、頭の上から冷水を浴びせられたかのような錯覚まで感じてしまう。

歳若い姿は、そこにいるだけで圧倒的な存在感を醸す。ルイリを見下ろす瞳には、熱どころか表情すらもこもっていなかった。

誰だろうこれは……昨夜、会った青年だろうか？　本当に、あの時と同じひとなのだろうか？

ルイリがそう感じたのも無理はない。確かに存在感や静かな美貌は同じなものの、この場を制圧するかのような重厚な圧力は昨夜とは桁外れだ。姿形の問題ではなく、彼の隠しても隠しきれない何かが……そう思わせた。

「調子はどうだ」

耳に滑り込む低い音。静まり返った部屋中に響き渡った声は、過度なまでの波紋を生む。

「え、……あ……」

動悸がする。二つの紅に射抜かれて、身体がどうにかなってしまいそうだ。それは決して甘い方向ではなく、肉食獣に追いつめられた小動物のような心境であった。彼が柳眉を動かす。

「俺は質問をしている。答えろ」

空気が沈み込む。何か答えなければと頭は焦るのに、唇はわななくだけで言葉を紡がない。喉がからからに渇いていく。

切れ長の目元に苛立ちが交じった。あぁもう駄目だ、その指先一つを動かすだけで、彼は私の首を飛ばしてしまうのだろう——混乱する頭は、そんな考えまで弾き出す。

「イアン殿下……まずは、【気】を緩めてくださいませぬか。我々ならまだしも、ルイリ様にはこたえましょう」

しわがれた声がそう言った。これは誰だったか……そうだ、先ほど診察してくれた典医の声。

「ルイリ様は生身の人間でございますわ。殿下の【気】を直(じか)に浴びてしまっては、返答なさることができないのも当然のこと」

落ち着いた柔らかな声は、侍女の声。

「生身の人間？」

イアンが嘲るように鼻を鳴らす。

「馬鹿なことを。リーファ……まさかこれが何の能力を持っているのか、分からなかったとでもいうのか？」

リーファは、「それは」と戸惑うように言ってから押し黙った。彼が何のことを言っているのかは分かる。だが、どうしてそれをリーファに言うのだろう？

数秒してから、身体を圧迫する空気がほんの少し緩和される。ルイリは安堵のあまり全身を弛緩させて、背中に添えられていた枕に全身を預けた。

彼の目は、逸らすことなくルイリを見ている。ゆとりの持てたルイリも、その視線を不思議そうに見つめ返した。やがて、彼の唇が動く。

「全員、下がれ」

「なっ……！」

真っ先に驚愕の声を上げたのは、ずっと沈黙を決め込んでいたイゼルだった。

「何をおっしゃいます皇太子殿下！」

「下がれと、言った。聞こえなかったのか」

「そういう意味ではなく！　何をなさるおつもりですか！？」

「ただ話をするだけだ。さっさと下がれ」

「不可能ですよ！　今ルイリ様は病み上がりの身です。いくら殿下であろうとも、患者と二人にさせるわけには……っ！？」

唐突に、声が途切れた。代わりにイゼルの口から漏れたのは、苦

しげな喘ぎだった。周囲は何ら変化していない。イアンも動いていないし、ダイエンやリーファは言うまでもない。だが、イゼルは己の喉を押さえていた。

「お前はいつから、俺に意見ができるほど偉くなった？」

傲然。

その言葉以外に、一体何が思いつくだろう。す、と紅の光が冷酷に細まる。彼がほんの少しだけ指先を回すと、イゼルはより一層顔を歪めた。

「かっ……！」

「図に乗るな。侍医にもなれない、出来損ない風情が」

ダイエンが苦虫を噛み潰したような顔をする。リーファは言葉も無く目を閉じ、青ざめた。ルイリは一人、困惑する。

どうして？　目の前で人が苦しんでいるのに、どうして誰も何も言わないの？　原因は分かりきっているのに、どうして誰も咎めないの？

イゼルの呼吸は浅くなり、顔色は見る間に青く転じていく。彼はそれを何とも思わないように冷めた目で眺めていた。罪人を眺めているような、視線だった。いやむしろ、今まさに処理されようとしている取るに足らないがらくたを見るような目。

思わず、身体が動いた。

「ルイリ様！？」

リーファの驚愕の声も耳に入らない。ルイリは身を乗り出して、

漆黒の袖を掴んだ。紅の視線がイゼルからルイリに移る。ぞっとするほど表情のないその瞳に、一瞬怯みそうになった。
だが。

「っ……や……めて……、……やめて、ください」
「離せ」
「やめてください、お願いします」

冷たい赤。揺れる翠(みどり)。
しばしの沈黙を挟んで、彼の唇は美しく、しかし皮肉げに吊り上がる。袖を掴む細い手を振り払ってから、身体を動かさずに【気】を動かすと、イゼルはその場に倒れこんだ。激しく咳き込む彼にすぐさまリーファが駈け寄り、背中をさする。

「……命拾いしたな」

馬鹿にするような物言いに、侍医の弟子は言葉も無く皇太子を睨み上げた。ルイリは不安げに口を開く。

「大丈夫ですか……？」
「えぇ、何とか」

まだ圧迫の名残があるのか、喉をさすっている。
憂(うれ)いで睫毛を伏せたルイリは、意を決したように息を吸った。

光よ満ちたまえ
闇よ立ち退きたまえ

ここに祈り、願い、懇願する

声を聞きたまえ　偉大なる光よ
声を聞きたまえ　忌むべき闇よ

ここにある非力な願いを
ここにいる弱い人間の声を

どうか聞き届けたまえ

ひどく短い唄だったが、もたらした効果は絶大。
室内に充満していた澱(よど)んだ空気が霧散した。代わりに、春風のような爽やかな空気が駆け抜ける。同時に、イゼルは自分の身体が軽くなったのを自覚する。驚きのあまり声も出ない。先ほどの彼女が歌った、？はじまりのうた？の時にはなかった変化だ。

イアンは歌う少女を見て、目を細めた。
少女の唇から零れる旋律は、そのまま華奢な身体を取り囲む燐光へ変わる。唄を聞くのは二度目だが、唄っている様を見るのは初めてだった。いつぞやに感じた時と同じ、侵すことを許さない神聖な雰囲気。どこも見ていない瞳は明るい若葉から深い碧へ。それはイアンを見つめてはいないのに、不思議とその色彩に魅せられる。
頭の中で渦巻く苛立ちが徐々に薄まっていくような感覚は、居心地の悪さを感じた。

唄が止んだ瞬間、彼女は青ざめた顔でふらりと揺れた。リーファが慌ててその背を支える。

「ルイリ様……ご無理を……」
「皇太子殿下、これは……」

混乱をそのまま表したかのような声をイゼルが発した。イアンはちらりとそちらに視線をやってから、興味のないように口を開く。

「これの能力(ちから)だ。歌……唄を唄い、対象者を癒す。……まさかそれが分からなかったとは言うまいな？　侍医ダイエン」

突然水を向けられた老医師は低くうなる。

「……むろん、気づかなかったわけではございませんぞ。しかし……どうも信じがたく」
「今、眼前で見たことが真実だ」
「何たること……。医者人生の中でも、この驚きは五指に入りますな」

イアンは目をすがめた。それはどうでもいい、とでも言いたげである。

「だとすれば、殿下……これは重大な事態ですぞ」

皺だらけの目元が渋面(じゅうめん)を作った。どう説明するべきが悩んでいるようだ。

「ルイリ様はその容姿だけでも随分と注目を集めましょう。……加えて、この能力(ちから)では」
「その件を説明するために、俺がここへ来た。だから下がれと言っている」

ダイエンは納得したように息をつき、次いで苦渋の表情を浮かべた。

「医者としては、許可しかねる申し出でございますな」

「くどいぞ。貴様もそれの二の舞になりたいのか」

軽蔑の対象は、イゼルに向けられている。

「滅相もございませぬ。ただ、殿下自らがご説明をすることではないのかと思う次第でございます」

「お前は能力を持っていないし、リーファの能力は分かりにくい。俺のが一番分かりやすいだろう」

「だったらここに僕達がいてもいいじゃないですか。支障はないでしょう？」

「馬鹿か、貴様は」

もっともな意見を言ったにもかかわらず馬鹿と言われたイゼルは、額に青筋が浮かぶのをおさえられない。

「あのですね、皇太子殿下。どうして僕達がいてはいけないのか一から十まできっちり説明していただきたいのですがよろしいでしょうか」

「気が散る」

それだけか。

「では扉の傍に控えております。何かあれば問答無用で入室するので、くれぐれも変な気は起こしませぬように」

牙をむこうとするイゼルを押さえつけて、ダイエンは人畜無害な

微笑みを顔に貼り付けて見せた。

「失礼致します」

いまだ釈然としていないらしい弟子を引きずり、典医は退室した。続けてリーファが退室する。

イアンは改めてルイリを見やった。ルイリもイアンを見ざるを得ない。

ベッドの上。二人だけの室内。

要するに、逃げ場がないということ。

重く立ち込めようとする沈黙に、ルイリは溜息をつかずにはいられなかった。

9．　凍てついた紅（後書き）

そして冒頭へ戻る、ということですね。

若干一名、二話分出番がなかったので暴走しやがりました。
もう少しダークだったんですが、やめました。自分で書いててやめました。

それから、２８００アクセス突破とユニーク６００突破しました！！

本当にありがとうございます！本当に嬉しいです！
嬉しすぎてこんな中途半端な発表をしてしまいました（笑）
これから四月の上旬にかけて、なるべくスムーズに更新していければと思っています。

9．5．　側近　対　侍女（前書き）

軽い（？）番外編みたいな感じです。
書いてたら何だか長くなってしまいました……（汗）

9．5．　側近　対　侍女

扉を閉めて、廊下を進み、部屋が見えなくなった辺りまで歩いて。

「……っあぁぁあもう！！　どうしてあの人はいっつもいっつもいっつもいっつもあぁなんだ！！」

イゼルは憤りやら鬱憤やらを全て吐き出すようにしてそう叫んだ。

その様を見た医師と侍女は、そっと息を吐き出すにとどめた。この屋敷の部屋は全て防音設備が整っている。たとえ扉の間近で叫んだとて、別に聞かれはしない。仮に聞かれていたとしても、それで罰するほどイアンは短気ではないだろう。

それに、普段は穏健（おんけん）な彼がこうして苛立ちを露にしているのだから、咎めるのも気が引ける。

「相変わらず、お前の殿下嫌いは治らんようじゃの」

「嫌いじゃなくて、苦手なんですよ。そりゃあの人が天才なのは拒みようのない事実ですが、だからって人を虫けらみたいな目で見るのはやめてほしいです」

「まぁ、元来の性格の食い違い、というものもあるでしょうし……」

「食い違いで首絞められてちゃたまりませんよ。ルイリ様が止めてくださらなかったら、今頃僕死んでましたね」

リーファの苦笑交じりの言葉も、宥（なだ）めには相当しなかったようだ。

「それにしても、ルイリ様は不思議な能力（ちから）をお持ちになったものだのう」

遠い何かに思いを馳せるようにダイエンがぽつりと呟いた。リーファは目を伏せて、数分前の出来事を回想する。

ありふれた歌だ。神に祈りを捧げる唄。主に寝る前の魔除けなどに使われる、まじない程度の効力しかない唄。今まで軽く三桁を越えて聞いたことがある。

けれどあの時……彼女が唄った時、全身に鳥肌が立った。悪寒の方向ではない。全身が清められたかのような寒さだった。先程までリーファが見ていた痩せて気力の無い少女はそこにはいなかった。仄かな燐光が彼女を取り巻き、その様はまるで――そう、天使、もしくは女神そのもののようで。

（殿下が私をお呼びになった理由が、分かる気がするけれど）

召集がかかった時、リーファは正直驚いた。

行きずりの、しかもまだ二十代にも達していない少女の世話をしろという。今まで散々気位の高い姫君を相手にしてきたリーファにとって、なぜ自分がしなければいけないのかという疑問は拭えなかった。

実際その少女に会ってみても、納得はしなかった。作りなれてしまった笑顔で対応しても、ぼんやりとしているだけ。自分につくという侍女を、困惑の眼差しで見つめ返すだけ。仕え甲斐があるとは思えない。今にも消えてしまいそうな儚さは、確かに今までの側室にはなかった。自らを着飾り美しさを誇示して、男には所構わず媚を売る姫君達に比べれば、ひどく異質だ。

とてもこれから、あの嫉妬と欲望と情念が渦巻く後宮で生活していけるとは思えなかった。

そう思っていたのだが。

ふとした時の笑顔はとても美しかった。彼女の歌った？はじまりのうた？は、今まで聞いたそれよりも遥かに記憶に残った。そして、人を疑うことを知らない眼差しは思わず立ち尽くす強さがあった。

穢れを知らない白い花。

最終的に、リーファはそう判断したのである。確かに、それは囲いがなければ雨風に打たれ、囲われても太陽が恋しく萎れてしまうだろう。脆く、弱い花は一人で生きてはいけない。だからこそリーファが召集された。今ならそう思える。

とは言ってもあの皇太子のことだ、それ以外にも考えがあるのだろう。

「それにしても今日は……殿下にしては珍しく、気が立っているようでございましたわね」

その言葉には、ダイエンもイゼルもうなずいた。

本来彼等が知っているあの皇太子は、泰然自若、その一言に尽きる。感情を昂ぶらせることもなければ、まして盾ついたものに制裁を施すような真似などしない。口調こそ静かだったものの、先程の彼はかなり苛立っているようだった。

「なぜでしょうか……」

「普通に考えてみれば、ルイリ様のことじゃろうな」

冷静な意見に反応したのは、リーファだった。

「ルイリ様のどこに苛立ちを感じたと？　あの方が人を不快にさせるようなことをなさるとは思えませんわ」

「いや、どちらかというと、それが逆にイラついてるのかもしんね

ぇよ？　殿下（アイツ）、捻くれてるから」

その声は、ダイエンの声でも、イゼルの声でもなかった。四人目の声の介入に、リーファはあからさまに顔をしかめてみせる。

「おーいリーファ＝フィレル殿。俺の声聞くだけでそんなに眉を寄せるのはやめてほしいな。キレイな顔が台無しだぜ？」

へらっとした笑いと共に現れたのは、イゼルと同じような背格好をして……しかしイゼルよりも筋肉のついた身体をした青年だった。リーファは顔をしかめたまま、そのまま口を開いた。

「何か御用でしょうか、黒豹（レン）様」

「え、ちょっと待って？　何でだろ、今クロヒョウって聞こえたけど？」

「空耳でございますわ。仮に本当に私がそう言っていたとしましても、それは貶（けな）し言葉ではございませんのでどうぞ喜んで受け取ってくださいませ」

浅黒い肌を持った彼の名は、皇太子の側近、レン＝スヴェイン。ちなみにリーファの不倶戴天（ふぐたいてん）の敵でもある。

すらすらっと言ってのける言葉には、隠そうともしない棘がある。レンは女性受けしそうな顔立ちを苦笑の形に緩ませた。

「何でいつもそうやって邪険にするんだか。……ところで、この後空いてる？」

「暇さえあれば女性をお誘いになる。あなたの中で、それはもはや日常会話の一つとして組み込まれているのでしょうね。おめでたい頭をなさっていて結構でございますこと」

リーファの瞳が、ますますきらりと鋭さを帯びる。医師二人は無言で二、三歩後ずさった。触らぬ侍女（リーファ）に何とやら、である。

「俺の誘いを断る女なんてせいぜい君だけだよ、リーファ」

「此の世の全ての女性が自分のものと思っていらっしゃるどこかの誰かの鼻をへし折ることはできたようですわね。光栄でございます」

「またまたぁ、本当は誘ってもらえて嬉しいんだろ？　素直になれって」

「勘違いにも限度がございましてよ？　このようなお方を側に置くなど、殿下の審美眼は随分と落ちぶれてしまったようで。悲しい限りですわ」

ルイリに向けていた柔和な笑顔からは想像もできない、冴え冴（さざ）えとした眼差し。冷めきった態度をものともせずに、レンは口を開く。

「俺を馬鹿にするのはいいけど、アイツを馬鹿にするのはよしてくれよ？　それこそ君を切らないといけなくなるから」

「そう思うのでしたら、もう少し日頃の行いを正すことが先決だと思うのですが」

「ははっ、もっともだけどさ。ソレ俺だけじゃなくてアイツにも言ってやって？　あの節操なしにさー」

「……レン様は、私に死ねとおっしゃるのですか？」

「とんっでもない。もし君が死んだら棺の前で大泣きしてありとあらゆる魔術を駆使して君を甦らせてでも万が一もし無理だったらもう二度と女性と関わらないと誓いながら毎晩君の棺の横で寝よっかな」

「謹んでお断り申し上げます。死んでからも付きまとわれるだなんて、成仏できません」

交わされている不毛な会話に、イゼルは息をついた。

よくもまぁ顔を合わせれば飽きずに同じようなやり取りができるものだ。イゼルが今まで立ち会ってきた中で、この二人は口論にならなかったことはない。恐らく立ち会っていないところでも口論をしているのだろう。もはやこれは昔なじみ云々（うんぬん）の問題ではない。いわゆる、犬猿の仲か。

……とは言っても、一方的に敵視しているのはリーファだけで、レンは確実にこの会話を楽しんでいる。リーファもリーファで、本当に毛嫌いしている相手とは口も利かなければ目も合わせない。しかも彼女がこのような態度を取るのはレンに対してだけだ。

素直じゃないなぁ、と声に出さず呟く。

「ま、それ以前に死なないで欲しい。そう思うよな？　イゼル」

「……っていきなり僕に話振らないでくださいよ」

冷静に二人の口喧嘩の分析をしていたところで水を向けられ、イゼルは思いっきり顔をしかめた。しかもそういう問いかけってどう答えればいいんだ。

とりあえずいつものように、一端不毛な口論を止める。

「いい加減その言い合いやめてくれませんか？　ていうか何でレンさんがこんな所にいるんです」

「とか言う君らこそ、何でここにいんの？」

分かってるくせに、と内心毒づく。どうもこの人は苦手だ。皇太子とは違う苦手さだが。

「ルイリ様の診察じゃよ」

ずっと沈黙していたダイエンが、のそりという音が似合いそうな動作で動いた。

「ダイ爺さん！　久しぶりだなぁ。最近腰の調子どう？」

「おぬしに心配されるほど柔ではないぞ。そっちこそ、いい加減女遊びをやめて家庭でも持ったらどうじゃ」

「おっと、いきなり説教はカンベン。俺まだ二十歳だよ？　遊びたい年頃だってー」

「そういう貴方の態度に、今まで何十人の女性が涙を呑んできたと思っているのです」

リーファの目つきがまた鋭くなった。あぁもう面倒くさいな、とイゼルは頭を抱えそうになった。

「もうホントそういうのいいですから。こっちは答えましたよ、何でレンさんがここにいるんですか？」

話が脱線するのはこりごりだ――その響きを込めながら言うと、レンはそれを察してくれたのかからりと笑う。

「今朝まで町にいたんだけどな。さっきアイツの部屋で業務報告してたら、いきなり部屋飛び出しちゃってさ。何事かと思って追ってみたワケ」

追ってみた、という割にはかなりスピードが遅くないか。絶対追いかける気なかっただろ。

しかし、飛び出したという言葉には引っかかりを覚える。

「飛び出した？　突然？」

「そう、突然。どこ行ったか知らね？」

その問いかけに、ダイエン、イゼル、リーファはそれぞれ顔を見合わせた。どこにいるかは知っている。だが……

「殿下なら…ルイリ様のお部屋に」

「……ルイリ嬢の部屋？」

リーファの返答は、やはり驚きに値するものだった。レンだけではない、三人も、また違った意味で驚いている。

部屋を突然飛び出して、あの部屋に向かったとはどういうことだろうか。彼に限って、そんなことがあるのか？

「あー……うん、なるほど……そっか」

レンは一人でぶつぶつと呟いてから、納得したように笑顔を浮かべた。

「じゃあ俺も言ってみようかな」

「！　ま、待った待った！」

突然何を言い出すのかと思えば。くるりと踵（きびす）を返しそうになったレンの腕を、イゼルは慌てて掴んだ。

「何か問題あんのか？」

「多分ですけど、今行ったら殿下から殺されますよ。実際、僕人払いの時に盾ついたら首絞められましたから」

「うわ……そりゃ過激だな」

殺されるという単語は決して言い過ぎではない。彼だからこそやりかねない。いや、やってのける。

「じゃあ話題を変えよう。ルイリ嬢の調子はどう？」
「それですが、レン様」
ほんの少し棘が取れた口調で、それでも不審そうにリーファが口を開いた。
「何？」
「ルイリ？嬢？とお呼びになるのは、いかがなものかと……。仮にも殿下の側室ですし」
「あぁやっぱり、俺と君って似てるね」
ぴき。
何だかそんな音がした。イゼルとダイエンは頬を引き攣らせて、更に五歩ほど後ずさった。
「貴方と同列に置かれたくありません」
「いやでも、言ってること一緒だから。俺だって昨夜、それ言ったし。ルイリ嬢に」
「え？」
毒気を抜かれた様子で問い返す侍女に、側近は満足そうににんまりと笑った。
「当然、俺も最初はルイリ様って呼んでたんだぜ？　でも本人が、様付けはやめてって言うもんだから」
「ほう？　儂らにはそのような事、言っておらなんだ」
「言おうとしてる節はあったと思うけどなぁ。リーファ、心当たりねぇの？」

言われてみて、気づく。

そういえば一番初めの時の反応……あれは、目の前で膝を折る者に対する戸惑い。自らがそのような高貴な身分ではないと思って、混乱していたのではないか。

側室という立場は案外位が高い。皇太子ともなれば、その地位は約束されている。記憶喪失ということや、貴族出身ではないという経歴も起因しているのだろうが……どう考えても、側室として考えられないような少女。突然の地位にも驕(おご)らず、むしろ戸惑うその姿。

「……本当に、変わったお方だわ」

感心を込めて呟かれた台詞に、レンは微笑み。

「なぁリーファ、やっぱり俺と君って心が通じ合ってんのかな」

「はっ倒しますよ？」

9．5．　側近　対　侍女（後書き）

何ででしょう。私の書くキャラはいつの間にか暴走してしまいます。

もう作者の意思なんかお構いなしです。誰か助けてください（泣）

まだ練習曲（エチュード）は続くので、どうぞ気長に見てやってくださいませ。

それから、いつの間にかお気に入り登録が十五件になっていました！

ありがとうございます！こんな駄文を登録してくださっている方々が十五人もいらっしゃるのかと思うと、感激で涙が出そうです！！

全てが私の糧になっていきます。感想いただけましたら、飛び跳ねて踊って喜びます（毎度図々しくてすいません）！！

10．神話はかく語りき

いい加減、この静寂も限度に近い。
何となくそう感じたルイリは、震える声をおさえつつ口火を切った。

「あ、の……。……身体のお加減は、いかがですか？」

突然話題を振られたにも関わらず、彼は尊大な態度を崩さないまま平然と答えた。

「お前の目は節穴か」
「は、い……？」
「そもそもお前が治療したんだろう。その歳で物忘れは致命傷だぞ」

ぱちぱちと、瞬きをする。これはあれだろうか。もしかしなくとも、馬鹿にされている？

「本題に移る。いい加減、黙りこくるのも飽きた」
「飽きた……って……」

ただの暇つぶしに、あんな重苦しい沈黙を流していたとでも言いたいのか。……もしかすると目の前の彼って、性格が悪いんじゃないだろうか。
周囲がそれを聞けば今更かとあきれ返るような結論をようやく見つけたルイリは、妙にすっきりとした。

「お前の記憶喪失の概要は大体分かった」

ぱん、という音に反応して顔を上げると、彼は一枚の紙を持っていた。どうやらそれを叩いた音だったらしい。

「それは……」

「イゼルが書いた診断書だ」

「……そうですか」

診察の最中にイゼルが必死に書いていたのは、それだったのだろう。

「不可解な記憶の消失……覚えていないものは、国名、国史、己の経歴か。……それと、魔術が何なのか、具体的に理解しているのか？」

「具体的に……？」

「一体それは何から生じたもので、どれほどの種類があり、どれほどの人間が使っているのか」

矢継ぎ早の質問に、返答に窮する。沈黙した時間はダイエンに問われたときよりも遥かに短かったが、イアンは浅く息をついた。ただ呆れたようにそうしただけなのに、彼がすると妙に艶がある。

「成程。存在は分かっているが知識は無い。そういうところだろうな」

全くもってその通り……なのだが。

何で皇太子殿下から直々に質問をされているのだろうか。ダイエンやイゼルでも良かったじゃないか。欲を言えばリーファでも。

そんなルイリの心中も気にせず、イアンは手近の椅子に腰を落ち

着け、長い脚を組んだ。ついでに腕も。

「分かっているとは思うが、お前は俺の側室になった」

「はい」

「二日後には宮殿に戻る。後宮に部屋も用意してある。そこで生活することになる。ここまではいいか」

「……はい」

宮殿や後宮という言葉を聞くと、側室になったという事実が急に現実味を帯びてくる。一体何が待ち受けているのかは分からないが、胃袋の辺りが縮むような感覚がした。

「側室といっても、何もせず暮らしていればいいわけではない。礼儀作法、宮廷作法は当然のこと、国史、裁縫、後はダンスか。魔術はどちらでもいいが、お前の場合は必要だろうな。とりあえず、これら最低限の教養を備えなければ、皇太子（おれ）の側室には迎え入れられない」

「え？」

迎え入れられない、って。今そう言った気が。

当然だが、ルイリは貴族の出身ではない。敬語は使えるが正式なものではないし、宮廷作法なんてもってのほかだ。

「それでは、あの、私は……側室になるのは無理なのでは？」

「存外頭が弱いな。何のために二日間という時間を取ってやったと思う」

「は……？」

話が読めない。いや、何となく読めたのだが、導き出された結論を認めたくない。ルイリの動揺を見ながらも、彼は安心しろとのた

まった。

「今から全てを教え込むつもりはない。国史、裁縫、ダンスは向こうに行ってから専門の教師がいる。この二日間で、礼儀作法、宮廷作法、魔術をある程度教えておく」

「え、は、はい！？　ちょっと待ってください殿下っ、それは……」

「言っておくが、無理だの何だのという文句は聞かん。やれないと嘆く前に、やれ。仮にも俺の側室ならばな」

側室も何も、それは貴方が一方的に決めたことでしょうに……！

二日間という期間でそんなこと、人間にできるのか。今までの不安感など全て消し飛んで、新たな不安感に汗を流すルイリである。

「礼儀作法と宮廷作法はリーファに教われ。あれは人生の大半を後宮で過ごしているからな」

「大半……？　……ということは、十年以上、ずっと侍女をしているのですか？」

「そういうことになる」

なるほど、と納得した。彼女は二十一だというのに落ち着いているし、一つ一つの動作が洗練されていて無駄がない。それは長い間同じ職場で過ごしてきたからなのだろう。板につくのも道理だ。

「俺が説明するのは魔術……つまり能力（ちから）が何なのか。お前の唄も、俺の【気】も。全て魔術という言葉に分類される」

そうして、彼は説明を始めた。

魔術というものが何なのか、能力（ちから）というものが何なのか。

†　†　†　†　†

遥か昔。

天は荒れ狂い、茫洋(ぼうよう)たる海が広がり、大地が荒れ果てていた頃。

ある時、そこに幾つかの?光?が舞い降りた。

全てを飲み込む光はやがて意志を持ち、姿を取り、その世界を統べようと考えた。

それが、神。

神は混沌の地をどうにかしようと考え、まず植物という生命(いのち)を創(つく)った。木々を、花々を創造(つく)った。

草の緑は神を和ませ、花の彩りを神は愛(め)でた。

次に神は、動物を創造(つく)った。獣、鳥、魚を創造(つく)った。

大地を、空を、海を駆け回る動物達を見て、神は喜んだ。

しかしそれでも、神は退屈だった。満たされなかった。それが何故だか考えた。

そうして思いつく。

自分と同じような格好の生命を創造ってしまえばいいのではないのか？　と……

その妙案を、神はすぐに実行した。

光を集め、自分と同じような手、自分と同じような足、自分と同じような顔を創造った。

その生命は、今まで神の創造した生命よりも遥かに賢く、そして感情豊かな生き物となった。

神はひどく喜び、そして満足した。

神はそれを人間と名付け、それぞれが話せるように声を与え、言語を与えた。

人間はこの大地に息吹くどの生命よりも賢かった。

自分達の頭で考え、悩み、前へ進もうと試みた。

神は人間を愛した。人間も、神を敬った。

初めは神に創造られていった人間であったが、いつしか自分達で

その数を増やしていった。

やがて、大地は人間で溢れた。

人間は神同様、様々な感情を持っていた。
喜び、悲しみ、怒り、快楽、驚愕、諦め、恐怖、嫌悪、幸福。

しかし神が有せず、人間だけが有した感情がある。

強欲、嫉妬、色欲、暴食、傲慢、怠惰、虚飾……即ち、『欲望』。

これこそが人間の強みであり、同時に滅びの起因となるとは、この時誰も思わなかったであろう。

世界は神を中心に回っていた。

陽が昇りそして沈み、月が満ちそして欠け。それは?世界の範?だった。
全ての生命は、そうして生きていくことに少しの否も唱えなかった。

だが、いつしか人間だけが、?自分達の意思?で生きることを望んだ。
己の『欲望』に忠実に従うことを選んだのだ。

人間(ヒト)は？世界の範？たる神を疎みだし、追い出そうと考えた。
非力な人間(ヒト)は大勢で群れをなし、神に刃を向けた。

神は激怒した。
自らの手で創造(つく)りだし、あれほどまでに愛し、慈しんだ人間から、
何故虐(しいた)げられなければならないのか――――。

怒りはおさまらなかった。神はその怒りを爆発させた。
その瞬間、大地は鳴動し、海は荒れ狂い、天は割れた。

神は十にも満たない。人間(ヒト)はその何百倍もの数を持っていた。

人間(ヒト)は必死に抵抗した。しかし、頭脳しか持たず、神々の加護の
下暮らしてきていた人間(ヒト)に、勝利の余地はなかった。
多くの生き物が命を落とし、多くの人間(ヒト)が死んだ。

乱は十五昼夜にまで及んだ。

やがて神は自らが齎(もたら)した大地の惨劇(さんげき)に悲しみ、絶望し、天へ還っ
ていった。

神のいなくなった大地は更に荒れ果てた。

周囲はいつの間にか瘴気に満ち、魔獣と呼ばれる獣が跋扈した。
世界の礎をなくした地上は、荒れていく一方だった。

ある時、一人の人間が荒れた世界の中に一筋の光を見つける。それは神の光によく似ていた。

その時に、一匹の魔獣が襲ってきた。人間は驚き、その光を魔獣に向けた。
すると不思議なことに、魔獣は逃げていってしまった。

これは魔を退散する力だ――人間はそう判断した。
そして、自分達で少しずつその光を分けていった。

人間はその光を、多くのことに使い分けた。
ある人間は水を操り、ある人間は己の耳を鋭敏化させ、ある人間は武器を作った。

人間は思った。これは、神々が我々に与えてくださった贈り物なのだ、と。

彼等は神々に敬意を払い、その能力を『神術』を名付けた。

決して神の慈悲を忘れないように。

けれども無情にも時は流れ、『神術』を持つ人間も少なくなっていった。
『神術』を持たない人間は、それを持つ人間を奇妙な目で見るようになった。

人外の能力（ちから）。
それは神ではなく、魔の力。
人々は口々に吹聴（ふいちょう）していった。

いつの間にか、『神術』は『魔術』と呼ばれていくようになったのである。

１０．　神話はかく語りき（後書き）

ヒトヒトヒトヒトうるさい文章ですね（笑）
強欲～……は、ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、キリスト教の用語として出てくる『七つの大罪』から抜粋しました。
本当は憤怒もあったんですが……まぁ、怒りはさすがに神は持っているだろうと。
代わりに虚飾を追加いたしました。

浅い知識で入れたものなので、スルーしてくだされば嬉しいです……。

11. 意志確認

「……神の遺した能力、それが魔術。もっとも、これは神話でしかない。他にも引く手数多の説があるが、これが最も有名だろうな」

低い声で流れるように説明された内容に、ルイリは納得した顔でうなずいた。

国名も、国史も覚えていないこの身体が憶えていたもの――それが、？はじまりのうた？をはじめとする唄の数々。

今彼が話してくれた神話は、？はじまりのうた？と一致する。それに話の内容に違和感はない。

「能力を使う人は、今はどのくらい……」

「正確には異能者という。大陸全土の人口の半分……といったところか。……否、もう少し少ないか。魔術を使う血筋は確実に薄れつつある。異能者同士が契りを結ぶことは規則ではないからな」

逆に、特殊な能力を持つ種族は未だに濃い血を受け継いでいくのだそうだ。

「特殊な能力……というと？」

「一概には言い切れんな。主にそういう種族は、皇族や王族などになって血を保っていく」

「では……殿下の能力も、特殊なのですね」

救急箱を浮遊させたり、指一本で青年の首を絞めたり。

例は出さなかったが彼はそれを察したようで、軽くルイリを睨め

つけ、

「……お前には及ばない」

低く、ぼそりとした口調で呟かれた言葉はルイリの耳まで届かなかった。

「俺の能力(ちから)は『大気』を操る魔術。この辺りを取り巻く空気全てが俺の支配下にある」

「全、て……」

「例えば」

言うや否や、ルイリの横を何か鋭いものがひゅっと通り過ぎた。思わず息を詰める。

鈍い音がしたので後ろを振り返ると、ベッドの縁(ふち)の飾りがほんの少し切れている。驚いてイアンを見返したが、彼は少しも動いた様子がない。

「今のは……殿下が？」

「凝縮して、動かした。しようと思えばお前の首を刎ねることもできる。俺が思えば大気(これら)はどうとでも動くし、形にもなる」

「では……前に、救急箱を浮かせたのは……」

「救急箱(あれ)自体を浮かせた訳じゃない。周りの空気の密度を変えて、運ばせただけだ。さっきも同じだな」

ルイリは納得した。大気を扱う能力(ちから)ならば、あの平伏(ひれふ)しそうになる威圧感もうなずける。彼が元来持つものもあるだろうが、意図してそのような雰囲気を作っている節もあるのだろう。

同時に絶句した。さっき……というのは、イゼルの首を絞めたこ

とを意味しているのだろう。表情も身体も動かさず、一人の人間を呼吸困難一歩手前まで追いつめた。

つまり彼の傍らには、常に武器がある状態になる。剣も盾も、即座に作り出すことができるということ。それは、脅威となりうる能力だ。

言葉も出ない様子のルイリに、イアンはぞんざいに返した。

「それほど驚くことではない。要は応用すればいいだけの話だ」

問題はお前だ、と低い声が言った。

「私？」

今度こそ驚いてルイリが目を瞬かせると、静かな肯定が戻ってきた。

「己の能力は理解しているな？」

「……はい。唄を唄うと、相手の傷を癒すもの」

「それはどれほどまでの効力か分かるか？」

効力、とはどういうことなのか。ルイリは眉根を寄せて考え込んだ。その様子を受け取って、彼は律儀にも説明してくれる。

「つまり……どこまでの傷なら癒せるのか、歌うだけですぐに治療へと変わるのか、ということだ」

「あ……。えぇと、……歌えばすぐに、というわけではありません。私が目の前に怪我人がいるというのを認識して歌いだすまでは、ただの『歌』です。怪我だけではなく、病も……普段よりも身体が『正常でない』場合、効果がもたらされます」

水が流れるように口から溢れる説明に、ルイリは困惑した。つい数秒前までは何のことかも分からなかったというのに。それは頭で認識していることを話しているという感覚ではなかった。自分の唇から能力の説明が零れるたび、あぁそうなのかと妙に学習している。

何だか奇妙だ。まるで誰かが体内に憑依して、ルイリの口を借りて話しているかのよう。

「後は……亡くなった方には効力がありません。たとえどれほど身体が完璧な状態であったとしても。心臓の動きが止まれば、どう足掻いても元に戻すことはできません」

最後の言葉を紡いだ後、唐突に台詞が途切れる。胸の内から湧き上がっていた何らかは鎮まり、説明すべき内容は話し終えたのだと判断する。

「これくらい……です」

先程の饒舌とは打って変わって消え入りそうな声で、完了の言葉を添える。

イアンはしばらく思案するように目を伏せていた。むろん彼は意図していないだろうが、そうして動作を止めた姿は稀代の芸術家が拵えた彫像のように美しかった。美しい、という言葉は男性に対してあまり使うような単語ではない気がするが、ルイリの中ではその言葉しか思い浮かばなかったのだからしょうがない。

見れば見るほど人間ではないような青年。ルイリは魅せられたように彼を見つめていた。

ふいに彼が顔を上げて、視線をルイリに向ける。鮮烈な紅に見つめられ、硬直した。

「『正常でない』場合、というのは身体的に限るのか」
「は……」
「……苛立っている時にも効力があるのかということだが」
「……？」

言っている意味がよく分からない。しかし彼は間抜けな返答が返ってきたのも気にせず、いや、いいと簡潔に断ち切った。

「しかしそうなると……成程、厄介だな」
「厄介、ですか」

意外そうに声を上げる側室を見やって、イアンは呆れたように溜息をついた。

「事の重大性を熟知していないらしい」
「……申し訳ありません」
「いちいち謝るな。気障(きざわ)りだ」

謝罪を鬱陶しそうにはねのける。どうもこの少女は相手に対して及び腰になる傾向が強い。それはイアンが常に発している【気】も関連しているのだろうが、それにしては引きすぎである。元来の性格か。それはそれで仕方のないこと。

「前にも言ったと思うが、この大陸上にお前のような……治癒の能力(ちから)を持ったものはいない。一人として、だ」

驚きながらも、うなずく。

しかしそうであれば、医師であるダイエンやイゼルは、一体どういう治療をしているのか。疑問の視線を察して、イアンは説明を続ける。

「ダイエンが行うのは主に血止めだ。包帯を巻くのは当たり前として。他にも、快癒の祈祷はざらだが、その場で傷や病が治ることなどない」

瀕死の重傷、不治の病を患えば、死は約束される――と。彼は抑揚の無い声音で呟いた。

イアンの瞳から表情が消える。その唐突な消失に、ルイリは息を呑んだ。

「……それにその髪と、その瞳」

長い指先が伸びた。反射的に身を強張らせるルイリには頓着せず、彼の指はつっと亜麻色の髪を一房取る。ほんの少しの感触しか伝わらないのに、ルイリは顔を赤らめた。

「亜麻色の髪と翠緑の双眸など、誰も持たない色合い。そして治癒の魔術。……お前の存在は極めて異質であり、一部の人間達には目障りになる可能性すらある」

淡々とした台詞が、過剰なほどに耳に響いた。

異質……目障り。

その言葉は思った以上にルイリの心を揺らした。ルイリ＝レティシアという存在自体を、否定された気がしたのだ。

それだったら、宮殿なんていうところに行かなければいいじゃないか。姿も、瞳も、能力も。全てを否定されるような場所に、なぜ自ら飛び込んでいかなければならない？

あのまま森の中を彷徨っておけば良かった。彼なんて見つけなけ

れば良かった。そして歌わなければ……良かったのに。
視界が滲む。目頭が熱くなる。いつの間にか髪を離れていた指にも気づかない。
そして――、顎を、掬い取られた。
「っ……！？」
目の前に迫るのは、白皙（はくせき）の美貌。太陽のような金髪がさらりと額にかかり、紅の瞳が至近距離でルイリを射抜いて。お互いの吐息が交わってしまうほど近いところで、止められた。
「殿、下……？」
「……存外打たれ弱いな。まだ仮定の話をしている段階だというのに。勝手に落ち込んで勝手に泣くな」
「な、泣いてなんて……」
言われて、目尻に何かが触れる。それが彼の指だと気づいた瞬間、全身が硬直してしまった。というか、何でこんなに顔が近いんだ、おかしいじゃないか……叫びたかったが、無理なことだと分かっている。
彼はその体勢のまま解放してくれない。こちらに身を乗り出し、今にも押し倒しそうな勢いでルイリに顔を近づけている。その真意をはかりかねて、ルイリは赤面すると同時に困惑した。
「安心しろ……後宮で大人しくしている限り、お前は俺の庇護下にある。他の奴には手出しをさせない」
後の台詞は言うなれば口説き文句だが、響きとしてそんな甘いものはない。事実のみを、端的に告げているだけ。

「あの。庇護下と、いいますと……？」
「お前の能力を知っているのは、俺、レン、リーファ、ダイエン、イゼルの五名のみ。それ以上、お前の能力を知られないようにリーファには言ってある」
だからこそリーファを呼んだ、と続ける。それじゃあ質問の返答になっていない……と無言の抗議をしてみると、イアンは口を開いた。
「皇太子の側室というのは、案外外壁が硬い。本人の意思ならどうしようもないが、よほどのことが無い限り他の者は寄り付けない」
「本人の、意思？」
「……いや、いい。どうせ分からないとは思った」
この短時間で、随分と性格の分析ができた。本当に、この少女は何も知らないのだ。
「要するに、お前の容姿を徒に触れ回る輩などには、目も触れさせないということだ」
「……私をそのようになさって、殿下には……利益があるのですか？」
皇太子の権利を使って、周りを堅固な守りで固めて。ほんの数日前に出会って、気紛れに側室にした少女に、それほどまで心を折る必要があるのか、と聞く。
すると、彼は口の端を軽く引き上げた。昨夜暖炉の火の元見た嘲りとは違う——楽しむような表情。一気に顔に熱が上る。
しかし、次に飛び出した台詞は、

「お前にはそれだけの利用価値がある」

ルイリは別の意味で眩暈（めまい）がした。『利用』を抜いてくれれば殺し文句だというのに……。別に、それを望んでいたわけではないが。そういえば昨夜、彼は自分を側室にした理由を『利用価値の可能性』だのと言っていたではないか。

「後は……お前次第だ」

投げかけられた言葉にルイリは視線を上げた。視界を覆うのは、秀麗な彼の顔のみ。先程は直視できなかったそれも、何故か平常心で見ることが出来た。

「どうする。このままこの屋敷で囲ってやっても構わない。ただし外には出さず、半永久的にここで過ごすことになるだろうがな？」

「……」

ルイリの反応を面白がるような口調に、沈黙で返す。あからさまに焚き付けている、それくらいはルイリでも分かった。

だから、あえて。

「行きます」

震えないように努力した声は、今までで一番毅然とした声だといえた。紅の瞳が微かに細まる。

「なるべく、殿下にご迷惑をおかけしないよう努力します。貴方に利用されるとしても……誰かに『必要』とされるのならば、私はそこへ行きます」

翠緑の瞳が深くなる。またか、とイアンは思った。彼女の瞳がたまに深くなるのは感情の揺らぎのせいなのだろうか。それは判断しかねたが、二十にも満たない少女はその瞬間、ひどく大人びて見えるのだ。

この煌めきが、続くのかどうか。陰謀と情念、そして底のない欲望が渦巻くあの宮殿でも、変わらずに煌めきを放つのか。

見届けるのも、悪くない。

「……上等だ」

思ってもみない暇つぶしを見つけた気がする。その響きを含ませて、イアンは笑った。

細い顎から指を離し、そのまま立ち上がった。ルイリもかなり脱力して、後ろにあった枕に全身を預ける。

「確認はしたぞ。後悔をするのもしないのも、お前だけだ」

そのままイアンは彼女の顔を見ようとはせず、扉の方へ足を向けた。

「あの、殿下」

長身の後ろ姿に向かって、ルイリはおずおずと呼び止めた。足は止まるが、顔が此方に向くことはない。

「え、と……申し訳ありませんでした。一人で行き詰って、余計なことを考えて……」

「謝らなくていいと、俺は言ったが？」

「はい、その……。けれど今、殿下から言われたことで、色々すっきり……しました。……ありがとうございます」

ほんの少し。それは気のせいと言われればすぐに納得してしまうような、微細な変化。けれど確かに、その場の空気が……微かに和らいだ気がした。

しかしそれはすぐに、まるで意図されたかのように重い空気で、塗りつぶされた。

「感謝される謂(いわ)れは、ない」

感情を一切廃した声。

それにはっとするルイリを置いて、イアンは靴音も高く部屋を去った。

姿を消した扉と、先程まで彼が座っていた椅子を見比べて、細く息をつく。

……分からない、というのが率直な感想だった。彼という人間は、よく分からない。冷酷で、無表情で、皮肉げで、けれど案外律儀で面倒見が良い。

そしてたまに――とても、苦しそうで、悲しそう。

それは、ほんの些細な時。威厳と自信に満ち溢れた紅が、険をにじませて揺らぐ時。端整な唇が、何かを嘲るように歪む時。

ルイリはその瞬間、恐れよりも疑問を感じるのだ。どうしてそんなに己を隠そうとするのか。どうしてそんなに暗い表情を抱えるのか。皇太子という立場は、誰よりも敬われ、誰からも羨まれる存在

ではないのか。

どうして……どうして皇太子(あなた)が、そんな表情(かお)をするの？

たまに垣間(かいま)見える、影を落とした表情。あれが彼の本当の顔だとしたら。……何て、悲しいのか。

「……」

そういえば、と他のことに思い当たる。

密度の濃い時間だったので忘れがちだが、そもそもどうして彼が魔術のことやこれからのことに関して言及しに来たんだろう。

よく考えてみればおかしな話だ。一国の皇太子ともあろうお人が、たかが一側室を目の前にしてしかも真面目な顔をして質問をしたり、魔術のことを懇切丁寧に教えてやっているなど。

むろんだが、考えてみても分からない。彼の心中は計り知れなかった。

ルイリはとりあえず考えることを放棄して、まだ感触が残っているように熱い頤(おとがい)に、そっと指を添えた。

ちなみにルイリがこの理由を知るのは、かなり先の話になる。

11．　意志確認（後書き）

更新できました……（息切れ）。
何だかこう……引き伸ばされ引き伸ばされ……展開がないですね。
練習曲（エチュード）はこれで終わりです。次回は何曲にしましょうか……嘘ですすいませんちゃんと考えてます。

そうそう！　前回の更新で３０００アクセスありがとうございますと言い損ねたので言います！
本当にありがとうございます！　頑張る気力になります！！

12. 噛み合い始める歯車（前書き）

即興曲（アンプロンプチュ）と読んでくださいませ！

12. 噛み合い始める歯車

曖昧な空間。

あぁ、まただ……と、声に出さず呟く。不安定な足場は、固めるよりもむしろ流れに身を任せた方が良いと判断して力を抜いた。

きん、と耳鳴りがする。

『やれやれ。こうも立て続けに繋がるとは、思っていなかったな』

声が響いた。聞くのは二度目。それは呆れがほとんどだったけれど、隠しても隠し切れないほどの温かさと慈しみに溢れている。ルイリは知らず、唇を緩めた。

「言っていることは、よく分からないけど……会いたくなかった？」

『何を言い出すかと思えば。私が否ということは分かりきっているだろうに』

悪戯じみた言葉にも、ちゃんと返答をくれる。相変わらず、その声はどこから響いているのか分からない。けれどそれで良いと思った。

だって、それが？彼？なのだ。

『どうやら、餓死状態にはなっていないようだ』

「それは……まぁ。えっと、あなたは私がどうなっているか知っているの？」

『いや、明確には分かっていない。……だが、こうすれば……』

華奢な両腕を、温かいものがふわりと抱えた。え、と思ったときには、こつんと額に温かいものが触れる。そこから何かが引き出されていくような感覚がする。

『……ふむ、なるほど。とりあえず目下の問題は、今からの二日間でその殺人的な内容の講座をどう受けていくか……』

独り言に近い声に、ただ驚いて瞬きをするしかできない。どうやら先程の行為で、ルイリの記憶を読み取ったようだ。しかしそれだけではなく、ルイリの憂慮まで分かってしまっている。

額と額が合わさったということは、？彼？は目の前にいるはずなのに。眼前を見ても、何もない。ほんの少し、人型のようなものがぼやけているだけ。それは輪郭も霞みがかってひどくおぼろげだが、ルイリよりも遥かに長身だということは分かった。

『……まぁ、いきなり知識を戻すのも変に思われるのは道理だろうし』

「え？」

今、戻すと、言わなかったか？

「戻すってどういうこと？　あなたは……私の記憶がどうなってるか、知ってるの？」

『おっと、それ以上の追及はよしてくれ。それは？幻想（ゆめ）？の域を脱する。しかし、さて。どうしようか』

とぼけたような口調の後、真剣に思案するように沈黙が流れる。

『不審に思われるのは仕方のないこと。私としては、お前が苦労するのは真っ平御免。……答えは決まっているな』

一方的に、置いていかれている気がしてならない。一体何が答えで、何を決めたのか。ルイリは少し不機嫌そうに眉宇を寄せると、苦笑した声と共に眉間に指が当たった。

『むくれるな。今は私のことも、お前のことも言うことはできない。だが必ず時は来る。それまで、待っていてくれ。いいね？』

「待てないわ」

ほんの少し、声が揺れた。目の奥がつんとする。鰓をほぐしてくれた指先を逃さないように掴んでから、喉から声を絞り出す。

「待てない。もう子供じゃないんだもの。……どうして？　どうして、いつも一人で色々と背負ってしまうの。少しくらい、私に言ってくれてもいいのに。もう、守られるだけの存在にはなりたくないの……

――ヴィン」

言ってから、はっと口をおさえた。相手も、声に出さず息を呑む。

ヴィン？　……ヴィンって、誰？

『……参ったな。こんなに干渉するつもりはなかったのに。やはりお前を侮ってはいけないということかな』

本当に弱りきった声でそう言うと、ふとルイリの耳元に口を寄せる。

『今回の事は全て幻。お前は全てを忘れて、現実に戻れ』

その台詞を聞くや否や。

頭の中が何か暴力的なもので掻き乱されたように、ルイリの頭の中は真っ白になった。大事なものが崩れ落ちていく。必死でかき集めた欠片が、無情に零れていく。

「あっ……いや……」

嫌だ。無くしたくない、失くしたくない。それなのに……

知らず、涙が溢れる。大きな手がそれを優しく拭って、額に柔らかいものが触れた。瞬間、頭の中の何かが覚醒したような感覚に陥る。

『これからの支障にならないように、一つ封を外しておいた。これでだいぶ楽になるだろう』

「……ヴィ……」

優しい指先が、唇を塞ぐ。それはまだ、禁句だというように。

『ルゥ、これだけは憶えておくといい。私はいつでもお前を想っている。……常に、お前の傍に私は在(あ)る』

?彼?は、そう言って。

『――愛しているよ』

深緑の瞳を細めて、微笑んだ。

「――、……」

ゆるゆると瞼を開くと、こめかみを冷たいものが伝った。
脳裏に残っているのは何もない。ただ奇妙なまでの空虚感。胸にぽっかりと空いた喪失感はひどく滑稽（こっけい）で――ひどく、哀しかった。

ルイリは泣いていた。何が悲しいのかも分からないまま、ただ泣いていた。とめどなく溢れる涙を拭いもしなかった。
拭ってくれる、手を期待していたのかもしれない。そんなありえないことを考えて、ふと失笑した。唇から漏れた笑いは、乾いていた。

何かを得た気がする。けれどすぐに、失った気がする。

――愛しているよ

前も聞いたような声、前も聞いたような言葉。
その台詞から溢れる、惜しみない愛情と思いやり。
「……たしも」
わたしも、あいしてる。
空気に溶け込みそうな言葉を呟いてから。
唇が、己でも意図していない間に、何かを紡いだ。

†　†　†　†　†

リーファは驚きのあまり、開いた口を塞げなくなっていた。
「ルイリ様……」
「はい？」
「あの、つかぬ事をお聞きいたしますが、……ルイリ様は、このような講座を受けるのは初めてでございますよね？」

一応、確認してみる。ルイリは少し首を傾げて考え込んでから、こくりとうなずいた。

「はい。……多分」

「あぁ……申し訳ございません。そうでしたわ」

初めても何も、彼女には不確かな記憶しか残っていないのだ。不躾な質問をしてしまったことを詫びる。

それにしても。

「今まで私が教えてきた方々は、一度聞いただけで動作までできることはほぼなかったのですが……」

リーファから言われた通りの順序で椅子に座ったルイリは、その呟きを聞きとがめて渋い表情を浮かべた。ルイリ自身、一体何が起こったのかさっぱりだ。

朝起きて、リーファから今日教えられる行儀作法、宮廷作法の内容を遠慮がちに伝えられたところまでは良かった。

しかし、いざ講座が始まってみると、自分でも驚くほど身体が動く。歩き方、立ち居振る舞い、礼の仕方まで。

リーファが口で説明すると、ルイリはあっさりとその動きをしてしまった。普通は相手が実践するのを見てから見様見真似でやってみるのが普通である。ルイリはその中間地点の最も重要な部分を省いて、しかも完璧にやってのけるのであった。

周りから見ればそれはもう不自然に違いない。それは例えるなら、昨日までは言葉も話せなかった赤ん坊が、次の日になって突然優雅な敬語を使う令嬢に成長したかのような変貌振りである。

物覚えが良い、で済まされる問題では、もはやない。

「けれど。まぁ、上達が速いのは何よりですし、何の支障もございませんから、良しとしましょう」

というのがリーファの結論らしい。案外さっぱりとした考え方は、逆にルイリを助けた。何せ一番困惑しているのはルイリなのだから。

昨日まで何も出来なかった。

今朝は起きてから、これから起こる（恐らく）厳しい指導にげんなりとしてリーファを困らせた。だが実際行ってみるとすんなりと体が動く。自分の名前や歳を覚えているのとは少し違う。それは長い間刷り込まれてきた、『躯（からだ）』の記憶と言えた。

それがどうして急に、湧き出したように思い出されたのか。

「変……ではないですか？」

「何がでございましょう？」

「あの……いきなり、こんなことができるようになるなんて」

しょんぼりと俯く側室を、侍女は妹を見るような眼差しで見つめて微笑んだ。

「不思議ではございますが。それを掘り下げたとて、ルイリ様に良いことがあるとは思えませんわ」

言われてからようやく、肩の力を抜く。リーファは決して無理強いをしない。

朝落ち込んでいるルイリに、「この二日間でやれるお方の方が極端に少ないのですから、殿下の仰る事なと気にせずにやっていきましょう」と言ってくれた。……まぁ結果的に、二日間でやれそうな勢いなのだが。

教えてくれている事も起因してか、リーファはこの前よりもルイリに対して遠慮がなくなった。そういう表現もおかしいが、実際そうなのだ。先日のような余所余所しい雰囲気でもなくなったし、何よりもあの薄い膜に包まれたような微笑を向けなくなった。それは多大な進歩だと、ルイリは勝手に思っている。

「礼儀作法、宮廷作法は申し分ないとして……後は、その口調でしょうか」

「口調？」

別に失礼の口の聞き方はしていないはずだ。相手に対して敬意を払うには、敬語が一番適切である。それに、リーファは年上だし。

それとなく抗議のようなものをしてみると、リーファはそれがいけないのですよと溜息をついた。

「殿下に敬語を使われるのは構いませんが、私達下々（しもじも）の者に使うのは少し……問題があるかと」

その理由が理解できないルイリに、リーファは説明してくれる。

皇太子の側室。むろん他の皇子の側室であっても、その地位は確固たるものがある。未だルイリが後宮入りしていないというのもあるが、これほど侍女を連れない側室も珍しいという。普通は二桁を超える侍女を周囲に引き連れ、身の回りの準備はすべて彼女等にしてもらうのだそうだ。

後から知ったことだが、リーファは後宮の中でも抜きん出て有能で、彼女を侍女にという争奪戦は激しかったらしい。そんな折にイアンが直々に召したのもあって、収拾がついたという話だ。

「下々って。リーファさんは、貴族のご令嬢じゃないんですか？」

「下流の、ね。後宮にいる侍女は大抵がそうですわ。側室様の下で

働いて、自分が殿下のお目に留まらないかを画策（かくさく）している」

しれっと言われた台詞は中々に過激だった。何と言えばいいのか思案しているルイリに、侍女はからりと笑ってみせる。

「私は違いますけれど。ただ単にこの仕事が性分に合っていましたから、父に頼んでこうして働かせてもらっているのです」

「……」

「あら。何だか無駄話をしてしまったようですわね。……では始めから、一通りおさらいをさせていただいてよろしいでしょうか？」

「あ、はい」

慌ててその言葉に返事をしながら、横に立つリーファをちらりと盗み見る。藤色の瞳は、先程と同じ穏やかな微笑を浮かべていたが……。

皆、抱えているものがある。

それを再認識して、ルイリは小さく息をついた。

ちなみにこの後の指導も、ルイリは己の意志に関係なく完璧にこなしてみせたのだった。

† † † † †

ばさ。
机の上に置かれた大量の紙の束を眺めて、イアンは不機嫌そうに眉をひそめた。
「何だこれは」
「見て分かんだろ。お前が宮殿(むこう)に溜めてた執務の資料」
「……何で此処にまで回してくる」
「仕事の才能が、陛下よりも皇太子(おまえ)にあるって言ってる何よりの証拠だろ？　素直に喜べば？」
何もしないお前に言われたくない。
喉までその文句が出かけたが、言ったところで事態が好転するわけでもない。イアンは諦めて、苛立ち任せに机を殴る代わりに目の前の束の一番上の資料に手を伸ばした。さして興味の無い目つきでそれを捲(めく)りながら、面倒くさそうに息をつく。側近の青年は、面白そうに笑った。
「相変わらず、回ってくるのは横領が発覚した奴等の左遷先決定お願いします的なヤツばっか？」
「そればかりという訳ではないが、圧倒的にその量が多い」
別段、左遷するんだったらどこかの片田舎を適当に選んで、あとはこちらに判子を求めればいいだけの話だろうに。
「ま、それはお前の判断した場所が適切だからだろ？」
「恨みをこちらに向けたい、の間違いじゃないのか？」
左遷先を選び、言い渡したのがイアンだとすれば、言い渡された

方はほぼ確実に彼に怨みを持つ。実際それで何度か襲撃されたが、襲撃と呼ぶのもどうかと思うほど低レベルなものだった。こちらからすればいい迷惑だ。悪事を働いたのは自分の方だということを忘れているらしい。

（……だが、目に余る）

最近、横領をする役人達が徐々に増えつつある。それは皇帝の指導力不足の賜物でもあるだろう。皇帝は威厳こそあれど、いかんせん利かせる範囲が狭い。目が行き届かない場所で、役人共はぬくぬくと私腹を肥やしているというわけだ。叩けばキリが無い。だが、放置しておくわけにも行かない。

全ての皺寄せが、自分に向かってきているような気がしてならない。若干不機嫌気味に溜息をついた。

「後で書状でも書いておく」

「大変だなぁ、有能な皇太子殿下は」

ちっともいたわりを込めていない昔なじみを軽く睨む。

「お前も少しは真面目に働け」

「能ある鷹は爪を隠すって知ってるか？」

「東方の諺（ことわざ）を引き合いに出すな。そもそも、お前は自分が不利な立場になったらそれしか使わない」

「ひっで」

非難の声も、少しも滅入った様子がない。けろりとした顔で笑うだけだ。それ以上相手をするのはこちらが疲れるだけだと判断し、目の前の彼は黙殺して資料に目を通しだした。

その時、ドアが控えめに叩かれた。

「誰だ」

「失礼致します。リーファでございます」

「入れ」

キィ、と扉が開き、侍女は紺色の髪をさらりと鳴らして優雅に頭を下げた。

「お早うございます。皇太子殿下に置かれましては、ご機嫌麗(うるわ)しく」

「挨拶はいい」

形だけの挨拶を口上しようとした言葉を素早く遮って、奥へと促す。リーファは洗練された完璧な動作で机の前まで歩み寄り、再度深く頭を下げた。

「何の用だ」

「実は、殿下に折り入ってお願いしたいことがございまして、参りました所存でございます」

それは彼女にしては珍しい要求。イアンは片眉を上げる。

「許す、言ってみろ」

リーファはゆっくりと顔を上げる。妙齢の女性といえるその容貌。しばらく表情を消してイアンを見つめていたが、やがてにっこりと微笑んで、言った。

「私を殿下直属の間諜(かんちょう)から、外していただきたいのです」

運命の歯車が廻りだす。

それは止まらず、狂々（くるくる）と回る。

舞台は前座（オープニング・アクト）を終わり、本編（メイン）へと移る。

ではそれまでの余興に、様々な音に満ちた即興曲（アンプロンプチュ）を。

12．　噛み合い始める歯車（後書き）

新章（？）始まりました。新キャラが……出てくると、……いい、な。

こんな消極的ではいけませんね。出します。出してみせます（きぱっ）。

久しぶりに、蛇足補足！

即興曲……準備なしにその場で考えて演奏する楽曲。また、自由な形式で書かれた抒情的小品。アンプロンプチュ。

13．皇太子の誤算、側近の憂慮、侍女の希求

レンは「えっ？」と声を上げた。

イアンは表情を動かさなかった。

否、表情は動かさなかった。

「どういう了見か、説明しろ」

声にすら動揺が現れていない。だが室内にいる二人、レンとリーファは、彼が微かに驚いたことを確信する。それは、無に等しい【気】の乱れ。

侍女は――侍女の姿をした間諜（かんちょう）は、再度にこりと笑ってみせた。

「少し考えてみたのです。私（わたくし）が一体何の仕事をしたかったのか」

その笑顔には実に清々しいものがあった。いつも薄氷（はくひょう）のような笑みしか浮かべない彼女だが、このような笑い方も出来たのか、とレンは軽く感心する。

「殿下。私は間諜ではなく、侍女を務めたいのです」

リーファは微笑みながら、己の胸に手を当てる。その所作を、イアンはどこまでも無の表情で眺めていた。

レンが目を瞠る。こんなこと、以前の彼女ならば考えもしなかっただろう。思わず口が開く。

「どうしたんだよリーファ？　まるで人間が変わったみたいだぜ」
「えぇ、私も驚きましたわ。実はこの決意を固めたのは……ほんの数分前なのでございます」
皇太子は片目を眇めた。リーファは無言で微笑んで、その数分前の出来事を回顧する。

†　†　†　†　†

「リーファさんって、どうして十年以上も侍女をしているんですか？」
投げかけられた質問は意外ではなかったが、どうしてその事実を知っているのかと驚いた。とはいえ、その話をする人物は極端に限られている。
「……殿下が仰ったのでございますか？」
ほぼ確信を持って問うと、彼女は長い髪を揺らしてこくんとうなずいた。その仕草は、十七にしては幼く、愛らしい。疲労が抜けた分、好奇心や興味が広がったのだろうか、と推測する。

「そう、ですね……」
「あ……言いたくないことならいいんです。少し不思議に思っただけですから」
「いえそうではなく。……けれど何と説明すれば良いのやら」
淡く苦笑してから、一つ一つ言葉を選ぶように口を開いた。
「先程言った通り、私の家は下流の流れを汲む貴族でございまして。当主であった母が十二年程前に死に、元より心臓の弱い父は寝たきりになってしまいましてですね……つまりまぁ、家計は火の車だったのでございます」
いきなり突拍子も無い身の上話をされて、当然少女は驚いているのかと思ったが、そうではなかった。椅子にちょこんと座り、真っ直ぐにリーファを見つめている。急かすでもなく、拒むでもなく。
「……何せ当時でも四人の弟妹を抱えていましたから、一番年上の私がどうにかするしかなく」
しかし、彼女の有した能力を、他人は簡単に認めてくれなかった。王族達ならまだしも、掃いて捨てるほどいる下級貴族の娘が異能者――それは、差別をする要素としては充分だった。
リーファの能力は確かに一族代々から受け継がれているが、隔世遺伝的なもので、両親はおろか祖父母もその能力を持ってはいなかった。調べてみれば、リーファの曾祖母にあたる人が能力を持っていたという。
色々な仕事を点々とした。道端に出て物売りをしたり、知り合いの店で働かせてもらったり。だがどうしても、彼女の能力を受け入れてくれる場所は見つからなかった。

「そんな時、皇宮が侍女を募集しているという報せを聞きまして」
「それで、侍女になったんですか？」
「ええ。行儀作法や宮廷作法は生前の母から叩き込まれていましたので、不自由はいたしませんでした。すぐに採用されましたわ」

その時の家の喜びようといったらなかった。何せ宮殿の侍女といえば給料はどこよりも保障される。よくやった、お前は一家の誇り、末代まで語り継がれる救世主……散々褒めちぎられて、リーファは後宮に侍女として入った。

「宮殿は本当に綺麗な場所でした。きらびやかで鮮やかで。当時九歳の私は、こんなところで仕事ができるのかと浮かれておりました」

だから忘れていた。能力のことを。己の持つ能力を、いかに人が奇異な眼で見るのかを、忌むのかを、忘れていた。

「はじめは……上手く隠しおおせていたのですけれど。やはり私も子供でしたから、すぐに発覚してしまいまして」

苦笑に、ほんの少しの自嘲が滲む。
ルイリは具体的にリーファの能力の内容は尋ねなかったが、彼女自身がそれを説明しないという事はあまりひけらかしたくないものなのだろうと察する。だから、黙って話を聞き続けた。

「始めの……そうですわね、五年間は失意のどん底だったかと存じます」

明るい口調だが、その期間は言葉にするのも耐え難いほど苦悩の日々だったことだろう。五年間という時間は、決して短かったわけ

ではないに違いない。ルイリは意図せずに眉を下げた。

「いっそのこと死んでしまおうか……そう考えた時期があったのも事実ですわ」

口から溢れていくとめどない言葉に、リーファは困惑する。これまで、自分の過去を誰にも話したことなどなかった。

だって誰しもそれを憐れむから。確かに、憐れみをかける方は気分がいい。優越感にひたれる。だが憐れみをかけられる方は、時に屈辱的な思いをする。己が圧倒的な下の立場にあると思い知らされる。

少女は物怖じもせず、リーファをじっと見つめている。その瞳の強さなのか、それともただ単に気が緩んでいるだけなのか。どちらにしても、リーファは話すのをやめることは出来なかった。

「まぁ……自殺の一歩手前までいったことがあるのも事実ですけれど、そんな時にある御方（おかた）とお会いしたのでございます。それからの日常は満ち足りていたと、自信を持って言えますわ。侍女という仕事だけでなく、その御方は――、」

言いかけて、止める。ここまで話してしまった自分に後悔しているほどだ。

一体何をしているのか。間諜という立場において、他人に対してこれほどお喋りになってはいけないと、肝に銘じていたではないか。たとえそれが、どんな相手であろうとも。

「……申し訳ございません。喋りが過ぎました」

それきり、リーファは口をつぐんだ。

中途半端な沈黙に、静かな声が落ちる。

「……では、私はその人に感謝しなければいけませんね」

小さいが、穏やかな声だった。驚いて視線を上げると、少女は翠の瞳を細めて淡く微笑んでいる。

「ルイリ様？」

「だって……その人がリーファさんを救ってくれなかったら、もしかしたらこうして会えなかったのかもしれないし」

水晶の鈴のような声が、すうっと耳に入って通り過ぎていく。それはまるで自分に対して言われていることではないようで、リーファはただ呆然とした。

「私……出会ってまだ浅いですけど、リーファさんが侍女になってくれて良かったと思っています。リーファさんは多分、誰かに命じられて私の侍女になったんだと思うんです……けど、本当に良かったです」

リーファが言葉も無く自分を見つめている事に気づいたのだろう、ルイリはいきなり顔を赤くして顔を俯かせた。

「え、えっと、だから、その……、自分を、そんなに卑下しなくても、いいと思います。……リーファさんは、充分立派な侍女だと……思いますから」

思うだけでごめんなさい、と少女は苦笑する。

（……この娘は、）

嘘偽りもなく、ただ純粋にそう言っている。虚飾でもなく、偽善でもなく、ただ純粋に。

眼を見開いて立ち尽くすしかないリーファに、少女はぎこちなくもにこりと笑った。

†　†　†　†　†

「もう一度申します。殿下、私は？侍女？になりとうございます」

紅の瞳は揺らがない。泰然と、責める色も宿さず、リーファを射抜く。それを臆せず正面から受け止めて、すっと背筋を伸ばした。

「無論……間諜の仕事は私にとって、これ以上もなく魅力的で、そして遣り甲斐を感じておりました。私は自分の能力（ちから）が、大嫌いでしたから……この能力（ちから）を昇華する方法を探していましたゆえ」

けれど、と藤色の瞳が明るく輝く。

「私の魔術を御覧になった殿下は、臆するどころかこう仰いましたわね」

――その能力（ちから）、買ってやる。俺の為に役立てろ

少年の抜け切らない顔立ちで、けれど誰しもを圧倒する紅の煌めきに、一瞬で魅せられた。

「実際、貴方は驚くほどこの能力を有効に御使用なさいました。正直感動いたしましたわ。このようなモノでも、人の役に立てるのであると。そしてこれほど才能を持ったお方が、この世にいるのかと」

イアンは彼女の能力を的確に理解し、無駄なく、過不足なく利用していった。

後宮で渦巻く陰謀、后妃の奸計、時には姫君の間で行われる勢力争いまで。全ての内情を探るように言われた。リーファはそれを探り、レンを介して彼に伝えた。他も、与えられた仕事全てに胸が躍った。それが自分だけにしかできないとなると、更にやる気が湧いたものだ。

「本当に感謝しております、皇太子殿下。貴方は私を救ってくださった。この御恩は一生忘れる事がないでしょう」

「……で、その一生の恩を感じる相手を、お前は裏切るというわけか」

裏切るという言葉は些か過剰すぎるか、とイアンは自嘲した。そこまで信頼を寄せていたわけでもない。

「とんでもございません。私は、間諜の仕事よりも侍女の仕事の方が好きであると思った所存にございます」

「好き嫌いで仕事を選べるとでも思っているのか。案外傲慢だな」

「まぁ。貴方には遠く及びませんわ」

ころころと笑ってみせるリーファの後ろで、レンは静かに冷や汗

を流した。そんな嫌味をこいつに面と向かって言えるのは、恐らく彼女だけだ。

イアンは少し不機嫌そうに眉をひそめたが、それ以上の変化は見せなかった。

「それで？」

「間諜の仕事も遣り甲斐がございました。けれど何よりも遣り甲斐を感じるのは……側室になりたての姫君に、伊呂波（いろは）を教え込む事でしたゆえ」

初めて、彼の表情が変わった。意外なところから意外なものが飛び出たような顔をしている。予想通りの反応に、リーファは満足気に笑った。今日はよく笑うなぁ、とレンは思う。

「正直に申し上げますわ。私は、殿下よりも仕え甲斐のある御方を、見つけてしまったのでございます。この生涯を賭してでも、私はあの御方に？侍女？としてお仕えしたい」

「お前にそこまで言わせるとは驚きだ」

「えぇ、自分自身でも驚く限りです。……ですが殿下、私は貴方よりもあの御方に興味を持ってしまった」

あの後……不器用な笑みを浮かべた後、彼女は言った。

――何も覚えていないし、これからもたくさん迷惑をかけると思うけれど……よろしくお願いします

そう言って、深く頭を下げたのだ。自分よりも遥かに身分が低いはずの、侍女に向かって。

その姿を見ながら、リーファの胸中に疑問が浮上する。彼女は自

分のことを、立派な侍女だと言った。傍目から見ればそう見えるのか……そう思った途端、胸が軋んだ。

表面を慇懃に振舞って、その実内面はひどく冷めている自分がいた。少しでも殿方の目に留まろうと己を着飾り、美しさに嫉妬してその相手を貶め、醜い争いをする女達は、何と醜悪なことか。

自分は彼女達とは違う——憐れみに似た暗い感情が、どこかで芽生え、根を張り、優越感という栄養を与えられて育っていた。

得体の知れないそれは、『無垢』という異物の介入により、唐突に成長を止める。純白の異物は、暗黒に染まった己の身を否応なく曝け出した。頭のどこか、麻痺していた部分が目覚め、いつの間にか脳内に巣食っていた暗黒を責める。

一体何をしているのかと。これでは、同じではないか。己が一番忌み嫌い、軽蔑していた彼女等と。

その声がはっきりとリーファの内側で聴こえた時。リーファは全身で脱力した。

あぁきっと、私はこの御方には一生敵わない。

それは今まで、目の前にいる青年にも感じたことの無かった敗北感だった。けれど悔しさはない。逆に、妙な憑き物が取り払われたかのようだった。

イアンの与えてくれた間諜という仕事を責めるわけではない。全てはそれを歪んで受け止め、性格まで捻じ曲がってしまいそうになった自分の責任だ。

「無傷で許されるとは思っておりません。……どうぞ、この腕でも脚でも、切り捨ててくださいませ。あぁけれど、首だけはやめてくださいませね？　これからの仕事に支障を来しますので」

飄然と嘯くリーファを眺めて、イアンは浅く息をついた。

「……お前は存外使える、手駒だったのだがな」

「私ごときが消えたとて、支障など無きに等しいものでございましょう。貴方様の周囲には、優秀な部下の方々がたくさんおられる筈でございます」

「え、それって俺もちゃんと入ってる？」

しばらく静観を決め込んでいたレンがすかさず進言した。抜かりない意見に、リーファは冷めた視線を寄越す。

「……貴方に殿下の部下であるという自覚があるとは驚きですわ」

「あ、ひでーリーファ。俺だってそれくらいの自覚はあるよ。てことで、俺も入ってるよね？」

「殿下、話を進めさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「って無視？」

「構わん、続けろ」

「ってお前もかよ！！」

一人で騒ぐレンは放っておくとして。

「……腕や脚を切り捨てても、仕事に支障は来すだろう。特別に五体満足で許してやる」

つまり、お咎めなし。

彼にしては随分寛大な処置に、リーファは一瞬思考を止める。あまりにも意外だという視線を送られたので、イアンはわざとらしく眉をしかめてみせた。

「いつまで突っ立っているつもりだ。目障りだ、消えろ。要らなくなった手駒に用はない」

意図して作られた苛立ちと共に吐き捨てられた台詞に、リーファは逆に笑んでみせる。

「仰せのままに、皇太子殿下」

凛と背筋を伸ばし、優雅に礼をして見せて、間諜の任を解かれた侍女はその場を後にした。立ち去り行く背中は、どこまでも誇らしげだった。

「こりゃ驚いた。まさかルイリ嬢がリーファをあそこまで改心させるとはね」

「改心？」

引っかかりを覚える単語。柳眉を上げて反芻（はんすう）すれば、だってそうだろ、とレンは続けた。

「あんなに生き生きしたリーファ初めて見たぜ。間諜の最中とか、まるで能面みたいなツラしてさ。あーんな、人間らしい顔できんのな」

「あれが、そこまで変えたとでも思っているのか？」

聞こえようによっては負け惜しみのような台詞だが、イアンは本気でそう思っていた。

「出来るはずがないだろう。……あれには、何も出来ない」

何も出来るはずがない。弱く、脆く、愚かなまでに人を疑うこと

の知らないあの娘が、人を変えることなど出来るはずが。
亜麻色の髪、翠緑の瞳、水晶の鈴の声。思い出すたびに、形容しがたい苛立ちが生まれる。それは憎悪とも毛嫌いともつかず。

――ありがとうございました

あれは違う、と何度言い聞かせたことか。あれは、イアンに向かって言われた礼ではない。イアンは、礼などを言われる人間ではない。

「俺は認めない。――綺麗言だけで、世の中が生きていけると思えば大間違いだ」

そうだ、認めてなるものか。
闇に身を投じてきたこの身。その全てを否定する存在など、断じて認めない。

だからあの少女を脳裏に浮かべると感じる……安らぎに似た感覚は、錯覚だ。
イアンはそれ以上のどす黒い感情を以って、沸き起こる不愉快な感覚を押し潰した。

剣呑な態度を露にした昔なじみの皇太子を、レンは複雑な表情で眺めた。

「お前が言うなら、それでいいけどさ……」

けどさ、分かってんのか？

認めないということは。否定するということは。拒むということは。

今まで、自分の側室どころか近親さえも、必要以上に見向きもしなかったお前が。

（……お前が揺らいでる、証拠なんだぜ？）

あの少女の、存在に。

†　†　†　†　†

扉の前で立ち止まり、一度大きく息を吐く。

この決断をしたのは、尚早だったかもしれない。もう少し考えてみればよかったのかもしれない。けれど、後悔するつもりはない。

よし、とリーファは小さく気合を入れて、顔を上げた。

「失礼致します、ルイリ様。入ってもよろしいですか？」

「リーファさん！　どうぞ！」

嬉しそうな声と共に、リーファが扉を開けようとする前に内側から開いた。そして、翠の瞳が輝きながら覗く。

本来、扉というものは下の立場の者が開けるのであって、姫君や令嬢、側室自らが開けることはない。むしろ開けてはならない。無作法を働いた新米側室は、呆気に取られた侍女を見てようやくそのことを思い出したらしい。

「あ、……ごめんなさい、つい」

「……入ろうとしたのが私でしたので事なきを得ましたが……宮殿では、決してなさらぬようお願いいたします」

「はい。ごめんなさい」

しょんぼりとうなだれる姿は宛(さなが)ら小動物のよう。リーファは思わず口元をほころばせた。

「ルイリ様」

「はい？」

何の虚飾も施されていない、純粋な瞳。全ての感情を闇で塗り固めた、あの青年とは全く正反対の瞳。

この目を見るたびに、リーファの予感は確信へと変わりゆく。その確信を更に深めるかのごとく、リーファは今までで一番の笑顔を浮かべて見せた。

「これから……どうぞ、宜しくお願いいたします」

いきなり言われた少女は一瞬言葉を忘れたように瞬きをして、すぐにはにかんだように笑い、うなずいた。

これだ。この笑顔で、私は変われた。そして、この笑顔を決して曇らせはしないと、誓ったのだ。

この方ならば――という予感が、どこかであった。この方ならば、あの御方を救ってくださるのかもしれない。

例えば、闇に差し込む光のように。例えば、砂漠に浮かぶ楽園（オアシス）のように。

けれどその為には、救われる側も、心を開かなければいけない。脳裏によみがえるのは、冷徹な紅。無をたたえた端整な容貌（かお）。感情を凍てつかせ、心を一切廃してしまった皇太子。

……殿下。

私に生き甲斐を与えてくださったのは貴方。私を救ってくださったのは貴方。

忌み嫌われる能力（ちから）を持った私を、貴方が救ってくださったように。

その貴方が、本当は誰よりも救われるべきなのです。

身を沈めている底の無い闇から。慟哭（どうこく）も枯れ果てて立ち尽くすしかない、空虚な砂漠から。

それは身勝手な願いだろう。本人の意志とは関係なく。

だが、願わずにはいられない。

（どうか……）

どうか、この無垢な少女が、あの御方を救ってくださるように――と。

13．　皇太子の誤算、側近の憂慮、侍女の希求（後書き）

基本的にリーファは、自分が一番興味を示した人に仕えたいと思う性質（たち）です。
そして多分、一番カンが良いのはレンです。

ここまで読んでくださった方、そしてお気に入り登録までしてくださった方、本当にありがとうございます！！
真面目な話、本当にそれがなければここまで書いていけませんでした。
ひとえに皆様のお陰でございます。読んでくださっている方々に心からの感謝を。

それと、アクセス解析やユニークはこれからは活動報告の方で叫ばせていただきます。後書きで書くのはうるさいかと思ったので……

１４．　襲撃（前書き）

（２０１１．１０．２２．　四千年→二千年に修正）

14. 襲撃

残る一日も礼儀作法のおさらいや魔術の復習などで過ごしたルイリは、三日間を過ごした屋敷に別れを告げて馬車に揺られていた。

馬車、と言っても、車を引いているのは馬ではない。馬に酷似した、『サベラ』という赤茶色の毛並みと漆黒の瞳が印象的な魔獣だった。

「魔獣といいましても、全てが理性を失った危険な獣だけではありませんわ。屈服させ、血の契約を交わせば従順な僕（しもべ）となります。私達の間では使い魔と呼びますけれど。サベラはその最たる例というべき魔獣ですわね。もっとも、私やレン様では使役できる魔獣はサベラ程度がやっとですが」

馬車内にいるのは、ルイリとリーファのみ。同性同士の方が話せることも多いし、ついでに色々と説明しておくから、というリーファの進言のもとだ。イアンはそれを許して一つ前の車に乗り、レンは御者台にいるらしい。

言葉どおり、リーファは馬車の中で息つく暇もなく様々な話をしてくれた。その全てがルイリの知らないことで、ルイリは興味深く聞き入った。

例えば、彼（イアン）の話。皇太子という立場やあの誰も真似する事のできない存在感から只者ではないと思っていたが、話を聞けば聞くほど認識が甘かったと自覚した。

シェリング皇国。それはここ、大陸ラルスヴァーナでもっとも強い勢力を誇り、二千年を超える歴史を持ちながら、一度も壊滅の危機に瀕したことのない屈強な帝国。周りを取り囲む小国はおろか、同じほどの勢力を持つ近隣の大国までもが、声を揃えて「シェリングを敵に回せばこの世の終わり」と豪語するほど……その堅固さたるや、折紙つき以上のものがあったという。

しかし二千年という歳月は、壊滅の危機にはならないまでも、権威の衰えには充分だったようで。

というよりはここ数十年のうちに、国の情勢が急速に傾き始めたそうだ。当代の皇帝は威厳こそあれど、己の周りのみに目を配るきらいがある。家臣の裏切りを食い止めることはできれど、目の行き届かない小国や少数民族の困窮までは気づくことができなかった。そこから貧困や飢饉（ききん）が広がり、人身売買に溢れた。人々の不満は当然、統治者である皇帝へ向く。それが内乱や反乱という形になって荒れた。

言葉通り、シェリングは徐々に崩れ行く傾向になりつつあった。

それを食い止め国全体を復活させたのが、他ならぬ現皇太子、イアン＝ルシアディス＝シェリングその人である。

彼は数年前、まだ少年と呼べる歳で皇太子に就任する。しかしその地位を獲得するやいなや、神業的な速さで全ての問題を修正した。家臣の中で芽生えつつあった陰謀を断ち切り、小国の内乱は圧倒的な力を以って鎮圧し、現地に赴き気の遠くなるほど長い時間をかけて和解に持ちこんだ。

しかもイアンは驚異的な魔術を操る。大気を操る魔術はシェリング皇族では幾人かが所有する能力（ちから）だが、彼の能力（ちから）は飛びぬけていた。まさに当代随一と呼べる魔術の使い手である。国民は自然と、彼の

前に傅(かしず)いていった。
わずか一年足らずで、彼は不穏な方向へ傾きつつあったシェリング皇国を復興させることに成功したのだ。まさに、『生ける伝説』なのである。

何故第三皇子でありながら皇太子になれたのか、という疑問も簡単に解けた。
シェリングは実力主義の社会なので、年功序列は基本的にない。有能であれば、長子でなくとも地位が高くなるのは当たり前なのだそうだ。

「……まぁ、万事が丸くおさまったというわけではございません。今でも不安の種はいくつか点在しておりますから」
「それでも……物凄い人なんですね」

そんな人と、三日間も同じ屋根の下で過ごしていたのか。今更ながら畏れ多い。

「えぇ、そうですわね。それはもう、色々な方面で」

何やら意味ありげな笑みと共に言われた言葉は、よく理解できなかった。眉根を寄せて首を傾げている間に、次の話題へと移る。

「殿下から、魔術のことはお聞きになられましたか？」
「はい。もとは神術と呼ばれていたものだと……」
「魔獣のことは？」
「え……と、神話の中のことなら。神がいなくなった土地に瘴気が満ちて、出現するようになったんですよね？」
「えぇ、その通りでございますわ。けれど魔獣を退散する能力(ちから)が魔術だなんて、皮肉なものでございますねぇ」

けろりと笑ってみせるリーファに対して、どう返せばいいのか困惑の表情を浮かべた。

「では、魔獣と使い魔のことについて、もう少し詳しく説明しておきますわ」

リーファ曰く。

理性を持たず、ただ本能のままに人間（ヒト）を襲う獣を魔獣と呼ぶ。対照的に、魔獣よりも知恵があり、高等の術を使う獣を魔物と呼ぶ。

能力（ちから）の強い異能者ほど、魔獣等を屈服させる力は強い。本能のまま暴れまわる獣を抑え、額の中に己の血液を埋め込む。これで血の契約は完了する。使い魔になった魔獣は、決して主人を裏切らない。主（あるじ）の命令とあらば自分の命すら惜しまない。ある意味、人間よりも忠誠心が高いらしい。

とは言っても、使い魔にしようとするのはある特定の魔獣や魔物だけで、魔獣を見つければやれ使役する、というわけではないそうで。

「殿下も、魔獣や魔物を使役しているんですか？」

「さぁ……私は把握しかねますけれど……。けれど殿下の能力（ちから）ならば、それをするのも道理というものでしょう」

魔獣や魔物は滅多に都市へは現れず、森林や岩山に出現する。その森林や山の麓（ふもと）を住居とする民の犠牲が多発した場合、イアンを筆頭とした皇国の騎士団が討伐に向かうそうだ。

ルイリがイアンに出会った時も魔獣の討伐に行っていた最中で、彼は死に際の魔獣に渾身の力で腹を抉られたらしい。レン達が後始末をしている間に、あの廃屋へ入った……とリーファは推測している。

「……皇太子が自ら、討伐に赴くんですか？」

皇太子は次期皇帝。国にとっては皇帝の次に貴重な命と言えよう。
その皇太子が、なぜ最も危険な地へとわざわざ赴くのか。
もっともな疑問に、リーファは曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

「……それは、私ごときが簡単に口にして良いことではございませんわ」

どこか諦めたような、寂しそうな笑みは、これ以上の言及を避けていて。

「あぁそうそう、これからルイリ様が向かわれる宮殿の事も説明しておかないと――」

言いかけて、リーファの顔色が変わる。

「……リーファ、さん？」
「……、」

優しげで秀麗な面立ちが、厳しくひそめられた。

「ルイリ様。……どうぞ、大人しくしていられませ」

緊迫した口調と、漂い始めたただならぬ雰囲気。

「あの、外で何か……？」

その答えを、リーファが答えようとする前に。

感じたことのある凄絶な空気と、何かが断ち切れる嫌な音、
そして、耳を劈く悲鳴が聴こえた。

†　†　†　†　†

リーファが使い魔のことを話している同時刻。

『随分色々とお喋りしてるみたいだぜ』

軽く目を閉じていたイアンは、脳に直接響く【声】を聞きとがめておもむろに瞼を開けた。窓の外を流れていく景色には興味がないので、遮光のカーテンを引いている。お陰で内部は昼間だと言うのに暗い。イアンとしては、その闇を好んでいるので怯える要素はないわけだが。

『リーファって俺と話す時はひたすらつっけんどんでさっさと話を済ませたいオーラばりばりなのに、ルイリ嬢相手だったらこんな積極的になるんだなぁ』

「……」

『話してる内容はあんまり聞き取れねぇけど、ひたすらに説明してるみたいだ』
「……」
『ルイリ嬢もよく根気強く聞いてるなぁ。普通なら寝るか飽きるかして早々に切り上げたいのが普通だと思うけど』
「……」
『っておい？　聞いてんのか？』
「……五月蝿い」

ぼそりと呟いた台詞は、実は本人には聴こえていない。代わりに、御者台に座っていた侍従が「はいっ！？」と声を上げた。

「でっ、殿下っ！？　某（それがし）、何かご機嫌を損ねるようなことをしてしまったでしょうか！？　あったのでしたら何なりと仰ってくださいませっ。何ならこの場で首を刎ねてくださっても構いませぬ！　なぁに、某一人の命が散ったとて騎士団には何の支障もございますまい。さぁ！　どうぞ遠慮なく」
「黙れ。喋ってないでさっさと進めろ」

暑苦しい台詞を跳ね除けると、侍従は力ない声で御意の意を示して黙りこくった。

『あっは、そっちの御者、声でけぇなぁ。後ろまで聞こえてきたぜ？　名前何て言ったっけ、デーバン？　あ、バゲールだっけ？』
『お前も黙れ』

向こうがわざわざ用意してきた回線に乗り、改めて【声】に応答する。どうでもいいことだが、侍従の名前はゼルバーである。

『お、やっと乗ったな。少しくらいは相手してくれよ』

『お前と話すことなどない』

言い捨てて、接続を切ろうとしたが。

『待て待て待て。ホント暇なんだってば』

『だったらリーファ達に話しかければいい』

『無理だってば。ルイリ嬢は相手してくれるかもしれないけど、その前にリーファに冷たくあしらわれて終わりだろうし。そもそも、ご婦人方の会話に野郎が入るのは無粋ってモンだろ？』

だからと言って、なぜこちらを引き込む。

言いたい文句は山のように積み重なっているものの、会話に入りこむのが面倒くさくて無言を突き通す。イアンは窓枠に肩肘を突き、静かに目を閉じた。

『寝るな無視するな回線切ろうとするなだからお前は冷酷無慈悲って言われるんだ昔馴染みの暇潰しくらいちょっとは付き合えっっ！！』

「――」

うるさくてかなわない。

これが肉声であればまだ良かっただろう。奴が自分の能力（ちから）を十分に熟知し、それを最大限に活用しているものだから性質（タチ）が悪い。

『あ、それ以上無視するんだったらマジで強硬手段でいくぜ？　俺の【声】を力いっぱい使ってお前を脳内から破壊させてやるからな』

『それより前にお前を八つ裂きにしてやるから安心しろ』

『どうかな？　最近俺、結構能力（ちから）上げてきたから。案外お前とか一発で』

『百年経って出直せ』

『おし、どうやら会話続ける気力はあるみたいだな』

言われて、ようやく気づく。

実際、奴の【声】と自分の【気】で言えば圧倒的に後者の方が速い。

奴はそれを知っていて、見越しての挑発だった。安易にも乗せられた自分に舌打ちした。見えずとも、にんまりとした笑いがやすやすと想像できる。

『うまーく乗ってくれたな。そうだよな？　自尊心と矜持の塊のお前がそんなことさせるわけねぇもんなぁ』

「……」

『ま、いいや。こっからはちゃんとした真面目な話』

そう切り出す時、彼は一度もふざけたことはない。自然、瞼を上げた。

『今日の午後に戻るっていう伝達を飛ばした。……皇后サマはそりゃーもう荒れてるようだったらしい』

その台詞を聞いた瞬間、イアンは口端（こうたん）を器用に吊り上げた。浮かんだ笑みは艶（あで）やかで美しく、そして酷薄だった。

『あのまま死んだ方が好都合だったか』

『おいおい、冗談はよしてくれ』

彼にしては珍しく、投げやりでどことなく冗談めかした口調に慌てて否を唱えてくる。

『老婆心と思って聞いてくれていい。ただ、引き続き注意は怠らな

いでくれよ。お前が消えたら皇国はまた戦乱に逆戻りだ』

老婆心という言葉は、レンほど若い男が使うものでもないような気もするが。イアンは少し可笑しさを覚えたが、それを表に出すことは無かった。

――ふと、表情を険しくする。

『……レン』

『あぁ、分かってる』

常に一定の距離の周りに張り巡らせている【気】の結界。その全ては神経の琴線だと言える。

それに、触れるものが。

「止めろ」

「は？　しかし殿下、あともう少しで宮殿に……」

「良いから止めろ。……死にたいのか」

腹の底から響くような声に危機感を感じたのか、侍従は「ただちに」と緊迫した声を出して馬車を止めた。片腕で抱くようにして持っていた刀に手をかけ、軽い動作で馬車から飛び降りる。

侍従に視線だけで隠れることを告げ、それを確認してから辺りを素早く見渡した。サベラが、威嚇するように森の奥へ唸る。

屋敷から宮殿までの近道として森林を選んだが……まさかそれが裏目に出るとは。

『手伝いは？』

『俺一人で充分だ。……お前は護衛をしておけ』

『御意ー』

思念を断ち切ってから、イアンは道の真ん中に不遜に立った。

「隠れていないで、さっさと出て来い」

大きくはない、しかし抗いがたい声に触発されて、木々の陰から黒影（こくえい）が姿を現した。魔獣ではない。手には鋭利な刃物を持ち、こちらに向けているものは紛れもなく殺意。

手に携えた刀を引抜くことはせずに、イアンは大儀そうに首を傾げる。

「……もはや誰の差し金だか、聞くのも面倒だな。殺されたいのか？」

答える声はない。表情すらない。前方を塞ぐ黒い影達は、全身を黒衣で覆い、顔も鼻から下を布で隠していた。暗い色を宿す瞳は、生気が抜けている。

イアンは片方だけ唇を歪めた。

「わざわざ命を捨てに来たか。愚かなことだな」

嘲りを体現したかのようなその声に。

黒い影達は、一斉にイアンへと襲い掛かった。

15.　嗤う少女（前書き）

※過激な残酷描写がございます。苦手な方はご遠慮くださいませ。

15.　嗤う少女

何が起こっているのか、ルイリには理解ができなかった。

絶えず続く叫び――断末魔。戸を閉め、リーファに引き寄せられて身を縮めているというのに感じる、刃物のような【気】。

「ルイリ嬢、リーファ、無事か？」

かちゃりと戸が開き、褐色の肌を持った青年が入ってきた。

「レン様……。賊、ではございませんね？」

「あぁ、いつものだ。自分一人で充分だって、あいつが」

いつもの、というのは一体何なのだろう。これが日常茶飯事なのだろうか。

会話の中から察するに、今外にいるのはイアン一人。仮にも側近とあろうものが、皇太子を置いてここにいるのはどうなのか。無言ながらも不審の視線を送ったのを感じたのか、レンは力なく笑った。

『案じる必要はないですよ。皇太子とはいえ、あいつはこういうの慣れてますから。自分の身は自分で守れます』

「……、え？」

脳裏に直接、音が響く。その場にいた二人はどちらも口を開いていない。目をぱちくりとさせて辺りを見回すルイリに、再度。

『俺です、俺。目の前にいるでしょ？　俺が喋ってるんですよ』
「……え……？　レン、さん？」
『そうそう』

そう言って笑う青年の口は、やはり開いていない。一体どういう原理なんだろう。リーファはそれを分かっているようで、苦笑とも微笑ともつかない笑みを口元に浮かべている。

『これが俺の魔術です。口には出さずに、相手に直接【声】を届けることができる。今はルイリ嬢とリーファに回線をつなげてますから、交信も可能ですよ』
「交信？　……どうやって」
『簡単なことですわ、ルイリ様』

急に、響く声に女性のそれも介入する。それは紛れもなくリーファの声で、ルイリは彼女を凝視した。

『心の中で、耳には聞こえないけれどご自身で呟くことがあるでしょう？　それをなさればよろしいのです。どうぞ、試してみてくださいませ』

耳には聞こえないけれど、自身で呟く……。
ルイリはゆっくりと呼吸をして、レンとリーファを見つめた。

『……こう、ですか？』
『おっ、上手いですよルイリ嬢。一発でできる人って案外少ないんです。俺の記憶にある内だったらあいつとリーファくらいかな。でもこれで、俺とルイリ嬢も？繋がり？ました』
『え……と、どういうことですか？』
『まぁ、この【会話】はその？繋ぎ？をするために始めたようなも

んですから、それは肉声で説明します』

そう言うと、頭のどこかでぷつんという音がした。それっきり、脳内には何も響かなくなる。

「さて、じゃあ軽く説明しますか」

今度こそ、レンは口を開いて声を出した。それは先程脳内で聞いた【声】と寸分違わない。にまっと、彼らしい笑みが広がる。

「名前も知らない、見ず知らずの人に話しかけることはできないんですよね。初めての人とは、目と目を合わせて【会話】をしないといけない。そこが俺の能力の面倒くさいところ」

やぁれやれと肩を竦めてみせる姿は、自然と周囲の空気を緩ませる。

「で、目と目を合わせて【会話】して、こっちが用意した回線に相手に乗ってもらう。これで?繋ぎ?は完了するんです」

「その……?繋ぎ?、をして、何が便利なんですか?」

「まず一番の利点は、相手が周りにいなくても話しかけることができます。人探しの時とか便利ですよ。実際、あの森林であいつに話しかけたでしょ?」

あ、とルイリは声を上げた。そういえばあの時、彼はやたら頭が痛そうな顔をしてしばらく黙りこくっていた。そして少し息をついたら、レンがやってきたのだ。なるほど、あれはイアン限定で【声】が聞こえていたというわけか。

「さきほど私が黙ったのも……レン様から曲者が現れたという【声】

を受け取った故でございます」
「あ、それで」
宮殿のことを話そうとしたときの。確かに不自然な途切れ方だったが、それが理由ならば納得できる。
「戦闘の時にも、言葉を交わさずに戦略を立てたりするんで案外便利で。あとは……そうだなぁ、【声】を大音声にしたら相手を脳から破裂させるなんてのも可能ですけど」
「の……、」
「レン様。ルイリ様に過激なことをおっしゃらないでくださいます？　繊細なお方でございますのよ」
リーファがすかさず窘めた。おっとすみません、という軽い謝罪が返ってくる。
ルイリは気づかなかった。この会話が、彼女を外で起こっていることから気を逸らすために始められたものだということに。
だから一瞬、なぜ戸が開いたのか、分からなかった。
「――――!!?」
レンが悪態をつき、リーファが小さな悲鳴を上げたところまでは認識できた。
伸びてくる、黒い何か。腕に黒いものが絡み付いて、ルイリはそのまま外に引きずり出される。思わぬ力の方向につんのめってしまいそうになったが、辛うじて地面転倒は避けられた。腕はまだ掴ま

れている。一体何なのか……ルイリはゆっくりと、顔を上げる。

開けた視界に入るモノ。

「……っ！！」

ある者は首と胴体が離れ、ある者は手足を飛ばされて――己の作った血溜まりの中に浮かんでいる。嘔気を感じたが、両手を拘束されていて口元を抑えることができない。

鼻孔を容赦なく刺激する鉄の臭い――血臭。

「少々大人しくしていただきますよ、側室様」

全身が総毛立つような声が耳元で囁かれた。と思った瞬間、急激に意識が遠のいていく。

動くな、と耳の至近距離で声が聞こえた。同時に、無骨な腕がルイリの首をとらえ、冷たく光るものが押し当てられた。目に入るのは白刃。視線の先には、この場で唯一立っている人影。

ぴたりと、人影が止まる。金髪を揺らして、まるで舞うかのように優雅に剣をさばいていた彼は――黙然と、振り返った。

氷のような硬質な美貌。すらりと伸びた長身。白皙の頬にべっとりとついた……赤黒い液体。

それよりもなお鮮やかで紅い双眸が、ルイリを射抜く。

最後に見たのは、その色で。

――あぁ、ルゥ……済まない……

誰かの声を聞いたのを最後に、ルイリの思惟は闇へ混濁した。

†　†　†　†　†

血のついた刀身を払い、そのまま目の前に迫ってきた影を切り捨てる。中途半端に薙(な)いでしまったせいか、影は血飛沫をあげながら耳障りな叫び声を上げた。イアンは秀麗な顔をしかめ、這い蹲(つくば)る背に刃を立てる。新たな紅い飛沫(ひまつ)を噴き出してしばらく痙攣していた身体はやがて動かなくなった。

ず、と鈍い音を立てて剣を引き抜き、辺りの状況を確認した。今とどめを刺した者を入れて、始末した者は七人。残るは四人。……相も変わらず、キリがない。

「鬱陶しい」

頬骨の上辺りにまで生ぬるい感触がするが、拭うのも面倒くさい。ただ、額から滴る赤いものが目の中に入ろうとするのは不愉快だ。しかし手も汚れてしまっている。どうしたものか。

修羅場とは思えないほど暢気な事を考えている背後に短剣が迫った。イアンは前を見たまま迫るそれを掴み、切り落とす。ぼとりと、

右手だった物体が地面に落ちる。

「……っぐ、あぁぁぁぁ！！？」

暗い瞳が苦痛に歪み、隠された口から叫びが上がる。右手を切り落とされただけでそれほど喚くことかと溜息をつき、振り返りざま、相手の心臓を違えることなく刺し貫いた。

あと三人。

辺りを見回してみるが、目の前にいるのは二人のみ。イアンは眉をひそめ、その場ですっと目を閉じた。瞼を閉じたイアンを見て勝機と思ったのか、影の一人が飛びかかってくる。その首と胴体の繋ぎ目の位置を正確に把握した上で、目を閉じたまま跳ね飛ばした。断末魔が響く間もなく、新たな血液が降りかかる。ごろんと重い音が聞こえた。

あと二人。一人は目の前に気配を感じるとして。さて、あと一人はどこにいるのか。

「……」

周囲に張り巡らせる【気】の結界。引き続き目を閉じ、それに神経を集中させる。

馬車の中にいるはずの三人の気配と、傍の木々にでも隠れているであろう侍従の気配。そしてじりじりとこちらに歩み寄る気配と――馬車に近づこうとしている、気配。

イアンはカッと目を開けた。それと同時に、影が飛びかかる。塵（ちり）を扱うかのようにそれを切り捨てた刹那、

「動くな！！」

鋭い制止の声が飛んで、イアンはそれに従った。剣を下ろし、静かに後ろをかえりみる。

全身黒ずくめの影。その腕が掴みあげる、細い身体。何らかの術で気絶させられたのか、白い瞼が翠の瞳を隠し、手足は力なく垂れ下がっている。

「ルイリ嬢っ」

「ルイリ様！！」

少し遅れて、馬車から側近と侍女が青い顔をして姿を現した。影は、そちらにも鋭い視線を送る。

「お前らも動くなよ。この……新米側室様の首が飛ばされたくなければな」

その言葉を聞いて、レンが悔しそうに歯噛みしている。リーファは今にも倒れそうに真っ青だ。イアンは静かに褐色の青年に視線を送った。意図を読み取った相手はうなずく。かちりとどこかで音がした。

『悪い。多分あいつ、気配を消す能力（ちから）を持ってて』

『それで言い訳できることか』

焦燥を含んだ【声】をにべもなく跳ね除ける。

『いや、足りないってのは分かってる。けど、今はそんな悠長に謝罪してる場合じゃないだろ』

『全くだな。……どこまでも足手まといだ』

毒づいた相手はレンではない。それを察したのか、抗議の声が上がった。

『おいおい、そういう言い方ないだろ。これは完璧に俺とリーファの落ち度なんだから』

『関係ない。注意力が散漫だったのはあれだ』

『……そーいう考え方を、ひねくれてるっていうんだぜ？』

『今、そんな悠長に会話をしている場合か？』

言い捨てて一方的に接続を切る。声には出さなかったが、レンは突然の切断にぎょっとした表情を浮かべてこちらを見た。それは気にせず、視線を影に移す。

「……随分情報が早いな。それが側室だと、誰から聞いた？」

すると、影は声にも出さずせせら笑った。

「聡明な皇太子殿下にしては間抜けな問いだな。伝達には新しい側室を迎えたことも伝えられていたぞ」

伝達。

それは確か、屋敷に行った最初の日にレンに任せたはずだった。

『……レン』

『いやいやいやだってさ！　どうせ宮殿行ったらバレるだろ！？だったらもう今のうちに言っといた方がいいかなって！！』

『つくづく、お前は物事を混乱させるのが趣味らしい』

『いや、だってまさか……なぁ？　帰還する時に襲われるなんて思

わないし、まさかルイリ嬢を盾に取られるなんて』
『お前に任せた俺が馬鹿だった』

本当にそう思う。魔獣の討伐で遠征していた間に側室を迎えたなどと伝えれば、向けられる視線は容易に想像がつくだろうに。確かに帰還すれば事実は明るみに出るが、何も戻る前に公表しなくてもよかったはずだ。どうも奴は最後の最後に重要な考えまで頭が回らない。

この状況ながら呆れたイアンは、素直にやれやれと溜息をついた。それが相手の癇に障ったらしい。

「き、さま……っ、黙りこくっているかと思えば！　こちらを侮辱する気か！？」
「大層な被害妄想だな。されたければしてやるが」

言い返せば、相手は（顔の大半は隠されているが恐らく）顔を真っ赤にして腕の中にいる少女の首元に切っ先を食い込ませた。白い肌に赤の点が浮かぶ。

「それ以上減らず口を叩いてみろ、この側室を殺す！！」
「殺せばいい」

あっさりと許可が出たことに困惑したのか、影は大きく目を瞠った。暗黒色の瞳が揺れている。対照的に、イアンは冷酷に目を細めた。

「それの命に重要性はない。殺したければ殺せ」

レンとリーファ（おもにリーファ）の非難の視線が向いたが、気にする素振りは見せない。

それは真実だ。弱く、何も持たず、足手まといなだけの少女。気まぐれに側室にした非力な娘。姿を見ても声を聞いても、湧くのは苛立ちばかり。ならば、いっその事ここで死んでしまえばいい。目障りな存在が目の前から消える、これほど好都合なこともない。

そう思えば思うほど、彼の中には暗雲のような感情が立ち込めていく。それを理性で押し潰した。感情など、忌々しいだけだ。

「他人の命を何とも思わないか。――どこまでも傲慢な貴様らしい返答だ！！」

激昂した声は辺りの空気を震わせた。怒りのままに振り上げられた刃は、真っ直ぐに少女の細い首筋へ振り下ろされる。

イアンは無意識の内に、周囲の【気】を総動員させて影の首を刎ねんと大気の刃を飛ばした。しかし、その前に白刃は彼女の頸動脈を赤く染めるだろう。

間に合わないか――柳眉をひそめ、歯噛みをしたその時。

「放さぬか下郎」

水晶の鈴のような声が、玲瓏（れいろう）な含みを伴って響いた。

瞬間、刃を掴んでいた男の手首が、弾けた。比喩など何もない、そのままの意味で。

水風船が弾けるような音がして、赤い飛沫が均等に飛んだ。

「がっ、あ……？！」

暗い瞳が驚愕に開いた。視線は、己が拘束している少女へ。否、この場にいる全員の視線はその少女へと向けられていた。

彼女は……ルイリは、どこかぼんやりと、だが確かに目を開いていた。

自分が人質の身であることなど気にしていないような、翠の――碧の瞳。深く果てしないその双眸に宿す表情は、凛乎（りんこ）にして傲然。奇妙に大人びた繊細な美貌が、険を滲ませている。

微かに色を失った唇が、ゆっくりと動く。

「放せと言っておるのだ、羽虫よ」

ぱんっ

先程よりも大きい音が響き、先程よりも大きいものが弾けた。

影の体が。

原形を留めず。

血液を撒き散らして。

弾けた。

飛び散った血液はイアンの頬にまで到達した。もはやあの場に、一人の人間が立っていたとは思えない。残ったのは、辛うじて判別できる血で固められた肉片だけ。

しかし、最も至近距離でその血肉を浴びたはずのルイリには、服にも肌にも何も降りかかっていなかった。毛先一本にまで、その穢

れは及んではいない。
亜麻色の髪。白磁の肌。碧の瞳。赤い液体に染まった地面に佇む細い姿は、まるで死をもたらす堕天使のよう。長い睫毛は伏し目がちになって、妖艶な雰囲気さえかもし出す。

「ふん、汚らわしい。この身体は、羽虫ごときが軽々しく触れてよい身体ではない」

眉宇をひそめて言い放った言葉は、遺体すら残らなかった無礼者に対する警告。
そして彼女はそのまま、己の首元にすぅっと指を滑らせた。首筋に流れた血液が止まり、傷口がみるみるうちに塞がる。

これは誰だ。
イアンは沈黙の中で自問する。

姿や声は確かに彼女。しかし、言い回しや口調、目つきなどは明らかに違う。

「ルイリ、様……？」

突然の異変にしばらく思考がついていかなかったリーファが、震える声で静寂を縫った。彼女は首を傾げて自らの侍女であるはずの方へ視線をやった。だがすぐに興味なさげに目を逸らし、ついと眼前へ視線を滑らす。
即ち（すなわ）、イアンの方へと。

「――む？」

深海の底の色がイアンを捕らえた瞬間、純粋な驚きが広がる。ふ

わり、と脚が軽やかに動いたのを目が察知する。
瞬き一つの間をおいて、少女の顔は眼前に迫っていた。

「な……」
「ほう……？　黄金の髪に、朱の瞳……」

細い指がイアンの目尻をなぞり、血で汚れた頬へと滑った。その手を振り払いたいのに、指一本すら動かせない。華奢な身体から溢れる力の――何と途方もなく、苛烈なことか。

「何故此処に居るのか……。いや、お主が今生きている筈が無かろう。となると……。……ふぅむ」

いつもよりも赤く見える唇が、ゆっくりと笑みを刻む。ひどく無邪気に……ひどく婉然と。

「なるほどのぅ。お主、彼奴の末裔か」
「彼奴、だと？」

剣呑に反芻するイアンには構わず、ルイリは、――否、ルイリの姿をした何らかは高らかに嗤った。細い喉から溢れる笑いは歌のように美しく、それでいて戦慄を禁じ得ない響きをもたらした。

「面白い、何と愉快なことか！　役者が揃い、御誂え向きの舞台まで用意されている……これだから人間の宿命というものは面白い！」

しばらく笑声を響かせていた少女は少しずつその嗤いをおさめ、静かに微笑んだ。

「聞くが良い、人間の子よ。この身体、暫くお主に預けておくこと

とする。来るべき時が訪れれば、直ぐにでも迎えに来よう。……あまり虐めるでないぞ、わらわの大切な小鳥を」

「……どういうことだ」

警戒を緩めない青年の顔を見て、少女はにこりと笑う。最後に、白い指先がふわっとイアンの唇に触れた。

「また遇おうぞ、＜暁の皇帝＞よ」

瞬間、瞼が落ちる。

糸が切れた操り人形のようにくずおれた身体を、条件反射で受け止めた。咄嗟に呼吸を確認すれば、微かな空気の動きがある。静かに目を閉じるその姿に、先程の凄絶な雰囲気は片鱗すら残っていない。

「ルイリ様……っ」

蒼白の顔色のまま、リーファがまろぶように駈け寄ってくる。侍女は衣服の裾が土と血液で汚れるのも厭わず、イアンが抱き上げる少女の傍らに座り込んだ。

「あぁ、ご無事でようございました……！」

震える声で万感の思いを吐き出す彼女を見て、イアンは後ろにいる側近と侍従に視線を流した。

「レン、ゼルバー」

「うん？」

「はっ」

個人それぞれの応答を聞いてから、やおら口を開いた。

「宮殿までは、これと共に乗っていく。……リーファ、お前は後ろから一人で乗って来い」

「殿下、それは、……承知いたしました」

色々と言いたい事もあっただろうが、ルイリが馬車から引き摺り下ろされたのはリーファの責任でもある。その自覚があるだけに、潔く引き下がった。それに、先程の変貌ぶりもある。

深い眠りの只中にある少女を抱き上げて、馬車の方へ脚を向けた。

「分かっているとは思うが、今回のことは他言無用だ。もし誰かに言ったならばその時は……己の胴体と別れを告げることになる」

三人が了承の意を示したのを確認してから、イアンは馬車に乗り込んだ。席に少女を寝かせ、その向かい側に足を組んで座る。

その時初めて、イアンは自らの手の平が微かに湿っている事に気づいた。

（……汗？）

否定しようにも、それは事実で。今まで一度も感じたことの無かった感情――畏怖。

あの時の少女の佇まい、笑み、仕草。そのどれを取っても、人間とは程遠い気がした。

「……お前は、何者だ」

険しさを浮かべて、眠る少女を睨みつけるも。

返る返答も、反応すらもなく、馬車は緩やかに走り出した。

†　†　†　†　†

同時刻、大陸のどこか。

「……あぁ、何という事だ」

強い後悔の念を込めて、溜息をつく者がいた。彼はそのまま、天を仰ぐ。

「まさかこれほど早く目覚めてしまうなんて」

何物にも代えがたい愛しい者。それの涙は見たくない、悲しむ姿は見たくない、そう思っているのに。

予想外の事態が重なりすぎている。

「これは、もたついている場合ではないな……」

彼は眦（まなじり）を決した。

街の喧騒から背を翻し、唇で何事か呟いて――その場から、忽然と消えた。

15．　噛う少女（後書き）

お久しぶりですこんにちわ！

即興曲（アンプロンプチュ）はこれで終了です。

新キャラを出すとか言っときながら、とんだ意味深キャラが出てきました。

えーと、多分今度はまともな人が出てくると……思います！！

新たにお気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます！

では、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

16. 辿り着いた舞台（前書き）

奏鳴曲（ソナタ）でございます！ようやく舞台（メイン）と言っても過言ではありません……！

本当に、長ったらしくて申し訳ありません。
お付き合いくださいますれば幸いです。

16. 辿り着いた舞台

真っ白なものがあった。

それを見たことがある気がする。

ゆっくりと足を進めると、光る波紋がどこまでも広がる。

あなたは……だれ？

問いかける。急に空気が震えた。それはまるで、笑っているようだった。

首を傾げていると、突然自分の胸の辺りがぽうっと白い光を放った。思わず視線をそこにやると、純白の球状のものが浮き出して、目の前まで浮遊する。

――面白きものを見せてもらった

荘厳で、甘美で、圧倒的な響きをもった声が朗々と響く。女性とも男性とも、ましてや老人とも子供ともつかない声。

純白の球はふわりと浮いて、眼前にある白い塊の中にすぅっと吸い込まれていった。白いものは生きているかのように蠢いた。混じりけの無い白が、より一層輝きを放つ。

くすくすと、何かが笑う。

――愛しい小鳥。お前はほんに良い？――――？

何と言ったのか、そこだけが聞き取れない。

――今なら、できるかもしれぬなぁ……？

刹那、白いものは――白い闇は、触手を伸ばすかのように広がった。

あ、と思う暇もなかった。白い触手は過(あやま)たず飛びかかってくる。

呑まれる、そう本能が察した瞬間。

――……お前は！！

白い闇が、驚愕の声を漏らす。触手は遠のいていく。その急激な変化が、理解できなかった。

目の前に、薄茶色のものが立ち塞がる。それはどうやら人のようで、背格好はあまり変わっていない。

誰……？

――何故……！？　お前を、誰よりも愛しているのに！！

『この娘(こ)の未来は、誰も奪うことができないはずよ。……あなたにも手出しはさせない』

この声は、すぐに判別がついた。凛とした女性の声。自分よりはいくつか年嵩(としかさ)で、どこか……懐かしい響きさえ持つ声だ。

巨大な力がゆっくりと遠のいていく感覚がする。安堵してしまったのか、思わず肩の力を抜いた。

すると、額に何かが温かく触れた。おぼろげな輪郭。けれど分かる、優しげに微笑む口元。

『彼は間に合わなかったようだから、私を呼んだのね』

「……？彼？」

『……あぁ、そっか。貴女には、記憶が欠落していたんだった……守られる為に』

「守られる、為？」

彼女は何を言っているんだろう。この記憶喪失の理由を、知っているのだろうか。

『私から多くを語ることはできないわ。けれど忘れないで。貴女は誰よりも愛されて生まれてきた。多くの愛を受けて、貴女は生きているの』

「多くの愛？　……だって、私の周りには誰もいない」

『見えるものだけが愛じゃないわ』

母親が幼い子供をあやすように、よしよしと頭を撫でられる。

「教えて。貴女は誰？　私はどうして記憶を失っているの？　さっきの……白い闇は、何？」

『ここで私が教えても、事態が好転するとは思えない。夢は夢。現実は現実。それは区別されるものでなければいけない』

やんわりと、しかしはっきりと断られた。

温かい指先が、喉に触れる。

『貴女の唄は、本当に真っ白で綺麗ね。それは、綺麗な心を持っている証拠だわ』
「私は……そんな、綺麗な者じゃ」
『いいえ、大いなる光を持った子。その光は、きっとどんな闇も照らしてくれるでしょう。……あの人の、子孫の心も』
「あの人？　子孫？」

何だか全てが謎かけのようだ。重要なことを言われているとは分かるのに、繋がりが見つからない。

『さぁ、そろそろ貴女は起きなければ。今回のことは忘れて、現実に向き合いなさい』

ふわ、と身体が浮く。何ともいえない浮遊感。

「待って、せめて、貴女の名前だけでも……」
『言えないわ』
「お願い……！」

懇願するように絞り出された声に、女性は温かく微笑した。

『時が来れば、必ず。また逢いましょう、可愛い歌姫』

身体が揺れている。

果たしてそれが覚醒の原因になったのかは分からないが、とにかくルイリは目が覚めた。

自分の状況が理解できずに身動ぎする。横たわって、身体には何かがかけられている。何だろう、これは。

ぼんやりとした瞳で瞬きをしてから、それをじっと見つめていた。黒い、漆黒と形容した方がしっくりとくる衣。女性用というよりは……どちらかと男性用の。

「あれ……？」

見覚えがある。

これは確か出発の時、彼が羽織っていた……彼？

「起きたようだな」

だいぶ近くで声が聞こえた。低いトーンだというのに、耳に心地いい声。ルイリは慌てて起き上がった。

「「……」」

金髪と紅の双眸を持った青年。がらがらと鳴る車輪の音。ようやく分かってきた頭で考える。ここはサベラの馬車の中。つまり密室。

なぜか目の前にいるのはリーファではなく、皇太子殿下。
もう一度言う。ここはサベラの馬車の中。つまり密室。
「――え!?」
今までで一番大きな声を出した自信がある。
ひたすらにうろたえたルイリは、ひとまず自分にかけられていた黒衣を目の前に彼に渡した。混乱からきた行動なので理由はない。イアンも素直に受け取った。
「ど、どうして殿下がここに……」
「俺が移動してきたんじゃない。お前がこちらに移動してきた」
「な、何故……」
言いかけて、今度こそルイリは絶句した。
目の前で尊大に足を組んで座る青年の頬に、赤黒い汚れがこびりついている。頬だけではない。煌めく金の髪にも、微かにのぞく首にも、斑点が散っている。それは紛れもなく血液だった。
「殿下、お怪我を……！」
「していない。全て返り血だ」
「か、返り血？」
純粋な疑問を口に出すと、イアンは不可解と言わんばかりに眉をひそめた。
「何も覚えていないのか」
「……？」
「何が起こったのか、本当に何も覚えていないのか、と聞いている」

どことなく責める口調に身を竦ませる。覚えていないのかと言われても……

そう思いながら、ルイリは必死で記憶を手繰った。

屋敷を離れて、彼の正居である宮殿への道中だったはずだ。しかし馬車が止まったかと思うと突然外から絶叫が聞こえて、レンが来て、？繋ぎ？をしてから。

いきなり戸が開いたと思ったら腕を掴まれて、外に引きずり出されて。急激に意識が遠のいて、最後に見たのは血飛沫を背景に佇む青年で、それから……

（……あれ？）

それから、どうなったんだろうか。

どんなに記憶を掘り起こそうとしても、それ以上のことは何も覚えていない。ぽっかりとした空白の時間。

眉根を寄せたのを察したのか、彼は嘆息して冷めた視線を向けてきた。

「お前が人質に取られ、そのお陰でだいぶ時間を喰った」

「え、あ……申し訳ございません」

人質という言葉も、その場で意識が無かったルイリには現実味がわかない。それにここにいるということは、解放されたということに他ならないが。

「あの、では……私を人質に取っていた人は……？」

「殺した」

端的に、それでも冷たい響きをもって伝えられる。声もなく息を呑むルイリに、更に畳み掛ける。

「当然だ……皇太子（おれ）の側室を人質に取ったんだからな」

たった、それだけで。

言葉を失ってしまい、何も言う事が出来ない。何もおぼえていない空白の時間に――自分に関わってしまったがために、人が死んでしまった。

その事実を突きつけられたルイリは全身が震えだすのを自覚していた。止めたくても、止めることができない。

私の所為（せい）で――私の注意力がなかったばかりに、人が死んだ。

私の所為で、私の所為で、私の所為で……！！

「――自惚れるな」

全身を熱く染めていた激情が、冷酷な声に鎮められた。

目を見開いて彼を見れば、先程と全く代わらない泰然とした視線がルイリを射抜いていた。自責の念に駆られて身体を震わせる少女を、皇太子は冷めた目で見ていた。

「お前は自分の所為で相手が殺されたと思っているのか？　それで自分を責めているとでも？　……自意識過剰もいいところだ」

紅の瞳は、苛立ちと不快感に暗く沈んでいる。

「あれはお前が俺の側室だと分かって人質に取った。失敗すればど

うなるかを分かっていながら」

手は組んだまま、足を反対方向に組みなおす。その一挙一動は洗練されてしなやかで、けれどそれに見惚れている暇はなかった。

イアンは冴え冴えと、凍てついた眼差しを窓に向けた。移り変わる景色。その向こうに何かを見つけたのか、途端に忌々しそうに歪められる。

「死んでも、殺されても当然のことをした、それだけの話だ。自分の責任で死んだなどと思うこと自体が、おこがましい」

視線が合わない。ルイリはずっとイアンを見ているのに、紅の視線は窓の外へ向いている。そこに宿るのは、強い憎悪。

「己の死は己の責任、他の何物でもない。罰を受ける人間は、罰を受けるような罪業を犯したということだ」

そして、と呼吸を一つ置いた。

「全てを自分の責と思うような考え方を持つならば、あそこでは生きていけない」

「え？」

言葉の意味を掴みあぐねて聞き返すと、何も言わずに窓の外を促された。少し身体を動かして窓を覗きこみ、彼と同じ方向に視線を向ける。

そこには。

「うわ、ぁ……！」

その時胸の中に凝(こご)っていた憤り、自責、悲しみ、全てを一瞬忘れてしまった。

途轍もなく高い城壁に、一つだけかけ下ろされた橋。その先に聳(そび)え立つ建造物。

それはルイリが想像していたものを遥かに凌駕(りょうが)する、純白の宮殿だった。

豪華絢爛、その言葉がこれほど似合うものもないだろう。高い城壁の向こうに覗く宮殿は、少なく見積もっても五以上はある。それはまさしく皇族の権威を象徴するかのように、堂々とその場に建っていた。

呆然とした表情で硬直しているルイリの耳に、抑揚の無い声が滑り込む。

「あれがシェリングの宮殿、クアレ・ローディン……今日からの、お前の住まいだ」

それを伝えながら、イアンはより一層表情を険しくした。

大嫌いな場所。

憎むべき場所。

戻ってくるたびに憎悪の募る場所。

綺麗なものなど形ばかりの――偽りと欲望で塗り固められた宮殿。

(また……戻って来たのか)

くだらない陰謀ばかりが渦巻く場所へ。

がらがらと車輪の回る音、そして蹄（ひづめ）の音と共に近づきゆく宮殿を、
睨みつけた。

―――――――――――――――

用意された完璧な舞台。
役者は上がる、何も知らずに。
創造主は観客席で笑う。

さぁ、始まるよ。

さぁ、鳴り響くよ。

混迷と欲望、そして狂おしいほどの愛おしさを込めた、珠玉の奏（ソ）
鳴（ナタ）曲。

16．辿り着いた舞台（後書き）

何故でしょう。本当に私の文章というのにはまとまりがありません。
キーを打てば打つほど勝手に行が長くなり文が長くなり。
前置きが何て長いんだ……自分の文章能力の無さを思い知らされますね。

おっと愚痴になってしまいました、いかんいかん。
いつものことながら、ここまで読んでくださった方に最大級の感謝を。

さて、蛇足補足！
奏鳴曲……独奏ないし重奏のために多楽章の器楽曲。基本的に第一～第四楽章で構成される。イタリア語の「ｓｏｎａｒｅ（ソナーレ）（鳴り響く）」が語源。ソナタ。

17. 出迎えと第五皇子

馬車が橋を渡り、城壁に進んでいくにつれて、不思議なことに目の前に頓挫している強固な門がギギ……と音を立てて開いた。

何の合図もなしに自然と開くとは、これも魔術の一種なのだろうか。疑問に思ったものの、張り詰めた空気を漂わせる彼に質問するわけにもいかないので窓の向こうに目を向けた。

門をくぐって更に一層近づいた宮殿――『クアレ・ローディン』。古代ルーヴ語で『七の色彩』を意味するそれは、遥か昔にシェリング皇国を設立した初代皇帝がその能力（ちから）を以って建設したものだという。広大な敷地は一種の都市である。建てられてから数千年の時を経ているにも関わらず、その権威は少しも色褪せない。まさに国と共に生きてきた建造物と言えよう。

狭い窓からなので全貌はよく分からないが、遠目から見ても細かいところまで意匠が施されている。神聖さを象徴するかのような白亜の建造物。まるで幻想の都のようなその姿に、ルイリは思わず嘆息した。

しかしルイリが見ている宮殿は全体の一端で、実はその後ろにまたいくつかの宮殿が鎮座している。

クアレ・ローディンは、その名の通り七つの宮殿を抱えている。

〈紅煌宮（こうおうきゅう）〉は、皇帝をはじめとした皇族の住まう場所。

〈翡翠宮(ひすいきゅう)〉は、婚礼や即位式などの神聖なる儀式を執り行う場所。
〈蒼泉宮(そうせんきゅう)〉は、他国から訪問してきた客人をもてなす場所。
〈紫芳宮(しほうきゅう)〉は、大広間や執務室、皇帝や皇太子が仕事をする場所。
〈桃香宮(とうかきゅう)〉は、皇后を最高権力者とし、后妃・側室の集う場所。
言ってしまえば後宮。
〈黒黎宮(こくれいきゅう)〉は、葬儀が執り行われたり、地下には罪人を幽閉する牢のある場所。
〈白蓮宮(びゃくれんきゅう)〉は、特別な祭典が無い限り、決して解放されない不可侵の場所。

そんなことも知らない新米の側室は、ただただ眼前の美しい建物に見惚れていた。ルイリが見ている宮殿は、紫芳宮だ。

馬車が進んでいる間、外は奇妙なまでに静かだった。ルイリは素直に首を傾げる。自分はまだしも、皇太子が帰還したのだから、盛大な凱旋や祝砲が行われてもいいような気がする。むしろされない方が、不自然に思えた。

何か理由があるのだろうが、それは聞いてはいけないような気がした。

室内に沈黙が満ちたまま、やがて馬車は止まった。

と思えば、伸びてきた手に腕を掴まれる。

「っあ、の？」

「着いた、つまり降りろ。このままここで過ごす気か？」

あからさまな皮肉と軽蔑に、ほんの少し胸のざわつきを覚える。

何だか前よりも扱いが雑だ。思えば、この宮殿を窓から見ていた彼の瞳はひどく荒んでいた。自分の住まいのはずなのに、どうしてそんな顔をするのだろう。

疑惑を抱いたまま彼の手助けによってそろそろと馬車を降りた。
目を上げたルイリを待ち受けていたのは、

――堂々とそびえる宮殿の巨大な入り口と、内部に向かって敷かれた緋色の絨毯、その脇を固める甲冑の兵士達。
場に満ちるのは無事に帰還した皇太子を歓迎する雰囲気ではなく、どこまでも硬質な緊張感。

カツン、と靴音が響いた。
それはまるで氷を踏んだような冷たい音。

「イアン＝ルシアディス＝シェリング、只今戻った」

低く、それでいてよく通った声。極力抑揚を抑えた声だったが、その場の兵士達は一斉に礼を取る。

「お帰りなさいませ、皇太子殿下！！」

一秒もずれずに、無機質な斉唱が響く。

リーファの話を聞いていると、彼は優秀な皇太子であることがうかがえた。普通に考えれば、兵士全員が彼を尊敬の眼差しで見つめると思っていたのだが――。
恐る恐る顔を上げて、彼の背中と、その向こうに並ぶ兵士の列を見た。

……思わずぞくりとした。背中が、氷の手で撫でられたかのようにすぅっと冷えていく。

彼の表情は分からない。だが、彼を見つめる兵士達の視線は、

畏怖。
嫌悪。
恐怖。
羨望。
嫉妬。

喉がからからに渇いて、呼吸ができなくなる。それはどう考えても、？未来の皇帝？に対する視線ではないような気がした。
どうしてここまで感覚が鋭敏になったのかは、よく分からない。理由を考える気力もなかった。どうしてここまで自分が衝撃を受けたのかも、分からなかった。

唐突に、足場が崩れようとする。震える膝を叱咤するのに、言う事を聞いてくれなくて……、

「――イアン兄上！！」

張り詰めた空気にはあまりにも場違いな明るい声が、重苦しい静寂を打ち破った。同時に、重さを持った空気があっさりと払拭された。さながら、冬の木枯しを春風が吹き飛ばしたかのように。
視線を上げる。宮殿の中から、こちらへ向かって一目散にかけてくる一人の少年が視界に入った。少年はイアンの前で止まり、にこりと笑った。

「お帰りなさい！　それからルイリ＝レティシア嬢！　ようこそシェリングへ！！」

太陽のような笑顔を向けられて、ルイリはほんの少したじろいだ。このような満面の笑み、向けられたこともなかったからだ。

少年はルイリよりも一つか二つ年下に見受けられた。ふわふわと跳ねた髪は濃い茶色で、喜色をたたえる瞳は果実のような橙色。人懐こい笑みは周りを和ませるが、全身からは育ちのよさを象徴する高貴な雰囲気が滲み出ている。

「初めまして！　シェリング皇国第五皇子、セイロン＝レドール＝シェリングといいます！」

ルイリは面食らってしまう。第五皇子……ということは、つまり彼の弟だろうか？　この天真爛漫を絵に描いたような少年が？　彼と？

……どう考えても血の繋がりを探すことができない。

「……あ、ルイリ＝レティシアと申します。お初に御目文字仕ります……セイロン殿下」

一瞬呆けてしまった自分を立て直して、慌てて自己紹介を返す。セイロンは更に笑みを深めた。

「伝達で新しい側室をお迎えになったと聞いていたので、とても楽しみにしていたんです。予想以上に綺麗な人ですね」

「いえ、そんな……」

「セイロン、無駄話をするなら戻れ」

穏やかな空気が流れようとしていた周囲を、冷えた声が一蹴する。しかしセイロンは臆する事無く長身の兄を見上げ、笑った。

「兄上、ご無事で何よりです。大広間で陛下と皇后陛下がお待ちですよ。僕は兄上をお迎えに来たんです」
「……俺が逃げるとでも思っているのか」
皮肉げな笑みが美しく唇を彩る。その凄惨な色合いに、周りの者達は皆一様に息を呑む。
視線だけで促すセイロンを無視してから、ついと紅い瞳をルイリに向ける。何も浮かばない紅。その奥底に揺らぐ何らかの感情を見つけて、ルイリは目を凝らした。
「殿下？」
彼は何も答えなかった。しかし、ルイリが何かを見つけようとしていたのを察したのか、意図して表情が消える。
「ルイリ様！」
歓喜と安堵に満ちた女性の声が聞こえた。もはや聞きなれたその声に首をめぐらせれば、濃紺の髪を揺らして、侍女がほっとした様子で駆け寄ってきた。どうやら後ろの馬車に乗っていたらしい。彼女の後方から、のんびりとした足取りで褐色の青年も歩いてくる。
「リーファさん、レンさん」
「長期の旅路、お疲れ様でした……ルイリ様。すぐにリーファが部屋へとご案内します」
？嬢？から？様？に敬称を変えたレンに違和感を覚えるが、何もいう事は出来なかった。周囲の空気がそうさせたのだろう。
リーファに顔を向ければ、侍女は静かに微笑んだ。ほっそりとした手にそっと手を取られ、目の前にある宮殿とは反対の方向へ誘導

される。

背後で長靴の音が響いた。振り向けば、漆黒の衣を纏った姿が緋色の絨毯を悠々と歩いていって、その後ろを少し小柄な姿が追いかけていた。全てを拒絶するような背は、どこまでも遠い。

レンが兵士達に向き直り、「お前達は戻れ」と声を上げる。その一言で、絨毯の両脇に整然と並んでいた甲冑はがしゃがしゃと音を立てながら四方へ歩き出した。

「では、また会えましたら」

一瞬だけ、いつも通りのにやりとした笑みを浮かべて見せて、レンは見えなくなった皇子二人を追って扉の向こうへ消えた。

「さ、ルイリ様。こちらへ……」
「あーぁ。まさか帰ってくるとはな」

リーファに先導されるままに足を進めようとしたルイリの耳に、うんざりした声が飛び込んだ。

（え？）
「今回の魔獣はかなり凶暴だったんだろ？　それを無傷で戻って来るなんざ」
「やっぱ、化け物だな」
「しっかし、こりゃー皇后陛下が荒れるぜ……」

震える身体を抑えながら視線を流すと、未だにその場にとどまっていた兵士の数人がくだけた口調で会話を交わしている。

これは……何？　誰の事を言っているの？
落胆と形容できる会話に、ルイリは愕然とする。

どうして？
どうしてそんな事が言えるの。貴方達は、殿下を主としたんじゃないの。

「控えなさい！！」

ぴしゃりとそう叱責したのは、何と驚いたことにリーファだった。
兵士のみならず、ルイリも目を丸くして侍女を見る。リーファは毅然とした表情で、臆する様子も見せずに口を開いた。

「女人（にょにん）の、それも殿下のご側室の前でそのような愚かな事を言うなんて兵士として失格よ。そんな事も分からない者に我が国の兵士は務まらないわ。代わりはいくらでもいるのよ？」

これほど冷たく、厳しい表情をした彼女は見たことがなかった。
歳とすれば、明らかに兵士達の方がリーファよりも上だろう。しかし、彼らは完璧に彼女の迫力に気圧されている。藤色の瞳が細まる。

「無駄な話をしている暇があったら、さっさと持ち場に戻りなさい。今後一切、ルイリ様のお耳にそんな下らない会話を入れないように」

彼らは何も言わず、ばつが悪そうな顔をしてそそくさと立ち去っていった。

何も言えなかった。
あの口調。あれは、彼を敬っている口調ではなかった。尊敬している口調ではなかった。先程の視線だって、憧憬からは程遠いもの。

彼は、知っているのだろうか。己に向けられている視線と感情を。
否、知っているからこそ、あんなにも表情を消して佇んでいたのではないのか。

凍りついた鮮紅（せんこう）。嘲笑以外を刻むことのない唇。人形のような表情の無い容貌（かお）。
その奥にあるものは、憎しみかもしくは……

「ルイリ様。……参りましょう？」

リーファは痛ましげに顔を歪めて、それでもルイリを促した。

†　†　†　†　†

「今回の魔獣はとても凶暴化していたと聞いていたんですけど……無傷で戻って来るなんて、さすが兄上ですね！」

喜色を体現したような声に、応じる声は無い。大広間へと続く廊下を歩くのは、イアン、セイロン、レンの三人。静寂に満ちた廊下に響くは、明朗な少年の声。くるくると表情を変える姿はさながら子犬のよう。昔から、この弟はいつもこれだ。

「ヴェルガ兄上もゼスト兄上も、それにリオナ義姉上も……あぁあと、もちろん側室の皆様も兄上のお帰りを心待ちにしているんです。皆きっと喜ぶと」
「セイロン」
ひっきりなしに口を開く弟を絶対零度の声で黙らせた。橙の瞳がほんの少し、萎縮したように揺れる。
「事実でもないことを簡単に口にするなと、何度言えば分かる」
「で、でも本当に……」
「いい加減そのお喋りを直せ」
にべもなく言い放つイアンに、セイロンはしゅんとうなだれる。
『相変わらず、厳しいアニウエだな』
小馬鹿にしたような【声】が聞こえる。しかしそれに応じるつもりは無かった。
扉は目前に、迫っているから。
自分の身長の三倍はある扉の前で、ぴたりと止まる。両脇に佇む兵士を視線で促せば、二人は恭しくお辞儀をして扉を開ける。
開けた視界の向こうに見える、黄金の柱がいくつも並び、頭上にはきらびやかなシャンデリアが吊り上げられている大広間。
緋色の絨毯の先にある、二つの玉座。
「いいな。今後一切無駄口を叩くな」

後ろに立つセイロンに釘をさす。消え入りそうな声の応答を聞いてから、イアンは広間の中に足を踏み入れた。

17．　出迎えと第五皇子（後書き）

文章表現が病的に皆無です申し訳ありません！
宮殿の外観は皆様のご想像にお任せいたします（丸投げ）。

次でも新キャラがわさわさ出てくる予定です。出るといいな（願望）。

思えば二十部まで書いてきて、登場人物が結構少なかったか？と思い……

でもこれからわさわさ出てくるので、頃合いを見て登場人物の資料を加えよう。

ここまで読んでくださった方、新たにお気に入り登録をしてくださった方、本当にありがとうございます！

18. 広がる波紋

左右に整然と並んだ兵士の間を突き抜け、玉座の前でイアンはゆっくりと膝をついた。

前の階段を四、五ほど上がった場所に、皇帝の座る玉座はある。すぐに動けば簡単に距離を詰められるそこは、しかし途方も無い距離感を感じさせる。

玉座の両脇を固めているのは、兄弟である皇子達、そして大臣達。後ろから着いてきていたセイロンも、その脇に戻った。

「只今戻りました」

「うむ、どうやら魔物の討伐も滞りなく済んだようで真に重畳（ちょうじょう）」

低く錬れた声で、皇帝は労いの言葉をかけた。一呼吸おいて。

「……今回は随分と帰りが遅かったようだのう、皇太子殿下」

高く耳障りな声に、イアンは微かに柳眉をひそめた。顔を見らずとも分かる。皇帝の横に座る皇后が、毒の笑みを手元の扇で覆い隠しているのだろう。

（遅かった、だと？）

白々しい。遅らせたのはそちらだろう。

口元が歪みそうになる。イアンは漏れそうな嘲笑を抑え、完璧な無表情で応じた。

「その件につきましては、深くお詫び申し上げます。これでも全力を賭して、最短で帰還した次第でございます」

「ほう、そちはそれほどまでに都が恋しかったのかえ？」

「長い間私が宮殿を空けていては、陛下の執務に支障をきたすと思いましたゆえ」

「ふん、まるで己が優秀であるかのような物言いじゃのう」

「そのように聞こえましたら、ご勘弁を。……で、陛下。今回の討伐ですが」

食い下がろうとする皇后をあっさりといなし、皇帝に業務連絡を二、三個報告する。

仰々しくうなずいていた皇帝は、ふと何かに気づいたように声音を変えた。

「ところで皇太子。余は一つ、そなたに聞くべき事がある」

「何なりと」

「そなたは討伐先で、また新しい側室を迎えたらしいな」

どうせこの話題は来るだろうなと思っていたので、さして表情は変えなかった。皇后や皇子達、両脇に控える臣下達が興味深そうにこちらに視線を送るのが分かる。

それほどまでに、？皇太子？の娶（めと）った側室が気になるか。

嘲笑をおさえつつ、返答を返す。

「は。部屋は既に、桃香宮に用意させてあります」

「聞けば、そなたにしては珍しく身分の高くない娘だという。何か恩義でも？」

「……いえ。記憶を失くした少女で、身寄りがないというので。一度こちらに引き取ることにしたのでございます」

ざわっ、と、広間に驚きの声が波立った。

当然といえば当然か。己の側室は政略結婚以外の何ものでもないことで有名な皇太子が、どこの出自とも知らない娘を娶ったのだ。

既に顔を見たセイロンは、彼女のことを言いたくて仕方がないようにきょろきょろと辺りを見回している。それを視線で制した。

むろん、イアンもただの気まぐれとして彼女を側室にしたわけではない。どころか、刺客に人質に取られた時は、いっそ死ねばいいと思ったことすらある。

しかしそれを懇切丁寧に教えてやるほど、イアンは寛大ではなかった。

まだざわついている中、ほほほ、と皇后が高笑いをあげる。

「心の広い処置じゃのう。そのようなありふれた娘、捨て置けばよいものを。それともそちは、目の前に記憶を失くした娘がおれば誰でも側室にするのかえ？」

「……」

「どのような脅しを使ったかは知らぬが、そちが娶る女子など遊女か金蔓（かねづる）かのどちらかであろ。たかがしれておるわ」

また面倒な茶々が入ってきた。

イアンはわざと疲れたような溜息を吐いて、僅かに目線を上げる。感情を一切廃した、人形のような顔で。

「恐れながら、皇后陛下。私がご報告申し上げているのは皇帝陛下に対してでございますので」
「な……っ」

皇后の美しい顔が醜く歪み、手に持っていた扇がばちんと閉じられた。傍らに佇む皇子が宥めようとするも、それより前にイアンは口を開く。

「そもそも私の側室は私自身が決めるもの、何人たりとも口出しはできないはず。――どこか相違でも？　皇后陛下」
「おっ……、おのれ、言わせておけば！」
「よさぬか、皇后！！」

不穏な空気の漂い始めた大広間は、皇帝の一喝で払拭された。兵士達が一斉に身を竦ませる。毒気を抜かれたような皇后は憤懣（ふんまん）やるかたないと言った体で玉座に座り直した。

「皇太子もだ。誤解を招くような発言は控えろ」
「失礼致しました、陛下」

中身の無い謝罪を口にして、イアンは深く頭を垂れた。

「ところで、側室を迎えるということは翡翠宮で……」
「婚礼の儀をする必要はございません。名だたる貴族の令嬢でもないゆえ、事を大きくすることは賢明ではありますまい」
「む、それも……そうだな」

矢継ぎ早の説明を、皇帝は上手く呑みこまないうちにうなずいた。本当はあの容姿で公にさらすのは徒に世間を騒がせるだけだと判断したためなのだが。

「……言い添えておきますが、新しい側室は私の許可が無い限り一切の干渉を禁じるので、そのつもりで」

沈黙が満ちていた空間に、一つの笑声が落ちた。

堪えられないと言わんばかりに口元を覆っているのは、女性と見紛うほど端整な美貌をたたえた男性。色素の薄い金髪をさらりと流して、面白そうにこちらを見つめてくる。特に感慨を抱かずにそれを見返してから、

「では、失礼致します」

退室許可を言われる前に、立ち上がり身を翻した。

周囲の――主に皇后の――敵意に満ちた視線が鬱陶しい。それを振り切るかのように、イアンは少し【気】を動かして、背後の扉を閉じた。

†　†　†　†　†

紫芳宮から、イアンの住まいである紅煌宮は渡り廊下で繋がっている。美しい装飾のほどこされた洋燈が、足元を明るく照らす。

帰ってきたからといってのんびりとしてはいられない。むしろ逆

だ。自分が宮殿を空けていた間にどれほどの仕事が積み重なったのか、考えるだけで気が遠くなる。

自室がある宮へ向かおうと足を進めるイアンの背に、笑みを含んだ声がぶつかった。

「相変わらず威圧感ばりばりだな、兄上サマ？」

「相変わらず表情がないねぇ、イアン」

ぴたり、と足を止めて、イアンは黙然と振り返った。

「……何の用だ？　ゼスト、ヴェルガ」

背後に視線を向ければ、二人の青年が両端の柱にもたれて立っていた。

一人はイアンと同じか、それより一つほど下の風貌をした青年。濃い茶の髪が、精悍で整った顔を縁取る。にやりとした笑みを作る唇は形がよく、細めた瞳は少しくすんだ赤銅色。ひょろりとした背に黒い服を纏い、腰に剣を佩く姿は一見すれば百戦錬磨の軍人ともとれる。

そしていま一人は、大広間での発言に噴き出したあの美丈夫だった。

イアンよりも色素の薄い金色の髪が顔にかかり、それを長い指先で優雅にかきあげる。その何気ない動作だけでも、異性はすぐに心を射抜かれてしまうに違いない。白い肌も薄い唇も、そして極上の

ワインのような臙脂色の双眸も、全てにおいて性別を超越している。彼の微笑一つで、国五つほどは軽く傾くとまで思えた。

むろん、イアンは全く興味が無い。己の肉親の容姿がどうだろうが、知ったことではない。

はは、と前者の青年が笑う。

「にべもないなぁ。ただ単に、帰還なさった兄君を歓迎しようとしただけなのに」

「全くだ。自分の兄を呼び捨てにするなんて、図太い弟だね」

「何の用だと、聞いている」

お互いで顔を見合わせて笑う二人に、イアンは感情の片鱗の見出さずに淡々と問う。

後者の男は、優美な仕草で肩をすくめた。

「特に用事はないよ。帰り道が一緒だっただけさ」

「ゼスト、お前と仲良く帰るつもりはない」

薄金の美丈夫、――シェリング皇国第二皇子・ゼストは美しく唇を吊り上げた。

「そう言わずに。……ねぇ、ヴェルガ？」

「え、俺にふっちゃいます？」

濃茶の青年、――シェリング皇国第四皇子・ヴェルガもにんまりと笑う。

「イアン兄さん、勘違いしないでほしいな。俺達は本気で感心して

たんだ。皇后陛下の前であんな啖呵を切れるのは、皇国……いや大陸のどこを探しても兄さんしかいないよ」

「……」

胡散臭いことこの上ない笑顔でいけしゃあしゃあと言ってのける弟に対して、文句の一つでも言ってやりたかったが。

「そうそう。今思い出しただけでも笑えてしまうねあの時の皇后陛下の真っ赤な顔。綺麗な顔が台無しだった。扇が折れそうになった時は驚いたなぁ」

「……」

女性も裸足で逃げ出すほどの美貌で飄々と言ってのける兄が隣で晴れやかに同意するせいで、その気力すら失せてしまう。

無言で足を翻そうとするイアンを、強制的ではないが抗いがたいしなやかな腕が止める。

「せっかく、久々の兄弟水入らずの語らいなんだ。辞退するなんて無粋なことはしないだろうね？」

「廊下の真ん中でお前らと無駄話をしているほど、俺は暇ではない」

「言うねぇ兄さん。――新しい側室様を迎える暇はあるっていうのに？」

軽快な笑みの中に、ほんの少しの澱みが含まれた。表情を崩さないイアンに、ヴェルガは挑発的な視線を投げかける。整った顔が凶暴性を帯びた。

「さっきセイロンに聞いたんだ。新しい側室様は、それはそれは綺麗で礼儀正しくて清楚なお方だって」

「……」

あのお喋り、とイアンは心の中で弟（セイロン）を詰（なじ）った。よりにもよってこの対処しにくい弟（ヴェルガ）にそれを吹き込むなど、馬鹿にも程がある。

「興味湧くに決まってるだろ？　百戦錬磨の兄さんが、どういう気の迷いでそんな純情さんを娶る気になったのか……記憶喪失だって？　しかも貴族の出身じゃない？　面白すぎるよ」

「言った筈だ。新しい側室をはじめ、俺の側室は全て俺の許可が無い限り干渉は禁じると」

「つれない事言うなよ。俺はその令嬢とお友達になりたいだけ。あ、兄さんが抱く気がないんだったら代わりに慰めてあげるっていうのもアリかな？」

イアンは冷酷に瞳を細めた。唇をすぐに、嘲笑に歪める。

「頭が空のお前が考えそうなことだ」

「ははっ、何それ。そうさせたいの？」

「そうさせてもらいたいのか？」

紅と赤銅の視線が空中で絡み合った。静かでいてその実激しく相対するその視線は、周囲が息苦しくなるほどの威圧感を生み出す。

悪ふざけを超えて、徐々に本気になりつつあるヴェルガの後頭部に。

ぱこんっという衝撃が走る。

「いってっ！！」

「全く……。お前という奴は、どうして成長しないのかな」

「波動飛ばすなよゼスト兄さん！　ちょっとからかっただけなのに！」

「からかいにも限度があるということを、いい加減理解することだ

ね」

やれやれと息をつく姿は、同情よりも動悸を誘う。溜息一つでこれほど艶やかな図を描き出してしまうのは彼くらいだろう。

「これ以上機嫌を損ねさせるのもよくないよ。今回は大人しく執務に戻ることだ」

「はっ?!　イアン兄さんに会いに行こうって提案したのそっちじゃん!?」

「はいはい。言い訳はいいから紫芳宮に戻りなさい」

どう考えても理不尽な叱りを受けてしまった第四皇子は、不満げに口を尖らせながらもあっさりと引いた。

「じゃあまた、イアン兄さん。近いうち、手合わせしてくれると嬉しいな」

ひらっと手を振り、ヴェルガは紅煌宮ではなく紫芳宮の方へ繋がる廊下を行き、姿を消した。

「イアン。君、ヴェルガに手合わせしてあげてるのかい?」

「まさか」

ヴェルガだけではなく、セイロンもイアンに手合わせを申し込んでくるが、彼はそれを容赦なく断っていた。理由は一つ、彼らとそんなことをしてまで親睦を深める必要性がないからだ。

「お前も執務に戻るんじゃないのか……鬱陶しい」

「あぁうん。そのつもりだけど、一つ……いや、二つほど言いたいことがあってね?」

訝しげに視線を寄越す弟に、ゼストは優雅に微笑んだ。それを見るためだけに、命を捨てようとする者さえいる魅惑的且つ妖艶な微笑。

誰もが一目見たいと思ってやまないその微笑みを、イアンは何の感慨も抱かずに見返した。何も感じない。当然だが。

「新しい側室には、私も興味がある。近々、ぜひ挨拶させていただくよ」

それと、とイアンに歩み寄り、すれ違う瞬間に小さく囁いた。

「早めに桃香宮に行くといい。――リオナ義姉上が、心待ちにしているだろうから」

イアンがそれに反応を示す前に、美貌の兄は颯爽と紫芳宮へ戻っていった。その場には、立ち尽くす彼だけが残される。

「……――」

ふっと、瞑目する。

瞳の奥に蘇るのは、赫(あか)。

――殺せ……早く！！！

耳の奥に甦るのは、悲鳴、絶叫。

――どうして……どうして!?　貴方のせいよ!!

自分の胸を、細い腕で何度も何度も叩いていた姿が、よみがえる。

覚えている。この腕が、この体が。

覚えている。己の罪深さを、己の愚かしさを。

赦されるはずがないのだ。この身を赦す者など、誰もいはしない。

……だから、闇に沈む。

誰も邪魔しない、誰も干渉しない、誰もいることのない――深淵の闇へと。

そうして、全てを拒絶していけばいい。

そうすれば、もう何も感じない。何も感じなければ、失うものもない。

だから。

「……入ってくるな」

ひらめく亜麻色。深い碧。

誰であろうと、ここに入ってくることは許さない。

ましてや非力な娘など。

早く、……壊れてしまえばいい。

醜い女達の情念が渦巻く後宮で、精神（こころ）を壊してしまえばいい。
それを見届けてやる。片時も目を離さずに、見届けてやる。

さっさと、崩壊してしまえ。

瞬間、それを抗議するように苛立ちが湧いた。それは考えをめぐらせていたこととは違う感情。ひどく矛盾した、本能とも呼ぶべき何かがかき鳴らした警鐘。

鬩（せめ）ぎ合う感情はイアンを掻き乱そうとするも、長年培ってきた鉄壁の理性がそれをおさえこむ。

ひとつ息を吐く。下らないことまで考えが及んでしまった。とりあえず、休むのが一番だろう。

しばらく足を止めていたイアンは、自分を取り巻いていた不快な考え全てを頭の隅に追いやり、ひとまず自室へ向かおうと一路を急いだ。

18.　広がる波紋（後書き）

予想以上に新キャラ二人が暴走しました……。
タイトル的には、最後の六分の一くらいのところしか表していないんですが……どうしても、このタイトルにしたくて。
少しずつイアンの心の闇を見せつつ、ルイリサイドへ戻ります。

今までの曲は一日とか場面とかで区切ってましたが、奏鳴曲（ソナタ）は規模が大きい楽曲なのでだいぶ続きます。
とりあえず、宮殿の新キャラを一通り出したら次に移るかな……。

という感じです。これからも見守ってくださったら嬉しいです！
ここまで読んでくださった方、更にはお気に入り登録をしてくださった方に溢れんばかりの感謝を！！

18．5．　舞う、ヒカリ

はらはらと、光が舞っている。

眺めれば眺めるほど綺麗なそれは、手を伸ばしても掴むことはできなかった。諦めて手を下ろす。

？――――？

自分の名前を呼ぶ心地のよい低い声が、耳に滑り込んだ。視線を動かすと、背の高い男がこちらを見下ろしている。その時になって初めて、自分が地面に横たわっているのだという事を知る。鮮やかな瞳に宿るのは、痛ましいほどの悲しみ。

――あぁ、良かった……。終わらせることができたのね

安堵の息を吐き出すと、更に瞳が歪んだ。そんな顔をさせたくないのに。

どうすれば笑ってくれるのか思案していると、ふっと背中に力強い腕が回る。整った顔がよりいっそう近づいた。

――すまない……すまなかった

震える声で謝罪をされた。その奥に込められた苦しみを読み取って、小さく、弱々しく首を振る。

決して彼の所為ではない。こういう時代だったから、こうならなければいけない運命だったから、こうなった。それだけのこと。

――どうやって償えばいい。俺は、お前を

それ以上の言葉は聞きたくなかった。辛うじて力の入る腕を持ち上げて、薄い唇を指で塞ぐ。

――謝らないで。私は私の意志でこうしただけ。貴方は何も悪くない

――逝くな。逝かないでくれ。俺は、まだお前に何も伝えていない

……っ！

揺れる声。頬に、温かいものがぽたりと落ちる。彼の唇から彼の頬に手を滑らせると、そこは濡れていて。

卑怯だ、と笑う。私より先に泣いてしまうなんて。

――自分を責めないで。これは私が決めたこと

もう駄目だ。全身に力が入らない。体中から、意識も気力も、全てが削がれていくようだった。

逝くな、と彼が叫ぶ。声を嗄らしながら。この身体を抱きしめながら。

今になってようやく溢れ出して行く感情。彼に対する悲しみ、苦悩、愛おしさ――憎しみさえも。

いっそのこと認めてしまえば楽だったのに。遅すぎる自覚に、小さく自嘲する。

はらはら、はらはら。

はらはら、ひらり。

光が舞う。

――これだけは、忘れないで

腕の感覚がなくなっていく。焦燥の念が胸を満たす。

まだ待って。もう少し、もう少しでいいから。まだ何も伝えていない。何も語っていない。この胸に長い間秘めていた想いも、何も。

あぁ、この身がもどかしい。もどかしくてたまらない。こうして眠りにつこうとする身体が、憎らしくてたまらない。

――私は、貴方だけの歌姫。……いつだって、貴方のためだけに唄うわ

霞みゆく視界。まるで、目の前に紗がかかったよう。

――あとひとつ、約束、して

彼が何かを叫んでいる。私の名前を呼んでいる。

けれど聞こえない。あれほどまでに愛おしい、彼の声さえも遠くなっていく。

もっと言いたいことがある。もっと伝えたいことがある。

もっと――彼の傍にいたい。

けれど。

――どうか、しあわせ……に……

喉が、震えなくなってしまった。手が力を失って、地面にぱたりと落ちる。彼がその手を掴む前に。掴もうとした手は、虚しく空を切った。

――逝くな……っ、逝くなぁっっ！！！

はらはら、はらはら。

はらはら、ぴたり。

光が止まる。

瞼を閉じる寸前に見たのは。

何よりも愛おしくて大好きだった、紅の瞳だった。

19．　桃香宮の日常

はらはら、ひらり。
はらはら、ひらり。

あぁ、なんてきれい。

あれはなに？
わたしはあれをしらない。

いいえ、わたしはあれをみたことがある。
はるかなるとおいばしょで、あれをみたことがある。

それはどこ？

それは、

ぱち、と瞼を開けると、案外頭の中はぼうっとしていなかった。
頭上の天蓋に施されている繊細な刺繍。寝台を囲む半透明の天幕。身体に覆い被さっている肌触りのよい羽根布団。自分を包んでいる寝間着も、これまた肌触りがいい。

「……」

ほんの少し腕に力を込めて起き上がる。きしり、と小さくスプリングが軋んだ。
広い部屋だった。大きな窓に白い刺繍のカーテンから、朝日が明るく零れ落ちている。白を基調とした室内は清潔な雰囲気を漂わせていて、箪笥（クローゼット）には真新しいドレスが並び、化粧台（ドレッサー）には鮮やかな装飾の櫛や髪飾り、更には高級な化粧品が並んでいる。

「……え、と」

ぱちぱち、と何度か瞬きをして、ルイリはようやく自分の状況を整理した。

（クアレ・ローディンの……桃香宮。ここは、私に宛がわれた部屋……）

声には出さずともそう確認する作業が、ルイリには早くも日課となりつつあった。そうでもしなければ、夢見心地の中で混乱してしまうかもしれないから。

細く息をつき、ふと自分の頬が必要以上張りついているに気づく。先程とは別の意味で瞬きをして、そこに指を添える。

（涙……？）

それは既に渇いていたが、確かに涙の跡。

泣いていたのだろうか。一体どうして。

そういえば、何だかとても哀しい夢を見たような気がしないでもないが――全く思い出せない。

寝台の上で首を傾げる。そんなルイリの耳に、軽快なノックの音が入ってきた。

「おはようございます、ルイリ様。入ってもよろしいでしょうか？」

この軽やかな声と共に、ルイリの一日は始まろうとしていた。

†　†　†　†　†

この部屋に初めて入ったのは一週間前。リーファに連れられて、桃香宮の一角にあるここに案内された。

あまりにも自分には豪華すぎる部屋だったものだから、はじめは他の場所に移してもらえないかと何度も懇願した。

しかし、

――自(おの)ずと慣れるものですわ。それに、これでも狭い部屋でございますのよ？

有無を言わせない笑顔と声音で諭されて、それ以上の抗議はできなかった。

ルイリが正式にイアンの側室になってから早一週間。早、という言葉がつく時点で、その日々はある意味充実していたと言えよう。

まず側室になった翌日から、完璧な令嬢であるための稽古が始まったのである。

出発前にリーファから教えられていた行儀作法、宮廷作法をはじめ、国史や裁縫、ダンスまで……その種類は多岐に渡る。聞いてはいたが予想以上の慌ただしさと量に、ルイリは少々辟易していた。

何せ午前中と午後の授業の内容が百八十度違うのである。宮廷作法をしてから国史、などという頭を完全に変換しなければならない時間割もざらで。しかもまだ宮殿内の地理を掴めていないという弱みも加わって、始めの一週間は言葉通り怒涛の一週間であった。

「今日は美味しい茶葉が手に入ったんです。どうぞお召し上がりください」

「……ありがとう」

鴇(とき)色の髪の侍女――セシーヌは、にっこりとした笑顔と共にティ

ーカップを差し出す。
それを取る動作も優雅でなければいけない――行儀作法の教師の言葉を頭の中で反芻して。一挙一動に気をつけながらカップを取ると、甘い香りが鼻腔を優しくくすぐった。こくり、と一口飲めば、ほの甘い風味と茶葉の香ばしさが全身に染み渡るよう。素直に「美味しい」と漏らす。侍女は更に微笑んだ。

「南方からの輸入品で、ジャリス茶というんですよ。そうそう、本日は授業は休みですので、どうぞゆっくりして下さいね」

言いながら、彼女はルイリの後ろに回って亜麻色の髪を何房か取って器用に結い上げる。素早い手つきで傍らに置かれた髪飾りをつければ、ものの数分間で簡単ながら繊細な髪形ができあがった。いつものことながら感心を禁じ得ない。
ここのところの身の回りは、全てこのセシーヌがやってくれている。

と、いうのも。
リーファは、後宮内の筆頭女官（ひっとうにょかん）も勤めていた（らしい）。つまり侍女の中でも上司的な存在。そんな揺るぎない実力を持つ彼女が貴族の姫でもない娘の侍女になったというのだから、以前から後宮に住まう姫君達の動揺は相当なものであったそうだ。
そしてさらに驚きなことが、何とリーファが筆頭女官の座を退いたということ。有能な筆頭の突然の辞任に、桃香宮は文字通り激震した。その辺りのことは上手くはぐらかされて、ルイリは深くは知らない。
ともかくも、辞任後の事後処理に追われるリーファが忙しくない筈がない。

その代わりとして遣わされたのが彼女、セシーヌ＝ラグスローだ

った。

薄紅色の髪と琥珀色の瞳を持つ端整な少女。ラグスロー子爵家の三女で、歳はルイリと同じ十七歳。ほんわかとした外見とは裏腹に、性格は快活ではっきりと物を言う。

五日前に初めて相対した時はまさに深窓の令嬢と言わんばかりの物静かさだったのだが、側室様と呼ぶのをやめてくれないかと言った瞬間に彼女に被さっていた猫百匹は外れたようで。

――私、ルイリ様となら上手くやっていけそうな気がします

清々しい笑顔と共にそう言われた。同年代の少女が傍にいなかったルイリからすれば、それは何物にも代えがたい言葉だった。

……とは言え。

「同じ歳の子から?様?付けで呼ばれるのは気が引けるんだけれど……」

「何を言います。ルイリ様を呼び捨てにしたら即刻私は打ち首ですよ?」

「せめて、敬語だけでも」

「これでもくだけた敬語を使っているんですから、甘受してください」

「……でも」

「でももだってもありますか。これだけは譲りません」

このやり取りは最初の相対から繰り返されている。

「ルイリ様は性根が優しすぎやしませんか?」

呆れ半分、他の温かい感情半分といった口調で、セシーヌは琥珀の瞳を細めた。対するルイリはひょいと首を傾げ。

「そう……かしら」

と呟く。そしてすぐに、げんなりとした表情を作った。

あぁ、やっぱりこの口調は慣れない。リーファやセシーヌ、更には言葉遣い指導の教師から半ば、いやほとんど強要されてようやくこの口調も板についてきたが、それでも慣れない。別に敬語を使いたいわけではないけど、こんないかにも令嬢のような口調は……慣れない。

「慣れるまで、精進あるのみですよ」

ルイリの渋い表情から読み取ったのか、はたまた先程の微妙な間で察したのか、同年の侍女は横で独白のように呟く。

見透かされてる、と言葉も無く呟いていると、セシーヌは瞳を輝かせてぽんと手を打った。

「そうですわ。ルイリ様、今日はお天気も良いことですし庭に出てみられては？」

「庭？」

「えぇ。思えば、此方に来てから一度もじっくり見たことがないのかと思って」

そういえば、部屋から移動する際などに横目で中庭を眺めていたりしていたが、確かにちゃんと見たことはない。

しかし……いいのだろうか。

まだ躊躇しようとする側室に、侍女は更に追い討ち、もとい説得を試みた。

「窓から見ているだけでは足りないことでしょう。桃香宮（ここ）の庭師は腕が立ちますから、間近で見られたら更に美しいと思いますけれど」

ルイリはしばらく指を顎にあてて考える素振りをしてから、

「そうね……せっかくだし」

甘い香りのするジャリス茶を飲み干し、静かに立ち上がった。

†　†　†　†　†

いつも窓や遠目から眺めていた庭は、直に見るとまた一段と美しかった。

桃香宮の庭は、クアレ・ローディンの中でも随一の美しさを誇るという（何せ蝶よ花よと育てられてきた姫君達の住まう場所なのだ、当然である）。可憐な花、陽を受けて光る若葉、切りそろえられた植木、どっしりとした木々。どれも丹念に手入れされている。

「きれい……」

ほうっと溜息をついて呟けば、後ろの侍女が口元をほころばせた。

「私から言わせれば、ルイリ様の方がよほどお綺麗です。花々を引き立て役にしてしまうほど」
「……おだてないで」
顔を赤らめる主を、セシーヌは穏やかな眼差しで見つめる。本当のことですよと言いたかったが、彼女が更に恐縮してしまいそうだったのでやめた。
お世辞を抜きにしても、ルイリは美しかった。
貴族の姫君のような派手な美しさはない。だが、白く透き通った肌や澄んだ翠緑の瞳は不思議と人を惹きつける。それは内面から溢れ出る優しさの証なのか。
「それにしても、まるで迷路みたいに入り組んでいるのね。何か理由でもあるの？」
面と向かって褒められるのに慣れていないルイリは、慌てて話題を逸らす。それを察してくれたのか、すぐに返答が返ってきた。
「木々というものは案外、人を隠してくれるものです。貴族の方々は、逢い引きに利用なさるんだとか」
「あ、逢い引、き……？」
聞き慣れない単語に、見事に固まる。セシーヌは年頃の娘らしい、悪戯じみた笑みを浮かべた。
「ルイリ様も、殿下とお会いになられる時に利用なさっては？」
「……セシーヌ。私がそんなことをするわけがないでしょう。第一、殿下とはあれから一度も会っていないし」

呆れたような返答。それに寂しさや物足りなさは含まず、ただ事実だけを述べた。

当然の話だが、紫芳宮の前で離別したきり、彼とは一度も会っていないし顔も合わせていない。他の側室の姫君達が噂している場面や、どうやら他の姫君のところに言ったらしいという話は聞くが。

「それに、私がここへ来たのは……」

――愛しているよ

何も、彼に愛されたくて来たわけではない。

言いかけたルイリの目が、ふぅっと深くなる。セシーヌは静かに息を呑んだ。

たまに、ルイリはこういう目つきをする。遠いところを見ているようで、どこも見ていないような。

明るい若葉の瞳が深い海の底のような色に転じて、彼女だけ周囲の喧騒から切り離されたような、そんな錯覚さえ覚えるのだ。

まるで、このままどこかへ消えてしまいそうで。

何か、いいえぬ衝動を感じ、セシーヌは慌てて口を開こうとした。しかし。

「何をしているの!?　こののろまっ」

甲高い声が庭に響き渡って、ルイリは強制的に現実に引き戻され

た。

19．　桃香宮の日常（後書き）

新キャラ出てきました。
何だかルイリが敬語キャラみたいになったので、タメ口使える人出したかったんです（笑）
それにしても時間軸がいきなり一週間ぶっ飛ぶなんて……。どうぞご甘受くださいますよう。これからも度々、多分きっとあります。

次回は何だか、ある意味出したかった人達を出せますっ♪
なるべく早めに更新できるように頑張ります。

最後に。ここまで読んでくださった方に、抱えきれないほどの感謝を！

20. 注がれる悪意

瞳は深い碧から、明るい翠へ。

遅れて、食器の倒れるガチャンという音、地面に液体がこぼれる音がした。

そして、乾いた音、短い悲鳴。そして何かが倒れこむようなどさっという音。それが一体何を意味するのか、簡単に想像がつく。

ルイリは瞬時に顔色を変えて、立ち塞がる侍女を押し退けた。焦燥と非難の交じった声も聞こえない。

足に纏わりつくドレスの裾をたくし上げ植木に挟まれた小道のような場所を抜ければ、そこは打って変わった開放的な庭園になっていた。一際手入れのほどこされた植木や花壇は美しかったが、ルイリの視界はそんなものとらえてはいなかった。

一人の見目麗しい女性が、芝生の上に佇んで顔を真っ赤にして震えている。その姿にルイリは見覚えがあった。あれは確か――イアンの側室の一人だ。

視線の先にいるのは、地面に倒れた十代前半ほどの少女。纏っているものは、侍女よりも一つ身分の低い、小間使いの服。

「たかが召使いごときが……っ、わたくしの衣装（ドレス）を汚すだなんて！」

美しく着飾った姫君は金切り声で叫んで、へたり込んだ少女に向かって手を振り上げた。

咄嗟に体が動く。

「やめて！」

久しぶりに腹から声を出し、手の動きが止まったのを見計って間に滑り込む。

一瞬、姫君は呆けて。しかしすぐにきっと眦を吊り上げた。

「おどきなさい！　誰だかは知らないけれど、わたくしの邪魔をするものは許さなくってよ！！」

「人に暴力を振るう場面を見過ごすほど、人でなしではありません」

足が震える。声も震えていないだろうかと心配になったが、姫君や周りの侍女達の表情を見るに大丈夫だったようだ。そのまま大きく息を吸って、努めて冷静に声を絞り出す。

「仮にも皇太子殿下の側室ともあろうお人が、下々の者に心を配れなくてどうなさるのですか？　誰しも間違いはあるものです。罰を与えても事態は必ずしも好転するとは限りません」

「……っ、生意気に……」

側室の姫はしばらくのあいだ燃えるような瞳でルイリを睨みつけていたが、やがてくるっと踵を返し、周囲の侍女を引き連れてその場を去った。庭園には、ルイリとセシーヌ、そして小間使いの少女だけが残される。

「……大丈夫？」

ルイリは振り返り、へたりこんでいる少女の顔を覗きこんだ。

十三、四ほどの容貌。茶の髪は肩で揺れていて、大きく見開かれた目は薄い水色。まだあどけなさの残る顔立ちはしかし、どこか達観した風情を覗かせる。派手な可愛らしさはないが……そう、神秘的、という言葉がよく合っている。

少女はしばらく、ルイリを真正面から見つめていた。まるで此の世のものではないようなものと遭遇した時（そんな機会は一向に巡ってきていないが）のような顔で。

「……白」

と、呟く。

一つの単語だけで考えを膨らますことが出来るほどの想像力を持っていないルイリは、純粋に困惑した。白？　白とは……あの色の、白のことか？

「あ、大変。怪我してるわ」

ルイリの視線が少女の手の甲を捕らえた。甲には朱色の線がはしり、血が滲んでいる。考えるよりも先に、ルイリは自分よりも幾分小さな手をそっと取った。そこでようやく少女は我に帰ったようだった。

「た、多分、さっき植木の枝に引っかかって」

「手当てしないと」

「は、え！？　だ、大丈夫です！　このくらい……」

「けれど、これで水仕事をすれば痛むでしょう」

「そんな、いつものことですから」

彼女はどうやら、早くこの場から立ち去りたいようだった。大方、先程の姫君に小言を喰らうのを恐れているのだろう。かと言って、このまま送り出すわけにもいくまい。また仕事に支障を来せば、また叱責される。

「……」

きょろ、と辺りを見回した。広大な敷地内では、誰が潜んでいるのか皆目見当もつかない。だが見る限り、目の届く範囲には誰もいないようだ。

「……セシーヌ」

「はい？」

「私は、あなたを信頼してもいい？」

唐突な問いに、侍女は戸惑ったようだった。静かに立ち上がって、蜂蜜色の瞳を見つめる。しばらく困ったように視線をうろつかせていたセシーヌは、やがて力強く微笑む。

「もちろんです。期待は裏切らないと誓います」

「ありがとう。……じゃあ、ここで起こったことは誰にも言わないで。絶対、誰にも」

強く念押しをしてから、再び少女に向き直る。何が起こるのか分からないといった風に、困惑と恐怖の色を浮かべる姿を見て、淡く微笑する。

「動かないでね」

そっと、己の喉に手を当てた。

風は吹き　水は流れ
花は咲き　雪は舞う

陽は沈み　また昇り
月は満ち　そして欠ける

息づく全ての森羅の中に
我らが生命（いのち）は静かに芽吹く

短く簡潔な、唄。決して大きく響くわけでもない、それこそセシーヌと少女にしか届かないような声量で紡がれた、簡素な旋律。
しかしたった二人だけの聴衆は、一瞬でその歌声に心を奪われた。目の前で歌う亜麻色の少女は、まるで人外の――天使と形容するに相応しい神々しさを纏う。けぶるような睫毛が縁取る双眸は、深い海の底を映しているかのようだ。

「良かった、治ったみたい」

いつの間にか唄は終わっていた。先程の歌声と同じ声が、ほっとしたように響くのを聞いて、少女は慌てて自分の手の甲を見る。
手の甲に、一直線に引かれていた朱色の痕が跡形もなく無くなってしまっている。そこを中心に疼いていた痛みも全くない。

「え？　……え？」

声を上げたのは、少女ではなくセシーヌだった。
一体、何が起きたのだろうか？
ルイリはぱっと顔を上げた。その瞳は、明るい翠緑になっている。
「セシーヌ、お願い。この事は誰にも言わないで。……特に、殿下には」
「はぁ、それは構いませんが……それがルイリ様の能力（ちから）なのですね？」
妙に納得した風情の声を、ルイリは無言の肯定で返す。なるほど、とセシーヌはうなずいた。
「かしこまりました。このことは決して他には口外いたしませんわ。……問題は」
傷を治された、当人だ。
しばらく信じられないように自分の手の甲を眺めていた小間使いは、はっと顔を上げた。
「わ、わたしも誰にも言いません。本当にありがとうございました、この御恩は一生忘れません！！」
とにかく言いたいことを一息に言って勢いよく頭を下げて、少女は慌てて身を翻した。先程姫君が消えていった桃香宮の内部へと。
「治してもらうだけ治してもらって、あれで終わりですか？　簡単に一生とか使うなんて……全く、薄っぺらいんだから」
「……治すと決めたのは私なんだけど」

「それでも、施された所業には相応の礼やお返しは必要ですよ。何より、こんな希少な能力を施してくださったのですから」
「……セシーヌって」
「何です？」
「……何でもない」

どうやらこの侍女は予想以上に図太く、適応能力が高いらしい。ルイリの能力をおぼろげながらも理解して、それを至極自然に会話に組み込んでくる。
何となく、性格がリーファに似ている……そう思った。

「ルイリ様にお仕えする前に、フィレル女官が言っていたことがよく分かりました。こういうことだったんですね」
「リーファさん、何か言っていたの？」
「『あなたを信頼しているから任せるわ』って」

その言葉を聞いて、ほんの少し胸が温かくなった。傍に居なくとも、リーファは自分のことを気遣ってくれている。自分の信頼する侍女を傍に置いてくれた。それだけで、嬉しい。

「私は元から能力を持っていないんですけど……それって便利の反面、厄介ですね？　悪用されないようにしないと」

ということは、私とフィレル女官がルイリ様を守る双璧というわけですね！　と何だか論点のずれている事を言っている。それでも、拳を握り締めて使命感に燃える侍女に思わず笑ってしまった。

「ふふ、ルイリ様はそうして笑っている方がいいですよ。せっかく綺麗なお顔をなさっているのですから」
「……セシーヌって、私をおだてるのが趣味なの？」

「心の底から言ったことをそう言われると、若干悲しくなります」

肩を竦めてそう言われて、また笑う。

庭園にはしばらく、二人の少女のひそやかな笑い声が響いていたが。

「あらあら、珍しい方もいらっしゃるのねぇ。そこにいるのはイアン様の新しい側室様ではございませんこと？」

優雅でいて、涼やかな声が響き渡った。

幾度か聞き覚えのある声に顔を上げると、後ろに何人かの側室を引き連れた姫君がが口元を扇で隠して微笑んでいた。光沢を放つ薄茶色の髪はこてで巻かれていて、薔薇のごとき桃色の唇と白磁の肌。紫水晶（アメジスト）をはめ込んだような瞳は自信と威厳に満ち溢れている。

微かに、ルイリは渋面を作る。この一週間、いやでも顔を見る、その姫君の名前は。

「……シンディ様」

シンディエラ＝アスター＝ヴィーケード。

イアンの側室の一人である、大国ヴィーケードの姫君。女性の美を全て実現したかのような美貌と豊満な体つきは、男であれば誰であろうと一度は夜を共に過ごしたいと思うのだろう。

とは言っても、ルイリは男ではないのでそこのところはよく分からない。しかし、同性の自分から見ても圧倒される美貌というのは

よく分かる。
シンディはくすくすと忍び笑いを漏らした。
「先程は、わたくしのお友達に随分なことをされたそうね？」
そう言われて後ろを改めて見れば、さっき少女に怒鳴り散らしていた側室の姫君がシンディの背後に隠れるようにして立っていた。ルイリを見る目は、ざまぁみろと言わんばかりに嘲りに満ちている。
（あ、なるほど……告げ口ね）
皇太子の側室で、しかも最も寵愛を受けていると評判のシンディは、後宮内でも勢力が広い。彼女は気に入らないものは徹底的に潰す性質なので、一度彼女に敵視されれば桃香宮では生きていけないとまで噂されるほどだ。先程の姫君は、シンディの取り巻きの一人だったらしい。
ということはつまり、ルイリはその噂をまさに再現されようとしているのではないか。もしかしなくとも、かなり危機的状況？
……こんな時にまで少し外れたことを考えてしまう自分が恨めしい。
「丁度いいわ、ルイリ嬢。皆に貴女を紹介して差し上げる」
艶然とした笑いで、美貌の姫はルイリを指し示す。全員の視線がルイリに集中した。それは、奇妙なものをみるような視線。無意識に身が竦みそうになる。
「皆様、彼女がイアン皇太子殿下の新しい御側室のルイリ＝レティ

シア嬢よ」
「？レティシア？？」

姫君の一人が、ルイリの姓を聞きとがめて首を傾げる。

「ねぇ、レティシアという貴族はどこかにいたかしら？」
「私も聞いたことがないわ。上流の流れを汲む家ではなさそうね」
「レティシア……どこだったかしら。確か、下流の方にそれを聞いたことがあるような気がするけれど」
「いやだ、それはレギシャ準男爵家のことではございませんの？」
「あら、そうだったかしら。シンディ姫、こちらのお方はどこの出身なの？」

言いたい放題言った後、姫君達は無邪気な視線を言い出し人のシンディに向けた。
ふふふ、とシンディは笑った。

「いいえ、ルイリ嬢はどこの貴族の出身でもありませんわよ？　殿下が魔獣の討伐先で見初めたとか」
「まぁあ」

一人の側室が、大袈裟すぎるほどの声で口に手を当てた。それは先程の姫君だ。他の姫もそれに倣う。

「驚いたわ！　あのイアン殿下が」
「えぇ、皇帝陛下であるならそれもうなずけるけれど」
「確かに、私達とは違いますわ」
「忙しい執務には、新鮮さも必要ですものねぇ」

口々に、小鳥が囀（さえず）るような会話を続ける女達に、シンディはさら

に毒を注ぎ込むように微笑んだ。

「あら、けれど……ルイリ嬢、貴女は殿下に？渡っていただいた？ことはあって？」

「え……、」

渡るという単語が一体何なのか、一瞬理解できなかった。セシーヌが背後で息を呑む気配が伝わる。

「その様子を見るに、まだのようですわねぇ。残念ね。殿下は、それはそれは情熱的な方でいらっしゃるのに」

愚弄と、嘲笑。

あれほどまで美麗な顔が、ルイリにはどうしてか歪んでいるようにしか見えなかった。

「けれどそれもそれで面白くてよ？　この後宮の中で純潔でいられる女なんて、本当に貴重ですもの」

「あらシンディ姫、それではルイリ嬢があまりにも不憫だわ」

「そうよ、きっと夢を見ているのよ。いつしか殿下が自分のもとに訪れてくれる……って」

「現実味のない夢ねぇ。結果はもう、この一週間の間に出ているのではなくて？」

身体が、震えてしまう。何も考えられない。

「――貴女、本当に殿下に望まれてここにいるの？」

姫君達の可憐な笑い声が、弾ける。

侮蔑に満ちた言葉が深々と心に突き刺さった。

望まれて……？

分からない。けれど彼は、私を庇護下に入れると言ってくれた。
それだけの、利用価値があると。

だが実際はどうだ？
この一週間、姿も見ない、顔も合わせない。本当にルイリに利用価値があるのなら、この一週間にいくらでもあったはずだ。ルイリの能力（ちから）は、セシーヌの言う通り希少なのだから。
けれどそんな呼び出しは一度もなく、ただ側室の勉強をして……。

だったら。

私はどうして、ここにいるの？

（あ……）

唐突に視界が揺れた。くらり、と眩暈がする。ルイリ様、というセシーヌの声が遠い。
そのまま芝の上に膝をついてしまう――その前に。

力強い何かが、ルイリの腕を掴んだ。

20．　注がれる悪意（後書き）

む、何だかいつもよりも長くなった気が。
と言いながら、少々加筆いたしました。

えーと、出したい人達出したんですが……なんか嫌われそうです（苦笑）
どうなんでしょうこういう人達？　ご感想いただけると嬉しいです。飛び跳ねます。

四月中に更新できるのはやはりあと一回でしょうか……。亀で本当に申し訳ありません！

ここまで読んでくださった方、新たにお気に入り登録までしてくださった方、本当にありがとうございます！！

21. 消えない罪業

桃香宮の最奥、『白百合の間』。

普段、皇族はおろか侍女も複数人ほどしか訪れないその場所へ向かって、イアンは滑るように歩いていた。

廊下を歩いている最中に、イアンの姿に気付いた幾人かの側室が甘く媚びるような声で言葉をかけたが、全くの無視。しかし彼女等からすれば、「その冷たい態度もたまらない」とか何だとかで、好感度が下落することはない。

「ある意味最も恐ろしいお方ですわね」と、昔リーファから言われたことがある。

美しい花々の咲き誇る庭園を通り抜け、殆どの者が足を踏み入れたことのない棟へと辿り着いた。

その中へ行き、ある一角の部屋の前で立ち止まる。扉の両脇に並んでいた護衛の兵士が、イアンの姿を認めた瞬間剣呑な目つきになる。様々な感情が混ざりすぎて、何とも形容しがたい。

しばらく真正面から睨み合っていた（第三者から見ればそうとしか思えない）両者は、やがて兵士の方が息をついて扉を開けた。

その向こうには、よく言って広い、悪く言って空虚な空間。

室内へ進もうと足を踏み入れたとき、ふとイアンの耳に息を潜めた話し声が滑り込む。

「何の目的があってここに来てんだ？」

「さぁな。罪悪感とか、後ろめたさとかじゃないか？」
「そんなのがあるかよ。一体どの面下げて来るんだか……」
「しっ、聞こえるぜ」

聞かせようとしているだけだろう。
唇の端で失笑を吐き捨て、それを黙殺する。

背後の扉が閉まるのを確認してから再度足を進めた。

†　†　†　†　†

壁に沿うように整然と並ぶ箪笥も、薄い天幕が囲む寝台も、その傍の小棚の上に置かれているティーカップすら、全てが一目で最上級の物と分かる。

しかしその高級な物品に埋もれることはなく……むしろ、それら全てを背景にしてしまうほどの存在感を放って、彼女は窓際のカウチに座っていた。イアンが入室したことで起きた扉の開閉の音……どころか、イアンがここへ来る音すらも聞こえていただろうに、彼女は窓の外に視線を向けたまま微動だにしない。

一つ息を吐いてから、イアンはカウチのすぐ傍まで歩み寄った。
視界に移るのは、人形のように精巧な横顔。

「お久しぶりでございます。……リオナ様」

その呼びかけに、初めて彼女は反応した。ずっと窓の向こうへと向いていた視線が、ゆっくりとイアンへと移る。

鴉の濡れ羽と形容するに相応しい、艶やかな漆黒の髪。どこか虚ろな瞳は、澄み切った冬空のような蒼。雪のような白い肌、鮮やかな赤の唇。自分の膝辺りで重ねられている手はあまりにも細い。

そして、震え上がるような清廉さと、匂い立つほどの色香を併せ持つ、絶世の美貌。

しばらくイアンを見つめていた蒼い双眸が和らぎ、大輪の花が咲き誇ったかのような笑みが広がる。

「あぁ――殿下。無事にお戻りになられたのね」

それは金糸雀（カナリア）の歌声のように美しく、誰もがいつまでも聞いていたいと切望するような声だった。しかし、イアンの表情は微かに翳る。

「良かった。ずっと、殿下がご無事でありますようにと、お祈りをしていた甲斐がありましたわ」

たおやかな腕がゆるりと動き、イアンの首へ回った。くっと力が込められたので、彼はさして抵抗もせずに引き寄せられる。その反応に満足したのか、彼女は満面の笑みを唇に浮かべた。ころころと笑う声は、さながら機嫌の良い猫のよう。

「殿下……ずっとずっと、待っておりましたのよ……」

改めて視線を合わせ、艶然と微笑む。うっとりと、陶酔したように。

そう、まるで夢を見ているかのように。

すっと、長い睫毛が動き、薔薇色の唇がそれを請うようにほんの少し開かれた。蒼い瞳が、白い繭玉のような瞼に隠される。

また、だ。

彼女が見ているのは、俺じゃない。彼女の言う『殿下』は、俺じゃない。

いくら目の前にイアンがいたとて、その目は彼を素通りし、その声は彼ではない他の誰かに向けられている。

むろん――その対象は分かっている。

魔法の時間もここまでだ。

イアンは、魔法（それ）を解く最大の言葉（じゅもん）を唇に乗せた。

「どうかご容赦を――リオナ義姉上。私は、貴女の夫ではない」

瞬間、彼女は弾かれたように瞳を開いた。イアンの首に腕を回した体勢はそのままで、しかし視線は先程の甘やかさとは打って変わった驚愕の視線で。

「……でん……か？」

「義姉上。義姉上の仰る『殿下』は、もうどこにもいらっしゃいません。……どこにも」

「……っ」

蒼い瞳が揺れた。細い身体は震えだして、そのまま両手を突き出し、イアンを渾身の力で突き飛ばした。

「あ……ぁ……、……っあぁぁぁぁあ！！」

がくがくと震える身体。しかし、イアンはそれを宥める術を持っていない。

否――そんなこと、許されない。

「何故!?　どうして……っ、殿下はどこ!?」

あれほど甘い声を囁いていた唇は、今や痛切な叫びしか紡がない。彷徨っていた視線は、遂にイアンをとらえた。彼の姿を視界におさめるや否や、苛烈な光が双眸に宿る。さながら、青い焔（ほむら）のごとく。

そこにはっきりと表れる怒り、

……憎悪。

「殿下を返してっ……返して！　――人殺し！！」

高い悲鳴は部屋中に響き渡り、やがて幾度かの反響を残して消えた。イアンは瞳を細め、口を開いた。

「どうぞ落ち着いてください、義姉上。そう叫んでいてはお身体にも障りましょう」

今までの殺伐とした空気が嘘のような、静謐（せいひつ）な空気が流れる。

しばらく立ち尽くしていた彼女は、憑き物が取れたような顔をし

て瞬きをした。そして、青ざめる。

「……、ぁ……イアン？」

「えぇ、仰る通りで」

いたって冷静に肯定をすれば、美しい面立ちは一気に引き攣った。

「あぁ……っ、ごめんなさい、ごめんなさい！　わたくしったら、何度この間違いを犯せば良いのかしら……！」

丹念に結い上げられたであろう黒髪を抱えて、彼女……リオナは、悔恨の念を押し出した。

そのまま床に座り込みそうになった身体を支え、落ち着かせるようにカウチへ誘導する。

「申し訳ありません……混乱させる心算（つもり）は、決して」

「いいえ、わたくしが謝るべきだわ。大事な義弟（おとうと）に、何てことを……」

「いえ」

言い募ろうとする声をきっぱりと遮って、イアンは感情の無い声を紡ぐ。

「義姉上の仰る通りです。……私は、人殺しだ」

痛いほどの静寂が流れる。著しく表情の欠落する義弟の顔を見て、リオナは痛ましげに顔を歪めた。「ごめんなさい」と、消え入るような声が沈黙を縫う。イアンは静かに首を振った。

「謝罪すべきは私の方でしょう。貴女から無二の存在を奪った挙句

……今も、貴女を利用している」
「……そういう風に思わないで」
「義姉上。私が貴女の部屋を訪れる理由が、分からないとは言いますまい」

そう問えば、見目麗しい美姫は表情を暗くする。その姿は手折られる寸前の花のようで、万人が見るだけで庇護欲をそそられる。

此処に来れば。
自分の犯した罪を、忘れないで済むから。

いくら思い上がっていようと、それはこの場では霧散する。皇太子という地位など関係ない。ただの罪深い人間となる。消えない罪の烙印を思い出すため、ただそれだけのために、イアンは此処へと赴く。

黙していたイアンの肩に、白い手がそっと添えられた。清楚な、甘い花の香りが漂う。

「イアン。貴方が気に病むことなんて、一つもないわ。全てはわたくしの所為。わたくしが、あの時……、」

そこまで言って、ふとリオナは言葉を途切らせた。ぱちぱちと瞬きをして、ふと首を窓の向こうへめぐらせる。

「義姉上？」
「……唄？」

ぽつりと呟かれた言葉に、イアンは初めて顔色を変えた。

歌――唄、だと。

リオナは特殊な【耳】を持つ。徒人よりも鋭敏な聴覚を持ち、その能力は本気を出せば遥か遠くの大国にまで及ぶという。

普段から能力を抑えてはいるものの、それでも範囲は桃香宮を覆うほど。逐一それに耳を傾けていては、心身ともに疲弊してしまう。

この部屋を囲む四方の壁は、音を極力遮断する素材で作られている。隔離の理由もあって、リオナは白百合の間にいるのだ。

だが、その壁をも通り抜けて聞こえてきた唄がある。

「……あぁ、終わってしまったわ」

そう呟いたのは、すぐのこと。仄かに残念そうな表情を滲ませて、リオナは息をつく。

「不思議な歌声……。何だか心が洗われていくようだった」

独白のように零れるその言葉を聞きながら、気付かれない程度に舌打ちをした。

「申し訳ございません、義姉上。急用ができましたのでこれで」

端的に告げてから、リオナがその真意を問う隙も与えずに退室した。

棟を出て、行く時よりも足早に歩く。端から見れば、ほぼ小走りの域に達しているほど。

確証はない。
桃香宮は女の溢れる宮殿、どこかの姫君が嗜みで歌っていたとしても疑問は無い。
しかし、リオナの【耳】にまで届き、そして彼女にあれほど言わしめる歌声。

イアンの中で、それは一つしか当てはまらなかった。

何故か足は迷わなかった。宮殿内ではなく、庭に足が進む。迷路のように入り組む小道を歩けば、高い声が話し合う音が聞こえた。
それをたよりに歩く。やがて小道は終わりを告げ、広い庭園に出た。

視界の開けた先には、豪奢なドレスで着飾った、自分の側室をはじめとした姫君達。
そして一人の侍女を従えてそれと対峙しているのは――一週間ぶりに見る、亜麻色の髪。

先頭にいる姫君が口元を扇で覆い隠し、優雅に微笑んで何事かを呟いた。瞬間、女達の間で笑いが弾ける。細い背中が大きく震えた。
そのまま、ふらりとよろめく。侍女が気色ばんだ声を上げる。

身体が、動いた。

侍女が支える暇もなく揺らいだ、その腕を掴む。
女達の笑いがぴたりとやみ、傍に付いていた侍女は呆気にとられた顔で自分を見ていた。
ゆっくりと、亜麻色の髪が動き。少しずつ、その顔が上を向いて。

「……殿下？」

久方ぶりに見る碧の瞳が、自分をとらえた。

21．　消えない罪業（後書き）

ようやっと大体の人物が出揃った感じでございます。
思えば17～21にかけて……何人出たのでしょうか。
……五、六人ですかね？　覚えられなくなりそうです怖い。

奏鳴曲（ソナタ）はあと一、二話ほどだと思います。
主要二人が絡むのって何話ぶり？　数えるのが怖いです……。
あぁ、早く書きたいんですが、とても遅筆なので、きっと早く更新できません。
それでも見捨てずに見てくだされば嬉しいです！

ここまで読んでくださった方、また新たにお気に入り登録してくださった方に心からの感謝を！！

22．　怒りの理由、牽制（前書き）

牽制（けんせい）と読みます。

22. 怒りの理由、牽制

一週間ぶり、という感慨なんか、もちろんない。

何故彼がここにいるのか。それが、率直な思い。

見上げるほどの長身と金髪、鮮烈な紅の瞳。決して表情の浮かばない硬質な美貌……のはずなのだが、どういうわけか今回の彼の表情は非常に厳しい。

見間違えるはずの無いその姿がなぜ、目の前に。というより、何故自分の腕を掴んでいるのだ。

「イ、イアン殿下……」

先程まで高笑いしていたシンディの声は、萎縮したように震えている。

彼は黙然と姫君達の方へと視線を流した。端整な顔立ちを向けられたことにより、彼女等の殆どは頬を赤らめる。しかし、辺りに満ちるのは、息をするのも億劫なほど張り詰めた空気。半数以上は、すぐに青ざめた。

未だ混乱の抜け切らないルイリは状況把握に困っていた。

だがそんな心情などお構いなしに、彼はルイリに一瞥を投げかける。何も言っていないが、その視線が責めていることは明らかだった。

「……来い」

言われるや否や。
ルイリの意志とは全く関係なしに、彼は抗いを許さない力で腕を引いた。思わずつんのめって転びそうになるのを、あってないようなぎりぎりの自尊心（プライド）で踏みとどまる。
セシーヌが慌てて後を追おうとするも、彼は鋭い睨みを向け、

「お前は来なくていい」

と、のたまった。侍女の足はその一言だけで、地面に縫い付けられたかのように微動だにしなくなる。身を寄せ合って縮こまる姫君達、呆然と立ち尽くす侍女一人を残して、彼はまるで嵐のようにその場を去った。

道連れに、ルイリを伴って。

†　†　†　†　†

「殿下、あの」
「……」
「は、放していただけませんでしょうか」
「……」
「他の方々が、不審に思うでしょうし」

「……」

「……聞いておりますか？」

一体どこに向かっているのだろう。聞きたくてたまらないが、何も言うなと言わんばかりの背中に口を開くことが出来ない。

「……お怒りの理由は何でしょうか」

別の事を恐る恐る聞いてみれば、空恐ろしいほどの睨みが全身を射すくめた。視線が具現化していたら、今ルイリは間違いなく八つ裂きになっていたはずだ。

震え上がる暇もない。自分の意志は無視されて、しかし腕を引かれているので足を動かすほかはない。ルイリの頭一つ以上背の高い彼は、当然脚も長い。彼の一歩とルイリの一歩は大幅に違うので、必然的に小走りになる。

いつも耳が痛くなる程言われる歩き方の作法など、ルイリには気にする余裕もなかった。ここに作法の教師がいれば顔を真っ赤にしていたことだろう。

何度もこけてしまいそうになる足を立て直して、必死に彼の歩速について行って、それでも転びそうになって――その循環が何回も繰り返され。

「きゃ……っ」

突然彼の脚が止まったので、ルイリは勢い余って目の前の背中にぶつかってしまった。つまり、イアンの背中にである。

「も、申し訳ありませ……っ」

謝罪の言葉は、またも遮られた。彼の身体が邪魔して見えないが、ガチャリという音がしたのでどこかの部屋の前にいたことを知る。そのまま強引に引きずられ、ようやく手首を解放されて気を緩めていると、頭上にふっと影が落ちた。

「……俺は、何と言った」

これほどまで低い声をルイリは聞いた事がなかった。しかも機械のように抑揚がなく、震え上がる材料としては充分である。

全くもってご立腹の原因が思い当たらないルイリは、震える声を絞り出した。

「……と、言いますと……」

「忘れた、と？　存外お前の頭の中は空だったようだ」

遠回しな皮肉もない、直接的な嫌味。ぞっとするほど単調な声に、思わず喉が凍りつく。

彼の顔を直視できずに、少しだけ顔をずらす。そこでようやく、ここがどこなのか悟った。

自室だ。

（な、何で殿下が私の部屋を知ってるの？）

混乱する頭が真っ先に考え付いたのはそれだが、よく考えれば自分はイアンの側室。彼が自分の部屋の場所を把握していたとて別に疑問ではない。

一度も、此処に訪れたことがなかったとしても。

「……何故唄った」

「は……い？」
「何故唄ったのかと、聞いている」
愕然とした。どうしてその事を知っているのだろう？
驚愕の表情から内側の心情を読み取ったのか、はっという薄い笑いが降ってきた。
「俺をはじめとして、お前以外にも数々の異能者がいるということが分かっていないらしい」
「……仰っている意味が、よく」
「お前の唄を聴いた者がいた。通常の人間よりも【耳】が利く異能者が」
「そ……、」
あの唄を、誰かが聞いていた？　あんなに小さな声量で唄ったのに。
それでも、その異能者の耳には届いてしまっていたらしい。そしてその人の傍に彼がいた。故に、彼が庭園まで来た。
「幸いその異能者はお前の能力（ちから）を利用するような者ではない。……だが」
きらりと、紅が冷たく光った。
「もしそれを聴き、お前を利用しようとする者であったとしたらどうするつもりだ」
「け、けれど……っ」
「けれど？　お前に弁明する余地でもあるのか」
ひどく淡白で、ともすれば関心すらなさげな調子で彼は言う。

「セシーヌは、黙っていると言ってくれました。それにあの子だって……、あの二人が、言い触らすはずがありません」
「口約が絶対とは限らない。他にどのような異能者がいるかも分からないこの宮殿で、随分な危険を冒してくれる」
嘲笑う声は、いつか聞いた声と同じで乾いている。そこで初めて彼の顔を見上げれば――驚くほどに、無表情だった。この無表情のまま嘲りの声を出したり怒りの声を出したりしていたのか。少し感心してしまうルイリである。
しかし次の瞬間、その尊敬に似た感覚は吹き飛ぶ。
「俺の許可も無しに、能力を使うな」
「きょ、……許可って……っ」
ぷつん。
と、ルイリの中の何かが切れた。それは初めてのような感覚でもあり、実に久方ぶりのような感覚でもあった。
「殿下の許可が無ければ、私は自分の能力すらも使ってはいけないのですか……!?」
その言葉に、彼は意表を突かれたようだった。いやむしろ、何を当然のことをと言わんばかりの表情を浮かべる。
「俺の側室になるとはそういうことだ。はじめに言ったはずだろう」
「けれど、そんな」
「そもそも、極力俺に迷惑をかけないと言ったのはお前だ。早速口約を破ってくれたようだが」

「っ……」

分かっている。

ルイリの言っている事は、全て感情論に流されているものだという事くらい。どう贔屓目に見ても、イアンの方が理にかなっているし、正論だ。ルイリに非がある事は明らかである。

「俺がそんな簡単に、お前に能力を使えと請うとでも思ったか。お前のような能力は前例がない。どのような状況で、いつ使うか、頭を整理して考えなければ取り返しのつかなくなることすら分からなかったとは、とんだ期待外れだ」

「……」

「所構わず能力の威力を示したことで事態が好転するはずがないだろう。言っておくが、俺は最大限譲歩してやっていた。お前を側室にすることで皇太子の庇護下に入れたやり、あのまま屋敷に囲っておく方と此方に来る方とを選ばせてもやった。その俺に、意見するとでも？」

冷静かつ冷淡な指摘に、熱くなりかけていたルイリは気力をなくしてしまった。

「全く……口止めをする人間が二人も増えてしまったとはな」

愚痴のようにこぼれたその台詞に、ルイリは蒼白になった。二人……セシーヌと、あの小間使いの少女のことだ。

「ふ、二人には絶対に手を出さないで下さい！　全て私が悪いんです。何か弊害が起こってしまった時は私が責任を取ります、だからどうか……！」

そうだ、また巻き込んでしまったのだ。ルイリがあの場で大人しくしていれば、唄わずにいれば、彼女等はこの秘密を知ることはなかったのに。

だがルイリの勝手な一存で、彼女の傷を治した。冷静になって考えてみれば、十人中十人が非難するに違いない。掠り傷程度に、一体何を急いていたのか――と。

思い上がっていただけだ。

他人にはできないことを出来る己に、陶酔していただけ。

「……責任は、全て自分が取ると？」

確認のように落とされた声に、ルイリは必死で首を縦に振った。

「そうか。なら」

瞬間、足場が浮いた。

え？　と思う間もなく、視界が反転して、背中に柔らかい衝撃を受けた。目の前に広がっているのは見慣れた天蓋。かと思えば、無を浮かべた端整な顔が視界を占める。

「なっ、え……！？」

事実を認めたくない。しかし認めざるを得ない。

今ルイリの身体は寝台（ベッド）に横たえられていて、その上にはイアンが覆いかぶさるような体勢で乗っかっている――というこの事実。

びっくりして起き上がろうとした身体は、それ以上の力を以って抑えつけられる。

「望みどおり、責任を取らせてやろう」

「は、――はい？！」

そう言いながら目の前の彼は、己の襟元をくつろげる。そこから露になった首筋から鎖骨にかけた艶めかしさに、思わず赤面してしまう。

が、そんな呑気なことをしている場合ではない。

「お、お待ち下さい殿下！　何か、弊害があった時にと、言ったはずです！」

「後宮入りしてからたった一週間で後先考えずに能力（ちから）を使い、俺の期待を裏切った罰だ」

（何それっ！？）

どう考えてもそんなのどこかの餓鬼大将みたいな考え方じゃないか。つまり腹いせに相違ない。

彼の指先が伸びて、シーツに散る亜麻色の髪を一房絡めた。どくん、と鼓動が高鳴る。同時に、背筋が凍りついた。一体何が起こるのか、具体的に分かるわけではない。しかしこの状況下でそれを察することが出来ないほど、ルイリも鈍くない。

どうにかして逃げなければ。本能から突き出された両腕は、……頭上で一つに纏め上げられた。

「や、あの……っ、待って！」

「待ってどうする。俺は今非常に機嫌が悪い。……責任を取るんだろう？」

耳元に吹き込まれた低い声に全身が震えた。

これが、シンディの言っていた?渡り?というものなのだろうか?
だとしたら何て、何て恐ろしいのか。

当然だが、経験したこともないルイリには対処法が全く分からない。無駄に等しい抵抗を続けている中で、ふうっと首筋が寒くなった。そして、冷えた指先が触れる。

「ッッ!!」

戦慄。
知らない。こんなこと、知らない。

冷たい紅の瞳が、どこか熱を孕んだように細められた。それは今まで一度も見たことない表情(いろ)。

長い親指が、ルイリの桜色の唇をなぞった。ぎゅっと目を瞑る。

嫌だ。
助けて。
誰か。
誰か誰か誰か誰か――――――

「……ヴィン……っ!!」

無意識に唇から零れ出たその言葉に、指がぴたりと止まった。

しばらく流れる沈黙に、ルイリは恐る恐る目を開く。彼は変わら

ずにそこにいた。
しかし、その瞳に宿っているのは純粋な驚愕だった。極限まで見開かれた紅い双眸がゆっくりと瞬きをして、薄い唇から掠れた吐息が漏れる。
「、……」
微かな呼吸音が支配する中で、唐突に乾いた笑みが空気を震わせた。
「大人しそうな顔に似合わず、強(したた)かな女だな。一週間足らずで手篭めにしたか」
「いえ、今のは……」
そういう対象の名前ではない、と断言しようとした自分に疑問を覚える。どうしてそういうことが言えるのだろう？
今ルイリが零した名前は、自身に全く心当たりの無い名。それどころか、今のルイリは先程自分が何という名前を紡いだのかさえ覚えていない。
「いいだろう、今回は許してやる。……他の男の女(もの)に手を出す趣味は無い」
「ち、が……っ、誤解です！」
必死で言い募ろうとするルイリの上から退き、彼は冷めた視線を向けた。
そこに含まれるのは、軽蔑と――何だろう？　怒りともつかない、憎しみともつかない、しかしとても酷似したもの。
そして――はだけた襟元から覗く鎖骨の辺りに浮かぶ、変色した……

ルイリがはっと目を瞠った瞬間、彼は徐に顔を逸らし、靴音も高く部屋を去って行った。

部屋には、呆然としたルイリだけが残される。

「な……に？」

また、あの目だ。

冷たい氷の奥底にひそむ、とても哀しい色。

残酷で冷徹で、震え上がるほど恐ろしい所業をしようとしていた青年が、なんであんな表情を宿しているのだろうか。

冷酷な――だけでは、ないのだろう。

それを裏付けるように、ルイリは何度も彼の別の表情を垣間見たのだから。

†　†　†　†　†

その後すぐに、セシーヌと、久しぶりに会うリーファが血相を変えて部屋に飛び込んできた。

とにかく慌ててルイリの無事を確認する侍女達に大丈夫だからと返したが、それでも納得のいかないようである二人は、「禊(みそぎ)を！」だとか「清めないと！！」だとか叫んでいた。中々説き伏せるのは骨が折れたが、結局徹底的に無事である事を確認されてから許された。

大丈夫だという太鼓判が押されたルイリに、リーファは全身の力が抜けたかのように足元に跪いた。

「あぁ、本当にようございました！　殿下がルイリ様の部屋から出て来た時は心臓が止まるかと思いましたわ。呼び止めても当然のように無視でしたから」

「すいません……心配かけました」

「いいえいいえ、ルイリ様がご無事であられて何よりでございます。セシーヌから事情は聞きましたわ。どうぞご安心になって。これからは、殿下であろうと貴女に危害は及ぼさないようにいたしますゆえ」

意気込む元筆頭女官に、ルイリは安堵した。

きっと彼のことだから、また気まぐれにあんなことをしてくるかもしれない。それは非常に困る。

しかし守られてばかりではいられないだろう。自分の身は自分で守るしかない。

そう、自分で。

「……」

最後の瞬間に垣間見た、彼の肌の色。いや正確には、肌の上に刻まれたもの。

もし見間違いでないとしたら。

あたふたと身の回りを整えてくれている侍女を見ながら、ルイリはそうっと自分の唇に指をなぞらせた。

既に何の感触も残っていない唇（そこ）は、とても、熱いような気がして。

瞼を閉じて浮かぶのは酷薄な笑みではなく、何かを堪えるような苦い表情だった。

22．　怒りの理由、牽制（後書き）

何で暴走するの……？　と切実に聞きたいです。しかし、結局ストップということで。

矛盾しまくりの二人なので、前途多難で気が遠くなりそうです。

ぼーっとする頭で打ったので、繋がってない部分が多いと思います。

後で改稿します。

奏鳴曲（ソナタ）はあと二つほどで終了の予定です～。

恐らく次回、Ｒ１５に引っかかりそう、です……。

もしその時にはちゃんと前書きに注意を喚起する文章を書いておきますゆえ～。

では、ここまで読んで下さってありがとうございました！

23．　それぞれの夜　―苛立ち―（前書き）

一応Ｒ１５指定はしているので、大丈夫とは思いますが……
なんとなーく、それっぽいところはあり、ます。かすってもいないかもしれません。
それから少々残酷表現がございますので、苦手なお方はご注意をば。

23．　それぞれの夜　―苛立ち―

腹立たしい。

何がと聞かれれば、何もかもがとしか答えようがない。

白い肌を上気させながら寝台に横たわる女に背を向けて、イアンは寝台の淵に腰掛けた。脱ぎ捨てられた衣服が無事であることを確認して、それを羽織る。

乱れた金髪を適当に直しながら、情事の後とは思えないほど冷めた表情で立ち上がろうとした。

が。

「殿下……もうお行きになるのですか？」

甘ったれた、鼻に突くような声が背後で聞こえる。それに反応しないままでいると、細い腕がするりとイアンに絡む。背中から彼を羽交い絞めにするようになされたそれは、振り払おうと思えば簡単だが、事後処理が面倒くさい。

薄茶色の毛先が手に当たる。彼に縋りつくその姿は、遠目から見ればさぞや切ない光景であろう。

「もう少し、此処に居てくださってもよろしいではありませんか。

わたくしは一度も貴方と朝を迎えたことがありませんもの……」

寂しげな、ともすれば涙すらも混じりそうな声。イアンは見えないことを承知の上で嘲笑を浮かべた。

媚びた声音を使えば男が手に入るとでも思っているのか。だとすれば、相当の馬鹿だが。

「申し訳ないが……。シンディ姫、まだ紫芳宮に執務を残している」

「まぁ。わたくしよりも優先するものですの？」

しっとりと汗ばんだ身体を恥ずかしげもなく押し付けながら、大国の美姫は機嫌を損ねたように眉をひそめた。

「まさか。……貴女が此処で快適に過ごせるようにと思えばこそ、断腸の思いで行くまでのこと」

「お上手ですのね」

赤い唇が三日月形に弧を描く。それは誰から見ても扇情的な微笑。

「良かった……わたくし、殿下のご機嫌を損ねてしまったのかと思って、不安でしたのよ」

「どういうことだろうか」

「今日の昼間、怖い顔をなさっていましたでしょう？」

それを引き合いに出すか、と舌打ちしたくなる。

しかしイアンの不穏な表情には気付かず、シンディはそのまま切なげに言葉を続けた。

「ほんの少し、新しい側室様をからかっただけでしたの……。誤解をさせてしまったようですし、今度改めて謝りますわ」

心にも無い予定を聞くのは趣味ではない。
イアンは軽く息をつき、身体に回るしなやかな腕をそっとほどいた。艶めかしい肢体を晒した姫君は名残惜しそうに口を開く。

「あぁ、殿下……また来てくださいますか？」
「愚問だな。自信がないとでも？」
「いいえ、まさか。けれど……よろしければ、そのお約束を」

艶然と微笑む女の顎を捕らえ、そのまま彼女の唇と自分のそれを合わせる。シンディは満足気にイアンの首に腕を回して、繋がりを更に深くへと求めた。適当にそれに受け答え、行為の後でまだ敏感な女の肌に指を滑らせてやれば、喉の奥から嬌声が漏れた。

「では……また。シンディ姫」

相手の全身が脱力するのを見届けてから、イアンは静かに退室した。

†　†　†　†　†

長い回廊に規則的にはめ込まれた窓から、月が光を注ぐ。夜中だ

と言うのに、その光は太陽のように煌めいていた。

紅煌宮は紫芳宮と桃香宮とに直接通じている。桃香宮から紅煌宮へと繋がる廊下を歩く皇太子の端整な横顔を、月光が照らし出した。

なぜこれほどにも感情が乱れているのか、自分でも未だに整理がついていない。それに更に苛立ち、気まぐれに桃香宮へ足を運んで憂さを晴らした。

否、晴らしたつもりだった。

女の内面に興味は無いが、柔らかい器は必要だ。魔獣を討伐した時しかり、腹が立った時しかり。ただその時に抱いて、熱を冷ませばいい。

事実イアンはそれまでそうしてきて、幾度となくその方法で己を鎮めることができると知っていた。甘ったれた嬌声は耳障りではあるものの、熱を吐き出す場所としてこれほど適任なものもない。激情をぶつけてしまえば、苛立ちは晴れる。

そうであったはずなのだが。

「……」

浅い舌打ちは、それでも閑散とした廊下には遠くまで響いた。

一体どうしたことか。女の身体を抱きしめても、胸の内に燻る何かは痞えているままだ。最近、このようなことが多い気がしてならない。常に理性は冷静であろうとするのに、ふとした時に苛立っている時がある。

そう、例えば――あの少女を見れば。
シーツに散る亜麻色の髪と怯えた碧の瞳を思い出して、険しく紅を細めた。

……どうしようもないほど弱い。
側室達のたったあれだけの悪意に蒼白になって、倒れそうにすらなって。いざ考えの浅さを責めれば、許可がなければ使えないのかと逆上する。少し標的をずらせば、自分が全て悪かったのだと縋りつく。
一体自分は、彼女をどうしたかったのかはよく分からない。しかし彼女の言動に腹が立ったのは事実だ。
少し乾いた唇が、紡いだその言葉に。

――ヴィン……っ！！

「……、」

ふと立ち止まる。目前に人の影はない。音無き音が耳を支配して、痛いほどの静寂の満ちる廊下。

だが。

「遅い」

背後に迫ろうとしていた気配を鋭敏に感じ取り、イアンはその場から動かずに、しかし【気】を操作した。彼めがけて振り下ろそうとしていた短刀が、カランと床に落ちる。そして、相手の首の辺りに【気】を収束させて締め上げた。

「う、ぐ……っ！」

苦しげにうめく声を確認しながら振り返れば、無礼者が一人。数日前の刺客と同じ、漆黒の衣服に身を包んでいる。

「いい加減、諦めたらどうなんだ」

冷たく言えば、憎悪に満ちた視線が澱んだ瞳の奥から放たれた。それは威圧感をかもし出すには程遠く、むしろそれ以上の冷徹さを以ってしてイアンは視線を返した。

睨めば怯むとでも思っているのだろうか。残念ながら大幅な見当違いである。というか、イアンの場合首元に刃を突きつけられても眉一つひそめやしない。

「無駄だとは思うが、聞かせてもらおうか。……誰の差し金だ？」

静かに問うと、乾いた笑みが返ってきた。

「偽りの、皇太子……。貴様を、認め、など……誰がするものか」

「質問に答えろ。誰の差し金だ」

畳み掛ける問いにも、影は狂ったような笑いを浮かべるだけだ。

「皇太子の、……仮面を、つけた、……血濡れの罪人……！　お前の両手にあるのは、全て幻」

ごきり。

そんな耳障りな音と共に、影の首が不自然な方向に折れ曲がった。刺客は目を見開いたまま、絶命する。

すっと力を解けば、イアンよりも遥かに逞しくがっちりとした身

体はどうと音を立てて廊下に倒れた。その全てを凍てついた瞳で静観していたイアンは、ふと後ろに忍び寄った気配に視線を向ける。

「おっと、猟奇的殺人現場目撃」

おどけたようにそう言ってみせるのは、イアンの懐刀。

彼の足元に倒れた姿の前で膝をつき、未だ目を開いているその顔をしげしげと眺める。

「うわ、これ軍の中堅じゃん。なかなか言い訳が厄介だなー」

「手を出したのは向こうだ」

「それは当然だろうけど。ま、血を散らしてないんだったら処理しやすい」

そう言いながら、褐色の青年――レンは、静かに右手を上げた。

次の瞬間、どこから現れたのか、複数の人影が出現する。

皇太子直轄の暗部の者達だ。

「いつも通りでいい。とりあえず、これを外に運び出して人目のつかないところで処理。そんで……あぁ、死亡情報は適当でいいや。よろしく」

人影は無言のまま了承を示し、完全に呼吸を止めている大男を担いで足音もなく姿を消した。

「やれやれ。こうやって向かってくるみそっかすをいちいち潰すよりも、いっそのこと頭潰したほうがいいんじゃないか？」

「反旗を翻して挙兵か？　どれだけの費用がかかると思っている」

「いや、いっそ金銭のことは抜きにして……。……何苛立ってんだ？」

静かな口調の中に何を感じ取ったのか、レンは意外そうに瞬きをした。

「……別に」

「いーや絶対イラついてるだろ。【気】が荒すぎるんだよ。殺り方も雑すぎるし」

軽薄な口調の奥に鋭い見立てを感じ取り、イアンはうんざりした様子で金髪をかきあげた。どうしてこう自分は、廊下の真ん中で面倒くさい話題を展開されるのだろう。

「苛立っていれば、何か悪いか」

「別に俺には支障はねぇけど。でもお前にとっては致命的なんじゃねぇの？　大敵なんだろ、そういうの」

しれっと返された台詞に、黙する。

レンという男は一見して軽薄でだらしがない。しかし仕事には余念がなく、完璧にこなす。しかもこういう鋭さもある。だからこそ側近として傍に置いているのだが。

「この二週間もないくらいだろ、その苛々。で、このところの事態の変動でお前が苛々する事といえば。……ははーん、ルイリ嬢か」

ずばり核心を言い当てられて、イアンは思わずレンを睨んだ。震え上がるような睨みを受けたレンは軽く肩を竦めただけだ。

「図星って感じだな。ふぅん、冷血漢の皇太子殿下が清廉潔白な側室少女に心傾く……。これはこれで、戯曲にしたらいいのできるんじゃないか？」

「……殺されたいのか？」

それはからかいなんかではなく、本気の殺意から紡がれた台詞だった。辛うじて苛立ちの表情が残っていた瞳からは感情が抜け落ち、無機質な彫像が出来上がる。彼は本気で怒ったとき、表情を失くすのだ。

すぐにそれを察知したレンは慌てて諸手を挙げた。

「冗談だって。ていうか、これくらいで本気で切れるなよ」

何だか機嫌の悪い馬でも相手をしているような気分だ。無論、目の前の男は馬なんかよりも何百倍も性質が悪い。

「あーもう。今夜は厄日か？　機嫌の悪いお前に会うし、リーファからは殴られるし」

愚痴の中に飛び出した侍女の名前に、少しだけ視線を向ける。それが興味を示した反応と受け取ったのか、レンは肩を竦めて話し出した。

「いやな、ここに来る前にあったんだよ。桃香宮の警備交替で。普通に声かけただけなのにさ、いきなり睨んできて……」

そして綺麗に、鳩尾に一発。

実に清々しい笑顔だが、その裏は実に痛々しい。

「適度に手加減はされてたけどな。でも恐ろしく急所を突いてくるし怖いの何の。あいつ絶対暗殺者に向いてるぜ？」

わざとらしく身震いする側近を、イアンは静かに見た。
昼間、側室（ルイリ）の部屋から出て来た時に血相を変えて駈け寄ってきた侍女。何か問い詰めていたような気もするが面倒だったのでその場に捨て置いた。
恐らく、それが苛立ちとなって積み重なり、発散がレンへと向いたのだろう。八つ当たりだ。
原因は間違いなくイアンなのだが、残念ながら彼は罪悪感どころか同情とすら縁が無かった。という訳で、レンに対する後ろめたさなど皆無である。

そこでレンは気を逸らすように、「しかし」と話題を転換した。
「確かにルイリ嬢は興味深くはあるよな。侍女を除けば、後宮の中で純潔なんて彼女くらい……」
「違う」
「へ？」

間抜けな返答を返す側近を、イアンは冷たく見返した。そこには先程の空恐ろしい威圧感はない。
「あれは早速男を作ったようだ」
「へ？　いや、へぇ……いやいや、えぇ？」

言葉の意味が飲み込めないのか、レンはひたすら瞬きを繰り返している。その反応に苛立ったのか、それとも自身の言動に苛立ったのかは知らないが、イアンは意図せず唇を歪める。
「とんだ女狐だ。大人しそうな外見でいつの間にか籠絡しているのだから」
「それ、本当だったら俺の人生の驚き上位五指に入る」

「事実に相違ない。……俺が確認した」
「へぇ、あのルイリ嬢がねぇ。でも俺には、あれが演技とはとても思えないんだがなぁ」
「男を作ったということが何よりの裏づけだろう。所詮、あれも他の側室（おんな）と一緒だった。それだけだ」
ちりっと神経が焼かれるような錯覚をもよおした。自分で言う言葉に、どうしてこれほど苛立ちが募るのか。
「……お前は何の用だ」
「え？　あぁ」
だいぶ話が脱線してしまった上に衝撃的事実を教えられたので、本来の目的を思い出すのに多少の時間を要したようだ。
「魔物討伐の伝達が来た。出発は明日の夕方、場所はレンザス。部隊の人選は俺が適当に選んどくけど、いいか？」
「構わん、好きにしろ」
「今回は手強いらしいから警戒して……っつっても、怪我しても大丈夫か、お前の場合」
イアンは肯定もしなければ否定もしなかった。レンの言っていることは、唯一治癒の能力（ちから）を持つあの少女の事だ。
「じゃあそういうわけだから。気をつけて戻れよ」
褐色の側近はそう言ってひらりと手を振り、桃香宮の方向へと姿を消した。廊下に一人残されたイアンは、すぐに紅煌宮の方向へ歩き出す。

今日の昼間から、どす黒い何かが心中にとぐろを巻いている。不快感を引き起こす。それを打ち払いたくて女を抱けど、効果は無い。それが一層苛立つ。完璧な悪循環だ。

あのまま、壊してやればよかったのかもしれない。

他の男の名を呟いていたから何だと言うのだ。そんなものに耳は貸さずに、言葉通り責任を取らせてやればよかった。白い肌を、赤い唇を蹂躙してやれば。

しかしどうしてか、イアンは躊躇った。揺れる翡翠の双眸に、小刻みに震える細い身体に。

とっくに純潔を失った身体ならば、抱くことは容易なはずであったのに。

あぁ、全て腹立たしい。思い通りにならない全ての事が。

――怪我しても大丈夫か、お前の場合

おどけたようにそう言った、レン。イアンは口元だけで笑った。冗談じゃない。男に媚を売る声と同じ声で癒される傷など忌まわしいだけだ。それは本能が拒絶する。

気が変わった。

利用などしてやらない。その価値もない。

壊れるのを見届けてもやらない。崩壊するのを傍で見ていてもやらない。

ただその場に放っておく。

気が向けば慰みものにしてやるのも見せしめとしてはいいかもしれない。

どちらにせよ、あの少女はもう用済みだ。

新たな考えを打ち出した青年は、自分が一層どす黒い感情に渦巻かれていくことを気付きもせず、月光が照らし出す回廊を歩いていったのだった。

23．　それぞれの夜　―苛立ち―（後書き）

お、お疲れ様でございます！　ここまで読んで下さってありがとうございます！！

もう何だか色々叫びだしたい出来です。

話ごとにヤツのキャラが変わってないか！？　と思うのです。

うー……。ほとんどの話に改稿したい部分が散在していて……。

さて、この後すぐにもう一つ更新するのですが、実はこれとくっつけるつもりでした。

しかしあまりにも趣旨やら雰囲気が違ったので分けました。

24.　それぞれの夜　―ようやく―（前書き）

本文、余白が多いくせに短いです。

24．　それぞれの夜　―ようやく―

今回は、今まで以上に足場が不安定だった。

上下の判断もあやふやになってしまいそうな時、唐突に――ふわりと、何かに包み込まれた。

「？　？？」

一体なんだろう。

そう思ったルイリの耳に、温かな吐息がかかる。

『あぁ、良かった。ルゥが無事で』

万感の息と共に呟かれた声は……まぎれもなく、ずっと聞きたかった声。自然と唇が笑みを刻んだ。

「心配してくれていたの？　ありがとう」

『礼を言われる謂れはないがね。しかし、受け取っておこう』

どこまでも優しい声。心が温かくなって、ここのところ忙しかったことすら忘れてしまいそうだ。

『さて、今回も……いいかな？』

それが何を言っているのか、ルイリは正確に理解する。そして笑顔で頷いた。

頷いた直後、額に何かがこつんと当たり、何らかが引き出されていく感覚。たった二回目のはずなのに、ルイリはそれが無性に嬉しかった。

自分の記憶を共有することができる。何と嬉しいことだろう。じんわりと全身が温かくなる。

『……』

しばらく額が合わさったままで、しかもかなり重苦しい沈黙が流れた。軽く首を傾げる。

「どうか、した……」

『……貞操の危機か』

ぼそりと呟かれた言葉に仰天する。

「て、てい……！？」

『こちらの手が及ばないと思って調子に乗って……』

「ちょ、ちょっと待って。大丈夫、大丈夫だから。何にもされてないから」

あれ？　とルイリは再度首を傾げた。

じゃあ先程、無事でよかったと言っていたのは一体何のことだろうか。それに……こうやって必死で宥める行為に、覚えがあるようなないような。

ぱちくりと瞬きを繰り返すルイリの頭を、優しく大きい手がふわりと撫でた。

『済まない。どうしてもお前が絡むと冷静さが欠けてしまってね』

「……口説いているの？」
『もしそれでルゥが惚れてくれるなら、本望だ』
冗談交じりの言葉にくすくすと笑う。あぁ、声を出して笑うなんて何時振りだろうか。
『……しかし、ふむ。予定が変わった』
低く心地いい声が、ほんの少しの深刻さを帯びる。
見えないとは分かっていても、ルイリは自分を包んでくれている腕の主を見上げて――目を丸くした。
「え？」
今までのように、輪郭すらも分からないことは全く無かった。むしろはっきりと姿が見えている。
しかし、その姿は。
ルイリの動揺も驚愕も全てを分かったような笑みを浮かべて、それでもルイリの唇に指を当てた。
『思っている事を、すぐに口にしてはいけない。――言葉は言霊だから』
その台詞に、はっとする。
やはりこの人は……彼は。
『さて、では』
彼は一呼吸を置き、周囲を警戒するように目を配った。そこに広がるのは茫洋とした、果てしない空間。何を注意する必要が在るの

だろう？
そしてルイリに向き直り、白い頬をいとおしげに撫でた。

『私の可愛いお姫様、愛しい娘……
――ルイラシエル』

どくん。
心臓が高鳴る。

ルイラシエル……その、名は。

『ようやくお前に逢いに行ける』

動けないルイリの額に、優しい唇が触れた。ぽうっと、胸が熱を帯びる。

『また一つ、封を外しておくよ。……しかし全てを外すことはできない。それは、お前が不幸になるだけだからね』

私はお前が幸せでいればいいんだ、と笑うその姿。

自分と同じ色を持った、姿。

『愛してる。ルゥ』

ルイリは目を見開き――、涙を流した。

唇が、ゆっくりとその名を紡いで、

ルイリは目を開けた。それは、不本意な目覚めではなかった。

ルイリは泣いていた。それは、悲しみから来る涙ではなかった。

「……あぁ……」

寝台の上で起き上がり、膝を抱えて涙を流す。膝頭に目を押し付けても、雫はとめどなく溢れて、シーツを濡らす。

ずっと焦がれていたその姿。

優しい目許も、穏やかな笑みを刻む口元も、自分の全てを包んでくれる腕も、温かく広い背中も。

どうして忘れていたのだろう。どうして思い出せずにいたのだろう。

触れてくれた頬が、額が、温かい。
ほのかな吐息を吐き出しながら、ルイリはひたすらに、はらはらと涙を流した。

窓から差し込む月の光は、どこまでも優しくて、明るくて。

――ようやくお前に逢いに行ける

嬉しくてどうにかなってしまいそうだった。

ルイリはひっそりと、唇を動かした。
呼ぶために。誰よりも大切な名前を、唯一無二の名前を。

「ヴィン……

――ヴィンセント、兄様」

大好きな、名前を。

24.　それぞれの夜　―ようやく―（後書き）

と、いうわけでした。予想通りだったかもしれません。
皆様どのような反応でしょうか？　感想頂けましたら嬉しいです。

この次にちょっとした閑話を挟んで、奏鳴曲（ソナタ）はようやく終わりを告げます！

あぁ長かった。ここまでお付き合い下さり、本当にありがとうございました。

もしよろしければ、これからもお付き合いくださるようよろしくお願いいたします。

24．5．　動き出す暗闇

そこはひどく息苦しく、窒息してしまうほどの圧迫感を伴う空間だった。そこには何とも言いがたい暗闇が満ちていて、遠近感すら曖昧になってしまう。

ぼっ、と音が立つ。

すると、どこにあったのか蝋燭の光が灯り、それが光源となって辺りを照らし出した。しかしこれと言って特徴的なものはなく、ただひたすらに無の印象だけが広がる。

ゆらゆらと、静かに燃える蝋燭の音だけが空間を支配するその中に、黒い姿が現れた。

男か女かも分からない。頭まで黒いフードで覆われた立ち姿から、顔の輪郭すら判断する事はできない。

黒い姿は足音すら立てずに空間を滑るように歩き、ふと足を止めた。

ずず、と音がする。

闇の中に、それら全てを飲み込んでしまうほど更に濃い闇が渦巻いた。

常人であれば震え上がるどころか、即座に失神してしまうそのおぞましさ。しかし、黒い姿はその口元に笑みを浮かべた。

『……変わりないか。忠実なる、我が腹心よ』

空気が、震える。

地を這う、その表現が相応しい声が、濃密な闇の奥から放たれる。

「ご心配には及びません、閣下。ご配慮、痛み入ります」

『国の方は……どうなっている』

いつも通りの問いに、事務的な返答を返す。

「何の問題もありません。閣下の『計画』に支障を来すような出来事は、何も」

少し、闇が動く。

『皇太子は魔物の討伐へ行くと言ったか』

「はい、レンザス地方へ。……小細工を仕掛ける必要が？」

『いや、良い。捨て置け』

ほんの少し、冷涼とした沈黙が流れる。

『他に、何か変動は』

「特には御座いません。……あぁ、そういえば、皇太子が新しい側室を迎えました」

『側室……？』

訝しげな反芻に、軽く頷きを返す。続きを促す沈黙に従い、口を開いた。

「これがまた、珍しいを容姿をしていると……亜麻色の髪と碧の瞳を持った少女です。正体は未だに」

『亜麻色……碧……』

ざわ、という音が広がる。はじめはほんの少しだけの音だったそれは、やがてどこかの喧騒に放り込まれたかのようにざわざわと辺りに響き渡った。

これは――目の前の闇が、笑っているのだ。

「閣下？」

『そうか……』

黒い姿はほんの少し感心の息を漏らした。これほどまでに楽しんでいる様子は初めてだ。

『その女の正体を探るが良い。役に立つかも知れぬ』

「……御意」

深く一礼すると、黒い姿は踵を返してその場から姿を消した。

その軌跡を見送りながら。

『亜麻色の髪……碧の瞳……』

闇は、この上も無く楽しそうに笑った。

『これは……面白いことになりそうだ……』

そうだ。

きっと面白いことが始まる。何物にも比べようのないほどの面白い出来事が。

闇が愛してやまない、喜劇が始まるのだ。

『楽しみだな……。実に、楽しみだ……』

くつくつという笑いがしばらく続いて。

唐突に、ぷつりと途絶えた。

25．　非日常の足音（前書き）

これを書くにあたって、23話目のレンとイアンの会話に少々加筆をいたしました。
興味がありましたら御覧下さいませ～。

読みは、協奏曲（コンチェルト）でございます。

視点や時間軸がぽんぽん変わるので、ご注意下さい。

25．　非日常の足音

皇宮クアレ・ローディンの一、桃香宮　庭園にて

「……」

ある一人の侍女――リーファ＝フィレルは、複雑に顔をしかめた。

視線を注ぐのは、桃香宮の庭園に位置されたカウチに腰かけている亜麻色の髪の少女。卓の上に置かれたティーカップに手を伸ばし、そのふちに桃色の唇がそっと触れる。首の傾きに比例して、細い喉がこくりと上下した。

「美味しい」

唇がまるで花のようにほころび、水晶の鈴のような声が喜色に満ちる。周囲はいきなり穏やか且つ和やかな空気に包まれた。

「私、セシーヌの淹れるジャリス茶が一番好き」

「何て嬉しいことをおっしゃいますかルイリ様！　まだありますから、たくさん召し上がってくださいませ」

頬を紅潮させながらポットに触れる侍女、セシーヌ＝ラグスローに、皇太子の側室、ルイリ＝レティシアはのほほんとうなずいた。

昼間が過ぎて、午後の休憩時間。最近はもっぱら、こんな光景が続く。近頃ようやく穏やかな笑みを見せるようになった側室の少女と、和やかに談笑する同年の侍女。

リーファは思う。

（……平和だわ）

そう、平和だ。
実に平和だ。
これ以上ないほどに平和だ。

むろん、そんな光景を不快に思うはずがない。文字通り花のような微笑みを見せる少女を見れば、こちらまで笑みがこぼれてしまいそうなほど。

平和……なのだが、だがしかし。

「……あの、ルイリ様」
「……何？」

くるりと小首を傾げ、澄んだ翡翠色の瞳を向けてくるその様は未だかつて無いほど可愛らしい。思わず言葉を詰まらせたリーファであったが、こほんと咳払いをして自分の主と真正面から向き合った。

「再度確認いたしますが。本当ーーーーにあの日、殿下には何もされていないのですね？」

沈黙。
ぽかんとした表情を浮かべたルイリは、すぐに表情を和らげてくすっと笑った。

「リーファさん、またそれ？」
「私のことはリーファで充分と申し上げたはずですわ。敬語が取れ

たのは何よりですが、あともう一息でございます。……ではなく！
答えてくださいませ、ルイリ様」

ずずいと詰め寄る侍女に気圧されながらも、ルイリは苦笑気味に返答する。

「何も。心配されるようなことは起こってないわ。殿下は本当に、何もせずに部屋を去って行かれました」

「そう……なのですか？」

ありえない。

何度目か……もはや数えたくもないが、リーファは心の中で激しく突っ込んだ。

（殿下が、女人の前で未遂で終わるなんて！！）

あの日……正確には五日前、久しぶりにリーファは怒りが沸点を超えた。

事件の発端の丁度その時、リーファは筆頭女官を辞したことによる雑務処理に追われていた。そこへ、ルイリの侍女に指名したセシーヌが血相を変えて飛び込んできた。普段から肝が据わってあまり家柄を気にしない彼女の慌てぶりに、すぐに何かがあったのだと分かる。

息を落ち着かせて、理由を聞けば。

――こ、皇太子殿下が……突然現れて、シンディ姫を置いてルイリ

様のお部屋に……えぇと、ルイリ様を伴って、まるで風のように。
それで私

混乱していて単語同士がよく繋がっていない台詞を口にしたセシーヌだが、それだけで充分だった。初めて自分の歯軋りの音を聞いた。

――……あ……っの、節操なし！！

リーファの叫びにセシーヌはぎょっとして、その周りに居た侍女や女官も青ざめた。世界広しと言えど、天下の皇太子殿下に恐ろしい暴言。もちろんそんな反応は気にせずに、リーファは猛然とルイリの部屋へ急いだ。

昔から女癖の悪い彼だが、リーファに被害は無かったし近しい侍女にも被害はなかったので気にしていなかった。

久しぶりに切れた。

数週間前に彼の目の前で、彼女一人に仕えると宣言したばかりだ。その唯一と定めた主を、一体どうしようと言うのか。

あの時ばかりは、相手が皇太子だろうがなんだろうが息の根を止めるつもりだった。

イゼルいわく、「フィレルさんって切れると怖い者なしですよね。ていうか自分が最恐になるって感じだ」らしい。それは重々承知しているし、怒りに任せれば出来ないことなど何もないように思える。

桃香宮の内部、后妃や側室の部屋が並ぶ廊下を突き進み、主である少女の扉が見えてくれば、何とそれが開いた。

――殿下！？

そこから出てきたのは、紛れもなくイアンであった。リーファの声に一度だけ紅の瞳を向け、しかし興味がないようにふいっと逸らす。

その時の表情はいつもの傲然とした色が少なかったように見受けられたが、あの時のリーファにそんな余裕は皆無だ。

――お待ち下さい殿下！　一体何用でルイリ様の部屋に？　ルイリ様は無事ですか！？　何もしていませんよね……って、無視ってどういうことですか！！

普段の丁寧な敬語もかなぐり捨てて引きとめようとしたが、黒衣を纏った長身の皇太子はさっさとその場を立ち去ってしまった。

慌ててセシーヌと共に部屋に駆け込めば、淡黄（たんこう）の髪を揺らした少女は僅かに呆けたようにリーファ達を見た。

ルイリは少し髪が乱れていて（それは寝台に倒れてしまったからと彼女は言う）、胸元が少し肌蹴ていた（部屋へ向かっていた時に外れたのだと彼女は言う）。

とにかく動転していて、褄をしないとと思ったが、当人であるルイリが必死に引き止めるので渋々断念した。確かにくまなく調べたところ彼女が辱めを受けた様子はなく、退室していったイアンの表情やルイリの話は辻褄（つじつま）が合った。

結局、未遂だったということだ。

しかし、リーファの怒りは中々冷めず。

その夜にばったりと出くわしたレンに怒りの正拳を一発かまし、とりあえず頭を冷やした。

それでもリーファは信じられないのである。
無論、未遂で終わらなかった場合は怒りの矛先は間違いなく当人であるイアンに向いていたのだが、だがしかし。

（……あの殿下が）

女性の部屋にひとたび入れば、数時間は戻ってこないあの皇太子殿下が。
来るもの拒まず去るもの追わず、なのに女性関係では揉めたことのないあの節操……。……古から流れる由緒正しき皇族の血を引いた皇太子殿下が。

いいだろう、ルイリに関して未遂という事は百五十歩ほど譲って認める。
だが、だがしかし。

（一体どういう神経をしているのあのお方はっっ！！）

実は、リーファの立腹の原因はそれだけではなかった。

それは怒涛の一日が過ぎた明くる日のことだった。

――実は昨夜、殿下がわたくしの部屋にいらっしゃったの。いつになく情熱的で、……性急で。あらやだ、わたくしったら何を話しているのかしら。とにかく、寝台の上では何度もわたくしの名前を呼

んでくれて、とても幸せな夜でしたのよ

いつものように派手な茶会を開いていた姫君達の話を偶然聞いてしまったのである。しかも、ルイリと共に。

嬉々として語るは、イアンの側室の中でも一番の寵姫と名高いシンディエラ姫。彼女が事実を誇張して話すのはいつものことだが、渡りが事実なのは間違いないだろう。

彼の頭の中はどうなっているのだろうか。

今のところ魔物の討伐に遠方へと旅立っている彼だが、リーファとしてはそのまま帰ってこなくても一向に構わない。むしろ少しくらい痛い目に遭っていただきたいとさえ思ってしまう自分は、皇宮に仕える者としてはきっと失格だ。

さて、回想に戻ろう。

――あらルイリ嬢。昨日はごめんなさいね、あのような言い方をして。殿下には何もされていないかしら？　もしかするとあなたでは満たされなくて、わたくしの元へ来たかもしれないわね

扇で口元を隠して笑う美姫に、反省という二文字はないらしい。昨日、シンディがルイリに浴びせた言葉の数々はセシーヌから報告を受けていた。

リーファは基本的に、嫌っている人物とは関わらない。しかし今回ばかりは額に青筋が浮かぶのを止められず、何か言ってやろうと動いて――横のルイリが、静かに制した。

そして、毒の微笑みを浮かべるシンディに向かってにっこりと笑った。邪気などなく、にっこりと。

――ご心配ありがとうございます。えぇ、殿下は私のような貧相な身体よりも、シンディ様のような豊満なお身体の方が好みだっただけでしょう

リーファは、初めてルイリに戦慄を覚えた。

天使、もしくは女神とも形容できる麗しい笑顔で、何てことを言ってのけるのだろうこのお方は。

唖然とした表情のシンディ、ならびに茶会に参加していた姫君達を残して、ルイリは清々しくリーファとセシーヌに「行きましょう」と促した。

今も。

「今日は国史で教師の方に褒められたの。覚えがいいって」

「ルイリ様の記憶力は驚異的ですもの、当然でしょう！」

「そうね……。記憶がないから、今あることを憶えていたいって思うのかもしれない」

「懸命な心がけ、感動します。ルイリ様は私の自慢のご主人様ですから！」

「……セシーヌ、私をおだてるの、絶対趣味でしょう？」

「最近いつも言われますから、本当にそうなっちゃいそうです」

セシーヌと談笑するルイリには、少しも無理をしている様子は見受けられない。

幸せそうな微笑みは、そう、確か四日前から。しかも早朝から。

イアンが原因でないとしたら、一体何なのか。機嫌が良いのは何よりだ。

だが、男に強引に押し倒されてしかも未遂に終わってあろうことかその男は夜に他の女の下へ行った……そんな所業をなされた少女が、何でこんなに幸せそうなのだろう。

よく考えれば、そういう事態はルイリにとってあまり重要でないのかもしれない。価値観が貴族の姫君とはだいぶ違う上に、イアンに好意を寄せている様子はないし、まぁ納得できなくもない。

けれど女性としては、その心境を一週間足らずでどうにか清算できるものなのだろうか……。

そういうわけで、リーファの目下の悩みは以上である。

しかし、こうやって微笑んでいる少女を見るのは良いことに違いないだろう。

こんな日々が続いていけばいい。大事(おおごと)は起こらずに、こうして時(とき)間が過ぎていけばいい。彼女が心穏やかに過ごしていけるように。

リーファは気付く由もなかった。

これこそが変化であったという事。全ては動き出していたという事に。

気が遠くなるほど後になって、リーファは己の考えが何と浮薄であったのかと思い知るのだ。

†　†　†　†　†

クアレ・ローディン城門　検問場にて

「次、そこの馬車！！」

長年門番を務めてきた男は、慣れた声量で次の対象を呼んだ。掛け声の先にあった大きめの馬車はゆっくりと前進してくる。

「随分とでかいな。宮殿（クアレ・ローディン）に何の用だ？」

「私共は旅芸人で……」

そう言う御者台の男の声には聞き覚えがあった。そういえば毎回この時期に来る旅芸人の一座だ。

「あぁ、もうじき暁夜祭（ぎょうやさい）が開かれるんだったな」

暁夜祭とは、皇国が一年に一度催す三日間の祭典。出席者は、隣国の王や有力な貴族がずらりと名を連ねる。

演（だ）し物も中々のもので、遠方から吟遊詩人を呼んだりこのような旅芸人を呼んだり、とにかく抜け目無く準備をするのである。

それに出演するために赴いたのだろう。門番の男は納得してうなずく。

「一年ぶりだな。新しい芸人は増えたか？」
「はぁ、まぁそこそこに。とは言っても一、二人ですがね」
「そうか。何ならここでしてもらいたいが、無理だろうな」

自分の冗談（と本人は思っている）に自分で笑い、門番は通行許可証を御者台の男に手渡した。

がらがらと音を立てて宮殿内へと進みだす馬車を見送ってから――そろそろ忙しくなるのだろうなと感じていた。

城門を離れ、しばらく道沿いに馬車を歩かせてから、御者台に座っていた男は後ろを振り返った。

「さ、着いたぜ旦那」

声をかけると、少し俯き加減だったローブ姿がのんびりと動いた。

「あぁ、世話をかけた。わざわざ乗せてもらって済まなかったな」
「気にすることはないさ。あんたのその容姿だったら注目を浴びただろうしよ」

豪快に笑う男に、ローブ姿の――年若い青年は薄い微笑を浮かべた。

「ところで、旦那はクアレ・ローディン（ここ）に何の用なんだい？」
「実は私もしがない旅芸人の端くれでね。……しかし一人でここに入るほど勇気が奮えず、貴方方に乗せてもらったんだ」

「へぇ、何の芸ができるんだい？」

同業者として興味を示すことは当たり前だ。質問に対して、ローブ姿の青年は肩を竦めた。

「大した芸はできないが。まぁそれでも、観客が少しでも楽しめれば良いとは思っているよ」

「もしかして旦那、此処は初めてかい？」

「あぁ、その通りだ。恥ずかしながら」

「そうなの？　じゃあお兄さんさぁ、あたし達の一座として舞台に出ない？」

それまで黙っていた一座の踊り子が目を輝かせて提案した。歓声こそ上がらないものの、他の全員も賛同しているようだ。御者台の男……座長は息をつく。

「そう言ってるけどよ、旦那。俺は別に構わねぇ。あんたが決めてくれ」

青年は少し首を傾げ、何かを思案するように考え込んでから――微笑んだ。

「それはありがたい。是非、そうさせていただくよ」

†　†　†　†　†

「……――、」

ぴくり、とカップを持とうとしていた手が止まる。

「ルイリ様？　如何なさいました？」

傍に控えていたセシーヌが不安げに声をかける。

「え、あ……何でもないの」

取り繕うように笑ってから、何事もなかったように紅茶を一口含む。

やっぱり美味しい。甘すぎない香りが鼻先をくすぐって、ゆっくりと嚥下（えんか）すれば茶葉の風味が吹き抜ける。全身が喜ぶように温かくなる。

何だろう、今のは。

身体が反応した、と言えばいいのか。全身に微弱な電流が走ったかのようだった。けれど決して不快感は感じなくて。

代わりに感じたのは、高揚感。

それが一体何なのか、明確には分からなかったけれど。

ルイリは静かに、笑みを零した。

―――――――――――――――

歯車は廻り続ける。

役者が気付いていようとも、気付いていなかろうとも。

その巡りは時に悲しみを齎(もたら)し、――――時に、最上の喜びを齎す。

二つの歯車は、逢うべくして巡り逢う。

それが必然であろうとも、故意であろうとも。

さぁ、もう奏でてもいいだろう。

ずっとずっと待ち続けた、ずっとずっと恋焦がれた。

待ち侘びた協奏曲(コンチェルト)は、すぐそこに。

25.　非日常の足音（後書き）

更新が遅くなってしまい、本当に申し訳ありませんでした！！
ごたごたしていて中々時間が取れず、何度も先延ばしになってしまい挙句の果てにこんなに長く……！

ひとまず、ここまで読んで下さってありがとうございます！
本当に、皆様のおかげで新章にこぎつくことができました！！
感謝してもしきれません。ありがとうございます！！

内容に関しては活動報告で触れたいと思います。

久っっしぶりに蛇足補足！
協奏曲……オーケストラの合奏曲。ソナタ形式による大規模で華やかな作品が多い。ラテン語の「ｃｏｎｃｅｒｔｏ（闘争、競争する）」という意味も。コンチェルト。

26. 三人の皇子と新たな巡り

ふと。

「おや。……これはこれは、可憐な姫君がいらっしゃる」

低音の美声がいきなり響いた。
極上の絹が衣擦れを起こしたような、低くもひどく魅力的な声だった。これほどよく通る声を聞いた事がなかった。

「てっきり、花の精霊が迷い込んだのかと」

首をめぐらせて探すと、さく、と芝を踏みしめる音がした。セシーヌと、少し遠くに控えていたリーファが無言で頭(こうべ)を垂れる。

「……」

姿を現した声の主を凝視して、ルイリはしばらく瞬きのみを繰り返した。

横を長く垂らした、薄い金糸(きんし)の髪。穏やかな笑みを浮かべる口元。柔らかく細められた、熟成されたワインのような臙脂色の瞳。彫刻のごとき高い鼻梁。身にまとう礼服は高貴な印象をよりいっそう際立たせた。
優美、という言葉がこれほど似合う人もいないだろうと思ってし

まうほど、恐ろしく美しい男性だった。青年を少し抜けたあたりの美丈夫。

他の姫君ならすぐさま悩殺されているであろう整った顔立ち。ルイリは昏倒こそしないものの、無礼だということも考えずに見入ってしまう。

対する美貌の男性も、ルイリを少し意外そうに見つめた。

「淡黄……いや、亜麻色の髪……？　そうか、貴女が……」

端整な唇が紡ぐ言葉はまるで一つの旋律のようだ。反応が無く、自分をただ見つめる少女を穏やかに見つめ返して、美丈夫は指先を優雅に伸ばし、細い手をすくいとった。

唖然とするルイリにもう一度魅惑的に微笑んで、

「御名前をお聞きする栄を賜ってもよろしいですか、亜麻色の君？」

そして、まるで壊れ物を扱うかのように、手の甲にほんの少しだけ唇を押し付ける。柔らかい感触が瞬時に伝わってきて、一気に全身が熱くなった。

「っ、あの……」

「ゼスト殿下。……あまり刺激の強いことをなさらないでくださいませ。この御方は実に純然たるお人なのですから」

しどろもどろになってしまったルイリに、リーファがそっと助け舟を出した。

（……殿下？）

「あぁリーファ、久しぶりだね。君が筆頭女官を辞したのは実に残念だ。史上最年少で就きながら、君の働きは歴代のどの女官にも勝

っていた。姫君達は皆残念がっていたものだ」
「勿体無きお言葉、恐れ入ります」
「そちらの侍女は……そうだ、ラグスロー子爵家のセシーヌといったかな？　まだ十七歳というのに、中々有能だと聞いているよ」
「恐れ多い……殿下のお耳に止まるだけでも、身に余る名誉でございます」

リーファのみならず、あの大らかなセシーヌすらも緊迫した口調。それに確か、リーファは『ゼスト殿下』と……
疑いを確信に変えつつあるルイリを見て、彼は見惚れてしまいそうになる微笑みを浮かべた。

「失礼、私から名乗るのが道理というものですね。……私はシェリング皇国第二皇子、ゼスト＝サリディア＝シェリングと申します」

胸に手を当てて流麗に礼をしてみせる美青年――ゼストに、ルイリは慌てて頭を下げた。

「お、皇子殿下に何とご無礼なことを……。……ルイリ＝レティシアと申します。イアン皇太子殿下の、」
「えぇ、存じていますよ。我が不肖（ふしょう）の弟、イアンの新しい側室殿」

朗らかな口調に、ルイリは驚いてゼストを見た。麗しい容貌に浮かぶのはどこか、面白味を含んだ微笑み。

「先日は愚弟が随分と無礼な所業をしたそうで。手遅れになっていなくて良かった。何なら、今宵からは私の部屋でお眠りになりますか？　決して愚者を近づけさせはしません」
「いえ、あの……え？」

話の脈絡がよく分からない。一体何を言っているのか。
見かねたリーファが少々怒気を強めて口を開いた。

「殿下。お戯れもそれほどになさいませ。貴方様御自ら(おんみずか)お心を折らずとも、ルイリ様には私共がおりますゆえご心配なさらず」
「私やイアンにそんな口が利けるのは、多分君だけだよ？　リーファ」
「えぇそうですわね。私の唯一の主は、ルイリ様だけにございますれば」

たかが側室の一人を、唯一の主を言い切る。潔い笑みを浮かべた侍女を、美貌の皇子は薄く笑うだけにとどめた。

「いい度胸だね」

ほんの少し、ほんの少しだけ、その落ち着いた声に冷たいものが含まれた。
それは一瞬の事で、ルイリには判断おろか勘付くことすらできなかった。

「それはそうと、何故こちらに殿下がいらっしゃるのです？」
「おやセシーヌ。何か用が無ければ、私は此処に来てはいけないのかな？」

とてもひねくれた返答だが、彼が言ってしまうと正論に聞こえてしまうから不思議だ。ゼストが少し悪戯っぽい笑みをセシーヌに向けると、彼女はたちまち顔を赤くして顔を伏せた。
しかしリーファは気に食わなかったらしい。藤色の双眸が不満げに細まっている。一介の皇子に対する視線ではないが、ゼストは気にした風もなくひらりと手を振る。

「嘘、嘘。今日はちゃんとした用事があるよ。私の側室の姫が少し体調を崩していてね、そのお見舞いの帰りなんだ。そうしたら」

深い赤色の瞳が、ゆっくりとルイリをとらえる。

「これほど見目麗しい姫君に会えた」

ルイリはかぁっと顔が赤くなるのを自覚した。世辞が大半を占める言葉だと分かってはいるのだが、浮世離れした美貌ととびきりの微笑でそう言われるとそうならざるを得ない。何せ、手放しでこうやって褒められるのは片手の指で足りるほどなのだ。最近はよくセシーヌが世辞を口にするが。

「私なんかには勿体無いお言葉……ありがとうございます」

「あぁ、そういう謙虚な所もとても可愛らしい。……確かに、イアンの側室にはない新鮮なお方だ」

聞き逃してしまいそうな小さな呟き。とても魅力的な声なのに、一瞬背筋が寒くなった。

反射的に顔を上げて第二皇子を見れば、先ほどの涼やかな笑みが浮かんでいる。深い、深い赤い瞳。それと対を成すように、さらりとした金髪や肌の色素は薄い。

彼とはまた違う色合いは、どうしてか目を離せない何かがあった。

このまま魅入ってしまえば、いつの間にかどこかへ迷い込んでしまいそうなほど。

庭園に流れた静寂は、しかしすぐに破られた。

「あっ、ゼスト兄上！！」

「おー、いたいた。探したんだぜゼスト兄さん」

少年と青年の中間のような声と、どこかレンに似通った響きの青年の声が聞こえ、かと思えば二人分の人影がひょっこりと現れた。

「……空気を読まない弟達だね」

ゼストが落胆した口ぶりで言う。

かなり身長差のある二人だった。

一人は見覚えがある。濃茶の髪と橙色の瞳、そして少女と見紛うほど可愛らしい容貌を持つ少年。

もう一人は、少年の頭一つ分は背の高い、ひょろりとした精悍な青年だった。少年と同じく濃茶の髪に、瞳は燃え上がるような赤銅色。無駄な肉の削ぎ落とされた長身に纏っているのは漆黒の軍服のようなもので、腰には長剣を佩いている。

少年がぱたぱたという音が似合いそうな走り方でゼストに駆け寄ってくるのを、後ろから青年がのんびりと追ってくる。

「兄上、執務ほっぽってどこ行ってるんですか！　今はイアン兄上もいないし、ヴェルガ兄上は不真面目だから結局僕に回されそうになったんですよ！」

「おい待てセイロン、お前の発言に兄はひっじょーーーーに傷ついた。訂正しろ今すぐに」

「本当のこと言って何が悪いんです？　僕は正直なんです、嘘はつ

けませ」
「訂正しろ今すぐにっ！」
「痛ぁっ！！　殴ることないでしょう兄上！」
「殴ってない小突いてやったんだ！　小突くくらいで痛がるなっ！　何ならぶん殴ってやろうか？」
「嘘だ嘘だ！　今絶対に殴りましたよ！」
「はいはいはいはいはい」

呆然として会話を見守っていたルイリ達を見かねて、ゼストがすっぱりと仲裁に入った。口論を止めるようにそう言って、

「「い〝っっ！！」」

ぱこんっ、という音がしたと思うと、目の前の少年と青年が頭を抱えて悲鳴を上げた。

「女性方の前で見苦しいところを見せるんじゃないよ。……失礼、ルイリ姫。この二人には後できつーく言っておきますので」
「い、いえ、お気になさらず……」

姫と呼ばないで結構です、と言いたいが言えそうにない。
優雅に微笑むゼストが動いた形跡はない。一体どうやってあの二人の後頭部に衝撃を与えたのだろうか。
背の低い少年が、頭を押さえながら涙声で愚痴を零す。

「ひ、ひどいですゼスト兄上。僕何も悪いことしてないのに……」
「あれほど騒がしく口論をする時点で悪い子だよ。少しは皇子としての自覚を持ちなさい」

窘めをこめたその言葉を聞いて、少年は開き直ったように顔を上

げ、隣で同じように頭を押さえている青年を指差した。

「それを言うならヴェルガ兄上だって！」

「ヴェルガはもう駄目だからセイロンに言ってるんだ」

「ゼスト兄さん、それ結構傷つく」

ゼスト、ヴェルガ、セイロン。

一つ聞き覚えのない名前とその名前を持っているであろう青年を見ていると、彼は視線に気付いたようでにこりと笑った。

「初めまして、見目麗しいご令嬢。俺は皇国（ここ）の第四皇子、ヴェルガ＝アークル＝シェリングと申します」

「お久しぶりです、ルイリ嬢！　お元気そうで何よりです！」

青年――ヴェルガの自己紹介と重なるように、愛くるしい少年――セイロンはにこにこと笑いながらルイリを見つめた。それは此処に来た時に迎え入れてくれた笑顔と同じで、ルイリも自然と表情を緩めた。

「お気遣い痛み入ります、セイロン殿下。……初めまして、ヴェルガ殿下。ルイリ＝レティシアと申します」

「ご丁寧にありがとうございます。あ、ちなみに俺、貴女の義弟（ぎてい）なんで気軽に色々愚痴とか言ってくださいね」

……。

「……義弟？」

何故、皇子が自分の義理の弟になるのだろうか。首を傾げるルイ

リに、ヴェルガは大きく噴出した。

「嫌だなぁ、そうでしょ？　貴女はイアン兄さんの側室、つまり妻。まぁ何人いるんだって話ですけど。てことは弟……正確には異母弟である俺は、貴女の義弟にあたるわけですよね？」

確認というよりは断定口調で一息で言われた言葉を、ルイリはかなりの時間をかけて咀嚼し意味を理解した。

そして、ほのかに頬を赤くする。

（そういえば……そうなんだった）

全く彼と接しないし、寵愛が注がれていると噂の姫君達がたくさんいるので忘れていた。そもそも成り行き上こうなったのだ、自覚しろと言われても。

（あの人が、私の夫……）

今更ながらその事実に気付いて顔を俯かせるルイリを見て、ヴェルガはケラケラと続ける。

「ゼスト兄さんとイアン兄さんは奥さんいっぱいいますよねー。正室はいないけど」

「ヴェルガ、軽率な言葉は慎みなさい」

皇子らしからぬ口調を諫めるようにゼストが少々厳しい語調で口を開いた。

「全く……その口調はいつになったら治るのかな」

「多分一生治らないかな」

からりと笑うその表情は、本当に皇子には見えない。

「……皇太子殿下はいらっしゃいませんが、皇子殿下の方々が一堂に会しているって、中々ないですよね」

セシーヌが感嘆したように呟いた。それはリーファとルイリにしか聞こえていなかったようで、リーファがすかさず窘めていた。

しかし確かに、眼前の光景が非常に希少であることは確かだ。全員系統は違うが揃いもそろって美形なものだから、目の保養とまで考えてしまう。もっとも、これほどまで整った顔立ちが揃うと保養どころか毒になりそうだが。

「あ、そうだ！　本来の目的を忘れるところでした」

ぽん、とセイロンが手を打った。その様は実に可愛らしい。まるで小動物と相対している時のように、母性本能がかき立てられる。

セイロンはそのまま、決して威圧的ではないが恐らくそういうのを精一杯使っているのだろう視線でゼストを睨みあげた。

「兄上、執務（しごと）に早く戻ってください。書類を抱えた大臣が悲鳴を上げてるんですから」

「……皇太子（イアン）の代わりかい？　私は」

物憂げに溜息をついている表情さえ絵になる。

「そもそも一国の皇子がこれほどに忙しい国なんてシェリング（ここ）以外はないよ？　親は選べないというが、こうも不自由だとねぇ……」

「毎回毎回人目を忍んでは城下町に行ってる兄上に言われたくないですっ」

くわりと牙を剥く末弟を軽くいなしながら、ゼストは優美な微笑をルイリ達に向けた。背景に薔薇が咲く。

「麗しい淑女との楽しい語らいもここまでのようです。けれどルイリ姫、私の心はいつも貴女のお傍に」

「……あ、あの」

「はいはい、ルイリ嬢が綺麗だから口説きたくなる気持ちは分かるけど、そろそろ本当に戻るぜ兄さん」

兄（ゼスト）よりも背の高いヴェルガが嘆息交じりに促す。しかし彼も、ルイリにとびきりの笑いを向けてのたまった。

「じゃ、また。ルイリ嬢。今度はゆーっくりと話しましょう。もちろん二人っきりで」

どうやらヴェルガもゼストの弟であることは間違い無さそうだ。

「ではこれで失礼します！　今度絶対にお茶しましょうね！！」

最後に元気よくセイロンがぺこりと礼をしてから三人の皇子達は騒がしく会話をしながら桃香宮を後にする。

「そうです兄上、この前城下町（まち）に連れて行ってくれるって約束したのにまだ果たされてませんよ！！」

「おや、そんな約束をしたかな？」

「～～～っ、どうして皆して僕を子ども扱いするんです！　イアン兄上も手合わせに付き合ってくれないし、ヴェルガ兄上なんか未だに僕をチビって言うし」

「おいおい、チビにチビって言って何が悪いって言うんだ？」

「僕はまだ成長期なんです！　これから伸びていく予定なんです！」
「おーおー頑張れ。頑張って俺らを越してくれよー」

にやにやと笑いながら弟の頭を叩くヴェルガ。真っ赤になりながらそれを振り払うセイロン。それを、苦笑しながらも見守るゼスト。

その後ろ姿を見送りながら、ルイリはぱちりと瞬きした。

どうやら彼らは実に仲が良いらしい。兄弟だから、というだけでもなさそうだが、とにかく見ていて心が穏やかになる。皇子という地位には堅苦しいものが付きまといがちという偏見は捨てた方が良さそうだ。

けれど。

（……殿下（あのひと）は、あの中にいるのかしら）

冷徹な紅を宿した皇太子。皇子である彼らよりも上の地位にある第三皇子。

どう見ても協調性に欠けるあの人でも、彼らの前であったら年相応の表情を見せるのだろうか（とはいえルイリは彼の実年齢は知らない）。

少しは、表情を和らげるのだろうか。

それとも。

いつものような、何の表情も浮かばない瞳をしているのか。全てを寄せ付けない空気を身に纏い、自分に近づくもの一切を拒絶するのか。

他者との関わりを断絶し、全てを凍てつかせ、まるで心のない人形のように。

それは、……あまりにも、哀しすぎる。

脳裏で弾ける面影を思い浮かべる。

硬質な美貌。決して穏やかな光を宿さない鮮紅。馴れ合いを否定する視線。けれどその奥に潜むものは。

（あの人は、きっと……）

唐突に生じた微かな痛覚に眉をひそめて――

「……、」

ふとルイリは呼吸を止めた。

（……私……？）

思わず己の胸元に手をやって、ひたすらに瞬きを繰り返した。

今、感じた……

針を刺されたような胸の痛みは何だろう？

同情？

浮かんだ考えを即座に否定する。

それはルイリが最も嫌う行為であって、彼の最も嫌悪するものであろう。

第一、どうして今、彼の事を考えたのだろう。とても自然だった。無意識だった。彼らの光景を見て、当然のように彼の事へと疑問が繋がった。

一体、どうして。

「ルイリ様？」

気遣わしげな侍女の声が少し遠い。傍にいるはずなのに。

己の内に沸き起こった不可解な感覚に首を傾げる。

しかし、それの原因を追及する時間はなかった。

唐突に、リーファがはっと息を呑んだことによって、ルイリの思考は断ち切れる。

「……リーファ？」

一瞬のうちに血の気が引いた侍女を見てただならぬことだとは察する。

「そんな、まさか……」

無意識のうちに零れたであろう呟きは愕然としていた。驚愕に満ちた淡い紫の瞳は庭園の遥か遠くを見ているように思える。

セシーヌも、先輩侍女の異変を不審に思ったようだ。

「フィレル女官、どうかし……」

気遣うように発せられた声は、荒々しく芝を駆けてくる足音に掻き消された。

あからさまに女性の足音ではないそれに、ルイリは思わず身構える。

数秒を置いて小道からルイリ達の前に姿を現した人影を見て、思わず目を瞠った。

「……レンさん？」

浅黒い肌と茶髪、灰色の瞳を持った長身の青年は、ルイリも何度か交流のある皇太子の側近。

しかし何だか様子が変だ。

いつもの飄然とした微笑は霧散して、ただ張り詰めた表情が浮かんでいる。頬や腕、脚には数え切れないほどの裂傷が刻まれ、褐色の肌に赤い筋が滲む。血走った灰色の瞳や肩で大きく息をする姿は、およそ姫君の溢れる後宮には似つかわしくない。

「あの、どうしたんですか？　すごい汗……」

尋常ならざるレンの様子に、ルイリは自分の立場も忘れて彼の元へと駈け寄った。

近づけば、思わず鼻を覆ってしまう、むっとした香りが強くなる。それは認識したくないが――間違いなく、血臭（けっしゅう）。

「……ルイリ＝レティシア様」

普段の軽快な口調はどこにも見当たらなかった。緊迫感だけを醸し出す、震えてさえもいる低い声。

一体何なのか。

眉をひそめるルイリに、――レンはその場に、膝をついた。

「無礼を承知で申し上げる。シェリング皇国騎士団副団長、レン＝スヴェイン……我が主が為、貴女様の御力をご貸与賜りたく参上した。どうかご助力願いたい」

歯車は、また一つ、巡る。

26.　三人の皇子と新たな巡り（後書き）

ちょっといつもより早い更新です、ふう！

ヤツの兄弟達は当人と違ってお喋りなので、キーの打つスピードが速いの何の……

とても楽しかったなんて、口が裂けても言えません。主要二人の時よりも組み立てが早かったなんて、口が割れても言えません。

ここまで読んでくださった方に鬱陶しいほどの感謝を！　更にはお気に入り登録までして下さった方に額をこすりつけるほどの感謝を！

感想もしくはメッセージに一言だけでもいただけましたら、天にも昇る思いです！！

27. 理不尽な懇願（前書き）

あまり過激な表現はしていないつもりですが、残酷描写があります。
苦手な方はご遠慮くださいませ。

27. 理不尽な懇願

機械的で早口な言葉に、目を見開いた。褐色の従者は膝をついたまま顔を上げない。

「一体どういう……」

だが、真意を問おうとする前に、レンはルイリの手を強く引いた。思わず前のめりにこけてしまいそうになるルイリを気にも留めず、レンは己の額に白い手を押し付けた。

「どうか寛大な御心でお救いを」

「ちょっ……」

まるで神を崇めるかのような敬虔（けいけん）な行為に、ただ困惑する。ましてや日頃の彼の態度を知っていれば尚更だ。

「やめて下さい！　どうしたんですか、一体……」

リーファにも協力してもらい、石像のように動かない彼を必死に立たせた。漸く視線を合わせると、灰白（かいはく）色の瞳に浮かんでいるのはこちらが痛ましくなるほどの憔悴だった。

「レンさん……？」

「あいつが重傷を負いました」

端的に、無表情に告げられる。しばらくその意味が、分からなか

った。しかし、レンが？あいつ？という呼称を使う対象は、一人しか知らない。

「……殿下、が？」

確認するように聞くと、短い首肯が返される。その間に、セシーヌは素早く視線を周囲にめぐらせた。

「フィレル女官。ここでは人の目に付く可能性があります。向こうの東屋（あずまや）の方へ行った方がよろしいかと」

セシーヌがリーファにこそりと耳打ちをした。その提案を受け、リーファも強く頷く。

「えぇ、そうね。……セシーヌ、申し訳ないけれどあなたは」

「分かっています。恐らく、私がいない方が良いでしょう。先にルイリ様の部屋に戻ります」

同年の侍女は当たり前のようにうなずいた。まるで彼女だけを仲間はずれにするようでルイリが少し渋るような表情を見せると、

「セシーヌも一端（いっぱし）の侍女でございますわ、ルイリ様。その辺りの分別はついております」

リーファが静かに、諫めるように言ったので了承する。

ひとまず、ルイリはレンを連れ、リーファの先導で庭園の更に奥にある東屋まで移動した。四柱には蔦が絡まり、屋根はあるが壁はない。暑い日などはここで涼む姫君もいるという。

「それで、殿下の状況は？」

レンは手近の座椅子に腰掛けて、リーファの問いに淡々と返す。

「傷は肩から腰にかけて袈裟懸けに……死の危険は免れたものの、現在は意識不明、予断は決して許されない」

「そんな、どうして」

説明を聞くだけでも眩暈がしてしまいそうなほどの重傷だと分かる。しかしリーファの話を聞いてきた限りでは、イアンはいつも魔物の討伐へ赴いていたようだった。彼ほどの経験者が、今回に限って魔物に後れを取ったとは考えにくい。

沈黙の下にある疑問を察したのか、レンは力なく首を振る。

「確かに結果的な原因は魔獣……いえ、魔物です。だが、直接手にかけたのは魔物ではない。騎士団団員にして討伐隊の一人……ルイリ嬢は、ゼルバーという男を覚えておいでですか」

「ゼルバー……」

どこかで聞いたような名前と分かり、顎に手を当てて記憶を掘り起こす。そして、この数週間の間で聞いた事のある名前だと思い当たる。

「確か、私が殿下の屋敷からクアレ・ローディンに向かった時に……」

「えぇ、俺と一緒にサベラの御者をした、あの侍従です」

「まさか、彼が？」

それはルイリの声ではなかった。未だ驚きの抜けきらない様子で、リーファが思わずと言った体で進言したのだ。

「認めたくないが、その通りだ。……とどめを刺したと思っていた」

レンは苦い表情そのままに、当時の状況を簡潔に説明した。

いつものように人気のない場所で魔物を誘(おび)き出し、イアンを筆頭とした討伐隊十余名が討伐にかかった。

情報の通り魔物は手強かったが、今までに何度も同じような強さの魔物を相手にしてきた彼らにとっては、苦戦はするものの息の根を止めることに絶対の自信を持っていた。

実際、見事な布陣で魔物を周囲し、逃げ場を断ち、レンをはじめとする数人の騎士達が魔物を押さえつけている間に――イアンが、過(あやま)たずその眉間を刺し貫いた。おぞましい断末魔と共に魔物は崩れ落ち、それで全てが終わったと、全員が思った。

――殿下っ、お逃げくだされ！！

ほぼ絶叫に近い声が、自分達の中から響くまでは。

その声に真っ先に反応したのは、誰あろうイアンであった。収めようとした剣を再び構え、すぐさま応戦しようとした。その対応は、彼のみができたことであったはずだ。

しかし、まさに一瞬の差が明暗を分けた。

イアンが振り返ったその瞬間、雄叫びと剣が身体に斜めに振り下ろされ、一拍置いて尋常でない量の血飛沫が辺りを染めた。イアンは咄嗟に地面に剣を突き立てて膝をつき、転倒は免れる。しかし黒装束は斜めに切り裂かれて、そこからぼたぼたと血が流れ落ちる。

レン達が状況を理解する前に、彼はそのままの体勢で意識を失った。

――なんと……なんということっ！

慟哭と呼べるに相応しい声を出したのは、他でもないイアンを斬った男――ゼルバーであった。彼の手からガラン、と重い音を立てて血塗(ちまみ)れの剣が落ち、そのまま喉を裂くような咆哮が上がった。

――このような所業をして……某(それがし)が生きる意味は最早……っ！

血走った目でそう叫び、足元に転がった剣を狂ったように引っ掴む。

――よせ！！

それが何を意図するのか、いち早く察したレンが鋭く制止の声を投げかけたその目の前で。

皇太子を斬りつけるという大罪を犯した侍従は、己の頸動脈を断ち切った。

「今回討伐した魔物は、自分の分身とも言える『種』を埋め込む能力を有していた。あらかじめ対象者……宿主(やどぬし)に『種』を埋め込み、自身が絶命したその時に『種』が芽吹くようにして。『種』は瞬時に根を張り、宿主の身体を支配して、意思とは関係なくその身体を傀儡(くぐつ)と成せる。……もっと深く調べておけば、こんなことにはならなかった」

悔しげに拳を握る。色素の濃い肌に爪が食い込んで、血が滴り落

ちた。

「では……では、ゼルバーは」

「今の話の通り、自害した。最後まであいつへの謝罪、自分の罪深さを叫びながら」

青ざめたリーファの呟きに、レンは暗鬱とした声音で返答した。

「俺の失態と言っていい。あいつを護衛できず、その上有能な異能者を一人失った」

悔恨するレンの表情はどこまでも暗い。普段姫君達が茶会を楽しむ庭園に流れる空気は恐ろしいほど陰惨としている。

ルイリは睫毛を伏せ、数週間前に会った侍従を思い起こした。

――おぉ、何と美しき姫君であらせられることか！　殿下も隅に置けませんなぁ！！

まだ何も分からず、ただ顔を俯かせてばかりだったあの頃の自分に、何の屈託もない賞賛と笑顔をくれたゼルバー。

――皇太子殿下は、少々言葉が足りませんがまこと優秀なお方でありましてなぁ。某はあのお方に仕えることをこの身の誇りとしていましてなぁ！

――おーい、べらべら喋ってる暇あったら荷物運ぶの手伝え？

レンの制止もあってほんの少ししか会話をしなかったが、そのたった数分の会話の中でも、イアンのことを尊敬していることがよく分かったのを覚えている。あの彼は、もういないということなのか。

「こう言ってはなんだが、ゼルバーの事を惜しんでもしょうがない。……ルイリ嬢、俺がここに来た理由を、察していただけますか」
「……はい」

ここで分からないと言う輩はよっぽどの馬鹿だろう。今までの話を聞いて、そして自身の持つ能力（ちから）を考えたルイリはうなずいた。

「私に、殿下の傷を治せと……そういうことですね？」
「……仰る通りです」
「殿下は、今どこに？」
「お待ち下さい」

凛とした侍女の声が、そのまま円滑に進もうとしていた話を遮った。視線を向ければ、一対の淡い紫は剣呑に、かつ冷たく煌めいている。思わず息を詰めてしまった。こんな彼女の表情を、見たことがない。

「リー、ファ？」
「殿下が重傷を負われたという話は分かりますわ。けれどどうして今、ルイリ様の能力（ちから）が必要なのです？　重傷とはいえ、普段ならば時間をかけてでも治していけば良いだけのこと。ルイリ様が必要である理由は、他にあるのでございましょう？」

鋭い指摘に、レンは思わず苦々しい表情を浮かべた。ルイリは他の単語に首を傾げる。普段……とは、どういう意味だろうか。その疑問の視線を履き違えたのか、レンは目を伏せて息を吐いた。

「……リーファの言う通りです。本来ならば、俺がルイリ嬢にこうして頼むことはない」

だが、と一度言葉を区切ってから。

「暁夜祭（ぎょうやさい）が、近づいている」

「……暁夜、祭」

ルイリはぽつりと反芻した。

ここ最近リーファ達や姫君の会話、桃香宮全体で話題に上っている単語だ。

暁夜祭。

それはシェリング皇国が一年に一度、国の総力を挙げて取り組む三日間の祭典。この一年間、国が何事もなく平和に過ごす事が出来たことを創生の神々に感謝するという名目で、その期間のみ白蓮宮を解放する。

その日の為に呼び寄せる吟遊詩人や旅芸人の腕前は中々のものらしく、「今回は誰に褒美を上げようかしら」と側室の一人が浮かれていたのを思い出した。

大国の祭典とだけあって、招待客には隣国の国王及び王太子、広大な敷地を治める領主、王族の血統を継ぐ貴族など、総々たる顔ぶれが並ぶ。

「暁夜祭は、周囲との関係をより強化する絶好の機会となるのです。ましてやあいつは皇太子……つまり皇帝陛下の後継だ。あのような場では、ある意味陛下よりも重要な立場と言えましょう」

その彼が祭典に出られないとなると、確実に周囲の不審を煽る。疑問を芽生えさせる火種になるのだ。皇国の次期後継者ともあろう者が姿を現さないとは何事だ、そんな者を皇太子に据える国は一体どうなっているのか――と。

「一度の欠席、たったそれだけで……皇太子どころか、皇国の信頼を下げることにまで繋がってしまう」

沈黙するルイリの横で、リーファが非難の声を上げた。

「朝廷の権威を保つ為、ルイリ様に殿下の傷を治せと？　なんて都合の良い……ルイリ様は道具ではないのですよ！？」

「最初に言った筈だ。無礼を承知で申し上げる、と」

無機質な声を発する側近を睨みつけながら、それでもリーファは更に食い下がろうとした。

「暁夜祭が開催されるのは今より二週間後。その間ならば、完治はできずとも式典に出席する程度にはなれるのではございませんか？」

「無理だ。医者の見立てでは、意識が戻るのは早くても一週間。……それから起き上がれるようになるまでは、さらに二週間かかる。暁夜祭なんか、とっくに終わってるんだ」

「けれど、殿下ならば」

「仮に起き上がれたとしても。式典の最中に倒れたりしたら終わりだ、何もかも」

整然と並べられた事実に歯噛みする。

「ルイリ嬢」

レンは改めて、ルイリを見た。灰白色の瞳は焦りに歪んでいる。

「皇太子に就任してから、あいつは完璧だった。常に完璧であろうとし、実際そうなった。何一つボロは出さなかったんです。……『あの事件』以来、ずっと」

『あの事件』？　どこか気になる言い回しだが、それを聞けるような雰囲気ではなかった。

「怪我をするのがこの時期でなければ良かった。だが今は、状況が普段とはあまりにも違う。どんなに隠し通しても、一度露見してしまえば今まであいつが積み上げてきたものが全て無駄になる。最悪――皇太子としてやっていけなくなるかもしれない」

言って、青年は暗く目を伏せた。

「あいつは皇太子でなければならない。そうでなくなれば、――あいつはもう生きていけない」

目を瞠って黙するルイリに、レンは膝を折った。

「ルイリ＝レティシア様。どうぞその慈悲深い御心でお聞き願いたい。我が主……イアン＝シェリング皇太子殿下を、救ってはいただけませんか」

「レンさん」

普段上司であるイアンに砕けた口調を使っているのに、いざ彼が危機に瀕すると側室にさえ膝を折る。日常はどれだけ軽薄に相対していようとも、レンがいかにイアンに対して忠誠を誓っているのかが知れた。

瞼の裏に怜悧な美貌がよみがえった。あれほどまでに他者を疎み、常に独りであろうとする青年。全てを拒絶する背中に背負うものは、一体どれほどの重みがあるのだろうか。

「……分かりました」

「ルイリ様！？」

微かに、だが確かに了承を示したルイリに驚愕の声を上げたのは、他でもないリーファだ。

「よろしいのですか！？　ルイリ様は、利用されようとしているのでございますよ！？」

「いいの」

利用、という言葉は不快に思わなかった。いやむしろ、これでようやく彼に『必要』とされたのではないか。

「私が……役に立てるのなら」

少なくとも、彼の傷が癒せる能力（ちから）を、ルイリは持っているのだ。逆に言えばそれしかできないが、それで何らかの問題が解決するのならば、喜んで行こう。

「目の前に救える命があるならば、私はそれを救うだけ」

たとえそれが、偽善だと思われても。

レンは少し安堵したように顔を上げて、すぐに表情を引き締めた。

「あいつは今、あの屋敷に安置されています。……行きましょう。移動術を使う異能者が、紫芳宮で待っている」

褐色の青年を先頭に、側室と侍女は東屋を後にした。

その一部始終を、何者かが見ていたことには気付かずに。

27．　理不尽な懇願（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでしたぁっ！！　しかもあまり進展がない！

予想以上にレンが出張りやがりました。お前、どれだけ引き伸ばせば気が済むんだ……？

よく考えれば六月初の更新ですね。お待たせして申し訳ありません。……待ってくださっている方がいらっしゃれば舞い上がります。

次の話は、一週間なんて空かずに更新できると思います！　願わくば土日に。

ここまで読んで下さった方、新たにお気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます！　ただひたすら、それを糧に生きていきます！

28. 微かな期待

三日間（眠っていた時間も加えると四日間）だけ滞在した屋敷の外観を見るのは初めてかもしれない。確かに広大だが、皇太子の屋敷、という肩書きにしては少々飾り気がない気がした。

あの後、ルイリとリーファは秘密裏に桃香宮を抜けて、レンの案内で紫芳宮の一角にまで赴いた。そこには討伐隊の一人という男が待っていた。レン曰く空間移動の能力を持っている男なのだそうだ。実際彼はその能力を駆使し、ルイリ等三人を一瞬のうちにここまで移動させた。

しばらく屋敷を見上げていたルイリはぽつりと呟いた。

「あの、レンさん」

「何か？」

「……ゼルバーさんの遺体は……残っていますか？」

思ってもみなかった発言のようで、レンのみならずリーファまでもが瞠目した。

「それはまた……なぜ？」

「いえ、絶対にとは言わないのですが……見ておきたくて」

頚動脈を掻っ切った死体を見たがる淑女も珍しい。レンはしばらく信じられないものを見るようにルイリを見下ろしていたが、すぐに頷いた。

「今黒黎宮（こくれいきゅう）へ送ろうとしていました。こちらへどうぞ」

そう言ってレンが誘導したのは、屋敷の裏手にある森の入り口だった。そこには人型らしきものが黒い布をかけられて横に倒れていた。周りには数人の騎士姿の男達がいて、ルイリとリーファの姿を認めた瞬間驚いたように目が見開かれる。

「あぁ丁度良かった。ちょっと待ってくれ」

今まさに運ぼうとしていた男達を引き止めてレンは静かに歩み寄り、布の端を静かに持った。いいですか、という目線を受けて、ルイリは軽く頷く。それを確認してから、レンは緩慢な動作で布を捲（まく）った。

「！」

軽く息を呑んだのは、ルイリではなくリーファだった。ルイリは震えてしまいそうになる身体を抑え、その場に踏みとどまる。

黒い布が顔の辺りだけ捲られて、顔に赤黒い汚れをつけたままで目を閉じる侍従が姿を現した。荒々しく男らしい顔立ちの彼の瞼は固く閉じられ、二度と開けられないことを物語っている。首筋の右側は耳の付け根辺りから鎖骨にかけて、かなり深くまで裂けていた。

「血は止まりましたが……傷は塞がりませんでした。当然なんですけどね」

レンは微苦笑を滲ませた。死した同胞を見つめる視線には追悼が宿っている。ルイリは察した。あの眩しい、豪快な笑いを見ることはもうできない。

「……治してあげられなくてごめんなさい」

息を引き取ったゼルバーの脇、草むらに膝をついた。

ルイリの能力（ちから）は、死人には効かない。心臓が動きを止めた後の傷痕は、どうあっても消すことができない。せめて、綺麗な状態で埋葬してあげたかったのに。

「どうか、……来世では倖せに」

指を組んで祈りを捧げるその姿は、まさに神に仕える天使、もしくは聖女そのもの。たかが騎士一人の死を悼むこの儚げな少女は一体何者なのかと、その場にいた男達はそれぞれの顔を見合わせた。

レンは目を閉じるルイリの横に膝をつき、優しく微笑する。

「ルイリ様のそのお言葉が、ゼルバーへの何よりの手向（た）けですよ。……悪かったな、運んでくれ」

副団長の呼びかけで、立ち尽くしていた男達ははっと我に帰ってゼルバーの体を持ち上げ、運んでいく。そのまま馬車の方向へ去っていくのを眺めながら、ルイリは細く息をついた。

（ただの……自己満足よね）

来世では倖せに、だなんて、偽善以外で取られることなどないだろう。それでも願わずにいられなかった。ほんの少しの時間でも、自分と関わった人が死んでしまったのだから。

「それではルイリ様、こちらへ」

レンの案内で屋敷内に入り、大広間を抜けて廊下を歩く。滞在したとはいえ三日間だけだったし、必要以上に部屋から出なかったのでまるで初めて来たような感覚だ。

レンは怪我を負う身にもかかわらずきびきびと身体を動かし、一つの扉の前で止まった。二回扉を叩き、軽い応答の声が聞こえたのを確認してからドアノブを回した。一つの部屋とは思えないほど広い面積が視界を占める。室内には数人の人間が動いていた。

その中の一人、部屋中を忙しそうに歩き回っていた白衣の青年がぴたりと止まった。髪と同じ薄茶色の瞳が、ルイリの姿を認めた瞬間驚いたように瞠られる。

「……ルイリ様？」

「イゼル、さん」

眼鏡をかけてはいるものの、彼は間違いなく侍医ダイエンの助手、イゼルであった。あれから会っていなかったから、数週間振りの再会だ。

「イゼル様だけですの？　ダイエン様は……」

「先生がここまで来ると噂が広まりそうですからね。秘密裏に、という依頼をレンさんから受けたので、ここにいるのは僕だけです」

「イゼルはダイ爺さんの助手の中でも飛び抜けて腕が立つからな」

「お世辞をどうも」

言いながらも、イゼルは紙を傍らの男に手渡したり、何やら忙しく動いている。

「しかしまぁ、代理であるにしろ、皇太子殿下の治療を一任されたんです。そろそろ先生から独立する頃かなと考えてますけど」

年若い医師は、少しおかしそうに微笑んだ。場の空気を和ませようとしてくれたのかもしれない。

「しかし……ルイリ様が来たってことは、僕達はお払い箱ですかね」

少々苦い表情を浮かべて言う。何だかルイリは申し訳なくなった。きっと迅速な対応で治療をしていたのだろう。それを根底から覆すような存在が現れれば、複雑な思いがするのは無理も無い。表情が顔に出てしまったのか、ルイリを見てイゼルは慌てて手を振った。

「責めてるわけじゃありませんよ。ここに来た時、レンさんがいない時点でそういうことだろうなとは思ってたので」

安心させる声音で言ってから、イゼルは医師達に退室するように促した。彼女の能力（ちから）を見せるわけにはいかないと判断した故（ゆえ）だろう。彼らは興味深そうな目でルイリを見つめながら、ゆっくりと退室していく。

数人の白衣姿がいなくなった後、イゼルは少々語調を低くして口を開く。

「暁夜祭に、殿下は必要不可欠の存在ですからね。まぁ、皇国としては『皇太子』を求めてるんでしょうけど」

淡々と言いながらも、色素の薄い瞳は責めるような色を宿してレンを見つめていた。それをものともしない様子で受け止め、レンはあっさりと言い返す。

「俺達は違うぜ？　さっさとあいつに治ってもらわないと書類が溜まって仕方がない」

「……ほんと、いい性格してますよねぇ、レンさん」

諦めた風情で溜息をつき、イゼルは丁寧な動作でルイリの手をとった。

「殿下はそこの寝台（ベッド）に寝かせています。包帯は巻いていますが少々刺激は強いかと……大丈夫ですか？」

刺激、というのはどういうことなのか。恐らく怪我の程度のことを言っているのだろうが、その点に関しては全く問題がなかった。そもそも怪我をしていると認識しなければルイリの唄は効力を示さない。まずは彼の状態を見なければ。そう思いながらうなずく。

「はい。血を見るのは、全く」

「……いや、そういうことじゃなくてですね。いやそれもあるんですけど……」

何やら困り果てた様子で眉根を寄せるイゼル。訳が分からないルイリは説明を求めるように首を傾げる。

「えーっとですね。まず、殿下は肩から腰にかけて負傷していて」

「はい」

「当然、素肌に直に包帯を巻いていて、もちろんそのままでいるわけなんですが」

「？　……はい」

「つまり、その……上着を着ていないということなんですよ？」

ルイリはいよいよ本気で眉根を寄せた。それが一体なんだと言うのだろう。それだからイアンを治療するのを断念すると言うとでも思っているのだろうか。ルイリにとって重要なのはいかに自分が相

手を治せるかであり、姿は特に頓着はしない……のだが。

「……あぁ、なるほど。いや、申し訳ありません。貴女がそんなことに興奮するわけがないですね」

少々自己嫌悪を交えた溜息と共に紡がれた言葉は、ルイリの耳までは届かなかった。届けようとする気はなかったようだ。

「では、こちらへ」

部屋の入り口付近で立ち止まっていたルイリを優しく誘導する。その後ろからレンが静かに歩いてくるのを感じる。イゼルの身体に隠されていたこともあって、努めて目を向けないようにしていた寝台が、視界を占める。

そしてその上で目を閉じる、――金髪の青年。

「……っ！」

思わず唇から零れそうになった悲鳴を両手で押さえることで押しとどめ、ルイリは目を見開いた。

酷い状態、そうとしか言いようがなかった。寝台に横たわるイアンは上半身には何も纏わず、しかし肌の色をほとんど確認できないほどに包帯が巻かれている。真っ白で清潔な包帯、とは言いがたい。肩から腰に斜めにかけて、赤い染みが滲んでいた。

「これでも何度か取り替えたんですが……血止めをしても間に合わなくて」

横で悄然と呟く声を耳にしながら、ルイリはゆっくりとイゼルの

手を離れて枕元まで近づいた。
瞼を閉じてもなお端整な顔立ちは、しかし青ざめている。太陽の光を紡いだかのような金髪の毛先には、赤黒い斑模様が散っていた。剣を振り下ろされたときに咄嗟に己を腕で庇ったのだろう、左腕にも幾重もの包帯が巻かれていた。

（……生きてる、のよね？）

彼の額に浮かぶ汗や短い呼吸で一目瞭然だというのに、そう思えて仕方がなかった。人間とは、これほどまでに深手を負っても生きているものなのか。――もしかすると、彼だからこそ、という可能性もあるかもしれない。
既に死したゼルバーを見た時よりも更に恐ろしい恐怖が、ルイリの足元に絡みついた。

「ルイリ様、顔色が……やはりご無理をなされてはいけませんわ」

いつの間にか隣に立ってくれていたリーファが、心配そうに覗き込んできた。藤色の瞳が案じる色を宿しているのを見て、ルイリは慌てて首を振った。

「大丈夫。少し、びっくりしただけ」

言ってから、ゆっくりと息を吸った。そして、レン、リーファ、イゼルを順番に見る。

「多分、支障はないと思いますが……私の能力が必要以上に影響を及ぼすかもしれません。……席を外していただけますか？」

おずおずとした申し出に、三人は当然のように頷いた。

「確かに、最低限の人数の方が効力が高まるでしょうね」
「最初からそのつもりでしたよ。僕らは少し向こうの部屋の方で待機しておきます」
「ルイリ様のお邪魔になるようなことは致しませんわ」
けれど！　と、リーファは釘を刺すような口調で声を上げた。
「もし万が一殿下がお目覚めになり、何か不穏な動きをされましたら……恥じらいも遠慮も捨てて大声で叫んでくださいませね？　すぐに飛んで参りますゆえ」
薄紫の双眸は、いつにも増して燃え上がっている。ルイリは気圧されながら、それでも首を縦に振った。
「では、俺達は失礼します。あ、最後にルイリ嬢」
レンは淡く微笑んだ。瞬きをする側室の少女の足元で膝を折り、頭(こうべ)を垂れる。
「今回のご協力、真に感謝申し上げる。……『実はね、俺は予感してるんですよ』
始めの口上は他の二人に聞こえるほどの声量で。そして、いきなり脳内に【声】が響いたのでルイリは素直に表情を顔に出してしまった。褐色の青年は悪戯っぽく、自分の唇に指を当てる。
『どうかこのまま聞いて下さい。ルイリ嬢、俺はイアン(こいつ)が貴女を側室に選んだこと、それは偶然じゃないと思っています』
『……え？』

レンの用意してくれた回線に乗って、ルイリも頭の中で返答を返した。イゼルとリーファの表情からして、二人には【声】が届いていないようだ。しかし特に急かしもせず、ルイリとレンの様子を見守っている。

『貴女が治癒の能力を有しているのも、あの場所でこいつを治したのも、今貴女がこいつの側室であるのも。全てはなるべくしてなったことなんじゃないかな、と思うんですよ』

『どういう……ことですか？』

レンは、もう一度笑う。とても穏やかに。

『ルイリ嬢。貴女にこいつは救われる……そんな気がして、ならないんです』

返答する言葉もないルイリを軽く見返してから、レンは立ち上がった。

「いやぁ、待たせて悪かった。じゃあ行こう」

戸口に立っていた青年医師と侍女を促し、側近はそれ以上ルイリに視線も向けずに部屋を去った。室内には、釈然としないルイリと眠り込むイアンだけが残される。

少しの間レンの言葉の意味を考えていたルイリだが、今はそんな悠長な事をしている場合ではないと思い直した。改めて枕元に移動して、目を閉じる皇太子を見つめた。

「……」

硬く閉ざされている瞼の奥に隠されているのは、何よりも印象に残る鮮やかな紅。

――貴女にこいつは救われる

それは、つまり……

私が、殿下を救う、ということ？

一体精神的にという意味なのか、ただ単に治癒の能力（ちから）を言われたのか。

どちらにせよ、全く訳が分からない宣言をされたルイリは困惑した。そんなこと、考えたこともなかったからだ。いや、彼を目の前にして真っ先に救いたいと思う人間も少ないだろう。それほどまでに彼は必要以上の協力を嫌い、誰の助けも借りずにここまでのし上がった来たのだから。そもそも、彼が誰かに救われる図など……全く想像できない。

（……でも）

ひとまず、今のルイリにはすべきことがある。

ルイリはそっと喉元に指を添えて、すぅっと息を吸った。

† † † † †

……、

熱い。

全身から熱が発せられているかのように、とにかく熱かった。だというのに指一本動かすことが出来ない。少し動かそうとしただけで、身体に突き刺すような痛みがはしる。

呼吸をする喉、漏らす息さえ燃えているかのようだ。息をしなければ生きていけないのに、その行為がひどく億劫だった。心臓が鼓動を刻むたびに、全身が痛む。

どうしてこんな状況になっているのか。ぼんやりと考えて、あぁと結論に行き着いた。

斬られたのだ。侍従であり騎士団の一人であった男に。容赦の欠片もなく。あれは一体どうなったのだろうか。自分を斬ったのだから無事ではいられまい。打ち首かもしくは――その場で自害したか。

考えながら、唇を嘲笑に歪めようとした。しかしその些細な動きさえひどい痛みをもよおして、全身が疼く。

何度か経験したことのある感覚だ。死の淵に沈もうとしている様子はないのに、壮絶な痛みに身体を動かすことも出来ない、ぬるま湯のような状態。いっそあの時死んでしまえたら、どれほど楽だっただろうか。

……瞬間。

水晶の鈴のような、音が聞こえた。

（……？）

途切れ途切れに、しかし確かに聞こえるそれは――唄。

耳に滑り込んでいく唄は、時間をかければかけるほど自分の身体から熱を奪っていった。自らを燃やし尽くさんとしていた熱は鎮まり、疼くように広がっていた痛みが消えていく。全身を壊すとばかりに全力疾走していた心臓も、静かに鼓動を刻み出した。

幾分か楽になった呼吸をしてから、ほんの少し、うっすらとだけ目を開けた。

亜麻色の髪。色づく頬。桃色の唇。華奢な身体を覆う霞がかった燐光（りんこう）。

そして己でも気付かないまま心が凪ぐ――深い深い、碧の瞳。

（お前は、）

口を開こうとしたが、緩やかに忍び寄る睡魔に抗えず。全身が脱力するのを感じながら、再びその瞼を閉じた。

†　†　†　†　†

栄華を謳う鷹が飛ぶ　背徳の蛇は闇へと帰る

黄昏に背を向けて　暁を見つめて
貴方は私の下を離れ　戦場（いくさば）へ向かうのでありましょう
ほんの少し羽根を休めて　大空へ飛び立つ鳥のように

私は貴方をずっと待って　安らぎと共に迎えましょう
何も出来ないこの身を捧げて　神に祈り続けましょう

偉大なる地　遥かなる空　母なる海　その全てに

地よ　空よ　海よ
この世界に満ちる全ての自然の恩恵よ

どうか彼（か）の人の進む道に　大いなる光があらんことを

日常から離れ、戦いに向かう者への祈りを込めた唄。ルイリが曲目を決めているわけではない。唄う体勢を作れば、自然と唇が旋律を紡ぎだすのだ。

眠るたった一人の観客に向けて、高く澄み渡った歌声が響く。部屋全体に光が溢れたかのように明るくなった。

亜麻色の髪がきらきらと輝く。いつも若葉色の明るい翠を写す瞳は、深い碧へと沈む。何物も侵せない海の水底（みなそこ）のように、揺らがない。細い身体を取り巻く燐光は、いつもよりもその輝きを濃くしていた。

青年の額に滲んでいた脂汗が引いていき、短く不規則になってい

た呼吸も規則的にされるようになる。白い包帯にじわりと滲もうとしていた赤い染みは、その広がりをやめた。

最後の音まで丁寧に唄い、そして心地の良い余韻を残しながら――ルイリは唄い終える。唄い終えた後の達成感は格別だ。最近はあまり唄わなかったし、唄ったとしても短く即興的な唄だったから久しぶりにここまで長く唄った気がする。独特の喉の温かみにほぅ、と息をつき、ルイリはそっと目線を下げて青年を見た。

少し苦しげに寄せられていた眉根の皺はなくなっていた。薄い唇が零す呼吸もゆっくりとした律動を保っている。どうやら傷を受けた際の苦痛は取り払われたようで、無意識に肩を落とす。

しかし首元の方に視線をずらして包帯に覆われていない部分の素肌を見ると、そこには少々変色した傷痕が残っていた。

（うそ……痕を残してしまったの？）

ルイリは急激に不安に駆られた。自分の能力（ちから）が万全でないということは何となく分かっている。しかしこれは自分の持つ唯一の能力（ちから）なのだ。出来ることなら、痕も残さずに完璧に治したい。傷が癒えて痛みが引いたとて、痕が残ってしまえば後々痛みを引き起こす原因になるかもしれない。

じっと、起きない様子のイアンを見つめる。少し視線をずらして、彼の上半身に巻かれる包帯を。

「……」

もう一度彼の顔を見る。静かに目を閉じる端整な美貌は、起きる様子はない。どうやら随分と眠りが深いようだ。

……今なら。

視界の隅に、イゼルが置き忘れたのであろう医療用の鋏（はさみ）が映った。細い造りになっているそれは、包帯を切るためのもののようで。好都合、と思う自分はおかしいだろうかと思う。しかし気になって仕方がなかった。

それをそっと取ってから、もう一度枕元に戻る。鋏と、端整な顔を見比べて、ゆっくりと瞬きをした。

ここまで血が滲んでいる包帯は、恐らくもう使わないだろう。切っても特に支障はなさそうだ。もしまだ　傷跡が残っているのであれば、再度簡潔な唄を唄えばいい。

自分勝手な理屈で自らを納得させてから、ルイリはそっと肩に回る包帯に鋏を入れた。襷（たすき）のように背中へ回されている包帯を繊維の方向に逆らって、肩の線に沿って切っていく。肌を傷つけないよう細心の注意を払いながら切り進めれば、隠れていた鎖骨が露になる。

そこで――ルイリは唐突に、手を止めた。

「……え……？」

28．　微かな期待（後書き）

ごめんなさいすいませんっ！！　土日にとか言っていながら、遅れてしまいました。本当に申し訳ありません！

えーと、内容について少々触れさせていただきますと……

……誤解の無いように言い添えておきますが、ルイリは超絶鈍いだけです。傷を見たかっただけであって、何か他意があって包帯をざっくざっくと切ったわけではありません。他の誰もがやれないことをやれるのがルイリなんです。

次回も、一週間なんて期間は置かずに更新できるといいなと思っています！

ここまで読んで下さった方、新たにお気に入り登録までして下さった方、本当にありがとうございます！

29. 知ってしまった傷　芽生えてしまった感情

しばらく、三人分の足音のみが続いていた。

「……何を言ったんですか？」

それをおもむろに破ったのは、剣呑な色を隠そうともしない青年医師の声。その問いかけを受けた褐色の青年は軽い動作で視線を流した。

「何が？」

「はぐらかさないで下さい。レンさん、さっきルイリ様に【声】飛ばしたでしょう。あの時何を言ったのかって聞いてるんです」

一分にも満たない沈黙だったが、ルイリとレンが見つめ合っている時点で、あぁ【声】を届けてるんだなとは思っていた。しかし不審に思ったのは【声】を受け取った彼女の表情だ。最後に垣間見た顔には、純粋な驚きが広がっていた。

「いや、単なる世間話を」

「言い訳が苦しすぎる上にわざとらしすぎますよ。当然、フィレルさんも気付いてましたよね？」

「愚問ですわ」

「て、ことです。何か余計なこと言ってたらフィレルさんからぶっ飛ばされますよ？」

さらりと宣言してやれば、レンは思いっきり渋い表情を作った。

「さっきお前が俺にいった台詞、そっくりそのまま返してやるよ。いい性格してるぜ」
「どうも」

イゼルは不敵な微笑を浮かべた。受け取り手によるが、イゼルにとってその言葉は間違いなく褒め言葉だ。

「で？　何を言ったんです」

追及の手を緩めないイゼルに諦めたのか、レンは少々疲れた様子の溜息を吐いた。リーファはその様子を、凪いだ藤色の双眸で見つめている。

「いや、な。……勝手な期待を、押し付けただけだよ」
「期待」

レンらしからぬ単語を復唱して、イゼルとリーファはお互いの顔を見合わせた。皇太子に対しても不遜な態度を崩さず、常に自分に自信を持つ彼の言葉とは思えない。

「レン様がどなたかに期待をするという事実が、驚きですわ」
「リーファ、何気に貶してるよな？　さりげなく貶してるよな？　泣いていいか、君の胸で」
「……えぇよろしいですわよ？　その後すぐに地獄を御覧になりたいならば」

にっこりと美しく笑う侍女の背後には、果てしなく寒い吹雪が吹き荒れている。イゼルは思わず頬をひくつかせた。やばい、本気でキレてる。

「……話が脱線して仕方ないので、とりあえず続けますよ。期待ってどういうことです？」
「別に。そのまんまの意味だよ」
言いながら、レンは寂しそうに笑った。
「俺はさ、どうにかあいつの力になってやろうとしても、結局は『皇太子』に対しての力添えしかできない。あいつ自身の力になろうとしても、拒まれる」
灰色の瞳が、遠くを見るように揺れる。太陽は少し西に傾いたが、窓から差し込む陽光はまだ眩しい。
「だってあいつさぁ、まるで人間じゃないみたいだから。あれだけ他人の感情の機微には鋭いくせに、自分の事となると致命的に疎い。……まるで、心を持ってない人形みたいだろ？」
イゼルとリーファは、全く口を挟まずにそれを聞き続けた。むろん、口を挟もうとも思わなかった。滔々と語るレンは笑っているが、それは己を保つ為だろう、とイゼルは推測する。これを沈んだ表情で言っていたら、滅入ってしまうに違いないから。
「けどさ」と、レンは少し声を明るくした。
「何て言うのかな……ルイリ嬢は、容姿だけじゃない、他の人と違うって感じたんだ」
イゼルは軽く目を瞠った。口にこそ出さなかったが、イゼルも同じようなことを考えていたからだ。
亜麻色の髪と碧の瞳は確かに珍しい。宮殿入りした最初の一週間

ほどは、滅多に宮殿に行かないイゼルにさえもその噂は届いた。そこに貴族出身でないという事実も重なって、一時はかなり物議を醸したものだ。しかしはっきり言わせて貰えば、始めのうちに彼女と会っていたイゼルにとってはそんな噂取るに足らないものだった。あの場で歌声を聞き、そしてあんな視線で信じろと言われればそれ以外の真実などありえない。そもそも、彼女はイゼルの命の恩人なのだ。下らない噂話など耳にも入らなかった。

穢れを知らない無垢な少女。イゼルはあのような少女を今まで見たことが無かった。

「奇遇……ですわね。私もそう感じていましたわ」

少し不服そうに、しかししっかりとリーファが進言する。俯き加減に言ったのは、レンと意見が合ったという事実が気に入らなかったからだろう。

「僕もです」

「……だよな。結局、俺達が考えてることは同じだったわけだ」

彼らが考えていることは、ひどく身勝手で、それでいて押し付けがましい願いに過ぎない。こうしてレンが彼女を連れて来たのも、医師であるイゼルがあっさりと身を引いたのも、抗議をしながらリーファが此処へと付いて来たのも。

全ては、感情を凍てつかせた皇太子を何らかの形で変えてくれるかもしれない、あの頑是(がんぜ)ない側室に対する期待の表れだ。

「我ながら思いますよ。これほど強引な要求もない」

イゼルはうんざりと溜息をついた。誰にでも向けられるあの純粋な心が、必ずしもイアンにも向けられるとは限らない。しかし彼ら

はそれを信じて疑わなかった。それが彼に対して、救いになるのだということを。

「勝手だよな、俺達って」

沈んだレンの声に応じる声は上がらない。

側近、侍女、医師の三人は、自分達がいかに重い荷重をあの少女に負わせようとしているのかを考えて、ただ暗い表情を浮かべた。

†　†　†　†　†

息を呑む。それしかできない。目の前に広がっているものが現実のものだと、認識したくはなかった。

「何……これ……」

首筋から鎖骨にかけて、ほんの僅かしか見えないのに。

視界いっぱいに広がるのは、――彼の肌に浮かぶ、変色した傷痕の数々。

それはルイリが癒した傷とは関係ない、過去に刻まれた歪な痕。

しばらく言葉も無く見つめていたルイリに、ある予感が浮かぶ。

これほどの傷痕が、この些細な部分だけに局地的に残っているとは

考えにくい。

（まさか……他にも？）

我ながら恐ろしい仮説が立って、全力で否定しようとした。しかしできなかった。少し思い当たったことが、急激に現実味を帯びてきたからだ。確かめなければ、と、頭のどこかが叫ぶ。本当にそうなのか確かめなければ。

ルイリはゆっくりと鋏を持ち直して、彼の胸元から腹まで一直線に包帯を切っていった。進めるごとに、露になっていく肌を見るごとに、強張ってしまう全身を動かしながら。思わず震えてしまいそうになる手を抑えながら。

やがて——乾いた血液の染み付いた包帯は強制的に役目を終え、彼の細身ながらも鍛え抜かれた前半身が露になり。

「……どうして」

その声を絞り出すだけで、やっとだった。それっきり、絶句するほかは無かった。

嫌な予感が当たってしまったのだ。

彼の全身には、夥(おびただ)しい量の傷痕が広がっていた。血こそ出ていないが、それは浅いものから深いもの、引き攣(つ)れたものまで多岐に渡る。あまりにも所狭しと刻まれているので、傷が無い箇所を探す方が遥かに困難だった。鏤(ちりば)められた痛々しい過去の足跡は、目を背けてしまいそうになる。

呼吸が上手くできない。全身が震えるのを自覚しながら、指先を鎖骨の下の青紫色をした痣に滑らせる。

これは最近出来た傷だろうか。その横には火傷のような痕、更に

その下には肉を抉られたと思しき痕跡。鋭利な爪、もしくは刃物による傷痕は、まるで当たり前のように点々と散らばっている。治療はされたようだが、それでも残っているという事実に、負った傷の深さは容易に想像できた。

中には、死をも連想させるものまで。

それすら覆うように、見える範囲全てに幾つもの切り傷が重なっている。すぐに治療をすれば、痕も残らなかったと推測できる微々たるもの。しかし満足に治療した様子は見受けられない。捨て置かれたと表現してもいいのではないだろうか。まるで、――このような怪我、気に留める必要も無いと言っているかのようだ。

痛くない傷などないのに。

「……」

言葉が上手く出て来ない。喉が、声を出す方法を忘れてしまったのか？

残る傷は、古いものから新しいものまで様々だ。中には魔物によるものではない、あからさまに人為的な傷さえあった。

ルイリの中で、ある記憶が閃いた。数日前、自室で彼に責められて、責任を取れと押し倒されて――はだけた衣服から見えた、紫色の何か。

どうして、どうして気付かなかったのだろう。どうしてあれ以上、追及できなかったのだろう。ルイリは確かに彼の傷を見たはずだったのに。あの時に、この傷の存在を気付くべきだった。いや、気付いていた。しかし一瞬だけ見たそれはとても不確定で、結局ルイリはこの数日の間に見間違いだったと決めつけてしまったのだ。

「……殿下」

皇太子殿下。第三皇子殿下。

彼の兄弟以外、殆どの人々が彼をそう呼ぶ。羨望をこめて、憧憬を込めて、あるいは畏怖をこめて。そう――確かに、そうだ。彼は有能な皇太子で、誰よりも将来を約束され、誰からも尊敬されるべき存在で。誰よりも誇らしく生きていく人間のはずだ。

だが……これがその答えなのか？　人々の尊敬を集める気高き皇太子は、傷だらけになる必要があるのだろうか？

――まさか帰ってくるとはな

脳裏に突然、初めて宮殿に赴いたときの出来事がよみがえった。ひどくうんざりとして愚痴を漏らしていた、兵士達。

――無傷で戻って来るなんざ

――やっぱ、化け物だな

化け物――化け物？　皇太子が、化け物とはどういうことだ？からからに渇いた喉から漏れるのは、短い呼吸だけだ。たくさんの疑問が頭の中で浮かんでは消え、それの対象である青年は深い眠りの中にある。

彼は瞼を開かない。端整な面差しは、起きている時よりも随分若く見えた。二十代後半と思っていたが、こうして見るとルイリと五、六ほど違うかどうかくらいだ。静かに目を閉じている表情は、安らかからは程遠く。

あぁ彼は、眠っている時でさえ穏やかに過ごせないのだ。

「……何……？」

呆然と、呟く。こんな傷を抱えてまで、他者を徹底的に排除してまで、幾人もの人間に疎ましがられてまで。そうまでして、彼が持つ称号には。

「皇太子って……何なの……」

一体、どれほどの価値があるのだろう。

ルイリは、彼がそれを自ら望んで手に入れたものだと思っていた。第三皇子という身分ながらも他の追随を許さない実力で地位を手に入れた、そう信じて疑わなかった。兄であるはずのゼストをも超えて勝ち取った、栄光の位。たとえ誰かに妬まれたとて、彼は少しも意に介さず、ただ己の世界を作り上げていったのだと。そう思っていたのに、今の立場は、彼を幸福にしているわけではなさそうで。

万能の皇太子。次期賢帝。大国の未来。

それらは全て、彼を指す代名詞。

しかしそんなものの前に。

「……さ……ま」

ルイリは震える唇を開いた。一度も口にしたことの無い、単語を発するために。だって彼は、代名詞などではない、肩書きなどではない、たった一つの名前を持っているはずだ。

「……イアン、様」

イアン＝シェリングという、一人の人間であるはずだ。

初めてその名を口にした瞬間、すぅっと、ルイリの頬に一筋の雫が滑った。今更ながら改めて――それが彼の名前だと認識した。

そしてようやく、気付いた。目の前の青年が抱える心の傷は、表面に現れたこの傷跡の数々の比ではない。

どうして彼が他者を拒み、疑うのか。

それは、他者を受け入れられず、信じられないからだ。彼は万人の手に入れることの出来ない地位を得、その代償として、万人が享受する当たり前の『幸福(しあわせ)』を失った。その出来事が、そして数多の傷が、彼を闇へと引きずってきたのだろう。一条の光も差さない、暗黒へと。そして彼は己の全てを封じ込め、己を取り巻く全てと断絶して、闇に沈んでしまった。

決して癒えることのない、心に刻まれた傷と共に。

「……」

癒したい、と思った。内に秘めた傷を。暗黒が巣食う心を。誰にも救いを求めないこの青年を、癒したいと思った。

知りたい、と思った。傷を秘める理由を。なぜそこまで深く傷ついているのかを。過去の彼に起こり、そして今の彼を作り上げてしまった原因を、知りたいと思った。

だが、そう思ったところで。

「私に……何が、出来るの」

出来ることといえば、目に見える傷を治すだけだ。ルイリはそれ以外の能力(ちから)を有していない。

理解する。私には、――何も出来ない。

全ての傷を癒しても、全ての傷痕を失くしても、何一つ解決にはなりやしない。上辺の傷を治したところで、何の意味もないのだ。彼の心は今も絶えず、血を流し続けているのだから。

「……っ」

閉じたはずの唇から嗚咽が漏れそうになり、反射的に口許を押さえる。それでも涙は零れて、雫は彼の目尻に落ちた。こめかみを伝う様は、まるで彼自身が涙しているかのよう。

自分がこれほど無力だと思い知ったのは初めてだった。彼に対して何も出来ないとわかっているのに。それでも何か救える手立てはないかと考えている自分は、何と浅ましいことか。

けれどルイリは知ってしまった。冷酷な皇太子の裡に潜む、底の無い闇を。そして思ってしまった。誰よりも孤独である彼の救いになりたいと。

彼を――知りたいと。

けれどそれは、決して受け入れられることのない思いだ。干渉を何よりも嫌う彼は、目を覚ませばきっとルイリを拒み、疎むだろう。そして表面上の傷を消すことしか出来ない、忌まわしい能力を持つ娘を蔑むに違いない。

だから。

「……イアン様」

ルイリは寝台の上で投げ出される大きな手をそっと取り、弱く握った。その手は、血が通っていないのかと思うほど冷たい。固く閉じられた拳を包み込むように、両手で握る。

これは、ただ逃げているだけだ。彼が起きない今ならば、拒まれ

る心配は無いのだから。

「イアン様」

この手に、どれほどのものが握られているのだろう。この手を、どれほどのものがすり抜けていったのだろう。彼の計り知れない闇に――果てはあるのだろうか。

ルイリははらはらと、涙を流し続けた。目尻から頬へと滑り、顎を伝い、そうして彼の手を包んだ自分の手に落ちる。止まらない。痛くて痛くて仕方がなかった。けれど、悲しくはなかった。

きっとこれは、彼の涙だ。彼の代わりに、自分が泣いているだけだ。涙も、安らぎも、心も、全てを持ちうることの無いこの青年の代わりに。

孤高の青年の最奥に隠された傷を知ってしまった少女は、己の内に芽生えた感情に怯えていた。それは見過ごすには如実な輪郭を帯びていて、しかし名前をつけるにはあまりにも朧げで、曖昧だった。

静寂の満ちる室内には、しばらく細い嗚咽が続いた。

29．　知ってしまった傷　芽生えてしまった感情（後書き）

遅くなってしまい申し訳ありません！　ぎりぎり、一週間は置かずにすみました、が……！

内容については……文章が病んでる病んでる。我慢できなくてレン達三人をうっかり打ち込んでしまいました。

しばらくシリアスは続きそうです。「仕方ねぇな読んでやるよ」という心の広いお方がいらっしゃいましたら本当に嬉しいです！

では、ここまで読んで下さってありがとうございました！

３０．　錯雑なる怒り（前書き）

錯雑（さくざつ）とお読み下さいませ。

30．　錯雑なる怒り

イアンは、ひどく不安定な空間にいた。
上下感覚はさることながら、五感も鈍ってしまうような空間に投げ出されていた。だが、それ以外の第六感とも言うべき感覚は、奇妙なまでに研ぎ澄まされている。まるで自分の身体が自分のものではないようだ。周りの空気に溶け込んでしまいそうになる、そんな錯覚さえ及ぼす。

――お前はまだ、生きているのか

嘲笑が、耳にこびりつく。それは今まで自分自身が奪ってきた、数多の命の残骸。

――数多の命を手にかけて、数多の血液をその身に浴びて。それでもお前はのうのうと生きているのか

うるさい。だから何だ。……死ねば全てが赦されるとは思っていない。

――……そうだ、お前の場合は死ぬことすら許されないのだ。生きることも罪、死ぬことも罪。償いを求めること自体が、罪なのだ。

男も、女も、子供も、老人も。全ての笑い声が彼を嘲り、哄笑し、闇へと引きずる。己を取り巻く笑声は、今まで一度も止んだことがない。いつどんな時も彼を囲み、嘲笑しながら貶める。
笑う、嗤う。嘲笑は、止むこともなく。

そんな時間がいつまでも続こうとしていた時だった。

『……何故だろうな』

突如、低い声が辺りに響き、己を取り巻いていた無数の嘲弄が霧散した。同時に、ずん、と空気が音を立てて沈んだ。思わず屈しそうになる膝を押し止め、弾かれたように顔を上げる。が、その声はどこから呟かれたのかも分からないほどあちこちに響き渡り、反響し、イアンを惑わす。

「誰、だ」

圧迫した空気の中、それでも剣呑な声音。しかし、誰何に応答はない。代わりに、

『何故運命とはこれほど正確で、何故宿命とはこれほど残酷なのだろうな』

声は、厳かに、朗々と響く。どこにでもいそうな若い男の声だというのに、やけに耳に残った。

『やはり決められた未来（さき）というのは、どうあっても覆すことは出来ないものなのか……』

突如、目の前に人型と思しき靄（もや）が現れた。長身のイアンと同じほどの背格好、体格は明らかに男のものだ。全く面識がないと分かっている……が、どうしてか不審に思わなかった。ここでこうして会

うことに、何の違和感も抱かない。しかし、遠回しのような言動には疑問を抱く。

「何を、言っている？」

『逆らうことも出来ない、抗うことも出来ない。我々は巨大なる運命（はぐるま）を廻す、微々たる歯車の一端に過ぎない』

苦渋に満ちた声が、ただ響く。

『だが……、それでも我々は逆らい、抗うしか術が無い。……それが、人間（われわれ）にできる唯一の行動だからな』

一方的な言葉に、しかし応じる言葉は見つからない。まるで、そうさせることは許さないと言わんばかりに。言葉が、一つ一つの単語が、一つ一つの音が、押し潰されそうなほどの重圧を伴って、イアンに襲いかかった。ともすれば呼吸すらも圧迫される。

『よく聞け、古よりの大国――シェリングの皇太子よ』

心臓を鷲掴みにされたかと思った。どうしてか相手は、自分の正体を知っている。

そして五感全てが曖昧だった中、その言葉を聴いた瞬間急に耳が通った。声どころか、周囲の空気の流れすら聞き取れるほど聴覚が鋭敏になる。

『これは忠告だ。時の種子達は揃ってしまった。一度廻った歯車は止まることを許されない』

「何……？」

『全ては、必然の上に成り立っているのだ……後戻りはできまいよ』

まるで謎懸けのような言葉の数々。しかし自分の最奥――本能と呼んでいいものが、僅かながらも蠢いた。まるでこの瞬間を待っていたかのように、騒ぎ出す。

『それにしても……何と荒んだ精神だろう。これでよく正気を保っていられるものだ。……それとも、これほどの闇に呑まれ、既に狂っているのか』

ぶつぶつと呟く声を聞き取る気力もない。その声ですら、逆らいがたい圧力を伴っている。

『？ルシアディス？……か。中々どうして、皮肉なものだな』

その台詞は独白というよりも捨て台詞に近い。嫌悪すら滲む口調を少々不愉快に思って顔をゆっくりと上げると、深い瞳と目が合った。相手の姿は依然、霧がかかったように全貌が明らかになっていないのに、視線が合うのは明確に分かる。

絹糸のような髪。深い色合いの瞳。それをどこかで見たことがあるような気がして――目を凝らそうとした刹那。

『現へ戻れ。……時は遠くないぞ』

暴力的なものがイアンを掻き乱し、一瞬の内に思惟は闇へ突き落とされる。

『……あぁそうだ。あまりあの娘を苛めてくれるな。私とて、無闇にそちらを敵に回したくはない』

思い出したように呟かれたその台詞は、イアンの耳に届くことを許されなかった。

覚醒は、普段よりも幾分か平穏に訪れた。

浮上した意識を感じながら、ゆっくりと瞼を開ける。僅かに焦点の合わない視界を固め、イアンは少し視線をうろつかせた。見慣れたものよりも幾分か質素な天蓋。その天蓋や窓の位置からして、紅煌宮の自分の部屋でないことは明らかだ。

（屋敷……か）

軽く息をついてから、覚醒独特の気だるさから解放されるために己の拳を幾度か開閉させた。

「……？」

そこで生じた微かな違和感に、知らず眉根を寄せる。

イアンは標準の人間よりも体温が低く、手足の冷たさは自分でも自覚している。しかしどういうわけか、握った左手は仄かに熱が残っていた。手の平に、というよりも、手の甲を中心とした外側全体に温かい感覚が広がっている。自分から発したわけではないようだ。まるで誰かがずっと――握っていたような。

そこまで考えて、イアンは目を見開いた。即座に起き上がり、自

分の身を包む衣服を乱暴に掴み、捲る。

「……これは」

広がっているのは、過去に刻まれてきた忌まわしい傷の数々。しかしそんなもの、今は気にしている暇もなかった。

記憶が正しければ、レンザス地方の魔物討伐へ向かった折、イアンは侍従であるゼルバーに斬りつけられたはずだ。それも肩から腰にかけて、かなり深く。あの時に全身を襲った熱と痛覚ははっきりと覚えていた。炎の蛇が体中をのたうちまわる、そんな熱さが苛んでいた。

当然、あれほどの深手なら傷も残っている——はずだった。しかし斬りつけられたであろう場所には、その痕跡どころか軌跡すら見受けられなかった。新たに刻まれると確信できた傷痕は、どこにもない。

焦りそうになる身体を落ち着かせて、左腕をもう一度持ち上げて袖を捲る。確かここも致命傷を避けようとして斬られたはずだ。だが、なかった。過去に残った傷痕は幾つか点在しているものの、真新しいものは何もない。

どういうことだと考え、直前までの記憶を辿る。

そうだ、確か——音が聞こえたのだ。鼓動を刻むたびに広がる熱を、その音が……唄が、抑えた。

夢だと思っていたあの光景。朧げだった記憶が、鮮明によみがえる。

太陽を反射して光る絹糸の如き亜麻色。透明な旋律を紡ぎだす薄紅(うすべに)の唇。燐光が取り巻く細い身体。光を集めたような繊細な容貌。深い海の底を写した、一対の碧。

ぎり、と。
イアンは強く、歯軋りをした。
何故だ。何故、あれがここに――
「お？　起きたみたいだな。生きてるか？　ま、当然だけど」
部屋の入り口から発せられたのは能天気な声。視線だけを向ければ予想通り、褐色の青年が扉にもたれかかっていた。
――瞬間、イアンは常人には目にも追えない速度で寝台から飛び起き、すかさず青年との距離を詰めたかと思うと、彼の胸倉を掴み取る。咄嗟のことで受身を取れなかった彼をそのまま、手近の壁に叩きつけた。ダァンッ、と、激しい音が静かだった空間を切り裂いていく。
「っ……！　これはまた、いきなり不機嫌だな」
背中の痛みに顔を歪め、それでも苦笑いを浮かべる青年、レンを射るような視線で睨みつける。胸倉は掴んだまま、むしろ握力を強め、底冷えのする声を絞り出した。
「どういうつもりだ」
「ナニが」
「俺がいつ、こうしろと頼んだ」
震えそうになる声を押し殺す。久々に感じる感覚。苛立ちよりもなお濃い、怒りだ。レンが苦笑をこぼした。先程よりも幾分か、緊迫感の増した笑み。

「睨むなよ。それから俺の喉元に突きつけられてる【気】を、どうにかしてくれ。これじゃ説明しようにも出来ない」
「……」
イアンは燃え上がるような視線そのまま、少し集中してから周囲の【気】を動かした。レンの喉に突きつけていた透明な刃は、文字通り霧散する。レンはふぅ、と安堵したように息をつく。しかし胸倉はまだ掴んだままだ。
「……このまま説明しろと？」
「つべこべ言うな」
【気】を外してやっただけありがたく思え――と、低く吐き捨てる。レンは観念したように肩を竦めた。
「分かってると思うけどな。俺はお前が負傷した後桃香宮に行った。それでルイリ嬢に、お前を治してくれないかと頼んだ。ルイリ嬢は快諾してくれた。そして屋敷（ここ）に連れて来た。ルイリ嬢は歌い、お前は治った。その後彼女はリーファに伴われ、無事に桃香宮へ戻った。何か質問があるか？」
「ふざけるな」
何かの台本を読んでいるかのようにすらすらと喋る側近の台詞に、イアンは簡潔且つ容赦ない言葉で切り返した。
「いや……こんな長々しい説明を噛まずにやってのけた俺への賞賛はなし？」
「随分と無駄口が回るな……。余程、胴体との別れが名残惜しくないらしい」

遠回しだが確実に死刑宣告のその言葉に、レンは口を閉じると共に眉をひそめた。

『じゃあ、何だよ。コレで話をしろってことか？』

「そういう問題ではない」

脳内に響いた【声】に対する応答は、肉声で返す。全身が、負傷した時とは別の意味で熱い。思わず叫びだしそうになる衝動を、理性が寸でのところで押し止めていた。

「俺が……あれを呼べと、頼んだか」

「頼んでねぇけど……お前、あのままだったら良くて寝たきり悪くて昏睡だぜ？」

「ふざけるな……っ」

声が、震えた。イアンは再度歯軋りをして、紅の瞳を更に激しく輝かせた。

「俺は誰の助けも要らない……ましてやあれの、助けなど」

「自分の立場を考えてからものを言ってくれ」

疲れたように溜息を吐く褐色の青年を、強く睨みつける。灰色の瞳は卒倒しそうな眼光を受けてもなお、冷静な色を宿していた。

「いいか、お前は皇太子。そして二週間後には国の一大行事である暁夜祭が迫ってる。ルイリ嬢がいなかったら、お前は沽券（こけん）を下げるどころか地位すらも失っていた可能性だってあるんだ」

「……」

「俺はルイリ嬢に、今回だけだ、勝手な依頼だって言った。それでも了承してくれたんだ。感謝こそすれ、何でそんなに苛立って……」

「黙れ」

イアンは乱暴に、レンの胸倉を離した。側近から顔を背けた後、何とも言いがたい感情に顔を歪める。

心が、ひどく荒んでいる。自分でも制御できない感情の渦がうねり、ともすれば理性すら崩壊してしまいそうになる。

あれほど苛立ちが募る少女に助けなど借りたくなかった。貸しなど、作りたくなかった。そんなものがなくとも、イアンは生きていけるのだから。

助けられたのか。あの少女に、あの歌声に。別の男の名を紡ぐ声に、助けられたのか。他の男がいながら、中途半端な同情で――イアンを助けた、そういうことか。

生温い優しさや中途半端な同情はいらない。イアンはそのようなものを殊更嫌った。甘い理屈など、綺麗事など、此の世で最も忌まわしいものだ。そしてその最たる存在が――あの娘。

「俺に、助けなど要らない……」

どす黒い感情が神経を焼いた。思わず拳を強く握り締めると、爪が手の平に食い込んで皮が裂けた。

様々な感情はイアンを内側から壊さんばかりに渦巻いて、うねって、揺れる。

やめろ――落ち着け。

それでも辛うじて残った理性が、熱くなりゆく感情を責める。

こんな事で、感情を揺らがせるな。こんな瑣末(さまつ)なことで揺らいでしまうほど、お前は弱い人間だったか。そんな為体(ていたらく)で、皇太子を名乗るつもりか。

忘れろ。一時の感情に流されるな。あんな娘、目に留めておくだ

け煩わしい。お前に求められているのは皇太子という立場。これしきの屈辱、先を考えれば取るに足らないだろう。

一つ息を吸う。目を閉じて、息を吐いて、そして目を開けて。開かれた紅には、感情など一つとして浮かんでいなかった。

イアンは傍に佇む側近を呼び、皇宮へ戻ると告げた。

激情に染まる紅の瞳を見て、レンは頭を抱えたくなった。

（おいおい、マジかよ……）

こうしなければいけなかった状況下とは言え、自分のしたことが思わぬ波及を呼んでしまったようだ。

彼がこれほど感情を表に出したのは久しぶりだ。それこそ、年単位での貴重な光景。普段から冷たい怒りはあったが、これほど激したのはもしかすると初めてかもしれない。

何ものにも揺らがなかった、何ものにも動かされなかったあの皇太子が。揺らいでいる、動いている。あの少女に癒されたという事実に。

イアンほど冷静な人間は殆ど知らない。感情よりも理屈を重んじて、彼の意見は全て理に適っていた。しかしその彼が、暁夜祭という重要事項をも無視し、怒気を露にしている。

とは言え彼は、分かっていないだろう。その苛立ちが、怒りが、一体何のためなのか。

きっと分かるはずがないのだろう。何故ならイアンは、それを知る術を捨ててしまったのだから。遠い過去に置き去りにして、忘れ

てしまったのだから。だから、言いようのない苛立ちを持て余すほかないのだ。負の感情をつぎ込んでしまうのだ。色々なものが見分けがつかないほどに入り交じって、錯綜して、最悪の方向へ傾いてしまう。

確かに変化ではあるが、良いとは言えない。

（これは、予想以上に厳しいな）

今回のことで再認識したのは――イアンの心が、思った以上に頑なだということだけだ。

「レン」

奇妙なまでに落ち着いた、感情を一切廃した声がレンを呼んだ。視線を上げれば、先程の怒りとは打って変わって凪いだ表情をした男が、レンを見ている。

「皇宮へ戻るぞ」

その顔は既に、怒りに全身を滾らせていたイアンという青年ではなかった。全ての感情を押し込めて、無表情という名の仮面を貼り付けている。そこにいるのは、数多の名声を欲しいままにする冷徹な皇太子で――いつものことだというのに、今回は随分と苦い思いが残った。

無理なのだろうか。この男を変えることは、誰にも出来ないのだろうか。

レンは諦念の溜息をついて、表情を捨て去った自分の主の前に膝をついた。

「御意、皇太子殿下」

30．　錯雑なる怒り（後書き）

良かった、なんとか更新できた……！　お待たせして申し訳ありませんでした、これからもそうなると思います申し訳ありません。

内容はえーと、……もう、ホント、不器用な男ってイライラします。じれったいです。

一話一話で色々と二転三転して申し訳ありません。もっとゆっくり進めたいのですが……！

更新が少ない分、どうにか展開させたいと急いてしまう結果です、本当にすいません！

次回の更新は……六月中は厳しいかもしれません、活動報告で色々お知らせしているのでよろしければ御覧下さいませ。

ここまで呼んでくださった方、お気に入り登録をして下さった方、ありがとうございます！！

31.　不穏な予兆（前書き）

長らく更新を停止致しまして、真に申し訳ございませんでした！
ようやく更新再開です、少しでも皆様のお暇潰しになりますように。

31．不穏な予兆

ひどく眩暈がする。

方向感覚が鈍って、視界がぐらつくし、心なしか頭も痛い。

「いけませんわ、ご無理をなされては……」

不安そうに労わる侍女の声は、耳に膜が張られているかのように遠い。それでも介添えをしようとしてくれた腕を断り、ルイリはようやくカウチに腰を落ち着けた。

「大丈夫……少し、能力（ちから）を使いすぎただけだと思うから」

「それにしては顔色があまりにも悪うございますわ。どうぞ寝台（ベッド）でお休みになって下さいまし」

そう言ったリーファの顔の方が青ざめている。ルイリは安心させるように微笑んだが、どうもぎこちないようにしか笑えなかった。

彼の枕元で泣いていたルイリは、数十分後に部屋に戻って来たリーファに連れられて桃香宮へと帰った。その間中、リーファにイアンに泣かされたのではないかだとか本当に何もされていないかだとか質問攻めにされたが、どうにか誤魔化して。

しかし後宮の自室へと戻るまでの道のりで、どうも身体が重いことに気づいた。目の前に広がる視界はぶれていて、平衡感覚が崩れる。

「ルイリ様、どうかお休み下さい」

リーファの横で言い募るセシーヌの言葉に首を振って、それよりも、と口を開く。

「殿下は、その後良好と……？」

「え、えぇ。レン様から先ほど【声】を受け取りましたわ。先程お目覚めになったそうで……今回の負傷の名残は、どこにもないと」

「……良かった」

ほっと息を吐くが、すぐに繊細な美貌は沈んだ表情に変わる。

今回の、という前置きを置くあたり、リーファも彼の傷のことは知っているのだろう。知らなかったとしても、あの部屋で傷の数々を目の当たりにしてしまっている。しかしあの傷を見た時、リーファは驚きの眼差しをイアンよりもルイリに向けた。包帯を鋏で切ったことが衝撃的だったということもあるだろうが、その後もあの尋常でない傷痕に言及する様子は見られなかった。やはり、事前に知っていたに違いない。

いくらこれから生まれる傷を癒したとしても、あれほど刻まれてきた傷を治すことは不可能だろう。ましてや、心の傷ともなればもってのほかだ。

それでも。

彼を、癒したくて。

（私……おかしい……）

あぁ、頭が痛いからそんな訳の分からないことを考えているのだろうか。何だか目の前に靄がかかってきた気がする。ぼうっとした頭は、それ以上何かを考えようとすることを許さない。

自然、瞼が落ちる。

「「ルイリ様！」」

侍女二人の、悲鳴まがいの声を聴覚が拾って。

そこで、ルイリの意識は途絶えた。

†　†　†　†　†

イアンが宮殿に帰還してから二日後。彼はようやく時間の余裕というものを取り戻していた。

あの後すぐに宮殿へと戻った彼だったが、五日間皇宮を空けていた皇太子に暇と言う言葉は皆無であった。皇帝皇后へ業務報告、そして五日分の執務及びその他雑務処理が怒涛のように彼を襲い、しかも一週間少し後に控えている暁夜祭の案件も重なって、紅煌宮の自室に戻る暇すらなかった。しかし五日分の溜まりに溜まった執務を二日で終わらせたあたり、やはり自分は化け物じみている。

後は、心の隅に引っかかったままの火種を払うだけだ。

窓の向こうで、陽が隠れつつある。忌々しくも離れようのなかった執務室の机から立ち上がりさっさと退室しようとするイアンに、

レンは深々と溜息をつく。

「ルイリ嬢に？渡り？を伝えたんだって？」

揶揄というよりも咎めが強いその口調は、彼らしくない。イアンは黙然と側近を見やる。

イアンが彼女の元へと？渡り？の通告をしたのは、数時間前のことだ。

「向こうの了承は取ったのかよ。しかもいきなり目も向けなかった側室に？渡り？をするとか、シンディ姫辺りが知ったら憤慨すること間違いなしだぞ？」

「俺が自分の側室の誰を選ぼうが、俺の勝手だ」

「その通りだけどさ……今回の？渡り？はそういうのが目的じゃないだろ。尋問目的なら、リーファが許すはずない。……まぁそっちの方向も許さないだろうけど」

ぶつぶつと呟いているレンに対して、イアンは歪んだ嘲笑を向けた。背筋が凍りつきそうになる、酷薄な笑み。

「随分とご執心のようだな、レン。それほどあれを気にかけるなら、妾（めかけ）にでもしたらいい。お前の家へと降嫁させるのは一向に構わない」

「……お前、自分が何言ってるのか分かってるのかよ。おい、待てって……っ」

側近の言葉を遮るように執務室の扉を開けると――そこには足を生やした紙の塔があった。

……いや、訂正しよう。それは人であった。しかしその腕が抱えている資料の量は尋常でなく、何とそれの頭すら超えている。何故それで歩いていられるのか甚だ疑問だが、誰なのか、というのは一

目瞭然だ。ふわふわとした濃い茶髪が、白い紙の端からちらりと見えている。

「……セイロンか」

「はいっ！」

紙の向こうから、末弟セイロンは元気に返事をした。片方の橙の瞳と、半分の笑顔が辛うじて確認できる。

「……何をしている」

「何って、執務（しごと）ですよ。大臣から、これ全部追加だそうです」

「……」

弟の上半身を覆うほどの紙の塔。これらが全て、自分の執務。沈黙する三兄に、セイロンはよろめきながらも歩み寄る。

「どこかに行こうとしてたんですか？　その前にこれを……わわわ！！」

セイロンは自分の右足を自分の左足で見事に踏みつけた。小柄な身体の均衡が崩れる。レンがげっと呻いた。少年の両腕に整然と積み上げられた紙はこの辺りに思いっきり散らばり、たちまち白い海原を作り出す――前に。

「後先を考えずに行動するな」

冷めた声と共に、イアンは周囲の【気】を操作して散乱寸前の紙をフワリと浮かせた。しかし弟には手助けをしない。両腕から紙の全てがなくなり、セイロンはそのままべしゃっと床に転んだ。ものの見事に、豪奢な絨毯の床に額を打ちつける。

「い、痛……あ、資料は無事ですね。ありがとうございます兄上」

無数の紙を宙に浮かせたままの兄に笑顔で礼をする。が、返ってきたのは冷たく責めるような視線。

「お前は自分の能力（ちから）すら満足に活用できないのか」

「へ？」

「これしきの【気】くらい、自分で動かせ」

長い時間をかけてその意味を咀嚼した第五皇子は、たちまちしゅんと肩を落とす。

「ご、ごめんなさい……」

「謝る暇があるなら、自分で片づけろ」

言うや否や、イアンは唐突に【気】を緩めた。中空に留まっていた多量の紙は重力を思い出し、そのままひらひらと床に落ちようとする。セイロンは慌てて、兄の見様見真似で【気】を操作した。落ちようとしていた紙は、先程よりも多少のブレはあるものの空中で止まる。それを掻き集めて、先程通りの紙の塔をイアンの机の上に移動させた。

「用はそれだけか」

「あ、それもありますけど、実は兄上に面会を願い出てる侍女がいて」

軽くなった両腕を伸ばしつつ、セイロンは思い出したように顔を上げた。そのまま、入り口にひょいと首を向ける。

「入っていいよー」

無邪気な少年の声につられるかのように、開いたままの扉から小柄な影が現れた。イアンは軽く片目を眇める。そこにいたのは、鴿色の髪と琥珀色の瞳を持った若い侍女だった。イアンと目が合うや否や、ルイリの侍女であるセシーヌ＝ラグスローは緊迫した面持ちで頭を下げる。

大方、ここに来ようかと迷っていた矢先にセイロンと出くわし、そのまま連れて来られたようだ。人の好い弟のことだ、たかが侍女であろうと困っている人物を放っておけはしなかったのだろう。

「突然の訪れ、大変失礼致します。皇太子殿下には、寛大な御心をもってお許し頂きたく存じます」

「心にもない挨拶をするために来たのなら帰れ」

にべもなく言い放つと、更に彼女は萎縮したように肩を竦めた。少し困惑した風情で、ちらりとセイロンを見る。その視線を敏感に受け取ったセイロンは、あぁと手を打った。

「僕はこれで失礼するよ。執務もあるし。……あ。兄上、今度という今度は手合わせしてもらいますからねっ！」

びしっと指差し、可愛らしい容貌を厳しくしながらセイロンは部屋を後にした。穏やかな空気を纏った少年は去り、執務室には殺伐としながらも静謐な空気が流れ込む。軽快な足音が完全に聞こえなくなった中、レンは一人首を傾げながら後頭部を掻いた。

「俺はいてもいいのか？」

「は、はい。フィレル女官は、スヴェイン様がおられても良いと……」

「てことは、ルイリ嬢のことだよな」

あっさりと本題を口にするレンに対して、セシーヌはぎこちなくうなずいた。

「……恐れながら」

先程よりも幾分か青ざめた顔を上げた侍女は、微かに震えている唇を動かす。

「殿下……大変申し訳ございませんが、今宵のルイリ様への？お渡り？はご遠慮頂きたいのです」

微か、真紅の瞳が細められる。瞬間、周囲の空気が一気に冷えた。セシーヌはおろか、唐突な温度差にレンでさえ息を呑む。紅い双眸は、燃え上がる炎を瞬間的に凍りつかせた、そんな印象を抱かせる。冷たすぎる表情は、触れれば凍傷を起こしてしまいそうだ。

「どういう意味だ。皇太子（おれ）の達しは絶対ではないのか」

どこまでも感情を押し殺した、それだけに底冷えのする声が響く。まるで肉食獣に追いつめられる小動物のように、ただでさえ華奢な身体をした侍女は縮み上がった。

「いえ、そうではなく……その、ルイリ様は……今現在、お話できる状況ではないのです」

歯切れの悪そうな口調と困ったように下げられた眉は、ただイアンの【気】に怯えているだけではなさそうだ。イアンは無表情のまま、片眉を上げた。

「話せる状況ではない？　あれが今夜、他の男のもとへ行くということか？」
「そ、そんなこと……っ」
「なら、どういうことだ」

セシーヌは暫くの間言葉を探すように琥珀の双眸をうろつかせていた。しきりに言葉を探す様子で口を開閉していたが、やがて観念したように顎を引く。

「ルイリ様は確かにお部屋にいらっしゃいます。ですが……」

年若い侍女は困惑した風情で顔を伏せた。薄紅の髪が白い面差しを覆う。

「……二日前にこちらへ戻られてから、今まで……終始、眠っておいでのままなのです」

31．　不穏な予兆（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます！！
そしてごめんなさい申し訳ございませんお詫びの言葉もありませんっっ！！
更新予定よりも大幅に遅れてしまいまして、ごめんなさぁぁぁい！！！
しかし一番更新できずに悶絶していたのは私でした。理由も言わずにいきなり騒ぎ出して迷惑かけましたマイフレンド……。

せめてものお詫びに、あと少し後にもう一つ更新します！　実は繋げるつもりだったのですが、ありえないくらい長くなった＋趣旨が違うなーと思ったので分けました。
設定集は一旦取り下げます、ご了承下さいませ！

32. 懇願、困惑、混乱、そして

微かに聞こえてきた長靴の足音に、リーファは瞼を開いた。数十分前から、彼女は扉の前に立っている。少しも揺れずに、ただ立っている。

リーファの主は今、彼女の背の向こうの寝台で深い眠りについていた。徐々に濃紺が面積を占めつつある空。窓から差し込む月明かりが、光を集めたような美貌を一層際立たせている。

主は……ルイリは、二日前に眠ったきり、一度も起きない。

ダイエンの見立てでは病ではなく、体調に関しては心配することはないと言っていた。しかしこれ以上眠り続けるのは、危険だ。

どうしようかと迷っていた矢先に、皇太子からの?渡り?の通達があった。二日前に、レンから彼の荒れ具合は聞いていたので、リーファは非常に焦った。

理由は定かではないが、彼はルイリが自分の傷を癒したことに対して非常に激昂したらしい。それはもう凄かったと、真剣な口調で語るレンから易々と想像はついた。となると、今回の?渡り?の件も本来の目的は彼女への尋問だろう。

それは何としても阻止せねばならない。そもそもルイリは眠っている。だから、夕方にセシーヌを紫芳宮へ伝達係として送った。

しかし、戻って来たセシーヌは半泣き状態で阻止は無理だったと伝えた。彼の【気】に当てられたからか、切迫した様子で言葉を紡いだ侍女の言葉を要約するといわく、「だったら様子を今夜見に行く、拒絶をするなら後宮から追い出す」。

……さすがに開いた口が塞がらなくなったリーファだが、彼がそう言ってしまったのならば来るに違いない。

どうして彼がここまでルイリに干渉を求めるのか、分からないわけではない。しかし厄介なことに、彼自身、そうしたがる理由が何なのかを分かっていない。

いい加減どうにかして気づかせなければ。何も知らないまま進んで先に待っているのは――混沌とした闇、そして絶望だ。

カツン、と。長靴の音。

月の光というよりも太陽の光と形容するに相応しい、鮮やかな金髪。暗闇の中でもはっきりと浮かび上がる二つの真紅、全身に纏った漆黒。神の御手で作り出されたかのような、無を浮かべた端整な美貌。

リーファは背筋を伸ばしたまま、最上級の礼を取るため腰を折った。

†　†　†　†　†

紫芳宮と桃香宮を繋ぐ渡り廊下を抜け、暗くなりつつある廊下を歩く。

桃香宮の夜は早い。例外はあるが、大抵の姫君は陽が沈めば早々

に自室にこもり、湯浴みをし、香油をつけ、髪を梳り、そして淡い期待を抱く。皇太子――皇族の渡りがないものかと。

歩みを進める間にも、夜の帳はその色を濃くする。赤い衣を脱ぎ捨て、唐突に蒼へと。星々が煌めきだす頃、それを演出する夜空は深い濃紺へと姿を変えていく。しかし今宵の主役は微々たる星ではないようだ。それらの小さな光を飲み込んで、欠けという言葉を知らない月が白銀の輝きを放つ。己の存在を誇示するように、夜空に君臨する盈月。

ふと足を止めて、窓の向こうからそれを眺める。混じりけのない月光は美しい。

しかしそれは裏を返せば、穢れたこの身を糾弾する光の矢と言えよう。決してこの穢れを洗い流そうとはしない、むしろ己の汚さを浮き彫りにしていく。

此の世に、己を赦すものなどないのだろう。それほどまでにこの存在は罪深く、愚かしい。

珍しく感傷に浸りそうになった自分を自嘲して、イアンは心を殺して足を進める。

目的の部屋の扉は開いていた。傍に控えているはずの近衛もいない。さしてそれを疑問に思わず室内へ足を踏み入れると――背筋を伸ばした侍女が待っていた。今現在の夜空に似た紺色の髪が、月明かりで暗闇の中静かに浮かび上がる。彼女は恭しく、頭を垂れた。

「リーファか」

「……ようこそおいで下さいました、と申し上げたいところではございますが」

冷酷の名を冠する皇太子と相対しているにも関わらず、リーファ

は毅然とした態度を貫き通している。

「セシーヌの伝達通り、ルイリ様は眠りの只中にございます。どうぞ、乱暴な真似はなされませんよう……」

「お前は随分と、俺に信用がないようだ」

皮肉げな薄い笑みを浮かべるがしかし、リーファは何も答えずに静かな表情で目を伏せた。

「どうぞこちらへ」

リーファはそっと身体をずらし、その奥にある寝台へとイアンを誘導した。イアンはゆっくりとした先導を追い、窓際に置かれた寝台まで辿り着く。リーファが静々と天幕を上げた。そして視界に入る、亜麻色。

寝台に横たわる華奢な胸が微かに上下していなければ、彼女はまるで目を閉じた人形のようだった。窓から降り注ぐ青白い月光は、ただでさえ色を失った少女の頬を一層青くさせる。伏せられた長い睫毛が月明かりを受けて、白い目許に淡い影を落としている。

皇太子は沈黙を貫き、寝台の横に立った。そこから動かない。細い手を取るわけでもなく、少女に触れる気配すらなく、ただ佇む。無を浮かべた紅の瞳に、何か表情が浮かぶことは決してない。

「御典医の見立てでは、ご病気というわけではないそうです」

静寂の間隙を、端的な説明が縫う。

「今のところは何も支障は来しておりませんが……何せ、眠ってから一度も起きず、食べ物はおろか水すらも飲んでいないので」

このまま眠り続けるのはどうかと、と説明が続く。言われてみれば、目を閉じている面差しは心なしかやつれたように思える。

「……この二日間、よく俺に隠し通せたものだな」

一側室の一件とはいえど、皇太子の情報網をかいくぐるにはさぞや労力を有したことだろう。今回の？渡り？の達しがなければ、これからも隠すつもりだったのだろうか。

「殿下に報告致しましたら、桃香宮でも噂が流れると思いましたゆえ。ルイリ様にあらぬ醜聞が流れるのは、私としましては避けたい部分でございました」

「まさか二日以上も眠り続けるとは、思っていなかったか」

「……殿下からのお達しがあった際、これ以上は不可能だと判断いたしました。ゆえに、セシーヌに伝達を」

「……」

イアンは自分でも気づかない内に、その端整な横顔に苦い表情を浮かべていた。

ここ最近の苛立ちの火種であった少女。今日こそは相対し、余計なことをするなと言ってやりたかったのだが――その彼女は、声すら届かない眠りの中。

「殿下」

感情を殺した声がイアンを呼ぶ。眠っている少女から視線を滑らせ、横に立っている侍女を見やる。少女を見ているかと思った藤色の瞳は、何故だがイアンに向けられていた。

「差し出がましいことを申し上げますが……どうぞ、ルイリ様を誤解なさらないで下さいませ」
「誤解だと？」
胡乱な声を上げるイアンに対して、リーファの表情はどこまでも静かだ。
「ルイリ様が殿下の傷を癒したこと、それには何の他意もございません。ただ、貴方様の苦痛を取り除ければと、そう思っただけのこと」
訥々（とつとつ）と語る侍女の声を、イアンは無言を保って聞いていた。ひとたび口を開けば、不平不満がとめどなく溢れ出しそうだった。
「この御方には、何の裏もないのです。誰かを貶めようとも、籠絡しようともなさっておられません。殿下が今まで関わってきた者達とは違うのです」
「……黙れ」
「いいえ、たとえ首が飛ばされようと申し上げます。殿下、どうか……この御方は、殿下の想像なさっているような人ではございません」
「もういい」
「殿下……！」
「出て行け」
淡々とした命令に、逆らう術は与えない。ましてや皇太子の命令は絶対だ。比例するように、周囲の空気が重く濃く沈んだ。重圧に屈しそうになった膝を立て直し、リーファは唇を噛み締める。
室外に控えておりますと言い添えて、侍女は足音も立てずに退室した。

彼女の呼吸は乱れることがなく、微かな吐息が少し色を失った唇から零れ落ちている。

イアンが背にしている窓からは、眩いばかりの月光が惜しみなく降り注ぐ。少女へと降りかかる光の大半はイアンの身体が遮っていた。白いシーツの上に、長身の影がはっきりと映る。

紅の瞳が細められた。天上からの光を阻む自分は、どこまでも異端と思えた。

満月に照らされた繊細な容貌はどこか儚く、触れてしまえば傷すらつきそうで。肌理のこまやかな頬に指を伸ばそうとして、寸前で制した。

組み敷くのは簡単だ。華奢な身体に圧し掛かり、無理矢理にでも覚醒させて、その唇を貪ってやるのは――。そこまで考え、整った顔立ちに苦い、苦い表情が浮かぶ。

しかしそうするのは、躊躇われた。一体何がそうさせるのか見当も付かない。そもそも彼女は他の男に抱かれているのだ、慈悲をかける必要などないというのに。

（……俺は）

一体、彼女をどうしたいのか。

抱きたいのか、貶めたいのか、罵りたいのか。

しかしそのような言葉を弾き出す度に、両足が底のない沼に沈み込んでいくような感覚がする。不快な思いは苛立ちへと変わり、彼女に対する負の感情は一層強まっていくというのに、いざ彼女を目の前にするとどうしても躊躇う。

陶器のような肌が、月の光を受けてひときわ白く輝く。体温を感

じさせない白さは、彼女そのものを神聖不可侵と裏付けているかのようだ。それだけではない。白い瞼の奥に隠された碧の瞳は――誰にも侵せない。

駄目だと、何かが叫ぶのだ。

抱いてはいけない、貶めてはいけない、罵ってはいけない。穢しては、いけないと。

渦巻く感情がイアンを困惑させ、ぶつかり合う感情がイアンを混乱させる。荒れ狂う衝動を理性で押さえ込むのは容易いことだったが、何よりもそのような葛藤をせねばならない自分の身に苛立った。

――この御方には、何の裏もないのです

（ならば、何故）

何故あの時、男の名を呼んだのか。

あのような状況に於いて助けを求める対象は、近親かもしくは懇意にしている異性しかいない。彼女に家族があるのかは知らないが、記憶を失っている時点でそれはありえないだろう。つまりあの名前は、彼女が懸想している男の名前、それしかない。

皇太子（じぶん）の側室が他の男と繋がっているという醜聞が流れてしまえば、沽券に関わる。つくづく厄介事を持つこの少女。

寝息はひどく穏やかだが、浮かんでいる表情は安らかとは言い難い。

どこか張り詰めた風情で眠っていて、自然と手が伸びた。白い頬にかかってしまっている艶やかな亜麻色の髪を指先で払っても、身じろぎすらしない。

イアンは柳眉を寄せて、持て余していた指先を少女の目元へ伸ばした。

†　†　†　†　†

癒したいと思った。
知りたいと思った。

それがいかに愚かしいことなのか、思い知った。

――いかぬなぁ

唐突に響いた音声に、ルイリははっと目を見開いた。気付けばそこは、いつもの――上下感覚を麻痺させる、不安定な空間だった。しかし、いつもならそこにいるべき人物がいないことに不安を覚える。無意識の内に、その姿を探そうと首をめぐらせるが、

――探しても無駄なこと。ここにお前の求めている者はおらぬよ

それを見透かしたように笑う声。思わずたじろぐと、足元に光る波紋が広がった。リン……と涼やかな音が立つ。

「だ、れ？」
――あぁ、その声を聞くのは実に久しい。現在（いま）も過去（むかし）も、まこと美しい声をしている
甘美で荘厳で、この場を支配しようとする声。絶えず耳に注がれていく声は、ルイリの思考を鈍らせる。
――しかし、いかぬ。実にいかぬなぁ
嬉しそうに弾んでいた声音は一転、すぐに落胆した口ぶりへと変わった。
瞬間。
眼前に、真っ白い塊が突如として現れた。何よりも白く、穢れのない、純白。ルイリは微かに目を瞠った。それはひどく曖昧な輪郭だが、どことなく、人の形（かたど）を象っているように見えなくもない。
――お前の心はひどく揺らいでいる
「揺らいで……？」
思わず自分の胸に手を当ててみるが、当然のことながら変化はない。やれやれ、という声が響いた。
――由々しきことよ。お前が心を傾けるべくはただ一人。お前がその身を捧ぐべくはただ一人
「……？」
――お前を愛すも、お前が愛すもただ一人。他の誰にも渡さぬよ
「……どういうこと」
眉をひそめて問い返すルイリに、的確な答えは与えられない。代

わりに白いモノは輪郭を震わせ、きゃらきゃらと笑う。

――あァ無知ほど愉快なものはない！　その愚かしさ、何よりも愛おしい！

大量の鈴が耳元で一斉に鳴らされたかのような声に、眩暈がする。頭を押さえ、ふらつきそうになる身体をどうにか踏みとどまらせながら、その高らかな笑いがやむのを待った。この声は何もかもが狂ってしまう、そんな感覚すらしてしまう。美しく溢れんばかりの魅力を放っておきながら、身体の内側から凍りつくような戦慄を禁じ得ない。

――さて

いつの間にか笑い声はやみ、依然ルイリの前にいる白いモノは息をついた。

――可愛い小鳥を惑わす悪しき鴉には、ちと灸を据えねばなるまいか？

謎かけのごとき比喩。一体何のことを言っているのか、疑問に思う暇もなく。

白いモノの輪郭が音も立たずにうねり、一本の真っ白い腕が伸びた。咄嗟に身を退こうとしたが、それよりも早く白い腕はルイリの腕を掴む。

有無を言わせぬ力で引き寄せられ、眼前に迫る、白。何もかもを純白で埋め尽くすソレは――口を三日月形に吊り上げ、美しく笑った。

脳裏で閃光が弾ける。

「ッ……！」

声を出すよりも前に、ルイリの脳内は暴力的な力で乱暴に掻き乱された。突如として閃いた思考、感情を根こそぎ奪うように、それはルイリを侵食していく。

呑まれる。

――なぁに、何も心配することはない。ただ少し、からかってやるだけのことよ。少しだけ、のぅ……

くすくすと笑う、純白。

視界を、ただ、白が、席巻した。

†　†　†　†　†

青白い瞼が動いた。

イアンは微かに息を呑み、目尻をなぞろうとしていた指先を握りこむ。そのまま無意識の内に息を殺しながら、寝台で眠る少女をただ見つめた。

僅かではありながらも、伏せられた長い睫毛は震えている。規則

的な呼吸を繰り返していた唇から、少し深い息が吐き出される。

しんと静まり返った室内の中、少女はすぅっと瞼を開けた。窓から降り注ぐ淡い月光の下、深海の双眸は神秘的な光すら浮かべている。

静寂は未だ続く。一対の碧はしばらくの間真上の天蓋を彷徨(さまよ)い、ふと気づいたように脇に佇むイアンへと焦点を定めた。

瞬間、まるで魂が抜けたようだった少女は――艶やかな微笑を浮かべた。それはさながら、月夜の下に密やかに咲き誇る夜薔薇のごとく。

「……、お前――」

驚愕、むしろ呆然とした響きさえも含んだ声を零す。次の言葉を探そうとするが、上手く見つからない。

少女は更に笑みを深めた。華奢な身体が、寝台からゆっくりと起き上がる。亜麻色の髪がさらりと揺れ、月明かりを受けて光沢を放つ。どこまでも深い碧の双眸は、真っ直ぐにイアンを見つめている。その口許に、見たこともないほど艶然とした微笑を浮かべながら。

「良い月夜でありますね」

水晶の鈴が転がるような声がした。

32．懇願、困惑、混乱、そして（後書き）

いきなり色々と二転三転してごめんなさい、ここまで読んで下さってありがとうございました！

リーファは、一番私の心境にリンクさせて書いています。なのでリーファの言動や行動は、大半が痺れを切らした私の思考によって成り立っています（爆）。

しっかし……いつまでも出ない主人公ってどうなんでしょうか……

起きましたが、本当に主人公なのか？（聞くな）

次回はまた、一週間以上の間が空くと思います、申し訳ございません（泣）

あ、ちなみに、『夜薔薇』という薔薇はございません。造語です。念の為。

重ね重ねお詫び申し上げますが、更新が非常に滞りまして、真に申し訳ございませんでした！！

そしてそんな中お気に入り登録をして下さった方々、本当ーーーにありがとうございます！！

32．5．　彼の使命

『……ごめんなさい』

沈鬱と響いた透き通った声に、彼はゆっくりと瞼を開いた。明るいのか暗いのかも分からない曖昧な空間。独特な感覚に身を委ねて、目の前に佇む朧げな影を認め怪訝そうに首を傾ける。

そこにいたのは、華奢な身体こそ同じものの、彼が予想していた人物ではなかった。

「何故貴女が私の夢に……。……ルゥは？」

大事であるが故に、名前はあまり出したくない。しかし一抹の不安がそれを遮る。どうしようもない焦燥感に襲われて、彼はその名を口にした。

眼前の影は、過ぎるほどに震える。

『ごめんなさい……ごめんなさい……！　私が力不足なばかりに、あの娘は……っ！』

聞く限りでは意味不明な言葉。しかしその意味を正確に汲み取った彼は、言葉も無く目を見開く。

「まさか、だからルゥはここにいないのか？」

『まだ覚醒には早いわ。けれど……私が、私が全て悪いのにっ……！　あぁ、私達の最後の＜王＞！　どうかあの娘を……＜姫＞を守って！　お願い……！』

「待て、落ち着いてくれユーフィリア――」

矢継ぎ早に言葉を繋ぐ彼女を落ち着かせようとした瞬間――

全身を、稲妻が駆け抜けたかのような衝撃が襲った。

「――！」

彼は弾かれたように瞼を開けた。始めに目へ飛び込んできたのは、今や見慣れてきた簡素な天井。馬車兼寝床ともなっているそこには、十数人の老若男女が身を寄せ合って眠っている。自分が数日前から世話になっている、旅芸人の一座の馬車の中。

心臓が早鐘を打つ。小刻みに震える手はまだぴりぴりと痺れている。どれほど深い眠りでさえも、一瞬で覚醒へと導く、それ。

彼は息を整えながら、一座の者達を起こさないように慎重に身を起こし、薄手の毛布を払って静かに立ち上がった。

「……うん？　旦那、どうした？」

一瞬身を緊張させて、眠たげな声のした方向へ視線を向ける。見

れば団長の男が、寝ぼけ眼でむくりと起き上がっていた。その周りには、一座の踊り子や猛獣使いが眠りこけている。

「あぁ……申し訳ない。起こしてしまっただろうか？」

「いや、あんたのせいじゃねぇよ。自然と目が覚めちまったんだ。それより、どうした？　眠れないのか？」

人の好い男はそう言って彼の身を案じる。彼は薄く笑って首を振った。

「少し外の空気を吸ってくるだけだ。本当に起こして済まなかった」

簡潔に説明して侘びを入れると、男は気にするなと笑って再び横になった。長い間を置かずして寝息が聞こえてきたのを確認してから、彼はそっと馬車の外へと出た。白銀の光が静かに瞼を射て、微かに目を細める。生きとし生けるもの全てに月光が降り注いでいる。昼間とは雲泥の差だが、夜にしてはやけに明るかった。

今彼が身を置いている馬車は、宮殿（クアレ・ローディン）の敷地内の片隅に止められている。とはいえ一つの都市であるほど広い敷地なので、皇帝や后妃、側室の住まう宮からは程遠い。しかし、彼にとって距離は問題ではなかった。

地面に足をつけ、素早く辺りを見回した。背中まで流れる長い髪が首の動きに合わせて揺れ、髪同士が涼やかな音を立てる。

目を細め、息を殺し、神経の琴線を刃の如く研ぎ澄まして――先程の衝撃の根源を探ろうとする。脳内を稲妻が貫いたような感覚は、今でも覚えている。静かに眼を閉じて、冴えきった夜の空気に漂う電撃のような残滓（ざんし）を探った。

意識を遥か遠くに飛ばして、ここではない所へ。あまりに強い力

の残骸はかなり遠い場所からのもののようだった。馬車を越えて、数々の白亜の宮殿を潜り抜け――尾を引く残滓の大本を、掴み取ろうとしたが。

「……っ」

瞬間、その軌跡は唐突に掻き消えた。先程の衝撃が嘘だったかのように、何も感じない。凄絶で苛烈な力は、気配すら感じない。

（空間を閉じたか）

心中で呟き、次いで忌々しげに舌を打つ。ここまで後手に回らねばならないとは思わなかった。

整った眉をきつく寄せて、彼は苦い表情で月を見上げた。自らが輝きすぎるせいで星の光を消してしまう、気高くも孤独な光。

確かにその光は美しく、清らかだ。だが彼は、それ以上に清廉で無垢な存在を知っていた。知っているどころではない。常に心の奥に存在している。

「――ルゥ」

瞼を閉じればいつでも鮮やかによみがえる、愛しい面差し。

その笑顔も、心も、存在も。全てを守ると決めた。何に替えても、護ると。あの日あの時、一族の誇りと己の魂に――その誓いを刻み込んだ。

それなのに。

どうして今この時、お前の傍にいてやれないのだろう。誰よりも優しく、誰よりも愛しいお前の傍に、いてやれないなんて。

――どうかあの娘を……〈姫〉を守って！

絞り出すような懇願。

（……当然だ）

最悪の結末になど、させない。奴等の思い通りにさせてたまるか。

あの娘を守る、それが。

「それが私の使命であり……存在理由なのだから」

すぐに空気に溶けこんだ密かな宣言を聞いていたのは、万物に平等の光を照らす満月だけだった。

32．5．　彼の使命（後書き）

今回も二話更新です！　……ただ単に長すぎただけです、本当に申し訳ございません！

さらっと（新じゃないけど）キャラの名前出ましたが、正体が明かされるのは先のことです。

次回はちゃんと、イアンと誰か（笑）の場面です！

33．　月下に落ちる宣戦布告

静寂が支配する空間。無音と薄闇の満ちる室内で、月だけが冴え冴えとした光を遥か頭上から注ぐ。

「お前……」

ふいに目許を険しくしたイアンを、少女は首を傾げながら不思議そうに眺めている。邪気のないように見えるその表情。誤魔化しているつもりなのかもしれないが、イアンには全く通用しない。

「――何者だ」

極めて端的に問うと、深い翡翠の双眸が瞠られる。彼女はしばし瞬きを繰り返し、唐突にふっと笑みを浮かべた。

「……ほぅ。一瞥（いちべつ）で見抜くとは、お主中々見所があるのぅ」

未踏の地にひっそりと流れる泉のような透き通った声が、桃色の唇から零れた。涼やかで不遜な口調は、およそ普段の彼女からは程遠い。

イアンは【気】の魔術を使用するためか、他人の纏う空気、雰囲気には人一倍敏感である。その気配は異能者ならば言うまでもなく強い。依然として彼が剣呑な態度を崩さない理由――それは、彼女の細い身体から溢れる人外とも言うべき苛烈な空気のためだった。

「やはり慣れぬ敬語を使うべきではなかったか。少々は欺けるものと思っていたのだが」

長い睫毛を伏せて、華奢な肩を軽く竦めてみせる。その一挙一動にすらも尋常でない力が満ちていて、ふとイアンは眉根を寄せる。

これほど強い空気が満ちているのだ、外に少々漏れてもおかしくはない。そして外には、かつて自分の間諜の一人であった侍女が控えているはずだ。この異変に気づかない筈がない。

「案ずるな」

全ての疑問を見透かしているかのように、彼女は呟く。そして、イアンの顔を見上げて満足そうに笑った。

「この部屋は、外界とは完全に切り放しておる。此処は宮殿の一室であって、そうでない。音も、空気の流れも……何一つ、そこの廊下にすら漏れることはない」

扉の方向へ人差し指を向けて、その指を自らの唇に移動させ、まるで秘密の話をするかのように「つまり」と笑う。

「此処に居るのは、真実わらわとお主だけよ」

「……」

イアンはますます眉宇を寄せた。いつでも魔術が発動できるように、周囲の【気】の密度を濃くする。

空間の切り放しができる異能者など、ほぼいない。イアンの【気】も高等な魔術だが、空間を扱う術者はそれ以上と言えよう。今のところ殺気は感じられないが、油断していれば首を刎ねられる可能性

もある。それよりも前に、こちらから仕留めなければ。

「そう警戒するでない。何も取って食おうとは思っておらぬよ」

周囲の空気が微細に変化したのを見切ってか、少女は伸びをしながら暢気に呟いた。一通り身体を伸ばし終えてから脱力したように肩を落とし、イアンを見て微笑む。

「こうして相対するのは二度目だったかのぅ？　久しいな、鴉（カラス）」

「……『鴉』だと？」

「お主の呼び名よ。『お主』と呼ぶのも素っ気無かろう。黄金（きん）の髪と朱（あけ）の瞳は鴉と呼ぶには派手だが、漆黒の衣（きぬ）を纏う姿には似合いであろ？」

よく分からない持論を繰り広げながら、彼女は緩慢な動作で足にかかったままのシーツを払った。薄い夜着に包まれた足首が露になり、裾から覗く裸足は病的に白い。彼女は亜麻色の髪を気だるそうにかき上げ、寝台（ベッド）のふちに腰かけた。淡い色をした夜着は月の光を受けて純白に染まり、まるで彼女自身から光が溢れているかのようだ。

剣呑な態度を崩そうとしないイアンをちらりと見上げて、三日月形に口端を吊り上げる。月光に照らされた微笑は、思わず戦慄を感じるほど凄艶。

「まだ警戒を解かぬか。強情な男よ。ただ単に、このうら若き乙女との会話を楽しめば良いものを」

「答えろ」

「うん？」

何を、と言うように純粋な疑問の表情を浮かべる彼女に対して、

依然低い声音で言う。

「質問に答えろ。お前は何者だ」

「おやおや。わらわは随分と歓迎されておらぬようだのぅ。そう突き放そうとするな、鴉よ」

「鴉という呼び名もやめろ、不愉快だ」

「そうか？　お主には似合いだと思うが」

わざとらしく首を縮めてみせて、しかしすぐににっと笑った。

「生憎ながら、わらわは自ら名乗り出ぬ無礼者に教えてやる名は持ち合わせておらぬ。純粋な親切心で愛称を付けてやったというのに」

「親切心で『鴉』などという蔑称をつけるとは、お前は随分と悪趣味な輩だな」

「捻くれておるのぅ。そもそも自分の問いに答えが返ると信じて疑わぬとは、愚の骨頂。その厚顔さ、何より浅はかであろう？」

「貴様……」

他人を上から見る傲慢な口調は殊更イアンを苛立たせる。あまり自分が下手の立場に慣れていないからだろう。

思わず眉間に皺が寄ったのか、細く白い人差し指が何の躊躇いもなくそこをとんと突いた。咄嗟に身を退くと、少女は可笑しそうにふふっと笑う。

「そこまで拒絶することもなかろうに。ここに皺を寄せるのは賛成できぬ。せっかくの良い男が台無しぞ」

ちょい、と自分の眉間を指し示して見せて、更に笑みを深める。艶冶な微笑に反比例して、イアンの表情は険しくなるばかりだ。

普段から（見慣れているわけではないが）見ている彼女の表情は、

常に憂いを浮かべているか、イアンの【気】に慄(おのの)いているかのどちらかだった。時たま厳しい表情をしたのを見たこともあるが、このように笑う姿は見たことがない。

当然か――目の前にいる少女は、彼女であって彼女ではない。

「……イアン」

「む？」

「俺の名は、イアン＝シェリングだ。鴉などという、不快な呼称で呼ぶな」

あっさりと名を教えたのが意外だったのか、少女は呆れたように息をついた。

「そのように簡単に口にして良いのか？　己の名を得体の知れない者に教えてやるとは、中々に心が広いのぅ」

「お前が俺を傀儡(くぐつ)にしようとする異能者ならば、そのような質問をするまえに実施している筈だ」

数年の間命を狙われてきたのだ、刺客がどのような出方をするのかは熟知している。それに、刃向かうなら応戦するまでだ。

それらの言葉を暗に含めて論理的な返答を返してやれば、まるで合格と言わんばかりに満面の笑みが桃色の唇を彩った。

「ふむ、どうやら考えなしの莫迦(ばか)ではなさそうだのぅ」

「もう一度聞く。お前は何者だ」

考えてみれば三回目の質問になる。何故自分がここまで問わねばならないと不快感を覚えるが、少女はそのような心情などお構いなしのように首を曲げてみせる。首を傾げた時に亜麻色の髪が揺れ、静寂の空間にさらりとした音が響いた。

「そうさなぁ。何と答えれば満足か？　とりあえずこの娘に害を為そうとする無礼者ではない、安心するが良い」
「答えになっていない。それに、俺はそれがどうなろうと構わない。聞いているのは、お前の正体だ」
どこまでもはぐらかそうとする口調に苛立つ。吐き捨てるように一気に言うと、少女は驚いたように眼を瞠った。
「この娘が、どうなろうと構わない？」
確かめるように一字一句、しっかりと発音しながら反芻する。
「ほぉ……。それはまた、異なことを言う」
そして、とても面白いことを思いついたと言うように、満面の笑みを浮かべて見せた。
「ならば」
ひら、と細い手が揺れた。瞬間、彼女が触れてもいない窓が突然音を立てて開く。夜風が室内に吹き抜け、風を受けたカーテンが床の上に不気味な影の模様を形作った。冷涼とした風はイアンの頬を打つ。
少女は婉然と笑いながら、寝台から立ち上がって踊るように身体を回した。細い身体に纏う薄い夜着が夜の風にふわりと揺れて、白い裾が舞う。
訝しげに顔をしかめるイアンの前で、彼女は細い手首を白い窓の桟につき、そこに腰掛けた。月明かりを背にしていて、少女の表情は暗闇に沈んでいる。しかしその桃色の唇には余裕の笑みが浮かん

でいるのだろうと、容易に想像がつく。

一体何をしようとしているのか――イアンが警戒の色を濃くする中、華奢な身体は後方へと緩やかに傾いだ。無論、その背後には何もない。艶めいた微笑を残して、少女は下降する。亜麻色の髪が夜闇に舞い、月光のもとゆらゆらと煌めいた。

イアンは咄嗟に間合いを詰めて細い手首を掴み、空中に投げ出されようとする身体を引き寄せた。折れそうな腰を強く引いて窓から遠ざける。そのまま【気】を操作して、開け放たれた窓を閉めた。風が止む。

表情の読み取れない碧に映った自分の紅は、彼女の瞳と混ざって暗い色に。

「……何の心算（つもり）だ」

「別に？　お主が望んだことをしようとしてやっただけのことよ」

「何だと……？」

思ったよりも低くなった声音に怖気づきもせず、彼女はイアンの腕に大人しく身を預けてクスッと笑う。

「この娘がどうなろうと構わないのであろ？　ならば此処から身を投げ出し、この命を散らしても文句はあるまい。わらわは親切だからのぅ、望みを叶えてやろうとしたまで――」

そこまで言って、少女の艶麗とした笑顔は凍りついた。

理由は明確だ。片手で掴めてしまいそうなほど細く白い首筋に、月の光を眩いばかりに反射する銀（しろがね）の刃が押し当てられているからである。いつ抜いたのか分からないほど速く、イアンは腰に佩いていた愛刀の柄を握り締めていた。白光りする刀身に、月光が冷ややかに滑り落ちる。

「ふざけるのも大概にしろ……その首、刎ね飛ばすぞ」

殺気を隠さない口調で吐き捨て、不穏に揺らめく真紅の双眸を細める。しばらく押し黙っていた少女だが、己の窮地に気づかないかのように軽い溜息をこぼした。

「それは非常に困るのぅ。これはわらわにとって何よりも貴重で必要なモノであるから」

それにしても、と言葉を続ける。

「先程の言動とは随分矛盾した行動をする。どうなろうと構わないと言いながら、この身を助けたではないか」

「これを助ける為ではない」

突如、イアンの端整な顔から表情が抜け落ちた。著しく感情の欠落した顔で言ってのけ、イアンはそのまま言葉を続けた。

「俺が？渡り？をした側室が、その夜に飛び降りなどをしたら外聞が悪いことこの上ない。体裁は幾らでも取り繕えるが、面倒極まりない。……厄介ごとを増やすな」

「ふふふ、己の感情を如何に扱うか分からずにもてあそんでいるがゆえの、傲慢な物言いよの」

心底楽しそうにくすくすと笑う少女を冷然と眺め、イアンは無言で柄を握る手に力を込めた。白い首筋にいつぞやと同じ、朱色の筋がはしる。

「……死にたいか」

「おぉ怖い。しかし残念だが、わらわはお主ごときに殺められはせぬよ」

人のことを傲慢な口調と言っておきながら、自分の方がよっぽどその言葉に相応しい口調で話す。傲岸不遜、これほどの言葉が合うものもあるだろうか。

彼女はついと目を細め、ほっそりとした指先で己の首に当てられている刀身を撫でた。

「懐かしいものを持っておるのぅ……。これもまた、完全なる舞台を作り上げるための布石か」

愛しむように指を滑らせてから、緩慢な動作で剣を首から放した。何の力も込めず、自然と。そして赤い液体が流れる首筋に指を当てて傷口をなぞれば、真珠のような肌には傷一つなくなった。イアンは微かに目を瞠りながらも、それ以上の驚きは表に出さない。

少女はゆっくりとイアンから離れた。舞うようにくるくると身体を回らせ、碧の瞳が笑みを浮かべる。赤い唇が三日月を描く。華奢な掌を、自分の胸に当てながら。

「そう……この娘は、お主にとって取るに足らない存在（モノ）」

「何を、今更」

「間違っても、特別な感情など抱くでないぞ。何故か？　簡単なこと。これには既に、心を捧げる相手が定められておるのだよ」

耳の奥で、以前に聞いた水晶の鈴の声が弾けた。目の前の少女と同じ、しかし今よりも遥かに切実な想いのこめられた声が。

――ヴィンっ……！

イアンは努めて平静に剣を鞘に戻した。キンッという金属音が、静寂を密やかに裂く。

暫くの間月を愛でるように見上げていた少女は、ふと表情を厳しくしたかと思うとその場に膝をついた。俯いた拍子に、肩から亜麻色の髪が零れ落ちて床に垂れる。

「やれやれ……終いか。まぁ、ここまで保ったのも僥倖というもの」

初めて苦笑と取れる笑みを浮かべ、側室の姿をした得体の知れない何かは、愛おしげにイアンを見つめた。しかしイアンは眉をひそめる。蕩けるような微笑の奥に隠されているのは――

凍えそうなほど冷たい、憎悪の焔。

「忠告をしておいてやろう」

艶然たる微笑みを浮かべ、頑是ない少女は言葉を紡ぐ。

「舞台に上がった役者達は、ただ喜劇を演じておれば良いだけだ。創造主の成すがまま、筋書き通りに……。この娘の横に居るべき役者は、お主ではないよ」

「……訳のわからないことを言って、楽しいか」

少女は愉快そうに声を立てて笑った。

「今代の＜暁の皇帝＞は随分と頑なだのぅ。いや、そうでなくば面白くない。この後の……待ち遠しい喜劇を思えば」

す、と少女の足が動いた。身構えた瞬間、華奢な身体は眼前に迫る。小さな顔がイアンを覗き込む。抜刀しようとする彼の手を細く冷えた手がやんわりと制し、もう一方の手が彼の目尻を滑った。

「……良い目だ。これから起こることを想像もせぬ、無知ゆえの勇ましき……忌々しき、朱（あけ）の瞳」

浮かべる笑みは濃艶にして凄惨。

「わらわはお主が嫌いだよ。お主だけではない、この娘の周りにいる人間（ヒト）全てが、憎くて憎くてたまらない」

細い腕がイアンの首に回った。いきなりの行動で体勢を崩したイアンを躊躇わずに引き寄せ、唇同士を近づけ――月光が照らし出す影では重なり合ったかのように見えたが、実際は寸前で、止まった。至近距離に美麗な笑顔があろうとも、イアンの無表情は崩れない。

クスリ、と桃色の唇から吐息のような笑みが漏れる。

「この娘は、わらわのものだ。誰にも渡さぬよ」

「……まるで子供のような独占欲だな、下らない」

嘲笑混じりに言ってやるが、楽しそうな笑声は止まらない。

「次に遇うのはいつになるやら……。まぁ良い。また遇おうぞ、――イアン」

初めて、彼女の声がイアンを呼んだ。最後に花が咲き誇るような微笑を浮かべて――唐突に、彼女の瞼は落ちた。

細い腕が首から離れた。そのまま後方へと傾いて床に背中がつく前に、その華奢な肩を抱き止める。

「……」

まるで何事もなかったかのように、腕の中の少女は眠る。気づけば、真上に浮かんでいた丸い月は、僅かに西へ傾いていた。

さすがに彼女をこのまま床の上で寝せる訳にもいくまい。微かに嘆息して、軽い肢体を抱き直す。細身の身体には広すぎる寝台に横たえて、改めて白い面立ちを眺めた。

先程のことが嘘のように――あの時間だけが幻想だったかのように、ルイリは変わらぬ調子で眠っている。身を切るような威圧感も、妖艶な微笑も今や見る影もない。知らず、表情が険しくなった。

自分の与り知らぬ事が、彼女を中心として起こり始めている。それだけは確かだ。仮にも自分の側室である者を勝手にどうこうされるのは面白くない。たとえそれが、鬱陶しい存在である少女であっても。

そっと、薄く色づいた唇を撫でる。

先程彼女の声で、自分の名が呼ばれた。それは初めてのことであるはずなのに、どうもそうでない気がする。夢の中だったかもしれない。だが確かに水晶の鈴の声は――以前に一度、イアンを呼んだ気がしてならない。

――この娘は、わらわのものだ

勝ち誇ったかのような言葉を紡いだのは、この唇。

イアンは歪んだ笑みを浮かべた。

「お前のものも何も……」

これが俺の側室になった時点で、これは俺のものだ。

言葉に出さずにそう呟き、細い顎を二本の指で固定する。ゆっく

りと身を屈め、微かに零れる寝息を確かめて、そして。

花びらのような唇を己のそれで掠めるように、一瞬だけ塞いだ。
刹那の触れ合い。ともすれば、それともとれない程の。

最後に亜麻色の髪を一房掬って、それを徐(おもむろ)にシーツへ落とした。
何も知らない少女は眠る。ただ深く、ただ純粋に。
眠るルイリを見下ろす紅の瞳には、ぞっとするほど冷たい色が浮かんでいた。否、それは冷たいわけではない。あまりにも表情がなさすぎるのだ。浮かべるものすら、ないほどに。

長身の影はゆっくりと動き、入り口の扉へと爪先が向けられた。
何もしていないのに扉が開き、彼が退室した瞬間に閉まる。廊下で少々驚いた様子の侍女の声がするが、それも長靴の音と共に遠のいていく。

一連の出来事を見守っていた月はただ沈黙して、寝台で変わらず眠りにつく少女を照らし出すだけだった。

更に深く噛み合った歯車は、ただ回る。

33．　月下に落ちる宣戦布告（後書き）

未だかつてないほど色々が暴走した回でしたお久しぶりですこんにちは。

あれ、一応何度も添削はしたんですが……それでもこれってどういうこと！？

どうも私の作るキャラは、頭のネジが一本や二本外れたどころでは気がすまないご様子。というか……起きて下さい主人公。そしてどさくさに紛れて何やってるんですか遵守人口……違った、準主人公。協奏曲（コンチェルト）は、これで一応終わりです。この後設定集を再び投下して、新章です！　いい加減祭書かないと。

最後に、ここまで読んで下さった方、新たにお気に入り登録をして下さった方、本当にありがとうございます！　ありったけの感謝をこめて。

登場人物・舞台紹介　※ネタバレ注意（前書き）

予告しておりました通り、協奏曲（コンチェルト）が終了致しましたので以前投稿した設定集を加筆して投下致しました！

※３３話までのネタバレ満載ですので、見る際は充分にご注意のほど※

登場人物・舞台紹介　※ネタバレ注意

【登場人物】

ルイリ＝レティシア（17）　♀　亜麻色の髪　碧の瞳

本作主人公兼ヒロイン。

慈悲深いというよりもお人よし、純真と言えば聞こえはいいがその世間知らず加減はもはや危険。

自らの唄によって他者の傷、病を癒す能力（ちから）を持つ。今のところ、彼女以外に治癒の能力（ちから）を持つ者は確認されていない。

記憶の大半を失っているため、出自、正体は未だ不明瞭。夢の中の男からは「ルイラシエル」と呼ばれたが、本名かどうかもまだ確実ではない。主人公のくせに、謎の多さは本作筆頭。

不慮の事ではあるがイアンの身に刻まれた傷痕の数々、そして心の闇を知ってしまい、それを癒したいと切望する。抱いた感情が何なのか分からずに怯えている。

何かとりあえず色々から狙われている……はず。

イアン＝ルシアディス＝シェリング（21）　♂　金髪　紅の瞳

本作準主人公。シェリング皇国第三皇子にして皇太子。

整った容姿と完璧な仕事さばきで次期賢帝間違いなしと目されている……ものの、冷酷・冷徹・冷静の三拍子に加えて、無表情・無関心・無愛想の三拍子までも揃ってしまった厄介な男。有能であることは間違いないのだが、役に立たないものは躊躇いもなく切って捨てる主義なので恨まれがち。

女性に対する姿勢は『来るもの拒まず去るもの追わず』。今まで女性絡みの問題で窮地に立たされたことのない猛者。

その場の気まぐれで側室にしたルイリに対しては過剰過ぎるほどの苛立ちを感じているが、その真意やいかに。
大気を自在に操る能力（ちから）を持ち、当代随一の使い手とされる。

レン＝スヴェイン（２０）　♂　茶髪　灰白の瞳
シェリング皇国騎士団副団長。イアンの側近。
おちゃらけた言動と薄っぺらい笑みは基本装備。リーファを筆頭として、色んな人から蔑ろにされる可哀想な人。
上司と部下という立場ながら、昔馴染みでもあるイアンにはあまり敬語を使わない。が、彼に対する忠誠心は厚く、彼からも信頼を置かれている。また、イアンの苛立ちの原因を見抜くほどの天才的な洞察力を持っている。本作ではあまり語られないが、女性から女性へ渡り歩く生粋の遊び人。
忠誠心が厚い分、イアンがルイリの存在を否定し続ける真意を把握しきれずに憂えている。
自身の【声】を相手の脳内に直接届ける能力（ちから）を持つ。

リーファ＝フィレル（２１）　♀　紺の髪　藤色の瞳
元桃香宮筆頭女官、現ルイリの侍女。
朗らかで冷静だが、女性（最近では主にルイリ）の貞操が絡むと我を失ったり、女癖の悪いイアンやレンを快く思っていなかったりと女尊男卑の傾向が強い。一度激すれば身分の差なんて知ったこっちゃない。若いが、後宮に勤めて十年以上のベテラン。
勘は見事に鋭い。特に悪い勘は嫌と言うほど働く。最近はイアンに対して、女癖の悪さよりもルイリに対する印象を直すようにと働きかける。
かつてはイアンの間諜の一人。異能者らしいが、どのような能力（ちから）を有しているかは今のところ不明。

セシーヌ＝ラグスロー（１７）　♀　鴇色の髪　琥珀の瞳

ルイリの侍女。ラグスロー子爵家第三女。
年の割に腰が据えられている娘。とはいえお年頃なので、色恋の噂には敏感。少々面食いだったりする。ちなみに淹れるお茶は絶品。
能力（ちから）は持っていないが、異能者に対する理解はある。

ゼスト＝サリディア＝シェリング（２３）　♂　薄い金髪　臙脂の瞳
シェリング皇国第二皇子。
中性的な見目麗しい姿で、異性のみならず同性も虜にする美貌の人。性格は極めて紳士的で女性至上主義。
色んな意味で難儀な弟三人を抱えるが、本人はそれぞれをからかって楽しんでいる様子。ルイリに興味を抱いている。
異能者だが、詳細は不明。

ヴェルガ＝アークル＝シェリング（１９）　♂　濃い茶髪　赤銅の瞳
シェリング皇国第四皇子。
言動や態度はおよそ皇子らしくない、飄々とした好青年。剣の腕は申し分ないが、ゼストやセイロンの話から察するに、執務はあまり真剣に取り組んでいない様子。イアンへ果敢に手合わせを申し込むものの、跳ね退けられる日々。
イアンの側室としては百八十度印象が違うルイリに強い興味を示す。

セイロン＝レドール＝シェリング（１５）　♂　ふわふわ茶髪　橙の瞳
シェリング皇国第五皇子。
無邪気な笑顔と小柄な身体は正に子犬。本当に他三名と血が繋がっているのか激しく謎な末弟。人懐こく天真爛漫。兄弟の中でも飛び抜けてイアンを尊敬している。
精神面は未だ成熟しておらず、自分の立場も忘れて人前で感情を露にすることもしばしば。それをよくゼストやイアンに注意をされ

ている。
イアンと同じく【気】を使う異能者だが、彼よりも力は弱い。

ダイエン（６８）　♂　白髪　朽葉色の瞳
皇宮に古くから仕えている侍医。
好々爺然とした穏やかな老人だが、異能者でないにも関わらず陰謀渦巻く宮殿に四十年以上勤めているあたり、かなり強か。
自分の腕に絶対の自信を持っている。最近自信が持てなくなってきているのは、弟子の人選。

イゼル（２０）　♂　薄い茶髪　薄茶の瞳
ダイエンの弟子兼助手。
近頃飛躍的に腕を伸ばし、一気に一番弟子の立場まで上り詰めた。腕の正確性は誰あろうダイエンの折り紙付き。
普段穏やかだが、まだ若いせいか冷静さに欠ける。リーファとレンの口論に巻き込まれたり、イアンに八つ当たりされたりと、ある意味一番の苦労人。

シンディエラ＝アスター＝ヴィーケード（２０）　♀　茶髪　紫の瞳
イアンの側室。
大国ヴィーケードより赴いた、矜持と気位の高さが主成分の高飛車な姫君。国という後ろ盾もあり、一番でないと気が済まない性分。
イアンに最も寵愛されているのは自分だと自ら噂を流している節も。自称桃香宮の最高権力者。

リオナ（？）　♀　黒髪　蒼の瞳
桃香宮の最奥、『白百合の間』に居る絶世の美姫。
イアン等からは「義姉上」と呼ばれている。ほぼ部屋からは出ず、ひっそりと時間を過ごしている。
人よりも遥かに鋭敏な【耳】を持ち、その聴力は隣国の他愛ない

民衆の会話を聞き分けるほど。イアンが敬語を使う数少ない人物。
原因は定かではないが、彼に対して罪悪感を抱いている模様。

ヴィンセント（？）　♂
　ルイリの夢に度々出没し、恥ずかしげもなく口説き文句を垂れ流す謎の男。彼女のことを知っているようだが、詳しくは不明。
　ルイリからは「兄様」と呼ばれたが……。

？？？（年齢不詳）　多分♀
　ルイリが昏睡もしくは気絶した時に二度現れた、名前も分からない正体不明のトラブルメーカー。
　性格は極めて傲慢で上から目線、人（と言っても今のところイアンに対してだけ）の神経を逆撫でするような言動がほとんど。天上天下唯我独尊という言葉をこれでもかと体現する。
　ルイリを「小鳥」と呼んで異様な執着を見せていて、自分のものと公言している。曰く、「彼女の周りにいる人間全てが憎らしい」。

【舞台設定】

＞ラルスヴァーナ大陸＜
　物語の主軸、及び舞台となる大陸。三百超の民族、六の大国と二十数の小国を抱える。

＞シェリング皇国＜
　大陸で最も強大な勢力と軍事力を持つ大国。四千年を超える歴史を抱え、不落の帝国として名高い。首都はウィスリン。

ちなみに地形を明記すると、東方は海に面していて他の三方は隣国に囲まれる。ただし西方には幾つかの山脈が連なっている。

＞クアレ・ローディン＜

首都ウィスリンの中央に位置する皇国の宮殿。古代ルーヴ語で『七の色彩』を意味し、言葉通り七つの宮殿が存在する。

敷地の広さは半端ない。建物の配置や面積を正確に把握しているのは宮殿内でも一桁の人間だけである。

＞紅煌宮（こうおうきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。皇帝をはじめとした皇族の住まう宮。

＞翡翠宮（ひすいきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。即位式から婚礼の儀まで、あらゆる式典を執り行う宮。

＞蒼泉宮（そうせんきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。他国の来訪者やその他の客人をもてなし、宿泊施設となる宮。

＞桃香宮（とうかきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。皇后及び側妃、側室の住まう後宮。百を優に超える女でひしめき合う。

＞紫芳宮（しほうきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。皇帝や皇太子が執務を行う仕事場。皇帝に謁見が許される広間もある。

＞黒黎宮（こくれいきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。葬儀を行い、遺体を安置する宮。地下

には罪人を繋ぐ牢が。

＞白蓮宮（びゃくれんきゅう）＜

クアレ・ローディンの一。特別な祭典がない限り、決して開放されない謎の宮。そこには隠された秘密があったりなかったり……。

＞暁夜祭（ぎょうやさい）＜

一年に一度、シェリング皇国で催される三日間の祭典。皇国の四大行事の一つで、この一年間何事も起きなかったことを神に感謝するという名目で開催される。

遠方からの旅芸人や吟遊詩人を呼び寄せたりするので、それはもう盛大な祭典。同時に隣国の有力者などを招き、外交の繋がりを深める機会にもなる。

この時だけ、白蓮宮が解放される。

３４．　暁夜祭に向けて（前書き）

更新遅くなってしまい、真に申し訳ありません！！

新章開始しました。読みは幻想曲（ファンタジア）でございます。

３４．　暁夜祭に向けて

光の溢れる光景だった。
まるで天国のような場所だった。

花は咲き誇り、木々は穏やかに梢を奏で、太陽はただ、慈しむような暖かな光を地上に注ぐ。
そこに響く、笑い声。

――ねぇ、貴方は赤の対（つい）の色を知っている？
――対？　どういう意味だ？

突然の問いかけに、彼は不審げに、戸惑ったように問い返す。くすくすと笑って、もう少し補足する。

――そのままの意味よ。対極、という意味

彼の眉間に皺が寄った。せっかく綺麗な顔をしているのだから、しかめ面は似合わないといつも言っているのだが。そんなことを言えば、「お前がそうさせているだけだ」と反論が来るので決して言わないけれど。

――それは……青に決まってるだろう。黒の対が白のように
――残念、はずれ

わざと軽快で無邪気な声を出してみせる。彼は理解しがたいと言わんばかりにいっそう顔をしかめた。

――意外。知っていると思っていたけれど

少しからかってみると、不審が苛立ちへ変わろうとしていた。思わず苦笑する。彼は冷静に見えて、実は気が短い。

――教えてあげる。きっと感動するわ

――どうだろうな。答え次第だ

肩を大仰に竦めて挑戦的に言ってくる。こちらの唇も、自然挑発的に吊り上がった。しかし彼がこちらを見つめる瞳も、こちらが彼を見つめる瞳も、とても穏やかだ。

――赤の……いいえ、紅の対の色はね……、

そっと彼の耳元に唇を寄せて答えを囁くと、彼は驚いたように目を瞠った。しかしすぐにその瞳が柔らかく細まり、こちらまで胸が満たされる温かな微笑が、彼の唇を彩った。

唐突に、視界が入れ替わる。

穏やかな光に満ち満ちていた光景は一瞬の内にして消え去り、草一本すら生えていないような荒涼とした景色が広がった。空は薄墨色の曇天、今にも雫が落ちそうに暗い。

目の前にいるのは、項垂れた背中。あれほど心強い、彼の背中。けれどどうして、これほどまでに小さく見えているのだろう。

――済まない……本当に、済まなかった

嗚咽を必死に堪えているのが分かるその声は、彼の腕に抱かれているものに対して。

あれは――私？

――俺が……赦されることは、きっとないんだろうな

諦めたような、ほのかに自嘲を交えた声に胸が締め付けられる。

赦されない？　そんな訳がない。彼は何も悪くない。

咄嗟に力の無い背中に手を伸ばそうとして、それを阻むように。

――届くと思うのか

嘲る声が、耳を侵す。

それはもちろん、彼の声ではない。聞き惚れてしまうほどの魔性の響きを持つ、甘美な声。知らない間に唇を噛む。

――届く訳がなかろう。お前の姿はもう此奴には見えぬ。お前の声はもう此奴には届かぬ。そも、これはお前を見捨てた男だ

違う、違う。彼は最後まで救おうとしてくれた。諦めないでいてくれた。

その思いを踏みにじったのは、断ち切ったのは、他でもない自分だ。待ち構える末路が恐ろしくて、彼を失いたくなくて。それなのに自分が選んだ手段は、結果的に彼を最も苦しめる事象となってしまった。

――人間（ヒト）とは、罪深い生き物よなァ

穏やかに、諭すように、声は囁く。台詞とは裏腹に、声の響きは慈しむように温かい。

――お前は……どこまで抗うのかのぅ？　小鳥よ……

空気に溶けゆくような呟きを残したきり、声は聞こえなくなった。

彼の肩が震えている。血を吐くように、何度も済まないという声が響く。伏せられた顔は、決して上がることがない。

自分を責めないで。悲しまないで。苦しまないで。

全ては、私の罪なのに。

何度口を開いても、声が出ることはない。この声が、彼に届くことはない。

あぁほら、手を伸ばせば届くのに――、

「……」

目を開けた時にまず視界に飛び込んでくるのは、もはやお馴染み

となった身慣れた天蓋だ。
が、今回はどうしたことか……他のものも視界に入っている。目一杯伸ばされている、薄い夜着に包まれた腕。もしかしなくとも、どうやら自分が伸ばしているらしい。

（な、何で……？）

何かに触れるように、何かを掴み取るように伸ばされていたその腕をおずおずと下げ、ルイリは一人混乱した。
夢を見ていたのだろうか。だとしたら納得が行かないわけではないが、……何だか恥ずかしい。寝ている間に無意識に腕を伸ばしてしまうなんて、奇妙にも程がある。もちろん、夢を見たという確固たる確信はないので納得できる要素は非常に少ない。
けれど胸に残るのは、とても空虚な感情。何もかもを失って、感じるものすら無いような感覚。

しかしこのまま寝転がっている場合ではない。ルイリは細く息をつき、腕に力を込めて起き上がった。
その時に生じた寝台（ベッド）の微かな軋みが聞こえたのか。

「まぁルイリ様、お目覚めになられました？」

弾んだ声が天幕の向こうから聞こえた。え、とルイリが声を漏らすと、薄い幕の向こうから細身の影が音もなく姿を現した。
呆然と瞬きをするルイリに対して、紺色の髪を結い上げた侍女はほっと息を漏らす。

「お早うございます。どこか不具合に感じる箇所はございませんか？」

ルイリは何度か瞬きをしながら、ほんの少し首を傾げて眉をひそめた。何だか彼女の顔を見るのは久しぶりな気がする。
いや、確か眠る前に心配げな表情を見て――心配げな表情？

「……私、どのくらい寝ていたの？」

もしかしなくとも、彼の傷を治して桃香宮に戻ったあの直後から今まで、ずっと寝ていたようだ。どう考えても睡眠時間は一晩ではない気がする。
リーファは目を瞠り、少し誤魔化すように視線を彷徨わせて。そして観念したように、苦笑を浮かべた。

「……ルイリ様は殿下の屋敷から戻られて、そのまま三日お眠りになっておられましたわ」
「三日……」

それまで一度も起きずに、食事はおろか水分も摂らずに眠っていたというのか。自分のことながら驚きを禁じ得ない。しかしそんな長い期間眠っていたにしては、随分と身体が動く。確かに心なしか関節がぎしぎしと言うような気がするが、三日眠っていたならもっと頭がぼうっとするものだろう。
少しも空腹感がないし、何だか妙だ。まるで眠っていたのではなく、三日間だけ時間が止まっていたかのような――。

「ルイリ様、いかがなさいました？　やはり調子が……」

いつの間にか難しい顔をしていたのか、隣に立っていた侍女が心配そうに声をかけてきた。ルイリははっと顔を上げて、取り成すように首を振る。

「あ、いいえ。そうではなくて。多分、ずっと寝続けたせいね。まだ少し、身体が思うように動かなくて」

弱った様子で苦笑を浮かべるルイリを見て、リーファも同じような笑みを唇に刻んだ。

「無理もございませんわ。今日はゆっくりとお休みになって……と申し上げたいところでございますが」

「もう大丈夫。それに、寝すぎて休むっていうのも変な話だし」

「えぇ、確かに。……まぁ、本日はどちらにせよ起きてもらわねばならなかったので、丁度良かったということでしょうか？」

その言葉を受けて、思わず表情を固まらせる。リーファは優しいが容赦ない。起きなければいけない日ならば、きっと叩き起こすことも辞さなかっただろう。

自然に目が覚めて良かった、と安堵してから、一体何があっただろうかとルイリは少し考え込んだ。何せ三日も眠っていたのだ、時間感覚が著しく鈍っている。しかしこの時期に優先するべき事柄といえば……

「……暁夜祭に関係すること？」

眠っていた時間も加算して、四日後に迫っている祭典のことに違いない。

「お察しが早く何よりでございますわ。えぇもちろん、暁夜祭に向けての最も重要な事項でございます」

にっこり。

その言葉がこれほど当てはまるものもないだろうという笑顔を浮

かべるリーファ。ルイリは対象的に、少し後ずさった。端整な顔立ちに浮かんだ笑みに何ら他意は見えない、が……清々しすぎて、逆に怖い。

一体自分の身の内に何が起こるのか。しかしどちらに転んでも面倒なことになりそうで。

「……お手柔らかによろしくね？」

待ち構えている事象に全く見当は付かないが、ルイリはとりあえず引き攣った笑みを浮かべてそう言っておいた。

†　†　†　†　†

「……どうしても？」

「どうしてもでございますわ」

不毛な押し問答。

「だって……絶対痛いでしょう」

「痛くないように善処するのが、私の務めでございますゆえ」

「せ、せめてもう少し待って……」

不安げに揺れる声に、それより幾分か年嵩の声がすぱんと切り返す。

「もう充分待ちましたわ。さぁさぁ済ませてしまいましょう。セシーヌ、そちらを持って押さえていてちょうだい」

「はい、フィレル女官」

「セ、セシーヌまで……！」

「観念なさって下さい……こうなったフィレル女官を止められる人なんて、誰もいません」

「さぁ、ルイリ様。一度大きく息を吐いて。……――そして、吸う！！」

威勢の良い声に思わずつられて、ルイリは必要以上に周囲の空気を吸い込んだ。

その瞬間、リーファの目がきらりと鋭利に光るのと、腰部にえもいわれぬ衝撃的な圧迫を感じたのはほぼ同時。

「――っひ、ぁ！」

上げたこともない声が口から飛び出して、しかしそれを恥じる暇もなく更に腰回りがきゅっと締められる。

「まぁ……本当に細うございますわ、ルイリ様。まさかここまで細いとは」

目盛の刻まれた細い紐をルイリの胴に回したリーファは、感嘆よりも驚きの強い口調でそう漏らした。ルイリは背を反らせ、意図せず息を止める。はっきり言って、苦しい。

「……ちょ、ちょっと締めすぎじゃないの？」

「何を仰います。ここまで締めてもまだこれほど余裕がございますわ」

自分の人差し指を中指をまっすぐに並べて、侍女はしれっと言いのけた。その間、ルイリの身体が揺れないように彼女の両腕を押さえていたセシーヌがようやく解放してくれる。そして、リーファが今しがた測った腰回りの数値を紙に書きとめていく。

セシーヌが差し出した紙の数字を眺めて、リーファは片眉を跳ね上げた。……何だかいつもと雰囲気が違う。

「初めに宮殿（こちら）にいらした時よりは、多少肉が付いたものかと思っておりましたが……先日の色々で、また痩せてしまわれたようですわね」

リーファはやれやれという仕草で言ってのけた。普通、痩せた場合というのは喜ぶべきなのではないか。しかし彼女の口調は喜びよりもあからさまに呆れが表されている。何だかいたたまれなくなって、ルイリは言葉もなく肩を落とした。

「細さは十二分でございますわねぇ……。ルイリ様、これは健康的にもう少し肉を付けなければ」

「そう言われても……」

痩せろならともかく、太れと言われるとは。

瞳を鋭く細めていたリーファは腰に回していた紐を外し、そのままルイリの胸囲、腕、脚などなど……それこそ頭の天辺（てっぺん）から足の爪先までの数値を弾き出していった。

数分後、計測地獄から抜け出せたルイリは、カウチで文字通り脱

力して座っていた。目の前では、ルイリの全身の数値を書き出した紙を持ってリーファと幾人かの針子達があれやこれやと議論を繰り広げている。

「えぇ、絹を三枚ほど用意して……もちろん、全て淡い色で揃えてちょうだい。……予算？　自分で考えれば分かることでしょう。貴方達、何年針子をやって来ているの。これとこれを合わせれば……」

眉をひそめながらも、リーファは律儀に教えている。その口調は実に軽快で明朗だ。何て楽しそうなのだろう。

リーファのあの笑顔からして、自分にとっては何かえげつないことなのだろうと思っていたが。

（まさか暁夜祭に向けての衣装作りだなんて……）

四日後に迫る暁夜祭。一年間何の災厄もなかった事を神に感謝すると共に、これからも災厄がないようにと神に祈る祭典。

その祭典に向けて、宮殿に住む皇族（クァレ・ローディン）、側妃、側室は、必ず一着は衣装を新調するという。昔からの習慣がいつの間にかしきたりとなり、新たな装いをすることで、神に敬意を示すのだそうだ。なるほど、衣装を新しくして神に祈りを捧げるという意味ではおおいに納得できる。

が、他の者達はどうなのか知らないが、ルイリにとっては心底面倒な事柄だった。個人的な意見なのでどうしようもないが。

元よりルイリは自分を着飾るという行為が苦手だ。まして、今の立場には望んでなった訳でもない。とは言っても不平不満を言うつもりはない。むしろ恐れ多いくらいだ。なってしまった時期が不幸だったと言ってしまえばそれまでだが、恐らく側室になって今まで、

これほど面倒な出来事もなかっただろう。
はぁ、と深い溜息を吐くルイリに苦笑しながら、セシーヌがお茶を淹れてくれた。

「フィレル女官は、侍女になる前にお針子の仕事もなさっていたと聞いています。衣装作りには人一倍の思い入れがあるのかと」
「……なるほど……」

侍女になる前というのは、彼女が幼い弟妹を抱えて若いながらも職を転々としていた時代のことだろう。思い入れもあるかもしれないが、それ以前に性分が合っていたのかもしれない。針子達に対して快活に意見を述べるリーファの姿は実にいきいきとしている。

「……あ、これ、ジャリス茶と違う」

活動的な侍女を見学しながらお茶の淹れられたカップに口を運び、すぐにその違いに気づく。
セシーヌがいつも淹れてくれるジャリス茶は甘い風味が特徴的な紅茶だ。しかし今回のお茶は赤いどころか明らかに緑がかっていて、清々しい風味の後ににほんの少しの苦味が残る。これもこれで美味しい。

「さすがルイリ様です！　これはシンラン茶というお茶だそうです。何でも、皇太子殿下が新たに外交を開いた遠方の東国からの輸入品だとか」
「殿下が……」

ルイリは目を瞬(しばたた)いた。今シェリング皇国は、皇帝よりも皇太子であるイアンが政(まつりごと)を執り行っているのは周知の事実。彼の有能さは聞き及んでいたつもりだったが、恐れ入る。貿易、外交にまで手腕を

振るっているとは驚きだ。
セシーヌは説明を続ける。
「ジャリス茶はこちらの方で紅茶と呼ばれておりますが、シンラン茶は緑茶と呼ばれているそうです」
「リョク、茶？」
「見ての通り、緑色をなさっておりますから……。けれど茶葉はジャリス茶などと同じように精製されているそうですよ？　焙じ方が違うとかで」
「……セシーヌ、お茶に詳しいわよね」
心からの感嘆を込めて呟くと、セシーヌはくすぐったそうに笑った。
「実家（ラグスロー）の父が、茶葉の栽培に強い関心を持っていて。そういった類（たぐい）の本を片っ端から買って来るので、家には溢れるほどありまして。昔からそれをずっと読んできたので」
「そう……お父様が」
何となく呆れたような物言いだが、その様子から察するに彼女は父親を尊敬しているのだろう。
それを微笑ましく思うと共に、ルイリは胸に微かに生じた棘のような痛みを自覚した。
ルイリには、自分を産んでくれたはずの両親の記憶がない。
だから、父と母の顔も、当然分からない。どのような声をしているのか、どのような性格をしているのか、果たして自分に似ているのか。名前はおろか、何一つとして思い出すことはない。ダイエンやイゼルは焦ることはないと言ってくれたが、やはり焦燥の念が生まれてしまうのは仕方のないことだ。

記憶喪失と言われても、自らに生を授けてくれた人の姿すら忘れてしまっている事実は、影ながらルイリを責め苛んだ。極力皆に迷惑をかけぬよう表には出さないようにしてきていたが、ふとした時に思い当たって、自己嫌悪の波に呑まれる。

自分の両親すら覚えていないとは、何と厚顔なことか。

それとも、自分は人間ですらない、得体の知れない何かなのでは。

他の人々が持ちうることのない治癒の能力も、そうであれば納得が行くのに。

「ルイリ様、どうなさいました？　わ、私、何かご不快になるような事を言ってしまったでしょうか？」

慌てふためいた声にはっとして顔を上げると、同年の侍女がおろおろとした様子でこちらを見つめていた。

あぁ、また心配をかけてしまった。

「ごめんなさい、何でもないの。少し考え事をしていて……それより、シンラン茶のおかわり、いただける？」

なるべく自然に見えるように微笑んで頼むと、セシーヌはぱっと琥珀色の瞳を輝かせて直ちにその準備を始めた。

気づかれないように、細く息を吐く。

自分の衣装の為にあれほどまで熱弁を繰り広げているリーファ。

自分を労わり、元気付けるために珍しい茶葉を持って来てくれたセシーヌ。

此処にはいないが、他にもいる。廊下で会った時に気さくに話し

かけてくれるレン。会う度に体調を気遣ってくれるダイエンとイゼル。たかが一側室に親しい態度を取ってくれた皇子達。

そして――気まぐれであろうと自分をここで生かしてくれている、皇太子。

たくさんの人が自分に気を遣って、支えてくれている。記憶もなく不安定なルイリがここにいられるのは、他でもない周りの支えのお陰だ。

しかしそれに、果たして自分は報いているのだろうか？

答えは否だ。礼を言っても言い尽くせないほどの恩があるのに、自分は何も返していない。しかし下手に動けば逆に迷惑をかけてしまう。ルイリ個人ができることというのは、極端に少ない。いつものことだが、己の無力さを痛感する。

せめて、穴だらけのこの記憶が、少しでも戻ればいいのだが――。

リーファの討論の声を背景にし、セシーヌが替わりのシンラン茶を淹れてくるまで、ルイリは思考の海に沈んでいた。

少女のふとした考えを汲み取って、僅かな間止まっていた歯車が、再びカチリと廻り出す。

――――――――――――――――

宴が始まる。

人間の空虚な繁栄を祝う宴が。神に仮初めの感謝を捧げる宴が。

歯車はまた噛み合う。舞台を作り上げるために、喜劇を完成させるために。

役者は踊る。何も知らぬまま、何も分からぬまま。

全ては廻っていくばかり。

優美な幻想曲（ファンタジア）を奏でながら。

３４．　暁夜祭に向けて（後書き）

ようやく更新しました滞ってしまいまして申し訳ありませんーーーっっっ！！

しかも、無駄に長い！　意味不明！　動きがない！！

章の導入部分なので、怒涛の展開にするつもりはありませんでしたが……。いやでも押しが弱い。もうこの駄文、どうすればいいのか……。神様私に話を構成できる頭を下さい。

もう少しリーファをいきいきとさせたかったのですが、誰が主人公か分からなくなるのでストップかけました。……暴走する人達が多すぎる。

遅まきながら申し上げますが、ジャリス茶・シンラン茶という名前のお茶はありません。念のため。

いや本当に、こんな駄目人間な作者でごめんなさい。

そんな中、ここまでお読み下さった方、その上お気に入り登録までなさって下さった方、本当にありがとうございますっ！　正直それに応えていけるのか不安で仕方ないのですが、精一杯頑張りますので！

新章始まったということで、蛇足補足。

幻想曲……自由に楽想を発展させた、形式に捕らわれない器楽曲。

古くは模倣対位法による楽曲の一種。ファンタジア。

35．　下らない虚像

皇宮クアレ・ローディンの一、紫芳宮　皇帝謁見の間にて

通常ならば両脇をずらりと兵士が固め、いかにも重厚な空気の満ちる謁見の間だが、今回は極端に人口密度が低かった。

それぞれの息遣いすら聞き取れるのではないかと思うほどの静寂を、低音がゆっくりと裂く。

「……恐れながら陛下」

些か（いささ）普段よりも低くなった声を絞り出したのは、今や皇国の支柱の一つとも言うべき皇太子・イアン＝シェリング。

怜悧と評されるその美貌に表情が浮かぶことは滅多にない。しかし後宮の姫君達や女官の間では、それが禁欲的な魅力だとか何だとか。

が、今回彼の顔にはありありと、『不機嫌』の三文字と眉間の皺が刻まれていた。その顔は生来生まれ持つ端整な顔立ちや身を切るような空気が手伝って、戦慄すら覚える。

無論、イアンは少なからず意図的にその表情を作っていた。

「お言葉の意味が分かりかねますので、お手数ではありますが今一度仰って頂いてよろしいでしょうか」

慇懃な言葉を淡々と、且つ抑揚なく紡ぎ出す。先程の言葉が幻聴でなければ、非常に面倒くさそうな事を聞いた気がするのだが。

イアンは緩慢に視線を上げた。三、四段の上に据えられている二つの椅子。一方は空だが、もう一方には大柄な男がどっしりと座っていた。少々白いものが混じり始めた金髪と、夕日のような朱色の双眸を持つ壮年の男。外見は五十代半ばといったところで、広い肩幅と体格は、そこにいるだけで絶大な威圧感を感じる。

肘掛け椅子――つまり玉座にゆったりと腰かけ、冷酷の名を冠する皇太子を物怖じせずに見下ろしている。

分厚い皮を貼り付けた手の平、そして節くれだった太い中指に嵌められているのは――皇家の色である真紅の石がはめ込まれた豪奢な指輪。それは、支配者の証。

そう、彼こそ誰あろうシェリング皇国第六十九代皇帝・ジルダス＝シェリングだ。

ジルダスは気だるげな様子で肘掛けに頬杖をつき、口端を吊り上げた。イアンの発する【気】に怯える様子はちらとも見受けられない。

「良かろう。もう一度言う」

それどころか先程よりも尊大な声音で堂々とのたまる。人を命じる事に慣れて威厳に溢れている、為政者のそれ。

微動だにせず直立する青年を見やり、反対側の腕で頬杖をつき直した。

「皇太子よ。三日後には暁夜祭が控えている」

「存じております」

「で、だ。そなたはいい加減正室を迎えてはどうだ？」

イアンはますます眉根を寄せる。その瞬間に室内の空気が三度程

低下したことにより、扉の両脇に控える近衛が身を縮ませた。

『……なぁおい、寒いんだけど』

後方で自分及び皇帝の護衛として控えている側近の抗議の【声】が頭に響くが、そんなことを配慮してやる温情を彼は持ち合わせていない。これしきで倒れるなら皇族に仕える者として失格だ。

非難の声を完全に無視して、イアンは口を開く。

「……話の脈絡が見つかりませんが」

祭典に向けての諸々の案件で執務に追われていた矢先、突然の皇帝からの呼び出し。彼は滅多にそのようなことをしないので、どうせ厄介なことだろうとは思っていたが……個人的に最も面倒くさい話題だった。

これで隣に皇后がいれば更に面倒くさかったのだが、幸運な事に彼女は数日後の祭典に向けての衣装作りで忙しいらしい。

大国を治める皇帝は、馬鹿にするように鼻を鳴らした。

「うつけの振りをするつもりか、皇太子？　余がこの時期だからこそ、こうして持ち出したと分からぬか」

「一切分からないとは申し上げません。しかし、この時期だからこそ、そのような問題よりも優先すべき事項がごまんとあるかと」

数々の資料を執務室に置いて来てしまった。部屋に戻った時には追加の資料が山のように積み重なっている事だろう。

先を憂慮して、ついそんな話題はどうでもいいという事を口走ってしまったイアンに対して、皇帝はしかし愉快そうに笑った。

「そう言うな。これも皇太子（そなた）に関しては非常に重要な事項だ。まぁ聞いておけ」

そこまで言われてしまえば、聞くしかない。悔しいことこの上ないが、命じているのは皇帝だ。拒む権限など、皇太子のイアンにはない。

「そなたがいつまで経っても正室を迎えぬのは、余だけではなく皇后も憂慮していたのは知っておろう」

「……は。皇后陛下には常々その事を気にかけて下さっています」

いや実際は、憂慮だの気にかけるだのというお綺麗な理屈などではない。つい先日に桃香宮で出くわした時も、

――おやおや。まだ正妻を迎えていないにも関わらず、また違った女の下（そくしつ）へ行くのかえ？　それともそちは、身を固めると女遊びが出来なくなると恐れておるのかのう。さすが、女に飢える獣は恐ろしいというお小言、むしろ悪口雑言を喰らったばかりだ。

無論ジルダスも承知の上だろう。しかしそれを諫める行為を彼がするはずがない。

「以前から何度も聞いているが、何故正妻を娶らんのだ。そなたの側室達は揃いも揃って高潔な女子（おなご）ばかりだ、それだから目移りしてしまっておるのか？」

「ご冗談を」

薄い笑みを浮かべて軽くいなす。

高潔、とは皮肉な言葉だ。いつ如何なる時も皇太子妃の座を狙い、日々お互いに表で裏でと熾烈な争いを繰り広げるあの女達にそのよ

うな言葉が似合うものか。
そもそも目移りという言葉を目の前の男に使われたくはない。今代の皇帝が抱える側妃、妾は歴代屈指と言われている。気に入った女がいればどうあろうと後宮に引きこみ、飽きればすぐに捨てる。皇帝の側妃達は少しでも長い間彼の目に留まろうと、必死で化粧を続けている。

「ふ、む。諸々を聞く前に……皇太子よ。余が何故、この時期にこの話題を持ち出したか、分からぬ訳ではあるまい？」

試すような口調に、イアンはわざとらしく、つと顎に人差し指を添えた。
少し考える素振りを見せるが、別に答えづらいわけではない。即答を避けた方が良い時もある。計算し尽くした逡巡の時間の後、口を開く。

「他国の権力者達がシェ（こちら）リングに集まる暁夜祭の折に私が正室を迎える発表をしておけば、皇国の更なる安寧を伝えると同時に各方面への牽制にもなる……と推測致します」

皇太子の側室、というだけでも充分な地位だが、正室は訳が違う。言葉通り本妻にして妃という地位にまで飛躍する。
そして正室を迎えるということは世継ぎを作る意思表示にもなる。国の繁栄をもたらす子孫の誕生を待ち焦がれ、国民の意欲は湧くだろう。そして更なる安定感を生み、周囲の国々や民族に反旗を翻す隙を与えない。

「……その通りだ。よく分かっておるではないか」

少々沈黙を挟んだのは、返ってきた解答が予想以上に的を射てい

るからだろう。それを分かっているならば何故……と、視線が問うてくる。

「確かに……皇太子がいつまでも身を固めぬ、という事実は他国には醜聞かもしれませんが」

皇族という身分には憶測のない噂が付き纏う。イアンに対する、あらぬ風評が各地で流れているのを知らないわけではない。寧ろ世俗の声は積極的に取り入れている方である。

大国であればあるほど、婚儀を挙げる年齢は早い。ましてイアンの歳となると、まさに適齢期だ。しかし彼の周りには美しい側室の姫君達こそいるものの、皇太子妃が立つという話は一向に現れない。

誰もが何故だと疑問に思うだろう。もしかすると男色かもしれない、という噂まで流れている。謂れのない称号を着せられるのは御免だが、だからと言って慌てて正室を選ぶのは愚者のすることだろう。

「皇国に多大な支障を来している、とも思えませんゆえ」

「……ふむ。つまり？」

興味深そうな皇帝の口調。一旦言葉を区切ってから、イアンは僅かの間言葉を模索した。口先三寸でこの男を丸め込めるとは思っていない。しかし少しでも有効な言葉を扱うようにしなければ。

「私が皇太子という地位を陛下より賜ってから今日（こんにち）まで、正室を迎えずとも国政は運営できていると判断しております」

大陸でも有数の大国、シェリング。その権威が揺らいだことは未だかつてないとまで言われる。

「歴代を振り返っても、生涯独身で身を破滅させた者はあまり聞き及びません」

その輝かしい国歴を積み上げてきた中、権力者の全員が全員結婚したわけではない。数ある歴史の中で、一生涯妻を娶らずに養子を取った皇太子、皇子など数え切れないほどいる。

自分もその一人で構わないのではないか、とイアンは言っているのだ。実質側室を何人も持っているから、独身という訳ではないのだが。

言わんとしていることを察して、ジルダスは疲れたような溜息をつく。

「成程、そなたの言い分はよく分かった。……しかしな、余は歴代の皇族と比較しての結果論を求めているわけではない」

低く錬れた声に、冷徹な色が宿る。夜になる直前に一度だけ世界を赤く染める、夕暮れによく似た朱の瞳がイアンを射抜いた。イアンは微かに目を細める。

近年皇国が衰退していたのは、全て能無しの皇帝の所為だという世論があるが、それを叫ぶ者もこの視線を見れば黙るだろう。その眼光は紛れもなく『皇帝』の眼。ただ、その目で見る範囲が少し狭いだけなのだ。これがもう少し幅を利かせていたならば、今頃大陸屈指の賢帝と崇められていただろうに。

高々二十を超えた青二才から反面教師のような冷静な分析をされているとも露知らず、皇帝は重たげな唇を開いた。

「見るべくは今だ。過去がどうだろうと知ったことではない」

「ご不快にさせてしまったようで、申し訳ございません」

上辺だけの謝罪を述べながら、イアンは内心舌打ちしていた。過

去の事例を引き合いに出せば少々は及び腰になると思ったが、逆効果だったようだ。今後この方法は通用しまい。

「このままで良いという訳ではなかろう。そなたならばどうする」
「どう、とは」
「此度（こたび）の問題にどのような方針を打ちたてるか、それを聞きたい」

静かに思考を広げる。さして時間を空けないうちに回答を返した。

「……ゆくゆくは正室を娶るのが皇国の為でありましょう。しかし今回の暁夜祭があるからと慌てるのは得策ではないかと」
「と言うと？」
「三日後という期間は短い。今発表したとて、それは国民を混乱させるだけと思いますが」
「国民が混乱、か……。他意はないだろうな？」
「何故そうお思いになるのか、理解しかねます。陛下も世論をお聞きになれば、納得して下さるのでは？」
『お、おい！　お前なぁ……』

受け取りようによっては不敬と思われる言葉。抗議するというよりは諫めるように、慌てた【声】が響く。しかしイアンは、それを思わず口走ったわけではなかった。

袋小路に迷い込んで行く会話。このままでは悪循環が形成されそうだったので、わざと好戦的な言葉を並べた。

『少しは勢い弱めろって！　見えてないだろうけど扉両脇の近衛真っ青だぞ！？　もうほんと、真冬の海に飛び込んできたかってくらいに！』
『少しは黙っていろ』

何度も言うが、これしきで青くなる従者は皇宮には必要ないとイアンは思う。

皇帝が更に言及してくるだろうと思っていたが、しかし予想は外れた。彼は頬杖をついたまま、ひどく静かな表情を浮かべている。訝しげに眉を寄せると、ジルダスは朱色の双眸を厳しく細めた。最奥に冷酷を内包した視線が、イアンへと向けられる。

「随分な口を叩くものだな。そなた……いや、お前が所有する権限の一切は、余が与えてやっているということが分かっていないようだ」

「……」

今までで最も重苦しい沈黙が、室内を包み込む。イアンの沈黙をどう受け取ったのか、ジルダスは「そういえば」と呟いて口の端を吊り上げた。

「先日殉職したお前の侍従……ゼルバーといったか」

イアンはほんの少し片眉を上げた。

「報告書では魔物に取り憑かれてお前を斬り付け、その後自刃したとあったが……果たして真実はそうなのか？」

「……どのような意味でございましょうか」

静かな促しに、皇帝は薄く笑んだ。

「自刃ではなく、お前が粛正したとしたら？　部下の口裏を合わせるのは楽だろうからな」

イアンはただ、沈黙を貫く。漣一つ立たない湖面の如き静かな双

眸で、ジルダスを見つめる。

「それだけではない。――『あの事件』についても、完全にお前の疑いが晴れたわけではないのだ」

その言葉を聴いた瞬間。

瞼の裏によみがえる、赫。

耳に響き渡る、何よりもおぞましい絶叫と、肉を断つ鈍い音。

鼻を突いたのは、今や慣れてしまった鉄の匂い。

――それで、いい……

微かな笑みすら浮かべて呟いた声。

「良いか、肝に銘じておくのだぞ」

束の間、追憶の海へと投げ出されたイアンの意識は、不機嫌そうな男の声によって引き戻される。

朱と紅、似て非なる色が、静かにぶつかり合う。

「その気になれば、余は今この場で『皇太子』の地位も剥奪できるのだ。お前が今後、これを嵌められるか嵌められぬかは、全て余が決める事」

そう言って右手の中指に嵌めているものをちらつかせた。見るもの全てを魅了する紅い宝石。皇帝たる者にだけ許された、至高の指輪。

次いで皇帝は、とん、と肘掛けを指で叩いた。

「お前がここに……座るのかどうかもな」

そこに座ることが出来るのは、名実共に皇帝として認められた者だけ。皇族ならば誰もが渇望し、その為に血のにじむような努力を続ける。

イアンは眉一つ、表情一つ動かさずに一連の動作を眺めた。まるで――少しも、興味が無いかのように。

「勘違いをするでないぞ。お前はあくまでも皇帝候補に過ぎぬ。……あまり驕らないことだ、若造よ」

「……これは、ご無礼を」

深く身を折って、最上級の謝罪の形を取る。その態度で多少の溜飲を下げたのか、皇帝は深く息を吐き出した。

「良い。今回の件は保留とする。……あぁ、それから」

もう一つ思い出したように顔を上げる。それは何かを掘り返すような顔ではなく、本当に伝えるべき案件を忘れていた、という顔だった。

「今回の暁夜祭の『歌い手』の選出は、そなたに任せる」

「私に……でございますか」

それをさっさと言えと思わないでもない。

「昨年まで余が選出していたが、抜擢していた側妃が体調不良を訴えてな。今回はそなたに一任することにした」

「……承知致しました」

「以上だ、下がれ」

「は。失礼致します」

髪の先一本にまで神経を使うように完璧な動作で身を翻し、レンを伴って退出しようとするイアンの背中に。

「皇太子よ。……そなたは真に皇国を思っているか」

その言葉に、ぴたりと足を止める。彼の顔を垣間見た褐色の側近は言葉もなく眉をひそめ、近衛二人は言葉もなく震え上がった。

沈黙は、時間にして数秒。表情の全てを削ぎ落として、皇帝たる男へと顔を向ける。

「私が生を受けたその瞬間より、この命、心血は全て皇国に――引いては尊き皇帝陛下へと捧げられております」

早口であっさりと宣言し、ジルダスの返答も待たないまま、イアンは皇帝謁見の間を退室した。

†　†　†　†　†

廊下に響く、長靴の音。

「……あーのーなぁ。何であんっな喧嘩腰で一国の皇帝陛下に挑みかかるんだよ」

レンはうんざりとした様子で、目の前を早足で歩く男に愚痴を零した。

「お前の【気】には辟易するよ。本気で冷気を流すんだから……」

しかし受け答えが返ってくる様子は一向になく、むしろ僅かに速度が速まった気がする。

一直線に自分の執務室へと向かう背中からは、何かを窺い知ることはできない。

「んで？　どうすんだ、正室の件。まぁひとたびお前がその気になれば、真っ先にヴィーケードの姫とかリーヴェル伯爵令嬢辺りが食らいついてきそうだけど」

「俺はそんな下らない案件に付き合っていられるほど暇ではない」

「……」

沈黙を返す。いや、沈黙しか返せなかった。

皇国で最も尊い人物からあれほど長い時間をかけて懇切丁寧に諭されたというのに、この男は全く動じていない。動じるどころか……鬱陶しがっている。

「えーとじゃあ……『歌い手』の件は？」

再び沈黙が返ってくる。しかし今回の沈黙は答えるのが面倒なのではなく、思案を広げている沈黙なのだとレンは感じた。

『歌い手』とは、暁夜祭の始まりを告げる歌を歌う者のこと。祭

典の初めの時に翡翠宮の露台に立ち、シェリング皇国の国歌を歌う。それと同時に、三日間の暁夜祭は幕を開けるのだ。

基本的に男女は問わないが、女性の方が良い。レンの個人的な感情も介入するが、何が悲しくて祭典の始めに男の歌声を聞かなければならないのか。

ここ十年間ほどは、皇帝の第三側妃……だったか。よく覚えていないが、多分そこら辺りが歌っていたはずだ。久しぶりに『歌い手』が変わるとなると、いよいよ世代交代も近づいているのか思う。

さて、ここでこの主が、一体誰を候補に考えているかということだが。

（最近を考えれば、ルイリ嬢を推したいところだけど……）

彼女の歌声は、圧巻以外に言葉が見つからない。とは言っても、実はレンはその歌声を直接聞いたことはなかった。しかしリーファやダイエンの話を聞くに、まさに未曾有の歌声らしい。しかもイアンが貶さないということは、相当の腕前なのだろう。

だが、それが決して容認されることではないということをレンとて理解していた。彼女はあくまでも皇太子の一側室に過ぎない。大抜擢と言えば聞こえはいいが、良い意味での注目はされないに違いない。

（シンディ姫とかはしたがるだろうけど……上手い訳でもないしなぁ。こいつの側室では考えられないか）

「レン」

口には出さずに蛇足のような考えを巡らせていたレンは、ふいに主人の低い声によって現実に戻された。

気づけば、今代の皇帝よりも遥かに深く濃い紅の瞳が向けられて

いた。静かな表情を見るに、どうやら考えがまとまったらしい。レンはおどけた様子で姿勢を正す。

「はい何でしょーか？」

「明日、桃香宮へ行く。連絡を取っておけ」

「連絡って、誰に……あ」

そこまで聞きかけて、レンは思わず声を漏らした。

そうか、失念していた。側室でもなければ大して外聞も悪くない、それでいて気品がある完璧な彼の女性を。長い間皇国にいるから国歌も分かるに違いない。

「了解。早急に手筈整えとくよ」

にやりと笑って応じた側近を一瞥して、イアンは興味がないように前を向き、再び歩き始めた。

レンはその背中を追わなかった。今命じられたことの準備をするためには、皇太子の執務室に行く必要は無い。自分の任務の中には彼の護衛も含まれているが、他に侍従もいるし、恐らくどこかに暗部も控えているから大丈夫だろう。

「……」

無言で、レンはイアンの後ろ姿を眺める。

毅然と背筋を伸ばし、颯爽と歩いていく皇太子。後ろ姿を見ただけでも、その姿は威厳に溢れている。歳若いながらも政治を任されている理由がよく分かる。

そう、彼は誰から見ても完璧な皇太子だ。皇国の為に心血を注ぎ、私情を一切挟まないその姿勢は尊敬に値する。

――自刃ではなく、お前が粛正したとしたら？
――お前の疑いが完全に晴れたわけではない

あれほどの言葉をかけられても、動揺の欠片すら出さない。感情が凍てついてしまったのか、それとも内なる思いが中で荒れ狂っているのか。

どちらにせよ、彼自体、表情を表に出すことは滅多に無いが。

（けどなぁ……）

苦い表情を浮かべて、レンは数分前を回顧する。

先程。皇帝が本当に皇国を思っているのかと聞いた時の、束の間の沈黙。

（多分……分かってないんだろうな）

レンは見たのだ。あの時、彼がどのような表情を浮かべていたのか。皇帝に振り返る直前、何故近衛が蒼白になったのか。

笑っていたのだ彼は――己でも気づかない間に。下らないと言わんばかりの、嘲りを浮かべて。

まるで皇太子である自分は、虚像以外の何物でもないというように。

35．　下らない虚像（後書き）

な……何だか色々と謝りたい文章ですが、とにかく更新致しました！
直前までタイトルを「皇帝ＶＳ皇太子」と迷ったのですが、そこまでふざけてる場面でもないか……と断念。
今回は今までに無いほど散漫な文章となってしまいました。読み難かったと思いますごめんなさい！

ここまで読んで下さってありがとうございました！　お気に入り登録までなさって下さった方には、本当に……！　涙を流しながらお礼を申し上げます！

36．　風雲の告げるは（前書き）

ある意味警告ですが……。
ものすごい長いです。そして視点がぽんぽん変わります。混乱されるかと思いますので、ご注意下さいませ。

ごめんなさい、私の文章構成力がないばかりに……今後こういうことはないようにしますゆえ。

36. 風雲の告げるは

ゆら、と蝋燭が揺れる。日中に置かれては太陽の光にいとも簡単に負かされる明かりだが、この空間ではそれが唯一の光源となっていた。

『……祭りが始まるか……』

濃密な暗闇の中響いたのは、その暗闇を更に凝縮させたかのような低くおぞましい声。

相対しているのは、漆黒のローブに身を包み、恭しく頭を下げる人影。姿形からは、性別も年齢も窺い知ることはできない。

「閣下。……差し出がましい進言かとは存じますが、そろそろ我々も本格的に動き出すべきなのでは」

『いかぬ』

発言は胃袋に穴が開きそうなほどの覚悟を以って為されたのだが、渦巻く闇の中央から吐き出された一言により一蹴された。

『頃合いを計れ、と何度言ったら分かる。……よもや過日の魔物の一件も、手を出した訳ではあるまいな』

「誓ってございません。あれは図らずも生じた出来事。……ですが」

黒いフードの下、うっそりとした笑いが唇に刻まれた。

「ご報告の通り、収穫は十分にあったものかと」

『……その件、真実かどうかは確かめたのか』
「いえ、まだこの目では。しかしほぼ間違いないことかと存じます。今後しばらく調査致しますが、閣下の『計画』にも必ず利用できることでしょう」
『ふん……』
しばらく不機嫌そうに沈黙していた闇が、ふと輪郭を揺らした。
『ともかく、くれぐれも表立って不審な行動はするな。……出来の良い切り札も、度が過ぎれば破り去る』
圧迫感を禁じ得ない重々しい忠告を聞き、黒い人影は深く頭を垂れた。
「……肝に銘じておきます」
『今回は以上だ。さっさと戻れ』
「はい、失礼致します」
その言葉が放たれたと同時に、闇も、黒い姿も、その場から忽然と消え去る。再度ゆらりと動いた蝋燭の火は音もなく消え、辺りからは光が失われた。
暗闇がただ、満ちていく。
† † † † †

「……ふむ、こんなものか」

簡素な姿身を見ながら、彼は緩く首を傾げた。

鏡に映った姿は中々に謎めいている。自分で言うのもなんだが、彼は良い意味で己の容姿を熟知して利用していた。

「お兄さん、用意できた？　……わ、すっごくかっこいい！」

軽快な足音と共に、色とりどりの花をちりばめて可愛らしく着飾った踊り子が姿を現した。彼の姿を見るや否や、年頃の娘らしく顔を赤らめて黄色い声を上げる。

「そう言ってくれるのはありがたいが……おかしくはないか？　大丈夫だろうか」

「おかしいなんてとんでもない！　むしろそっちの方が、神秘的で魅力倍増よ！　うん、絶対そう！」

嘘などつくものかと言わんばかりにまくしたてる一座の舞姫に微笑する。

「そこまで言われるのも面映(おもはゆ)いものだな。ありがとう、君も似合っているよ」

「そ？　ありがと。ま、こんなに盛大なお祭りで演技ができるのは、大陸中でもシェリング皇国の暁夜祭(ここ)(このとき)しかないもの。皆はりきってんのよ」

そう言って肩を竦める仕草は、実年齢よりも背伸びをしようとしているようで微笑ましい。確か十六だっただろうか。

（十六か……）

彼は踊り子の少女を見つめ、しかし真実全く違うものを見ていた。

あの娘は十七だ。会っていない期間は長い訳ではないのに、何年も会っていないような錯覚に陥る。あるはずのない柔らかな髪色が視界を掠めた気がして、静かに瞼を閉じかけたが。

「お兄さん？　どうかしたの？」

心配そうな声に、彼ははっと我に帰った。気づけば、赤みを帯びた茶の瞳が心配そうに顔を覗きこんできている。

「あぁ……済まないな、何でもない。少し考えごとをしていただけだ」

「そう？　どこかきついんだったら無理しないでよ？」

自分の体調を慮ってくれる舞姫の少女に笑みとうなずきを返し、極力自然に話題を転換した。

「ところで、団長殿はどうした？　姿が見えないようだが」

「……ついさっき起きたばっかだから、今慌てて支度してる」

「さっき？」

流石に驚いた。彼らの団長が朝に弱いことは知っていたが、まさかそれほどとは。踊り子は苦笑してうなずき、片手を腰に当ててみせる。

「せめてこういう大事な日には早起きしてほしいもんなんだけどなぁ。……ほんっと、仕方ないよね」

台詞としては刺々しいが、口調はひどく柔らかい。彼女がいかに団長を慕っているかが伝わって、彼は薄く笑う。

「そんなことより、お兄さんの姿みんなにも見てもらおうよ！　馬車の外に集まってるから、来て来て」

「いや……私は自分の姿を披露する趣味はないんだが」

「そーいうおカタいことは一座（ココ）では禁止だよ？　みんな絶対に褒めてくれるから！」

言いながら、花の精の如き踊り子は彼の腕に自分のそれを絡め、ぐいぐいと外へ引っ張っていく。さして抵抗もせずについて行きながら、彼は馬車の外へ出た。穏やかな風が頬を打ち、強すぎない陽光が満ちている。

二人の出現に気づいた団員達が、感心の声を上げて駈け寄ってきた。

「兄ちゃん、いいじゃねぇか！　そーいう格好に女のコ達はくらっと来るんだよなぁ！」

と言いながら、鷹揚に肩を叩いてくるのは大柄な大道芸人。

「すげー、かっこいー！　おれも同じカッコしたかったなー」

「テス、駄目よあんたは。お兄さんだからこそ似合うんだから！　百年経ったら出直して来なさい」

「うわっ……シェーラ姉さん、そーいうコト言うかなぁ！」

きらきらと羨望の眼差しを向けてくる刃物使いの少年の頭を揶揄するように撫でるのは、先程の踊り子。

数々の賛辞に彼は礼と微笑を返しながら、ふと天上を仰いだ。視界を満たすのは、突き抜けるような青空。夏のように濃い青をしてはいないが、いかにも春らしい柔らかな色。地上の風は穏やかだが、上空の雲は忙しなくその姿を変える。

つい、と目元に険が宿った。

（……随分と、風が疾(はや)い）

それが単なる強風ではなく、何かの前兆と考えるのは――思い違いだろうか。

（何にせよ、お前が無事なら私は……）

同じ空の下にいるはずの愛しい存在を思い起こして、彼は切なく瞳を細めた。

†　†　†　†　†

まるで矢のように準備の期間は過ぎ去り、いつの間にか暁夜祭当

日。

春に開催されるその祭典に相応しく、窓の外を吹き抜ける風は穏やかで柔らかい。そういえば、そろそろ実家から新芽の茶葉が送られてくる頃だ。届いたら早速焙じて、主である側室に感想を聞きたい。

セシーヌは取り留めもないことを考えながら、主の立ち姿を見て感嘆の息を漏らした。

「……まぁ！　真にお美しゅうございますわ、ルイリ様！」

感動を端的に表現した先輩侍女の声を聞き、主――ルイリが居心地悪そうに身動ぎをした。リーファは鼻歌を歌い出さんばかりの勢いで、衣装（ドレス）の裾に寄ってしまった皺を伸ばしていく。

「ここまで辿り着くのに何度針子達にやり直しをさせたことか……けれど、想像以上ですわ！　これでしたら彼女達の努力も報われましょう！」

彼女達の努力も何も。

セシーヌはひっそりと溜息をついた。針子達の提出するものが納得いかなかったものだからリーファは業を煮やし、結局は彼女一人でこれを作り上げたのだが……その点は、言わない方がいい。これほどまで感極まった様子の彼女に対して訂正を入れるのも無粋だろう。

リーファの表情とは裏腹に、ルイリはしなやかな眉を悄然と下げる。碧の瞳が繊細な刺繍の施された手袋をしげしげと眺め、自信なさげに揺れた。

「でも……本当に似合ってる？　こんな豪華な衣装、私には……」

「何を仰います！　これほどまでにお似合いになるのに、そう自分を卑下してはいけませんわ。ねぇセシーヌ？」
「もちろんです。こんなにお綺麗なんですから、自信を持っていいですよ」

念を押すようにセシーヌが言うと、ルイリは曖昧に笑った。自分達の言葉はありがたい、けれどもやはり似合わないだろう、と言いたげな微笑み。

しかし、今の彼女を目の前にして『似合わない』と言う者は皆無に違いない。
華奢な身体を覆う衣装（ドレス）は、彼女の深い碧の瞳がよく映えるようにと誂（あつら）えられた光沢を放つ薄緑色の生地。
腰を締める胴衣は僅かに襞（ドレープ）があることで、逆に彼女の胴回りの細さをより一層強調する。そこから足元にかけては丹念に折り込まれた薄緑の絹が広がり、ふんわりとした軽やかな印象を与える。実際は、幾つも重ねられた布がかさばり、重くて仕方がないのだが……。

（うーん、それにしても……）

改めて彼女の外観をつぶさに眺めていきながら、セシーヌは少しずつ視線を上にずらしていく。

リーファの仕立ては申し分なく完璧だ。ルイリの魅力を最大限に引き出している。
というよりも……これではむしろ、見惚れる者達が多くなるのではないか、と不安に思うほど。

細やかな刺繍の手袋は彼女の腕を肘まで覆い尽くしているが、衣装（ドレス）は袖がない造りになっているため、二の腕から鎖骨の僅か下にか

けては眩いばかりの白磁の肌が露出している。男ならいざ知らず、女のセシーヌは別の意味ではらはらしてしまう。しかしながらそこはリーファ、角度によって色が変わる薄手の肩掛(ショール)けがしっかりとその部分を隠していた。

鎖骨の下、胸元を隠すように、中央にあしらわれる一輪の黄色い花。これもまた、彼女の亜麻色の髪によく映える。

白い首筋には淡く光る小ぶりな真珠が一巡していて、耳元にはそれよりも少し大きい、同じ質の真珠が二、三個数珠(じゅず)繋ぎで揺れる。

「……さぁさ、これでよろしいのでは？　セシーヌ、貴女から見ても大丈夫？」

「あ、はい！　さすがです、フィレル女官……」

ずっとルイリの背後で彼女の髪を整えていたリーファは、最終確認と言わんばかりにセシーヌに促す。セシーヌは咄嗟にこくんとうなずいた。

腰まで伸びた真っ直ぐな亜麻色の髪は高く結い上げられている。全体を後頭部の右側で一度結び、亜麻色は見事な螺旋を描いて流れていた。結び目では幾つかの飾り紐と飾り玉が、鮮やかな色彩を加える。

髪型は全てセシーヌの提案で、ルイリが元々から髪艶(かみつや)が良いことに目をつけ、ずっと巻いてみたいと思っていたのだ。予想通り、彼女の髪はいつも以上に艶やかな印象を与えてくれる。

「あとは……髪をもう少し纏めてくれる花を、と思っていたのだけれど」

心底悩むようなリーファの言葉に、セシーヌは同意する。

無論、このままでも彼女のたおやかな美しさは余すところなく発

揮されているのだが、欲を言えばもう少し華が欲しい。とすると、髪型を引き締めてくれる花か何かがあれば……。

側室は吟味するように頭から爪先までを眺めてくる侍女二人に辟易した様子で、薄く化粧の施された白い顔(かんばせ)をほんの少し引き攣らせた。

「薔薇は駄目ですよね、ドレスの色に合わないから。菖蒲(あやめ)は、頭に飾るには不釣合いですし……あ、フィリーの花はどうですか？」

セシーヌは妙案を思いつき、先輩の侍女に同意を求めた。フィリーの花は、シェリングでは定番とも言える淡い青をした花である。旬は夏の初めだが基本的に年中咲いているので違和感はないし、芳香も清楚でルイリの印象にもぴったりだ。

しかし賛同してくれると思ったリーファは、渋面を作って首を振った。

「夏ならまだしも、薄緑に青を組み合わせると少し肌寒い印象だと思うわ。それはまたの機会に。春らしく、もう少し暖色系の花があるといいのよねぇ……」

「そ、うですよね……」

そう言われてみれば。セシーヌは再度顎に手を当てて、深く考え込む。

悶々とした静寂を破るように、ルイリが少し首を傾げ、紅(べに)を差した花弁のような唇を動かした。

「……二人共、考えてくれるのはありがたいんだけれど」

「はい」

「何でしょう？」

今度はこちらが首を傾げる番だ。その後の発言は何となく予想できつつも辛抱強く待っていると、少女は小さく微笑んだ。

「こんなにも素敵にしてくれたんだもの、私は充分。それに、これ以上目立つようにされても……」

言いながら、手袋に包まれた細い指先で亜麻色の毛先をもてあそぶ。碧の瞳が物憂げな表情を浮かべているのを見て、セシーヌははっとした。

亜麻色の髪と碧の瞳。その美しさを最大限に引き出す、というのが目的の衣装作りではあった。

しかしよくよく考えると、その色彩を持つのは恐らく祭典の中で彼女ただ一人。その色合いを必要以上に強調しすぎてしまうと、興味本位で近づく貴族などがいるかもしれない。引き出すのは構わないが、目立たせるのは良くない。

非常に残念なことだが、本人の意見は正鵠を射ていた。

リーファが藤色の瞳を罰が悪そうに伏せる。セシーヌも同様だ。良かれと思ってしたことが、逆に心労を追わせる羽目になるとは。

「申し訳ありません。そこまで考えが至らず……」

「いいの、ごめんなさい。これはただ、私の我が儘なんだから」

「我が儘など、そんなこと」

けれどセシーヌ等が自責の念に駆られれば、優しい心根の彼女は更に余計な気負いをしてしまう。これを言い出すのも随分と勇気が要っただろうに。

「あ……でも、二人がこうして悩んでくれたのは本当に嬉しかったから！　ありがとう」

沈んでしまった二人の侍女を励ますように、ルイリが明るい声音を出した。思わず顔を上げると、彼女は柔らかく口元を緩めている。

（わ、わぁ……）

あまり同性に見惚れたことのないセシーヌだったが、今回ばかりは惚けてしまった。透き通った、どこか儚い微笑を浮かべる彼女の何と可憐なことか。文字通り、花のような微笑み。

しかしここまで無防備に微笑まれてしまうと……。もしこの笑みを向けられたのが男であったなら、あらぬ誤解を抱くかもしれない。

（残念、って言うべきなのかな）

身分などどうでもいいセシーヌにとって、彼女の亜麻色の髪や碧の双眸は全くもって問題がない。皆珍しいと奇異な眼で見るよりも、綺麗だと感服の眼差しを向けるべきだ。この髪色や瞳を、もっと堂々と披露できる時が来ればいいのに。

「……お褒めに預かり、恐悦至極に存じますわ。ルイリ様」

セシーヌが色々と考えている間、リーファがゆっくりと唇に笑みを刻む。その潔い笑顔は、いつもセシーヌが憧れているもので。

「では……代わりと言っては何ですけれども。今回の暁夜祭、この命に懸けてルイリ様をお守り致しますわ。……えぇもちろん。悪い虫など近づけさせもしませんとも」

「……あ、ありがとう」

彼女の気迫に圧された空気ではあるが、それでもルイリはしっか

りと礼を言う。
セシーヌも口には出さずとも、決意を新たにしていた。この純真無垢で大切な側室（あるじ）を、絶対に無頼な輩に触れさせてはいけないと。

後になって、その決意が果たされたかと考えてみれば……悔いの残る結果となったのだが。

†　†　†　†　†

襟元が必要以上に窮屈だ。
まさか寸法を間違った訳ではないだろうかと仕立て屋を疑いながら、イアンは目の前の茂みに目を向けた。

紅煌宮の自室の近辺に設（もう）けられた庭園。彼はそこに立っていた。桃香宮よりも豪華さには欠けるが、イアンは別に観賞用の為に造ったわけではない。直属の部下に秘密裏に命を下す際に便利なだけだ。
実際、彼はそれを実行しようとしている。

「――オルク、オリス」

低く押し殺した声で呼びかけると、風が動いて木々がざわめいた。

不自然に生じた風はイアンの金髪を揺らす。姿こそ現さないものの、二つの気配が出現した。

『『お呼びで』』

少したりともずれることのない、見事に重なった二つの低音。それは眼前から放たれた声であって、そうでない。肉体はここにはなく、思念の塊が呼びかけに応じて馳せ参じただけのこと。

「城門外周辺の警備は、全てお前達に一任する。可能性は低いだろうが……万が一ということもある。悪童共の一切を決して近づけさせるな」

『恐れ多き大役、この身に代えようと全う致す』

『我が主が尊命、この命を懸けようと完遂致す』

生真面目極まりない返答を受けて、イアンは微かな呆れを眉宇に漂わせる。怠惰的な態度は好まないが、ここまで型にはまった態度もどうなのか。こうも丁寧だと、慇懃無礼という言葉が浮かぶ。

無論彼等に他意はない。一つ息をついた。

「余程のことがない限りはお前達で対処しろ。緊急と判断した場合のみ、俺を呼べ」

『御意』

『承知』

「では、――行け」

短い一言と同時に、ざぁっと風が巻き起こる。木々達が、驚いたように梢を揺らす。一陣の旋風（つむじかぜ）を巻き起こして、二つの気配は消えた。決して自然現象ではない風が余韻を残しておさまろうとした時、耳に滑りこむのは背後で芝生を踏む音。

「皇太子殿下、ここにいましたか。……っと、これはまた」

背中に、のんびりとした若い声がかけられる。

足音も立てずに背後に歩み寄る悪趣味を持ち、且つこの場所に迷わず訪れる男など一人しか知らない。自分を迎えに来たのだろう側近は、振り返ったイアンの姿を見るや目を瞠った。

「さすが、祭典の主役の一人なだけありますねぇ。これじゃあんたの隣に並ぼうと、側室だけじゃなくて祭典に参加した女性全員が躍起になりそうだ」

「……無駄口を叩くな」

レンが珍しく（正確ではないが）敬語を話しているのは、この場で聞いていない者がいないとも限らないからだろう。皇太子の側近とはいえ、砕けた口調を使っていては不敬罪として首を飛ばされかねない。

漆黒の軍服に隙なく身を包んだレンは、褐色の肌とも相まってまさに黒豹のようだ。普段は襟元や袖口の釦（ボタン）を留めずに着崩しているが、今回ばかりはきっちりと着用している。それでもどこか不真面目な印象を拭えないのは、口許に浮かぶ薄い笑みと尊大とも言える態度からだろうか。

不躾であることも考えていないのか、側近の青年は主であるはずのイアンをじろじろと見ている。

「毎度のことですが着付けも完璧で。少しは侍従や小間使いに手伝わせればいいのに」

返答が面倒で、イアンは黙殺した。礼服を自分一人で着用するの

はいつものこと。他人の手伝いなど煩わしいだけだ。
その反応をどう受け取ったのか、レンはにやりと笑う。
「お分かりかとは思いますけど、そろそろ時間ですよ。どうぞ翡翠宮へ」
いつもの軽薄な笑みとはまた違う、どこか凄みを醸した笑みが褐色の端整な顔立ちに浮かんでいる。
イアンは冷めた目でそれを見てから、右手に持ったままだった剣を胴部に巻きつけた太めの帯革（ベルト）の脇に差し込む。慣れた重さは、すぐに馴染んだ。
「毎度ながら、それで行くんですねぇ」
もはや敬語と呼べるのかも怪しいレンの声。純粋な興味に満ちた視線は、たった今イアンの腰に差された剣に注がれている。
それはイアンが皇太子に任命されたと同時に皇帝から下賜されたもの。鞘には蔦が巻きつくような銀飾りが、そして柄には細かな紋様が刻まれている宝剣。自らの所持品に頓着しない彼が唯一、肌身離さず携帯しているものだ。
このような場では式典用に作られた飾り用の剣を身に付けるべきなのだが、彼は昔からこの愛刀を手放したことはなかった。もし敵の襲来があれば、お飾りの剣など話にならない。
「……」
ゆっくりと鯉口に手を添えると、チャキ、と鍔が鳴った。
鞘の中でただ己の出番を待つ刀身には、血液一つ、脂一つついていない。鞘から抜く度（たび）、血液がこびりつく度に、時間を置かずに手入れをしている賜物だろう。鞘から抜き放った高潔なまでの白刃の

煌きは、時に血に塗れた刀身（すがた）よりも敵に畏怖を覚えさせる。

しかしそれでも――この剣を振るい奪った命の数を重ねるにつれて、イアンの目には常に白銀の輝きは血みどろに映っていた。

この刃が、一体何度血の雨を降らせてきたことか。いやそれ以上に、この身がいかにその雨を浴びてきたのか。表面上の穢れを拭い去ろうとも、その事実は変えようがないのだ。

雨――そう、あの日は雨だったか。

自分が初めて、赤い雨を降らせたあの日は……。

「殿下？」

訝しげな声が、突然耳に飛び込む。伏せかけていた視線を上げると、灰白色の双眸が奇妙なものでも見るような目でこちらを見ていた。

「なーんか遠い目してましたけど？　考えごとですか、珍しい」

「……別に」

言い、小さく舌打ちをしながらレンの横をすり抜けた。側近は、当然とばかりにその後ろを付いてくる。

三日前に皇帝が余計なことを言ってくれたお陰で、どうでもいいことまで思い出してしまった。今はそんなことを思い起こして感傷にひたっている場合ではない。

馬鹿馬鹿しい。

「城門、及び皇宮各所の警備は」
「全員配置についてますよ、抜かりなく」
「では全員に今一度伝えろ。決して気を緩めるな、その身に皇国の命運がかかっていると思え、と」
「御意に」

足早に回廊を歩きながら、ふと首を傾けて空を見上げた。
天上高くに太陽の君臨する青空。白い雲が浮かぶ空の様子は平和そのもので、式典の天気としては申し分ない。だが上空（うえ）は風が強いのだろう、白雲は千切られるように絶えず蒼天を流れていく。
イアンは眉間に皺を刻んだ。その性急なまでの変化に胸がざわつくのか、それとも単なる思い過ごしか――心中に渦巻くのは、暗雲めいたもの。

この後控える祭典が、何事もなく過ぎて行けば良いのだが。
あまりよろしくない懸念を抱え、イアンは鮮やかな青から目を逸らし会場へと一路を急いだ。

†　†　†　†　†

「……」

暁夜祭の開会が行われる会場、翡翠宮へ向かう道中。桃香宮の美しい庭園を眺められるように工夫の施された廊下を歩いていたルイリは、ふと足を止める。

「ルイリ様、いかがなさいました？」

怪訝そうなリーファの声を聞き流し、何となく気になったので空を見上げてみた。その拍子に、耳元で慣れない重みが少し揺れる。

春の陽光が葉の間から漏れる。そして上には、木々の葉に縁取られ、まるで切り取られたかのような青い空。雲一つない、とは言いがたく、蒼穹にはそこかしこに薄雲が浮かんでいる。しかし快晴とは違って、これはこれで綺麗な空模様だ。

（……でも）

何度かルイリが瞬きをしている内にも、雲は駆け回るように自在に、己の姿を変えていく。地上では風など草木を微かに揺らす程度しか吹いていないのに、上の方では風が強いらしい。

手袋に包まれた手を、そっと胸元に添える。

何だか、妙に心がざわつく。あの空は——あの風の速さは、何かルイリを落ち着かない気分にさせる。

もちろん、思い過ごしに他ならないだろうが。

「ごめんなさい、何でもないの。……行きましょう」

心配そうに己をうかがっていた侍女に笑いかけて、ルイリは何事もないように再び廊下を歩き出した。

彼らは後に思い出す。
あの風雲が告げんとしていたことを、あの風雲がもたらした巡り合わせの中で。

絡み合う歯車は、止まらない。

36.　風雲の告げるは（後書き）

ようやく更新致しました、遅くなりまして申し訳ございません！
そして……ごめんなさい無駄に長くて。あれよあれよと言う間に一万字超えそうで慌てました。ぎりぎりセーフです。

祭典編だというのに一向に開始されないので、今回は強制的に詰め込んだ結果ですごめんなさい。もうしません、ゆとりを持ちます。
それから前回の文章で、始まりの会場が紫芳宮、みたいな文がありましたが大嘘です。翡翠宮です。どこまで間抜けなのか……。その部分は修正済みです。

ここまで読んで下さった方、お気に入り登録までなさって下さった方、ほんっとうにありがとうございますっ！

37. 生じた棘の、些細な痛み

皇宮クアレ・ローディンの一、翡翠宮（ひすいきゅう）。

そこは暁夜祭のような祭典の開会式や、皇族の婚儀、皇帝及び皇太子の即位式等々、シェリング皇国のありとあらゆる式典を司る。

重要な位置付けにある宮だが、桃香宮と比べてみてもさして広大とは言えない。それどころか、この翡翠宮は七つの宮殿（クアレ・ローディン）の中で最も面積が小さいという。

実際ルイリが翡翠宮に足を踏み入れた時も、目の前にそびえる宮殿に圧倒される印象は抱かなかった。

ただ一つ、特筆するとすれば――宮殿は？繊細？な構造になっている、ということだ。

「……綺麗」

知らず、言葉と共にほう、と吐息が漏れる。

ルイリがリーファとセシーヌに連れられて来たのは、祭典の開会式が行われる大広間、『翠羽蝶（すいうちょう）の間』。上下左右共に広く視界が開け、しかも？蝶？の名を冠するだけあって見事に左右が対称になっている。

頭上は吹き抜けになっていて、普通の建物であれば恐らく三階ほどの高さに天井が見える。天井は一面が磨（す）り硝子（ガラス）張りで（割れたらどうするのだろうかとルイリは無駄な不安に駆られたが）、美しい切り細工が施されていた。外から差し込む太陽の光はその硝子によって巧妙に屈折し、床の磨き抜かれた大理石には不可思議ながらも

華やかな光の模様が広がっている。構造として近いと言えば教会だろうか。

最奥に誂(あつら)えられた祭壇には、座椅子――玉座が二つ。恐らくあそこに皇帝皇后両陛下が座るのだろう。祭壇の上、二階部分らしき場所には少し突き出した露台のようなものがあって、その周辺で宮廷楽師達が忙しなく動いている。

「翠羽蝶は古くから伝わる蝶の名称ですわ」

あの露台は一体何に使われるものなのだろうか……ルイリはそんなことを考えながら、耳だけをリーファからの流麗な説明に傾けていた。

「何でも言い伝えでは、初代皇帝がシェリングを建国したことを真っ先に寿(ことほ)いだのが翠色の羽を持った蝶で。初代皇帝はそれに深く感銘を受けて、全ての儀式を執り行うこの場所にその蝶の名前を名付け、造りもそれに近くしたんだとか」

「造り？」

「この広間は開放的な印象を受けますでしょう？　蝶が羽を広げる姿を連想なさいませんか？」

「……そういうこと」

リーファの説明はいつも丁寧だからありがたい。ルイリは納得してうなずき、上を見上げる。そして、先程天井を見上げた時には気づかなかったものに気づいた。

見事な切り細工の頭上の磨り硝子。円形になった天井に描かれている模様の全貌をよくよく見れば……

（……蝶……？）

それは一匹の蝶の姿に酷似していた。そう思って見れば、一枚の硝子を隔てて降り注いでくる春先の陽光は、まるで硝子の蝶が振りまく光の鱗粉。

名前といい構造といい意匠といい、この大広間自体をその翠羽蝶へ捧げたといっても過言ではなさそうだ。

一番先に祝ってくれたとは言え、一匹の蝶に敬意を表してその名を拝借する初代皇帝は、何と感受姓が豊かだったのか。もっとも、数千年前の逸話など、どこまでが真実なのか分かったものではないが。

広間一つに名前の由来があるのならば、当然宮殿一つ一つにも由来があるのだろう。紅煌宮は何となく分かるが、他の宮は分からない。もしリーファが知っていたなら、今度教えてもらうことにしよう。

それにしてもリーファは博学だ、と思う。日常の教養はさることながら、このような伝説の話題にも精通しているとは。セシーヌも茶葉に詳しいし、つくづく桃香宮の侍女は優秀だ。

ちなみにこれほどの知識はリーファだからこそ持ち合わせるのであって、他の侍女はここまではならない。茶葉の知識を有するセシーヌも同じ。しかし初めから二人が傍にいるルイリは、その辺りの基準点が大幅にずれていたのだった。

ふと、ルイリは自然に湧いた疑問に首を傾げた。

「……リーファ、一つ聞いてもいい？」

「もちろんですわ。何でございましょう」

「えぇと、あの……暁夜祭はシェリング皇国で最も盛大なお祭りなんでしょう？　だったら開会式くらいは都民の人達が自由に観覧できるように……とか、しないのかなと思ったんだけど」

未だに後宮入りして日が浅いルイリは、皇国全ての内情に通じているわけではない。疑問点をそのままにしておきたくはないので、何かあればリーファや授業の教師に聞いていた。リーファはいつもの調子で微笑んで、答えてくれる。

「確かに仰る通りですわね。他の祭典の場合は、城下に会場を特設したりするのですけれど……。まぁ、ずっと昔から、暁夜祭の開会式は翡翠宮と決められておりますゆえ、何とも申し上げられません」

「そ、う。……ごめんなさい、変なことを聞いて」

「いいえ、とんでもございません。あらゆるものに興味を持たれることは、とてもよろしいことだと存じますわ」

最後に褒め言葉を添えることも忘れない。どこまでも隙がないリーファの姿勢に、ルイリは苦笑半分、感心半分で笑った。

その時、思いもよらぬ声が耳に飛び込んでくる。

「えぇ、無知とはとても恐ろしいものでございますわねぇ。誰かが教えてくれると勘違いなさるのだから」

由緒正しき血統の猫が笑うようなその声に、思わず飛び上がりそうになった。

「その一見純情無垢な様子で、殿下にも取り入ったのかしら」

くすくすという笑いが忍びやかに響く。リーファとセシーヌがあからさまに顔をしかめるのをちらりと見てから、ルイリは緩慢に首を巡らせた。

視線の先にいたのは、背後に侍女だけでなく他の側室の姫君も幾人か従えた茶髪の美女。その姿は実に華やかで、後宮屈指の美姫という評判も納得できる。

「御機嫌よう、ルイリ嬢」
「……お久しぶりでございます、シンディ様」

淡い笑みと共に挨拶を返しながら、ルイリは攻撃的な視線の美姫――イアンの側室であり、彼の随一の寵姫と名高い大国の姫、シンディエラ＝ヴィーケードを真正面から見た。

身に纏っている真紅の衣装（ドレス）の輝きといったら、まるで宝石の粉をまぶしたよう。胸元や襟ぐりは扇情的なほど大胆に開けていて、豊満な身体をより一層強調している。しかし、見栄を張って無理にしている印象は抱かない。艶のある茶髪はこてで丁寧に巻かれて、緩やかに波打っている。側頭部には、誇らしげに花びらを開く大輪の薔薇が一輪。まるで彼女自身の美貌をそのまま表したようだ。

衣装自体の華やかさに埋もれることなく、むしろそれを引き立て役にしたシンディの美しさは自信に満ち溢れていた。

「あら、何でございましょう？　それほどわたくしを見ていては、妙な誤解を呼びましてよ？　皇太子殿下の側室には、女色（にょしょく）の気（け）がある者がいると」
「まぁシンディ姫！　それは言い過ぎだわ、あまりにもルイリ嬢が可哀想！」

紫水晶の双眸をおかしそうに細め、羽扇（うせん）で口許を隠したシンディが軽蔑の笑みと言葉を漏らす。それに側室の一人が、さして同情をこめない相槌を打つ。彼女の後ろに立っている側室の姫君達も、同じように羽扇で口を覆い隠して忍び笑いを漏らしあった。

はっとルイリは我に帰り、

「も、申し訳ありません。シンディ様のお姿がとてもお美しいので、見惚れてしまって」

ぼうっとしていたところにいきなり声をかけられたということもあるが、つい本音を零してしまった。

（し……しまった）

半瞬後、己の中で激しく後悔する。嘘はついていない。彼女の美貌に見入ったは確かだ。だが。

（まるで女色って認めたようなものじゃない……！）

この話の流れでそう言ってしまえば、肯定したようなものだ。後ろで、侍女二人が言葉もなく青ざめている様子が、ありありと想像できる。本当に、二人には心労をかけてばかりで申し訳ない。

しかし、その発言の揚げ足を取って更に嘲笑が弾けるかと思った姫君達の様子が何だかおかしい。不審に思って顔をあげると、シンディをはじめとした美しい側室達は、皆一様に奇妙な表情を浮かべて視線を交わし合っている。

「あの……私、ご不快にさせてしまいましたか？　でしたら、申し訳ございません」

「っ……別に構いませんわ。……ルイリ嬢、これは一つ親切心で教えて差し上げる」

右手で扇を大きく揺らして、シンディはルイリを睨むように見つめた。

「皇族の側室たる者が、そう簡単に頭を下げるものではなくてよ」

その声音は射ぬかんばかりの眼光とは裏腹に、出来の悪い後輩に

対する助言のような響きを伴った。ルイリは言葉もなく瞬きをして、傲岸不遜に目を細める大国の姫君を凝視する。

たまに、ルイリは彼女の姿が羨ましくなる。己の美しさ、矜持、地位を熟知し、それを余すことなく発揮して。

「申し訳……いえ、あの……ご忠告、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる新米の側室に、後宮の花と謳われる姫君は小さく鼻を鳴らした。

「皆様、そろそろ並ぶべきだわ。これ以上のお喋りは時間の無駄。もうじき式も始まってしまうことだし」

「え、えぇ、そうですわね」

「仰る通り。立ち話をしていても、徒(いたずら)に式の始まりを妨げてしまうだけだわ」

「行きましょう、行きましょう」

先導者であるシンディの進言に、姫君達は即座に、どこか気まずそうに同意する。

「……本当に、腰の低いことね。殿下にねだって側室にしてもらった人と、同一人物とは思えないわ」

去り際、冷たさと棘を纏った声がシンディから放たれる。豪奢な衣装(ドレス)の女性達が背を向けてぞろぞろと去っていく中、ルイリは静かに眉を下げた。

ルイリが側室になった経緯(いきさつ)を知る者はほとんどいない。無論、それはこの能力(ちから)を配慮しての沈黙であったのだが、噂好きの姫君達はそんなことで納得が行くわけがない。必然的に、話題として面白おかしい過程を自分達で作り上げることになる。本人の意志などない

に等しいのだ。
別に彼にねだったつもりはないし、未だに何故自分が側室であるのか釈然としない部分が多いのだが……。
溜息にしては浅く息を吐くルイリを見て、セシーヌがそっと耳元で囁く。

「ルイリ様……あまり、お気になさいませんよう……」
「……ありがとう」

気遣わしげに琥珀色の瞳を揺らがせる同年の侍女に笑いかけた。
確かに、一つ一つのことを気にしてしまってはキリがない。

その時、

「そうよ、お気になさる必要はありませんわ」

聞いたことのない、しかしひどく美しい声がルイリの耳へ滑りこんできた。その声の例えようといったら、他に比べる対象を見つけられない。王侯貴族が愛してやまない愛玩用の金糸雀（カナリア）も、今の声には到底及ばないと思えた。
軽やかで涼しげな声につられて顔を上げ――ルイリはそのまま、静止してしまった。

「ごめんなさいね。立ち聞きははしたないと思ったのだけれど……」

金色の鈴が転がるような声は、万人の心を潤すように耳に優しい。
そこにいたのは、二十代前半と見受けられる……女神と呼んでも

差し支えない、麗しい美貌を持った女性だった。

清い初雪ような白い肌とは対照的に、美しい面差しを縁取(ふちど)るのは艶のある漆黒の髪。その一本一本が水流のごとき流れを紡ぎ、まさに『緑の黒髪』という表現が相応しい。すっと通った鼻梁(びりょう)は高すぎず低すぎず。頬は白桃のように薄く色づき、緩やかな弧を描く唇は思わずどきりとしてしまうほど赤い。

そして、長くけぶるような睫毛に囲まれた瞼の奥にあるのは、ルイリを穏やかに見つめる二つの蒼い瞳。それは静謐(せいひつ)で凛とした空気の満ちる、冬の空のようで。

濃い青の衣装(ドレス)は極力光沢を避けた生地で、装飾品も輝きを抑えたものが多いが、逆に彼女の美しさは際立っていた。

首元まで生地が覆う造りは随分と露出が控えめにも関わらず、全身から溢れ出る色香。しかし決して下卑た考えには行きつかない。玲瓏(れいろう)と言おうか、清廉な空気が常に彼女を取り巻いている。

突出した美貌のシンディすらも、彼女が隣に並べば霞んでしまうのではないか……。非常に申し訳ないが、そんなことまで考えてしまう。

美しい、という言葉では足りない気がする。そもそも一言で言い尽くせない。しかしあえて言い表すならば――そう、神々しい。

「……」

しきりに瞬きを繰り返して、目の前の姿が幻でも神でもない、同じ人間であることを確認する。今気づいたが、彼女の後ろには二、三人の女性が静かに佇んでいた。全員侍女の正装をしている。

確かにそこにいる……目を瞠るほど美しい女性は、ふわりと笑った。ほんの少し困ったように。

「それほど見つめられると、何だか照れてしまいそう」
「あっ……。ご無礼、申し訳ございません……っ」
「いいえ、無礼などとは思っていませんよ」

黒髪の美女はルイリの謝罪をやんわりと制し、再度微笑む。その笑顔に後光が差したように見えるのは、目の錯覚だろうか。

「やはり、貴女ね」
「……？」

どこか納得した風情でうなずく女性に対してルイリが首を傾げていると、彼女はもう一度唇を緩めて……ルイリの後ろに視線を送った。

「久しぶりね、リーファ」

え、とルイリは声を漏らし、首を捻って後ろに背後に控えている侍女を見た。紺色の髪を纏め上げ、凛と背筋を伸ばしているリーファ。常に冷静な色を宿す藤色の瞳は、幾分かの緊張を帯びていた。彼女の横に並ぶセシーヌにいたっては、驚きに呼吸すらできないとでも言わんばかりに目を見開いている。

リーファがきゅっと顎を引き、腰を深く折って頭を垂れた。それは、数ある礼の形の中でも最上級のもの。

「お久しぶりにございます、リオナ様。永らくご無沙汰を致しまして、お詫びの言葉もございません」
「そんなこと。……あれからきちんと会っていなかったけれど、元気そうで良かったわ」
「私ごときにそのような、勿体ないお言葉を……。リオナ様に置か

れましても、息災のご様子。何よりでございます」

久方ぶりに聞く硬質な?侍女?の声。リーファがこれほど敬意を払う人物なのだ、相当の地位を有しているに違いない。

ルイリの視線に気づいてか、はたまたそろそろ頃合いと思ったのか。女性は美麗な笑顔を浮かべた。

「初めまして。わたくし、リオティシエーナ＝ギルゼム＝フォン＝シェリングと申します」

一瞬、言葉が出なくなってしまったルイリである。

姓が?シェリング?、つまり皇族だ。けれど今まで会ってきた皇族の人々は、差異はあれども金髪や赤い瞳を持っていた。彼女のような黒髪と蒼い瞳とは正反対。となると、誰かの奥方だろうか。そういえば『ギルゼム』という単語は、以前にどこかで聞いた覚えが。

どちらにせよ、なぜそのようなやんごとないお方が、側妃の配置場所であるここに。

情報が錯綜して混乱しかけ、ひとまず挨拶をするべく腰を折り、頭を下げた。

「申し遅れました、ルイリ＝レティシアと申します。恐れ多くも、皇太子殿下の側室の末席に名を連ねさせていただいており……」

「お名前だけで充分でございます。よろしくお願いします、ルイリ嬢……と、呼んでもいいのでしょうか?」

「は、はい、お好きなように……。……あの、私などに敬語を使われますと」

ものすごく恐れ多い。

言外の言葉を察してくれたのか、蒼天を写した双眸が和んだ。

「えぇ、分かったわ。ルイリ嬢、ね。では、わたくしのことはリオナと。……リオティシエーナだなんて、長くてややこしい名前でしょう？」

「リオナ……様」

リオティシエーナ――リオナと名乗った女性は、妹を見るような目でルイリを見つめてくる。

「突然話しかけられて、驚いたでしょう。ごめんなさいね」

「いえ、リオナ様が謝られる必要など……」

蒼の瞳を細めて済まなさそうに微笑むので、ルイリは慌てて首を振る。皇族たるお人に声をかけられることすら名誉だというのに、謝罪をされてしまった。こちらこそ申し訳ない。

「何だか遠目からも、あまり良い状況ではなさそうだったから、思わず。……シンディ姫も困ったものね」

リオナは、まるで聞き分けのない子供のことを言うような口調で深々と溜息をつく。ほんの少し首を傾げた拍子に、白貝のような耳に付けた黒曜石が少しだけ覗いた。

ルイリはぱちりと瞬きをした。それを意味していることが、あまりにも意外だったからだ。

前に授業で、シェリング皇国の風習をいくつか聞いたことがある。未婚の女性は服のどこかに必ず白を身につけるとか、子供がいる人々は子供の数の分腕輪をするとか。もちろんするしないは個人の自由だが、固有の文化は自然と流布（るふ）していくものだ。

それが本人の嗜好でないのなら、女性が黒曜石の耳飾りをつけるというその意味は――。

「根は悪い人ではないのだけれど……少し気位が高いのでしょう。あまり気負いはしないでね？」

「気負いだなんて、私は本当に」

「……お優しいのね。貴女のような人が、イアンの側室で良かった」

心底安心したような、慈愛に満ちた微笑み。

見れば全員が魅了されるような微笑を真正面から向けられながらも――ルイリは束の間、息を止めた。身に余るほどの光栄な言葉をもらったはずなのに、ルイリの胸はそれを裏切るかのように不自然にざわめいた。

赤い花びらのような唇が紡ぎ出した、その名を聞いた瞬間に。

その響きにこめられた親しみを感じ取った瞬間に。

けれど。

「――リオティシエーナ姫」

低く冷涼な声が、それまで考えていたルイリの思考の何もかもを、一瞬にして奪い取った。

あら、とリオナが意外そうに声を上げる中で、ルイリは反射的に顔を上げた。

カツ、カツ、と、上質な革で作られた長靴の音が規則的に響く。その音が――姿が近づくにつれて、周囲の温度が冷えていくような錯覚がする。

「もうじき式が始まります……演台に向かっていただきませんと」

それは相手を敬う口調であるはずなのに、ひどく冷酷な響きにさ

え思えた。身が震えてしまいそうになる。暖かい陽光の欠片は一瞬にして、氷の粒子に変わったかのようだ。

首元までをきっちりと着込んだ詰襟の大礼服はひどく息苦しそうだが、彫刻のような顔に表情は浮かばない。すらりとした長身を包む礼服の生地は漆黒で、両腕の袖には鮮やかな赤い刺繍が彩っている。金色の釦に留められた肩章は飾り房つき。左胸には皇国の紋章である紅い鷹が象られた勲章を着けていた。背筋を伸ばして濃色のマントを纏ったその姿、正に威風堂々という言葉に値しよう。

服装が深い色合いであるだけに、陽の光をそのまま紡いだような金髪は普段以上に輝いて見える。くせのない前髪の奥から覗く真紅の双眸が、鋭利で冷ややかな光を宿して煌いていた。その眼光自体が刃であるかのように。

皇太子は正しい歩速を保ってリオナのもとまで歩み寄り、彼女と、そして立ち尽くしたままのルイリに交互に視線を動かした。

「……私の側室が、何か不敬を？」

「っ……」

そう言いながらルイリを見下ろす目はひどく冷たく、微かに咎めの色が混じっている。久方ぶりに見る美貌と視線に圧倒されて、喉の奥で声が絡まりついた。

「いいえ、違うわ。彼女がシンディ姫に絡まれているようだったから、お節介にも仲裁に入ろうとしただけよ」

「……ご心配痛み入りますが、これには侍女が二人おりましょう。そうでなくば庇護者たる私が対処致します。姫御自らが、お心を折らずとも良いまでのこと」

事務的で単調な言葉は、ルイリの奥の何らかを微かに抉った。それを悟られないよう、手袋に包まれた手を握りこむ。
リオナが呆れたように溜息をついた。
「そんな言い方……。無闇に怖がらせてどうするの、イアン」
あぁ、またしても。
胸が静かにざわめいていく。今まで何の変哲もなかった水面（みなも）に、一つの小石が投げ込まれたように。
「そのようなつもりは決して。……お叱りがあらば後でお受け致しましょう。そろそろ準備の方へ」
「えぇ、分かったわ」
短い手袋を嵌めた大きな手が、すいと差し出される。黒髪の美姫は、躊躇いもなくそこへ己のそれを重ねた。
瞬間、ルイリは胸の中に生じた棘のような痛みを、確かに自覚した。
「またね、ルイリ嬢。また機会があった折にでも、ゆっくりお話をさせていただける？」
「は……はい。リオナ様のご要望とあれば」
去る前ににこりとした笑顔を向けてくれるリオナは、本当に女神のように美しかった。イアンは濃色の衣を翻し、彼女を伴って去って行く。ルイリ自身には、リオナの態度への疑惑以外、一度も視線を向けないで。
気配すら殺して彼女の後ろに付いていた侍女達は、完璧な動作で礼をしてから踵を返し、二人の後を追っていく。
ルイリはそれを、ずっと見ながら。

「……」

それは微弱な違いだった。けれど不思議にも、ルイリはそれを敏感に感じ取ってしまった。

彼がリオナに対して声をかけた時、どこか気遣うような色が含まれていたことに。一度も見たことのない――思いやり、というものに。

きっと、そのままの意味なのだろう。イアンにとってリオナは気遣うべき存在で、だからこそ皇太子という地位にも関わらずここまで迎えに来た。もし彼女がルイリが推測した通りの身の上ならば、尚更のことだ。

リオナという女性は……彼にとって特別ということ。

ルイリにとって、それは単なる事実。何の関係もない事柄。側室の末端たる自分に何かを言及する権利はない。それ以前に、彼に特別な感情や思慕などは、抱いていない。

なのに。

どうして、棘で刺されるような小さな痛みが、生じているのだろう。

どうして、彼女の声で彼の名前が呼ばれたとき、苦く感じたのだろう。

どうして、一度でもきちんとした視線を向けられなかったことが、これほどまでに虚しいのか。

「ルイリ様……？」

リーファがそっと、声をかけてくれる。ルイリは努めて平静に見えるよう、首を振った。

「何でもない……何でも、ないの」

そう、何でもない。

いや、何も分からない。錯覚だと思えたらいいのに、思うことができない。

分からない、分からない。心中に渦巻く感情の名前も、心の最奥を静かに刺した棘の意味も。

だが、その答えは恐ろしく傲慢で身勝手なもののような気がして、追及することが怖かった。今まで感じたことのない痛覚は、ルイリの中に徐々に戸惑いと衝撃をもたらしていく。

ただ空虚な感情が広がって、遠ざかる二つの後ろ姿を直視することはできなくて。ルイリは小さく唇を噛んで、顔を伏せていた。

だから、知らなかった。知る由(よし)もなかった。

立ち去る寸前、皇太子が今一度こちらを振り返って、ルイリを見ていたことを。

そして欠けているものが多すぎる少女は、自身の中に確実に降り積もりつつある?想い?にも、気づけずにいたのだ。

37．　生じた棘の、些細な痛み（後書き）

更新遅れましたごめんなさい申し訳ありませんでしたぁーーーっっ！！

私生活の忙しさにかまけ、スランプに唸っていたら、こんな間が空いてしまった……！　九月中に一回しか更新できなかったという事実が重く圧しかかります。

内容？　うーん、えっと……ベクトルがおかしいのはイアンだけだと思っていたけれど、君もかルイリ。という感じでしょうか。冒頭の翡翠宮から翠羽蝶のくだりは、書いていてとても楽しかったです。思いっきり趣味に走りましたすみません（笑）

そして、前回長すぎで反省したにも関わらず、この量。反省の色なしです、どこがゆとりだ。

ＰＣの方、スクロールお疲れ様でした。携帯の方、ページ数多くってごめんなさい。もっと読みやすさを追及すべく、精進致します！

ここまで読んで下さった方、お気に入り登録までなさって下さった方に、あらん限りの感謝を！　もう本当に、一人一人にお礼を申し上げたいです！

38.　開幕の歌声は美しく（前書き）

※途中、怒涛の地の文攻撃になっております（そのつもりはなかったのですが）。

飛ばして読んでも先の展開に何ら支障はないはずですので、面倒なお方は短い文や台詞のみでお楽しみ下さいませ。

38. 開幕の歌声は美しく

自信がないように顔を伏せ、手袋に包まれた手を握り締める華奢な姿。遠目から見れば更に細く見え、痩せたのだろうと妙に納得した。

その姿は儚く――ともすれば消えてしまいそうなほどの、危うさえ持っていた。

「可愛らしいお方ね」

しばらくの間亜麻色の姿を凝視していたイアンは、隣で軽やかに響く声に視線を落とした。蒼き瞳は、イアンと同じ方向に向けられている。

「……誰が、でしょうか」

「今、貴方が見ていたお人が」

イアンは一度だけ瞬きをして、艶めいて揺れる黒髪を凝視した。リオナは子供のような表情を浮かべて、小さく微笑む。

「気になるのかしら？」

「義姉上。……いくら貴女であろうと、ご冗談にも限度はございます」

「まぁ、ごめんなさい」

あらぬ誤解を招く前に間髪入れずに返答をする。すると義姉はまるであどけない少女のように、イアンの手に重ねていない方の手で己の口許をおさえ、くすくすと笑った。

「けれど、本当に真っ直ぐなお方……。リーファも、仕え甲斐のある人が見つかったようで、良かったわ」

つ、と蒼の双眸が細まる。妹を見るかのような慈しみに満ちた眼差しは、新入りの側室だけでなく、濃紺の髪を持つ侍女にも向けられているのだろう。

イアンはほんの僅かに眉をひそめる。

「仕え甲斐のある？」

「えぇ。聞かれる前に答えるけれど、もちろんルイリ嬢のことよ」

「……お分かりになるのですか」

「リーファを見ていれば分かるでしょう。とても生き生きしているもの」

ねぇ？　と、同意を求めるように視線を向けてくるが、全く腑に落ちない。

「私には……そうは見受けられませんが」

彼にとって、リーファの仕え主――即ちルイリが、リオナの言う『仕え甲斐のある人』とは思えなかったからだ。自分の側室の中で、あれほど自信のない雰囲気を纏う者は彼女しかいない。会った当初からの儚げな印象は全く消えることなく、むしろ今日顔を見ればより一層強まった気がする。

間諜として十二分の働きをしていたリーファが、自ら任を解いてくれと申し出るほどの価値が、あの脆弱な少女にあるのか。イアン

の中での答えは、否だった。

「あら……そう見える？」

リオナは意外そうに瞬きをして、己よりも遥かに長身であるこの義弟を見上げてきた。澄んだ蒼の瞳に浮かんでいるのは、純粋な意外性。その視線に、イアンは近年あまり感じることのなかった――気まずさというものを思い出す。

「……それは、お叱りでございますか」

確かに先程、叱責があれば後で聞くと言い置いたが。

「叱っているわけではないけれど。……そうね、これも自分で理解する方が良いのかもしれないわ」

「……」

意図が上手くつかめない台詞ばかりだが、彼女の様子を見るにこれ以上追及しても無駄なようだ。イアンは無意識に息をつく。こちらとしても、この話題がこれ以上掘り下げられるのは御免だった。

「それはともかく、義姉上」

声音を変えるとリオナもそれを察したようで、ほのかに浮かんでいた少女めいた色はすっと消える。

彼女の手を引き、ようやく祭壇脇にまで辿り着いた。未だ騎士団員達はざわついており、大臣達も最後の調整で足しげく歩き回っている。万能の皇太子と後宮から滅多に出ることのない黒髪の美姫が向かい合った姿は実に話題になりそうだが、各々の準備に忙しい者達は二人には気づかない。

リオナはゆっくりと手を離し、イアンを真正面から見据えて次なる発言を待っている。イアンはすっと身を引き、無駄のない動作で膝を折った。――尊い人に対する敬意を表す礼。

「此度（こたび）は、急遽頼み込んだ事項にも関わらず任を引き受けていただきまして、真に感謝しております。遅ればせながら、心より御礼申し上げます」

「……まぁ。そんなこと、気にする必要もないのに。皇太子ともあろう貴方が……たかが後宮の女一人に、そうやって簡単に膝を折るものではないわ」

彼女は拍子抜けしたように声を上げ、肩を竦めて笑って見せる。けれどイアンは礼を崩さない。

「いえ……慎み深き生活を望む義姉上の心情を考えもしない申し出を。まして私ごときの依頼など、さぞ憤ったことでしょう」

「イアン」

鈴のような声が、凛と響く。その声につられるように顔を上げると、黒き髪を持つ美しい姫君は、確かな強さを持った瞳でイアンを見据えていた。

「良いのよ、わたくしのことをそこまで気にかけなくとも。……わたくしはシェリングの人間。こうして祭典の一役を担えることは、この上ない誉れだわ」

ふわり、と微笑む。その穏やかながらも潔い微笑は、心より皇族であることを誇るもので。イアンはしばし彼女の瞳を覗きこんでから、ゆっくりと立ち上がる。

「そのお言葉を聞き、大変安堵致しました。……それでは義姉上、準備の方へ」
「えぇ、しっかりと務めを果たさせていただきます」

最後にほんの少しだけ腰を折り、皇太子たるイアンに礼を示す。リオナは、案内役である騎士に伴われて踵を返した。影のように付き添っていた侍女二人は深く腰を折ってイアンに礼をすると、彼女の後を音もなくついて行く。

イアンは黙って、リオナの立ち去る姿を見ていた。紅の瞳が揺らぎ、ここではない遠い何かを見つめるように細められる。

何故だろう――何故、あの人が彼女の隣にいないのか。
彼女の隣に相応しく、また彼女が寄り添うに相応しい彼の人は、何故いない。

穏やかな笑みを刻む口許が瞼の奥に甦る。

「……っ」

しかしその次に閃いたのは鮮烈な赤の色で、イアンは思わず眼を閉じた。

同時に嘲笑と断続的な水の音が耳の奥で弾け、両耳を塞ぎたい衝動に駆られるも、公の場でそのような姿は見せられない。代わりに手を強く握りこむ。素手のままでは爪が食い込んで血が流れるところだが、革製の手袋がそれを阻んだ。ぎ、と、革同士が擦れる音が、微かに響く。

感傷が過ぎる――。頭の冷静な部分が叫んでも、しばらくの間イアンは瞑目を続けた。

あの時期が近づいているからなのか、どうも最近精神が不安定になる事が多い。結局は皇帝の言う通り、自分はまだ若造ということだろう。

は、と薄い嘲りを漏らした。先程とは別の意味で手を握りこむと、途端に周囲のざわめきが耳に飛び込んできた。

「皇太子殿下」

背後で、固い声が投げかけられる。いつの間にか、騎士団員の一人が音もなく現れていた。イアンに気配を感じさせずに出現したところを見るに、ただの騎士ではない。この声は確か、皇太子直轄暗部の者の声だ。

「まもなく開会の儀が執り行われますゆえ、演台の方へ」

固く閉じていた瞼を開く。凪いだ表情で、イアンは辺りを見渡した。

広間に集まるのは、五百を超える騎士達、貴賓席の隣国の要人達、後宮の姫君達、異国から招かれた数々の旅芸人達。

今この場に、『イアン』という個人は必要ない。必要なものは、『皇太子』という存在だけだ。

「……すぐに行く」

単調で冷えこんだ口調は、冷酷と知られる皇太子にこそ相応しい。燃え上がる炎を連想させるはずの紅の双眸は、見た万人が「冷たい」と口走りそうなほど凍えていた。

顎を上げ、自分が立つべき場所へ向かう。視線の先には、自分の

兄弟である皇子達が整然と並んでいる。
臙脂の妖艶な微笑、赤銅の気軽な笑み、橙の無邪気な笑顔。その全てがイアンに向けられていた。
それを紅の冷徹な視線で見返してから、彼は兄弟達が立つ玉座の周囲ではなく、その上に設備されている演台の方へ向かう。皇帝皇后の入場の言葉を告げる、内務大臣の声を背中に受けて。

羽織ったマントが、イアンの歩調に合わせてばさりと波打った。

†　†　†　†　†

磨り硝子が席巻（せっけん）する天井の中央に唯一、円形の硝子がはめ込まれている。そこに太陽が丁度姿を現した時が、正午の合図だ。丸い天窓から差し込んだ太陽の光が差し込んだ先には、祭壇にある二つの台座がある。すなわち、玉座。
そしてその両脇を固めるのは、年齢と系統にばらつきはあるものの全員が眼を瞠るほど整った顔立ちをしたシェリング皇国の皇子三人。

向かって左側に直立しているのは、中性的で艶めいた美貌を持つ第二皇子、ゼスト＝シェリング。薄い金髪と熟成したワインのような臙脂色の瞳は、思わず見惚れてしまうほど美しい。ただそこに佇

んでいるだけで気品に溢れ、一枚の絵画のようだ。
向かって右側に直立しているのは、身長差のある二人。背の高い方が第四皇子、ヴェルガ＝シェリング、背の低い方が第五皇子、セイロン＝シェリングだ。同じ濃茶の髪を持ち、瞳はそれぞれ赤銅色と橙色。皇子の割には逞(たくま)しい体つきのヴェルガに対して、無垢な表情を浮かべたセイロンは線が細く、育ちの良さを感じさせる。

貴賓席に座る隣国の王侯貴族は、その三人を興味深そうに眺めた。
今代の皇子達は若いながらも才に溢れ、皇国の政(まつりごと)に欠かせない存在になっているという。末子のセイロンに至っては齢(よわい)十五。それでも玉座の脇の警護を任されているということは、有能である何よりの証拠だろう。

しかしここで、彼等ははてと首を傾げる。
なぜ彼がいないのだろうか。ここ数年、シェリング皇国の話題では必要不可欠な、あの皇太子はどこに。

「皇帝皇后両陛下、御成りにございます」

僅かに残っていたざわつきを静めるように、皇宮内でも重鎮と言われる内務大臣が朗々と告げる。

重厚な靴音を響かせて、雅やかな衣装を纏った壮年の男性が祭壇に姿を現した。白の交じる金の髪と、夕陽(せきよう)を思わせる朱の双眸。目尻や口許に皺が刻まれた顔はしかし、晩年の芸術家が残りの命を注いで作り上げたように雄雄しく、勇ましい。
彼の後ろに付き添うのは、艶麗たる美貌を持つ女性だった。白い頬やふくよかな胸は若さ特有の瑞々しい張りよりも、成熟した女性の美しさを感じさせる。それでも露出した肌や蠱惑的な赤い唇は、否が応にも男達の劣情を刺激することだろう。

威厳に満ちた登場に、その場にいる全員が瞬時に理解する。あれが――シェリング皇国の皇帝並びに皇后であると。

大国の頂点に立つ二人は、儀式通りの歩速を保って玉座へと辿り着く。並んだ座椅子には座らず、ゆっくりと真正面を向いた。それだけで、緊張感が張り詰める。

「開会に先立ち、『歌い手』による国歌提唱を。――皇太子」

皇帝の低い呼びかけに呼応するように、カツン、と革靴の音が広間に波紋を作るように響いた。それは皇帝のいる祭壇よりは上に聞こえて――。

参列者全員が頭上を振り仰ぐ。そして漏れなく全員、感嘆の溜息を吐いた。

宮廷楽団が準備をしていた、気にも留めなかった屋内の露台（バルコニー）。そこにいたのは……誰よりも鮮やかで輝かしい金髪と、鮮烈な印象を残す紅の双眸を持った青年だった。

秀麗な顔が怜悧と呼ぶには冷たいと感じるのは、彼の目元にも口許にも、何の表情も浮かんでいないからか。だがその印象を補ってもなお有り余る、圧倒的な存在感。

一同は素早く察する。

彼こそが、イアン＝シェリング。第三皇子にして皇太子、近年のシェリング皇国繁栄の最大の功労者と名高い青年。

しかし参列者が溜息を漏らしたのは、彼のみの美貌に見惚れただけではなかった。

その隣にたおやかに佇んでいる、長身のイアンと丁度良い身長差の女性。彼女もまた、目が眩むほど美しい女性だった。シェリング

皇国の中では珍しい黒髪と、硝子の天井の向こうにある空によく似た蒼い双眸が、ますますその美しさを引き立てる。露出の控えた衣装（ドレス）は清らかさを感じさせるも、女性的な流線を描く身体には色香が漂う。

高貴な身分だとは分かるが、一体何者なのか。
観衆の視線が感嘆から興味へと変わり始めた頃、絶世の美女は皇太子よりも前に出た。ほんの一瞬だけ彼と目を合わせ、微かにうなずくような動作をしてから正面を向く。

すっと顎を引いて、そして。

我らが大陸は永遠（とわ）に栄えん　神の御心（みこころ）の導くまで
我らが大地に悠久の幸あらん　太陽が昇り　月が満つる限り
紅の鷹は暁の空を舞い　永久（とこしえ）の栄華を謳う

気高き先祖の魂　慈悲深き星々の煌き　深い海　広い空　全てが燦然（さんぜん）と輝き
我らが祖国の　栄耀を讃えん

天にまで響くかと思われる、美しい歌声。
清らかで透き通り、しかし芯の通った音色で紡がれていく旋律が

『翠羽蝶の間』を包みこんだ。

妙齢の黒髪の美姫は口許に淡い微笑を浮かべ、背筋を伸ばして声高々に歌い上げていく。歌声は万人の疲れを癒す風のように、万人の乾きを潤す泉のように響き渡っていく。絶えず心に沁みこむ美しい歌唱に、涙する者もいた。

その声に聞き惚れていた聴衆は、しばらくして歌詞の内容がシェリング皇国の国歌だと気づく。そして何度もこの祭典に呼ばれている隣国の貴族などは、深く理解したことだろう。

皇帝の言った『歌い手』とは彼女のことなのだと。

『歌い手』。それは暁夜祭の開会式で国歌を歌う、祭典を始める上では欠かすことのできない存在。

この十数年、『歌い手』の役目は皇帝の側妃として見慣れていたが、今年から代替わりをした。それはつまり、次代の皇帝の治世がまた一歩近づいたという何よりの証拠だ。

どこからともなく、唸りに近い感心の溜息が聞こえた。

数千年の歴史の土台に加え、優秀な後継ぎ達。シェリング皇国の繁栄は約束されているのだ――今後大規模な戦乱など、起こりはしないだろう。

国歌は静かな余韻を残して歌い終えられた。最後の音色が空気に溶けた頃、『歌い手』の美姫は皇太子の誘導で露台（バルコニー）から姿を消した。

少しして、皇太子のみが舞台袖から祭壇へ現れる。それを確認してから、皇帝は毅然と顔を上げた。

「美しき国歌を捧げてくれた『歌い手』に感謝を。――シェリング皇国第六十九代皇帝、ジルダス＝フェトラーズ＝ディー＝シェリングの名に於いて、これより暁夜祭の開幕を宣言する」

頭上の天窓から、太陽が完全に現れる。
瞬間、宮廷楽団による式典開始（ファンファーレ）の楽曲が打ち鳴らされた。

一気に、会場内が歓声に包まれる。貴賓席の貴族達は手を叩き、整然と並ぶ騎士団員達は鬨（とき）の声に似た雄叫びを上げた。

開会式は何の滞（とどこお）りもなく進み、ついにシェリング皇国最大の祭典、暁夜祭が始まった。

†　†　†　†　†

演台に立っていた二人を見て、側室の（比較的イアンに固執していない）姫君同士がこう話すのをルイリは聞いていた。

――何てお似合いなのでしょう。彼女は確か先の……
――えぇ。きっと思慮深い殿下のことだから、ずっと気にかけておいでなのだわ
――まぁ……そこまでお優しい配慮をなさるということは、やはり殿下は彼女を？
――そこまでは分からないけれど……。でもきっと、殿下の正室が

いつまでも空いているのは、彼女の存在があるからなのでしょうね

ふいに漏れ聞こえてしまった会話の内容を理解したと同時に、崩れそうな膝をただ支えるので精一杯だった。

全体が暁夜祭が始まったことへの興奮と歓喜で満たされていく中、ルイリはもう誰もいなくなった露台（バルコニー）をずっと見上げていた。

「……」

先程までそこに並んでいた、二つの影。

見事なまでに均整が取れていた立ち姿には、後ろで佇んでいたリーファでさえ息をついたほどだ。

リオナは穏やかな風貌を裏切らず、ルイリにまで心配りをしてくれる優しい人だった。きっと彼女は、誰にでも優しくできるのだろう。

そう……彼にさえも。

彼女を見つめる時のイアンの瞳は、いつものように冷たくもどこかが違った。

歌う前にリオナが彼にうなずいて見せたのは、真紅の双眸に案じる色が宿っていたから。そして堂々と歌うリオナの姿を、イアンはずっと見ていた。まるで、気遣うように。

ルイリは眩しく目を細めた。

黄金の髪と、紅の瞳。

漆黒の髪と、蒼の瞳。

色まで見事に対照的で、まるで生前からの取り決めのように二人は並んでいた。怜悧な美貌と華やかな美貌が横に並ぶ姿は、物語に出てくる王子と姫のようで。

あぁ何て。

（何て……『お似合い』なの）

優雅な美貌と慈悲深い心根、そして稀な歌声を持つ完璧な美姫――リオナ。

彼女こそ、皇太子たる人物に相応しい姫君なのだ。

そう思えば思うほど胸に広がる痛みに、わだかまりに、ルイリは眉を寄せた。その正体は全く不可解なもの。けれどそれは恐ろしく醜悪で、汚いもののように思われた。それを持ち合わせている自分が――ひどく嫌悪すべき存在だと思うほど。

耳の奥で、透明でしなやかな国歌の調べが反響している中。

ルイリは初めて、意図して感情を塗り潰した。

† † † † †

「……ふむ。なるほど、ね」

えもいわれぬ美声で歌われた国歌の余韻に広間全体が浸っている中、彼は一人薄い笑みを浮かべた。

あれが、シェリング皇国の国歌。まともに聞くのは初めてだが、なるほど、失笑を禁じ得ない内容だ。

「誰が作ったのか知らないが……」

随分と、婉曲な皮肉を混ぜたものだな。

後半部分は口中で呟くも、前半部分の低い声を聞きとがめたのか、横でそわそわとしていた少女が怪訝そうに首を傾けた。

「何、お兄さん？　何か言った？」

「いいや、何でもない。……そろそろ出番だろう？　頑張ってくれ」

場を取り繕うように微笑みと鼓舞を向けると、少女は口の端を器用に吊り上げ、「任せてよ」と得意げに囁いた。

開会の儀式は終了し、このまま異国の旅芸人や楽団による、祭りの始まりを祝う催し物が開かれる。

つい、と彼は視線を滑らせた。祭壇には、玉座に腰を下ろした皇帝と皇后、そして両脇を固める皇太子と皇子達がいる。

（あれが、そうか）

その時彼の口元に浮かぶ冷たい微笑を見た者は、誰もいなかっただろう。

（まぁ、何にせよ……）

祭典は始まった。

あとは、己の為すべきことを果たすまでだ。

38.　開幕の歌声は美しく（後書き）

すみません、更新早々こんなに鬱陶しい地の文ばかりですみません！！

も、もっと省けば良かった……！　最近ますます『ファンタジー』から遠ざかっている気が（冷や汗）　危ない危ない。軌道修正しなければ。

さて、そろそろ今回終盤にちらっと出て来た彼の出番になりそうです。な、長かった。

ここまで読んで下さった方、更にはお気に入り登録までなさって下さった方、ありがとうございますーっっ！！

39．　華の宴と仮面の青年

暁夜祭の開会式は終了し、その会場のまま、無事の開幕を祝う宴が開かれた。

大陸の各方面から招かれた名うての吟遊詩人や旅芸人、楽団・劇団が一同に会し、『翠羽蝶の間』は先程まで厳かな儀式が行われていたとは思えないほど絢爛な空気が満ちた。

取り分け観客達の目が釘付けになったのは、大陸中を放浪しているというある旅芸人の一座。華やかに、どこか異国の情緒を漂わせる彼らは演技をする者達の中でも抜きん出て異彩を放ち、たちまち広間は歓声の渦に包まれた。

絶賛の嵐が巻き起こった一座の演技は、当初予定されていた終了時刻を少しばかり超過するほどの盛況ぶりで。

会場に明るい笑い声と拍手喝采が止まぬ中、開会式後の余興はようやく終わりを告げた。

誰もが祭典の開幕と宴による興奮に酔いしれている中で――

ルイリは一人、己の中で渦巻く靄（もや）を取り払えずにいたのである。

†　†　†　†　†

「……皇后陛下主催の祝宴？」

宴が終了したのち桃香宮の自室に戻ったルイリは、てっきりこのまま就寝の支度に入るのだと思っていた。そこまでいかずとも、今日中にはもう外に出ることはないのだろうと。

それゆえに、侍女のもたらしたその報せは、彼女の意表を突かせるには充分な内容を含んでいたのだ。

報告をした張本人、セシーヌは眉を下げて首肯した。

「暁夜祭ではほとんど慣例となっているもので、開会式後の宴で優れた演技をした者達を桃香宮に呼ぶんです。隣国からの王族の方や貴族のご夫人方もお呼びして……」

「要は暇潰しですわね。殿方の皆様は外交や競技大会で予定が詰まっておりますゆえ、自分達は楽しいことだけをしておこうという娯楽好きな姫君方の考えですわ」

補足にしてはあまりに厳しいが、リーファはしれっと説明を追加した。

それに被さるように、ルイリは深く溜息を吐いた。そもそも華やかな行事が好きな後宮の女性達が、ようやく日が沈み出すこの時間帯に大人しく寝るわけがない。それに、よく考えてみれば……

（だから前に見た側室の方は、誰に褒美をあげようかと言っていたんだわ）

催し物の素晴らしさは、先程の開会式でも充分に分かる。しかし『褒美』となるとそうもいかない。現にあの宴では、演技者にそのようなものを与える機会などなかったし。

つまり、褒美を与えることのできる時間が、別に設けられていたということだ。

「えぇと……もちろん、行くべきなのよね」

正直に言えば、それほど行きたいという意欲があるわけではない。しかしながら皇后陛下主催となると……。

彼女の考えを十二分に察してか、リーファがすかさず口を開いた。

「出席は義務でも強制でもございませんわ。自由参加ですけれど……」

そこまで言って、一旦言葉を区切る。物事をはっきりと言う性分の彼女にしては珍しく、リーファは藤色の双眸を右へ左へと泳がせていた。ルイリはきょとんとしてその様を見守った。一体どうしたのだろう。

まっすぐな視線に根負けしたのか、小さく息を吐き出す。

「……要らぬ世話とは思いますが、少しでもルイリ様の気晴らしになれば、と」

「え？」

思いがけぬ言葉に、ルイリは僅かに呆けて声を上げる。

「私の思い違いであればよいのですが……開会式では、どことなく気を落とされているように見受けましたので」

ルイリは今度こそ目を見張った。そのままリーファの隣に立つセシーヌに視線を移すと、彼女も同意と言わんばかりに目で頷いた。洞察力鋭い侍女達は、開会式の最中のルイリの様子も見落としていなかったらしい。

「心配……かけていたのね」

ごめんなさい――と続けようとして、ルイリは口を噤んだ。

違う、この時に、言うべき言葉は。

ぱちん、と目の奥で閃光が爆ぜた。

呆れた微笑と、言葉とは裏腹に柔らかな声音。

唇に押し当てられたのは長い指先で、言葉を発することを封じられた。不審に眉を寄せると、耳元に低い声が落ちて――

――『ごめんなさい』以外に、相応の言葉があるだろう？　こういった時には……

「あの、ルイリ様？」

心配そうな声が突然耳に飛び込んできて、ルイリはひゅっと息を吸った。どうやら、束の間息を止めていたらしい。

見開いた瞳をそのままに首を巡らせると、琥珀色の双眸を揺らしているセシーヌが視界に入った。

「やはりお加減が……」

気遣わしげな響きのセシーヌの声を聞き、ルイリは慌てて首を振った。

「違うの、そうじゃないの。少しぼうっとしていて……」

余計な心配はさせたくない。その一心で言い募り、次いで自分の胸に手を当ててみる。

（今のは、何……？）

唐突に閃いて、霞のような残像だけを残して脳内を駆け巡った断片的な何か。

それ以上を思い起こそうとしてみるが、すぐに無駄だと悟った。確証があるわけではないが、そう思った。

ふ、と息を吐く。考えても分からないことを追及しても埒があかない。それに、今はそれを考える時ではないはずだ。寝る前にでも、じっくりと思い返してみることにしよう。

何より、今は侍女の配慮に応えなければ。

「リーファ、気遣ってくれてありがとう。……えぇと、じゃあ、宴に行く準備を手伝ってくれる？」

返される応答が義務であろうとそうでなかろうと、是か非かは分かっていたけれど。

それでも侍女二人が即座に快諾してくれたことは、ルイリの中に喜びをもたらした。

†　†　†　†　†

皇宮クアレ・ローディンの一、桃香宮　『華宝（かほう）の間』にて

桃香宮の中で最も広大な間には、壁や天井に名前通り鮮やかな花々が描かれている。広間全体の印象も華やかで明るく、後宮に相応しい。

大がかりな集まりがない限り開放されないそこは、今は色とりどりの衣装（ドレス）に身を包んだ麗しい姫君達でひしめき合っていた。皆きちんと階位に沿った座椅子に座り、隣や周囲と会話に花を咲かせている。

ルイリはといえば、また例によってリーファとセシーヌからの広間の由来の話に興味深く耳を傾けていた。

シェリング皇国皇后主催の祝宴、通称は広間の名前と同じく、『華宝の宴』。

『華宝』という言葉は皇国の史書に正確に記されている名称ではない。明確な由来は定かではなく、伝記などには多くの諸説がある。

一説ではとある代の皇后が、夫である皇帝の多忙ぶりに辟易し、後宮の側妃及び他国の友人を招いてこの宴の原形となる夜会を開い

たという。その後時間の合間を縫って宴に顔を出した皇帝が、「麗しき華のごとき婦人方が一堂に会す様は、まるで至高の宝石のように美しい」という台詞を残したとか。それに気を良くした皇后が、今の代まで口伝（くでん）したらしい。

「他にもあるんですよ。たとえば、宴で初めて演技をした芸人が華の入った宝玉を作り出し、時の皇后陛下に献上した、なんていう説も。……でも、今フィレル女官がお話になった説が一番有力ですよね？」

「そうね、セシーヌの説も有名だけれど。……それにしましても、当時の皇帝陛下は何とも歯の浮く台詞を吐いたとは思いませんか、ルイリ様？」

私、この話を伝記で読んだ時に鳥肌が立ちましたわ。

と続けるリーファに、ルイリは苦笑を返した。

「そうかしら、とても素敵なお話だと思うけど。『翠羽蝶』の初代皇帝のお話も、童話みたいに綺麗だったわ」

案外、シェリング皇族は叙情的な人が多いのかもしれない。どうも釈然としないのは、初めて知り合った皇族が彼だったからだろう。

「まったく……ルイリ様はお優しすぎますわ。かつての皇帝（おひと）のことに言及したとて、誰も咎めませんのに」

呆れ半分、その他の温かなもの半分でリーファは微笑む。ルイリは苦笑の中に困った色を含ませて、座椅子の肘掛けを軽く擦（さす）る。優しすぎると言われても、本当にそう思うのだから仕方がない。

「そろそろ始まる頃かしら……？」

「そのようですわね」

ルイリの呟きに、リーファが簡潔な返答をした。

徐々に席が埋まっていき、まだ微かなざわつきが残る中。りぃん、と複数の鈴が鳴らされた。すると前方に設(しつら)えられた簡易の舞台に、気高い雰囲気と豪奢な衣装(ドレス)を纏った女性が姿を現す。姫君達がその出現に気づき、しんと広間が静まっていく。

壇上にいる女性の立ち姿は成人女性の標準身長よりもやや上背があり、より堂々とした印象を抱かせる。赤みを帯びた濃色の髪は樺(かば)色とでも言おうか。多少目尻に皺があるが、老いているとは思わせない切れ長の瞳は金茶色。開会式の際、皇帝の横に並んでも決して霞みはしなかった輝かしい美貌のひと。

女性の手に握られた羽扇が、パチンと鳴った。赤い唇が魅惑的に弧を描く。

「皆様、開会式の直後でお疲れにも関わらずご臨席いただきましてありがとう。このひとときを、どうぞ無礼講で楽しんで下さいな」

円熟した美貌を持ったシェリング皇国皇后――フレイヴィア＝シェリングは嫣然たる微笑を湛え、艶(あで)やかな声で簡潔に開会の辞を述べる。

きちんと階位に沿った座椅子が五十数、そこに座っている姫君達は皆淑(しと)やかに手を叩いた。それは、壮大な開会式に比べれば随分上品な始まり方だった。

「さぁさ、では早速登場していただきましょう――」

フレイヴィアはそう口上して、侍女の先導で階位が最も高い貴賓席へと向かった。その間に、簡易舞台には複数の男女が上がる。全

員異国風の衣装を身に着けており、後ろでリーファが関心を持つように息をついたのが分かった。

列の中央に立った大柄な男が一歩前に進み出て、大仰に両手を掲げる。両腕につけた金属製の腕輪が、シャン、と軽やかな音を立てた。

「麗しき淑女、婦人の皆様、そして主催者たる皇后陛下。この度は斯様な会を開いていただき、感謝至極に存じます。我々は大陸中を放浪する旅芸人、フローラ一座と申すもの。――今回は皆々様が見たこともないような演目をご用意致しております、どうぞ最後までごゆるりとお楽しみ下さいますよう！」

大らかな声が朗々と響き渡り、ひときわ大きな拍手が上がった。

フローラ一座の演技は見事だった。開会式の時よりも。

花の妖精のような踊り子の少女、小鳥を自在に繰り出す動物使い、狙った標的を正確に刺し貫く刃物使いの少年、棒の両端から花を咲かせる手品師。どれも普段宮廷で変わり映えのない生活を過ごしている姫君達にとっては、充分すぎる余興だ。

余談だが、とある伯爵令嬢が刃物使いの少年にささやかな褒美を与えたところ、彼は心底無邪気な笑顔を浮かべてその令嬢の頬に口付けを返した。

広間はたちまち女性達の黄色い歓声や拍手で満ち溢れ、ルイリも楽しいひとときを存分に楽しんだ。

「すごい……本当に、楽しい」

「気晴らしになりましたでしょうか？」

「うん……それ以上よ。提案してくれてありがとう、リーファ」
「それは良うございました」

側室と侍女が和やかな会話をしている中、壇上に新たなる芸人がすっと上がった。姫君達が、ほぅ……と悩ましげな溜息をつく。

舞台に佇むのは、長身の青年だった。しかし顔を窺い知ることはできない。何故ならば彼は、顔の目から鼻にかけて仮面をつけていたからである。

「あら。彼、今年が初めてではなくて？」
「えぇ……そうね。去年はいなかったわ」

近くの席に座っていた側室の二人が羽扇で口許を隠し合ってこそこそと会話するのを聞いたルイリは、改めて舞台の青年を見た。

顔の上半分が光沢のある鞣革（なめしがわ）で覆われていても、顔の輪郭や形の良い薄い唇から、端整な面差しをしていることは一目で分かる。腰まで届く色素の薄い髪はうなじ辺りでくくられ、背中を流れていた。すらりとした長身の身体は他の座員同様に異国の装束を纏っているが、瞳を隠していることもあってその出で立ちはより神秘的だ。

優雅な微笑を形作っていた唇が、ふと動いた。

「お楽しみいただいておりますでしょうか、淑女、婦人の皆様。貴女方のその笑顔をここで拝謁できる特権を得ることができ、この身の誉れと存じます。ではこれより、皆様の貴重なお時間を、僅かばかり私に預けていただきたく」

低く、耳に心地良い声はまるで戯曲のように響いた。紳士的な声音に、姫君達はより一層深い溜息をつく。

「一体どういった演技をするのでしょうね？」
「さぁ……。動物使いでないことは確かのようだけど……」
セシーヌの声に答えでない答えを返しながら、ルイリは仮面の青年を凝視していた。
妙だ――今初めて見たのに、まるで以前から知っているような感覚に陥る。顔も見えない、謎めいた姿だというのに……。
舞台には、彼以外何も用意されていない。見れば、先程まで演技をしていた一座の芸人達も彼の立ち姿を興味深そうに見ていた。
では、と短く息をつき、青年は舞台の最前列に座っている隣国の王妃のもとへ歩み寄る。そして、羽扇を握っている彼女の手の上にそっと自分のそれを重ねた。
「こちらの羽扇を、少々お借りしてもよろしいでしょうか？」
低い美声と口許の艶やかな微笑を目の前に受けた王妃は、顔を赤くしてまるで操り人形のようにこくこくとうなずいた。彼は無駄のない動きで舞台に立ち戻り、ふわりと扇を開いて見せる。
「さて、寛大なご婦人のお言葉に甘えて拝借したこちらの羽扇。では、『華宝の宴』に相応しく、これより華の宝玉を取り出して御覧にいれましょう」
その前置きに、ルイリをはじめリーファとセシーヌも目を見開いた。
華の宝玉――それは、ついさっきリーファが説明してくれた『華宝』の由来の一説ではないか。大陸を旅してまわる旅芸人の青年が、なぜそれを知っているのか。

青年は緩慢な動作でゆるりと扇を振った。その所作はどこか艶めいていて、観客の目を釘付けにする。二、三度羽扇を己の手へ下向きに揺らす。すると、開かれた扇の中央から、丸い玉がふっと現れた。それはそのまま、青年の手の内におさまる。

驚きがさざなみのように会場に広まっていく中で、仮面の青年は自分の手にある玉を掲げた。円い玉の中には——硝子細工の華が、入っていた。

わぁっと広間が今までで最も大きな歓声に包まれる。

皆が不思議がっている。どうしてあの薄い扇の向こうから、宝玉が現れたのかと。

そんなことはありえない、とささめき合っている。きっと手品師、もしくは奇術師なのだと。

いや、違う。奇術などではない。

だって、仕方がない。彼ならば——そんなことも、簡単にできてしまうのだ。

そんな無意識下の自分の考えに、ルイリは気づくはずもなく。

元の持ち主に羽扇と、そして華の宝玉を渡し、ひらりと壇上に舞い戻る。

「さぁ、お次は先程の舞姫の見様見真似で、花の雨を降らせてみることに致しますか」

ふぅっと青年が腕を払った。瞬間、彼の長い指先から淡い薄紅色の花弁がひらひらと溢れ出ていく。観客の女性達はもはや体裁（ていさい）も矜持（きょうじ）も忘れ、少女の頃に戻ったようにきゃあきゃあとをはしゃいだ。

流麗な舞と共に流れ落ちて行く花弁を掴みとろうと躍起になっている。

「……これ、生花ですわね」

近くに揺れ落ちてきた一片（ひとひら）の花弁を難なくつまみ、リーファはそのままルイリの手の平の上に置いた。

照明の角度では、純白にも見える花びら。けれどそれは確かに薄っすらと桃色に色づいていた。感触も、造りものめいていない。

「幻術を使う異能者でしょうか？」

「考えられなくもないけれど、魔術の幅が広すぎるわ」

「でも一座にいる人間が魔術を使用するって……一種の詐欺なんじゃ」

「まぁ、ここにいる姫君方はほとんどが異能者でないし。楽しんでるのなら良いのでしょう」

ルイリの手の中にある薄紅の欠片を興味津々に覗きこんで意見交換する侍女二人に、ただ苦笑するしかない。

彼は優雅な動きと演技で観客を魅了していく。その場にいる全員が、彼の作りだす幻想的な世界に飲み込まれていた。

「――では、残念ながら私に許された時間はここまで。皆様この後も、どうぞ演目をお楽しみ下さい」

舞台の中央で静かに腰を屈め、青年は仮面を着けたまま魅惑的に微笑んだ。広間が割れんばかりの万雷の拍手に包まれる。

顔を上げ、舞台を降りようとした青年がふと――視線を止めた。

ルイリの方向に。

（え？）

思わずぱちりと瞬きをする。何故か……本当に何故か、彼は自分を見ているのだと、分かった。硬質な仮面は、彼がどのような表情をしているのか分からない。

と、しばらく引き結ばれていた唇が、やがて溶けるように綻んだ。ルイリが目を丸くしたと同時に、彼はふいと顔を背けて壇上から去ってしまう。

その後も一座と、他に招請された芸人達の演技は続く。仮面の青年の演技は素晴らしいものだったが、後に続いた演技も負けてはいなかった。

常連の吟遊詩人が披露する戯曲は悲劇から喜劇まで多岐に渡った。皆が手を叩いて喜ぶ。開会式の際に評判だった楽団も、広間中を駆けまわって演奏した。

笑い、驚き、感心して。『華宝の宴』は大盛況のうちに終わった。例年であればそれで終わるはずらしいのだが――姫君達が退場しようとする中、それに待ったをかけるように一座の座長が壇上へ上った。

「皆々様、お楽しみいただけましたでしょうか。ここで一つ余興の提案がございます。お時間があれば、お聞き願いたい」

短時間ですっかり一座の演技に魅了された姫君達が、それに否というはずがない。座長の男は笑って続ける。

「今年は少々趣旨の違ったものをご披露したい所存であります。つ

きましては、興味のあるお方は桃香宮の中央庭園まで足を運んで下されば、幸いにございます。内容はそこで公開……ということで」

宴が終わって残念がっていた姫君達は、その申し出に歓喜の声を上げた。

「また七面倒くさいことを……。……ルイリ様、いかがいたしましょう？」

もはやここまでくると、気分転換で済まされるような規模でもない。

リーファの言外の台詞をきちんと読み取り、ルイリはくすっと笑った。

「せっかくだから、行ってみましょう。あんなに巧みな演技をした人達だもの、きっと素晴らしい演目を用意しているんだわ」

†　†　†　†　†

外に出てみると、辺りには着実に夜の気配が忍び寄っていた。西の空の向こうへ隠れようとする太陽が、周囲の空を自分の姿と同様に赤く染めていく。そこかしらにたなびく薄雲も、普段の白から桃

色に姿を変えている。東の空には白い月が、太陽の退場を待っていたかのように徐々に黄色を帯びはじめた。
春先ながらも夕方は冷える。涼しい風が、前を歩くリーファの紺色の横髪をさらった。

その夕焼けにも負けぬ鮮やかな色彩が、『華宝の間』から桃香宮の中央まで移動していく。
はじめはその列について行こうとしたルイリだが、「もうあの時のような思いはさせたくありません！」というセシーヌの熱論のもと、別の経路から中央庭園に向かっていた。

あの時――というのは、十日と少し前の、庭園での出来事を言っているのだろう。シンディを筆頭としたイアンの側室の姫君達の嘲笑にさらされた時。
ルイリは何度も気にしなくて良いと言ったのだが、やはりセシーヌはずっと悔しかったようだ。彼女の思いやりは嬉しかったし、素直に受け取ることにした。

「庭園に着いてしまえば、他の方々に紛れることもできますし。ルイリ様だって、移動中にねちねちと言われるのは嫌でしょう？」
「嫌というか……ただ、私のせいで向こうをそういった気にさせてしまうのは、申し訳ないわ」
件（くだん）の姫君（もちろんシンディも含めて）は全員があの広間にいた。祝宴の素晴らしさに酔っている彼女らを、自分の出現で気分を悪くさせてしまうのは忍びない。まして移動中など、先程の演技の感想を交換し合いたいに決まっている。

「そんなお優しいことを……！」

セシーヌの声は感激のあまり震えている。琥珀色の双眸は薄暗い中でも、潤んでいることは明らかだ。思わず苦笑した。本当にそう思うだけなのだが……。

背後から道を案内してくれているリーファを見ようと、ルイリは後ろを振り向いた。

「リーファ、そろそろ？」

「えぇ。そこの生け垣を曲がって、東屋（あずまや）を通り抜けましたらもうじき……ルイリ様！」

「え？　……あっ！」

途中まで優しかった藤色の瞳と柔らかかった声が、いきなり鋭くなる。一体何なのかと視線を前に戻せば、ルイリは前方にあったものにぶつかってしまった。

どん、という音の後、セシーヌとリーファが自分の名前を呼ぶ切迫した声を聞いて――身体が後方によろめいていくのが分かった。

倒れる、そう思って目を瞑った瞬間、何かに腕を掴まれる。

「……？」

ルイリは恐る恐る目を開いた。緩慢な動作で視線を自分の右腕に動かすと、誰かの大きな手が二の腕の辺りを掴んでいた。

力強く、けれど決して痛みは覚えない、ルイリのことを配慮してくれている力の入れ具合。そのまま、ぐい、と前に引き寄せられて、ルイリは咄嗟に目の前にあった布を掴んだ。

「これは、大変申し訳ない」

「いえ、私こそ余所見をしていて……」

頭上で降ってきた低い声に頭(かぶり)を降り、ルイリは上を振り仰ぐ。そして、思わず息を止めた。

「……あなたは」

その人は、彼女の頭一つ分以上背が高かった。視界に入った顔の上半分は蔦のような飾りの施された仮面で覆われ、瞳の色は判別できない。色素の薄い髪は、夕日の光を受けて僅かに色を濃くしていた。ふと気づけば、ルイリが掴んでいた布は、その人が身に纏っている異国の衣装だった。

仮面の奥にある瞳が静かに細まって、――ルイリははっとする。そこに浮かぶ感情は温かく、僅かに暗いけれども見える双眸の色は。形の良い唇に滲む温かな笑みに、思わず声を漏らしそうになる。

貴方は。

「お怪我はございませんか、麗しき姫君」

心底労わるような口調で、耳に心地良い低い声を紡ぎ。

『華宝の宴』で万雷の拍手を受けた仮面の青年は、口許だけで涼しげに微笑んだ。

39．　華の宴と仮面の青年（後書き）

やっと更新できました遅くなりました申し訳ございませんーっ！

すみません、言いたいことはもろもろ、活動報告で！　今回は失礼させて頂きます！

ここまで読んで下さった方、更にはお気に入り登録をなさって下さった方、評価を下さった方、本当に本当にありがとうございますっっ！！

40. 幻の逢瀬、その花の名

女達がこぞって着飾る彩り溢れる衣装（ドレス）も、あれだけ集まってしまうといっそ公害だ。

丁度窓から見えた中央庭園。そこに集まる色の大群を眺め、イアンはそう思った。

紅煌宮の廊下からは、どういう趣向か知らないが桃香宮の庭園を見ることができるようになっている。何の気もなしに首を巡らせてしまったのが運の尽き、恐ろしい色彩を目にしてしまった。

「さっき、西方のファードラ王国から来た貴族の方とお話をしたんです。興味深い話だったんですよ！　何でも、今回そっちから招請した吟遊詩人が珍しい楽器を持ってるっていう話で」

夕日も沈み、ようやく辺りが暗がりに包まれ始める頃だというのに、ひしめきあう群衆は妙に浮かび上がって見える。普通、それを神秘的と考えるのだろうが、全く思わない。

「見た目は何の変哲もない竪琴なんですが、素材が特別なんだそうです。棹（さお）や共鳴胴（きょうめいどう）にはある獣の骨を、弦にはその獣の毛を使用しているとか！」

非常に目を刺激する赤やら紫やら黄やらの色が、配列を考えずに合わさっている。しかも薄暗い外が祟って、それらは絶悪な組み合わせで浮かんでいた。結局、それを纏っている女達は配列など考えもしないから、致し方ないのだが。

「そういえば、弦が特別な竪琴ってシェリングにもありましたよね？　十年くらい前に作られて、なのに今や幻って呼ばれてる竪琴が……」

この時間帯といえば、『華宝の宴』も終わっている頃だと思っていたが……招いた一座の芸人が、何か他の余興でもするのか。

頭痛を覚えそうになる。

敷地を貸し、資金を出すのは誰だと思っている。これ以上の興行は、個人的な投資家の援助で行ってもらいたいものだ。

偶然目をやった後宮の庭園の現状のせいで、新たな悩みの種を抱えてしまったイアンである。

（来月の予算会議は……『華宝の宴』の浪費削減も、諮（はか）るべきか）

「あ、他にもですね、……兄上」

（投資家の拡大も必要だな……呼びかけでどうにかなればいいが）

「兄上っ」

即座に今後の対策を頭の中で打ち出していると、少々咎めの入った声音によって現実へ引き戻される。

視線を、右側の窓から左隣へふっと移す――いや、下ろす。そこにある橙（だいだい）の瞳が、不服そうに吊り上がった。威圧感はないが。

「聞いてました？　僕の話」

「全く」

頭の中には入っていたが、肯定を返すと図に乗るだろう。あえて否定的に切り返してやると、橙の双眸はびしっと音を立てて固まる。

背後で、くっと笑みを漏らす音が聞こえた。歩いたまま後ろを向くと、臙脂（えんじ）の瞳が愉快げに細まっている。

「イアン、あっさり言うねぇ。さっきからあれほど、セイロンが熱弁を振るっていたのに」

「そういうお前は、聞いていたのか」

「うん？　まぁそれなりにね。ざっくり言えば、イアンみたいに頑張りますっていうことだよね、セイロン？」

「ざっくり言いすぎです、ゼスト兄上っ！　しかも全然合ってません！」

意外に早く石化から立ち直ったのか、セイロンはぎゃんぎゃんとゼストに文句を呈す。イアンは遠慮なく眉を寄せた。うるさいことこの上ない。

大体、なぜこの二人はついて来ているのか。ヴェルガがいないだけましだが、それでもセイロンがいるだけで精神的な疲労は強くなる。

今までもこの後も予定は詰まっており、この移動時間だけが周りに誰もいない貴重なとき……と、思っていたのに。

撫でつけられた金髪を気だるげに掻き揚げるイアンを見たのか、魅惑の美貌を持つ次兄は軽やかに笑った。

「そうあからさまに面倒そうな空気を出さなくても。私だって夜会のために部屋に戻る必要があったんだ、何も君に付きまとっているわけではないよ」

「僕はですね、一刻も早くこの話をイアン兄上に伝えたかったんです！」

要らん世話だ。

その言葉を、喉下で呑みこむ。ゼストの言い分はともかく、セイロンのそれは迷惑極まりない。別に、異国の珍しい竪琴も、自国で幻となった竪琴にも、さして興味はなかった。

もっともゼストも、部屋に戻る必要があるとはいえ、別に同行してくる決定的な理由にはならないのだが。

この後自室に戻り、今の大礼服から簡易の礼服に着替え、各方面の要人を招いた夜会に出席。そこでヴィクトール王国の王太子と、貿易の円滑化のために軽い会談をする必要がある。それから、国境付近の領地を治めるブレンジャ伯爵とも会わなければ。夜会を終えた後は、明日の午前中の宮内会議に備えて何もなかったはず……。半ば現実逃避で、イアンは自分の思考に没頭した。

そんな心情などお構いなしに、彼の兄弟達は能天気な会話を続ける。

「そういえば華宝の宴は終わったのかな？　私も行きたかったなぁ、飛び入りで」

「ゼスト兄上は詩吟がお上手ですもんね！　あ、でも僕は、イアン兄上とヴェルガ兄上の剣舞も見たいです！」

「あ、それは見たいなぁ。……ヴェルガもここにいたら良かったのにねぇ。久しぶりに兄弟揃いぶみも楽しそうじゃないか」

「そうですね！　何なら僕、今から呼んで来ましょうか？　多分ヴェルガ兄上も、まだ紫芳宮にいると思うし」

「――呼ぶな、いいから黙れ」

これ以上にやかましい弟を連れて来られるのはごめんだ。

二人には悟られないよう、イアンはふっと嘆息する。

左にはうるさい末弟と愉快犯の次兄。右の窓の向こうには、庭園

の緑を壊す色模様。何が悲しくて、視覚と聴覚が不快なものにさらされなければならない。

今度こそイアンは頭痛を覚え、こめかみを揉みほぐすため目の横へ指を押し当てた。

そうしているうちに、窓の外は景色を変えていた。目の害になる中央庭園はいつの間にか後ろに追いやられ、次に目に入ったのはぽつんと建った東屋。あそこはよく、側室の姫達が逢瀬に使いたがる。

何気なく視線を投げたその先に、庭園に溶け込むように、しかし確かに光沢を放つ淡い緑色の何らかが見えた。

（あれは……）

それはつい最近……いや、今日、見たことのある色。

怪訝な表情を浮かべ、目を凝らし――イアンは瞠目した。

†　†　†　†　†

既に日は沈んでいた。夕日の名残が周囲を包んでいるものの、東の空では月光が強まり始めた。

どれほどの時間が流れたのか、考えることもできず。
ただ言い知れぬ感情が全身を駆け巡り――ルイリの身体は、打ち震えた。

「……熱烈な視線は大歓迎。だがそのように食い入るように見つめられては、男としては愚かな誤解をしてしまいますよ、亜麻色の姫君？」

「え……、あっ、す、すみません……！」

しばらく惚けたように仮面の奥を見つめていたルイリだが、青年が困ったように苦笑したので我に帰る。慌てて顔を伏せ、自分の身体を支えてくれていた彼の腕から素早く抜け出した。

「いいえ構いませんとも。貴女のような可憐な女性の視線でこの身体に穴が空くのなら、死に方としては本望だ」

「は、ぁ……」

柔らかく、色気さえ漂う声。しかしルイリは曖昧な返事をするだけにとどめた。初対面の人に抱く印象でもないが、微かに呆れすら感じてしまう。

それでもなぜか彼から完全に視線を逸らすことはできなかった。

不躾だと思う自分の意志とは関係なく、ルイリの目は未だに彼を見つめている。仮面を纏う青年も、それを穏やかに受け止めていた。

が、それを遮るように、紺色の髪を持った侍女がルイリの前に滑りこむ。そして隣にはセシーヌがそっと寄り添い、僅かによれてしまった衣装の裾を整えてくれた。

「……我が主の負傷を防いで下さり、感謝申し上げますわ」

その声音は慇懃だが柔軟さに欠け、妙に硬い。ルイリを背に庇うようにして立っているリーファから、表情はうかがえないけれど。

何だか剣呑な空気を醸しているのは、気のせいだろうか？　そういえば、隣に立つセシーヌからも警戒する空気が漂っているような……。

彼女の向こうで、青年が笑うのが分かった。

「あぁ、そう険しい顔をなさらないでいただきたい、紺青（こんじょう）の侍女殿。そちらの薄紅（うすべに）の侍女殿も。私は、その姫君に危害を加えるような無頼な輩（やから）ではない。――決して」

整った唇から紡がれているであろう水のような流麗な言葉。低く落ち着いた声には言葉には表せぬ説得力のようなものがあった。理由もなく、すんなりと納得できるような何かが。

「リーファ」

心配しないで、と言うように侍女の名を呼ぶ。肩越しに振り返った藤色の瞳が案じるように揺れていたので、ルイリは頷いてみせた。彼は大丈夫だ。

普通ならもう少し渋るだろうが、リーファは観念したように身体をどけた。どうやら彼女も、青年の言葉に含まれた奇妙な信憑性を読み取っていたようだ。

リーファが退くことで再びルイリの目の前に現れた仮面の男は、口許で甘く微笑んだ。目が隠されている分、それがより神秘的に見える。

「聞き入れて下さり光栄だ。貴女の寛大な譲歩に心からの感謝を」

「それは、どうも」

後宮の姫君が見れば卒倒してしまいそうな微笑も、リーファには髪一筋も通用しないらしい。素っ気ない返事をして、彼女はルイリの背後へ後退した。

ルイリは前で指を組んで、一歩青年の下へ進み出た。

「あなたは……華宝の宴で演技をしていた、フローラ一座の芸人でしょう？　これからまた彼らが中央庭園で演技をするのに、なぜこちらにいらっしゃるの？」

「何と光栄な、私ごときを覚えていて下さったと？　貴女の記憶の片隅を私が占めている事実を、他の男が知れば嫉妬を買いそうだ」

「……」

そういう考え方もどうなのか……。しかも質問に対する答えが全く返ってこなかったので、ルイリは困惑した。これは、世間で言う、社交辞令というものだろうか。いやそれも違う気がする。

その考えが表情に出てしまったのか、青年はさもおかしそうにくすりと笑った。

「失礼、ご質問に返答を。実は私は一座の一員ではなく、ただ行動を共にさせていただいていただけで」

「……えぇとでは、中央庭園での演目には出ないのですね？」

「その通り、貴女はご聡明な淑女だ。……ゆえに、こちらで休憩を」

「休憩？」

ルイリはその単語を反芻する。それはつまり、疲労がたまっているということか。

すると、青年は一瞬黙りこんでから、口の端に淡い笑みを滲ませた。口許だけなので判別しにくいが、それは苦笑に類似したもの。

「まぁ、ご心配されるほどのものでも。あれほどの観衆を前にしたのは初めてのことでしたから、少々緊張が緩んだだけのこと」

どこか念を押すような補足。ルイリが目を瞬かせると、だから、と青年は続ける。

「何もなさらず結構ですよ。――何も、ね」

今度こそ瞠目を禁じ得なかった。彼が何を意図して言ったのかは、全く不明だが……まるで心の内を見透かされたような気になる。

彼がそれを言わないでいたなら、ルイリは迷わずに自分の能力(ちから)を使おうとしていたから。

「それに、一座の演目は本当に素晴らしい。私のような半端者が出るよりも、彼らのみで演技をしていただきたいと、そう思いましてね」

「半端だなんて……。華宝の宴での演技は、とても素敵でしたよ？思わず魅入ってしまったもの」

率直な感想を述べれば、彼の唇はこれ以上なく――これ以上ないほどに嬉しげに、綻んだ。

ふと、異国の装束に包まれた腕が動き、長い指がルイリの顔に迫った。咄嗟に息を詰めると、垂らしていた横髪を一房さらわれる。彼の指先に自分の髪が絡む。亜麻色の毛先はまだ緩く波を保ち、彼はそれをそっと己の口許に運んだ。

「ちょっとあなた！」とリーファの非難の声が背後でかかる中、彼は掬い取ったルイリの髪に唇を押し付けた。まるで壊れ物を扱うかのような仕草で、そっと。

彼の唇がルイリの髪に触れていた時間は、随分長く思えた。その

神聖なる儀式のような空気がそう思わせたのか、それとも本当に長かったのかは、彼女には分からない。

「……万人の世辞も霞む、極上の賛美を頂戴してしまった。果たして私は、それに匹敵するお返しができるのでしょうかね？」

「あ、あの、」

「感動に浸っているところ申し訳ございませんが……度が過ぎますわ、仮面のお方！　まずは姫様の御髪（おぐし）をお離しなさいませ！」

先程よりも低く、そして厳しい語調でリーファが声を荒げた。青年はそれを受け、素直にルイリの髪から指を外した。とはいえ彼の余裕めいた様子からして、リーファの語調に圧されて、というのが原因でもなさそうだ。

「失礼。あまりにも感激をしてしまったので、つい」

「つい、で済まされることはございませんわ！　姫様はお守りすべき尊きお方。必要とあらば、騎士団を呼びますわよ？」

いや、たかが側室のために、騎士団を引っ張り出すのは駄目だと思う。

その辺りには言及せずに、彼は広い肩をひょいとすくめた。

「それは困る。私としても、その辺りの悪い虫と同一視されるのは非常に不本意だ」

虫？　ルイリは思わず辺りを見回す。

視線の少し先には、以前例の件で使った東屋がある。見る限り、どこにも虫は飛んでいないし、この時期いるという夜光虫も姿を見ないが……。

「あの、フィレル女官。そろそろ行かないと、遅れるのでは……」

妙な緊張感のせいか、しばらくの間静観していたセシーヌがおずおずと口を開いた。リーファは失念していたように、僅かに声を漏らす。

「参りましょう、姫様。遅れてしまいますわ」

「あぁ、しばしお待ちを」

ルイリを誘導しようとしたリーファを止めるように、仮面の青年はすかさず声をかけた。ぎ……と、上手く油の差されていない操り人形のようにリーファの首が動き、彼を睨めつける。……はっきり言って、結構怖い。

「まだ何かありまして？」

迷惑これ極まれり、とばかりの言葉に堪えた風もなく、彼は一歩ルイリに歩み寄った。彼の指が再びルイリの髪に触れる。なぜか違和感は感じなかった。

「どうやら、姫君の御髪が少々乱れているようだ。恐らく、先程ぶつかってしまった時でしょう」

「え……」

リーファとセシーヌの顔色が変わったので、それは真実なのだろう。ルイリは恐る恐る自分の右側の髪に手を運んだ。確かに、横髪が余計に零れ落ちている。

これは、セシーヌが時間をかけて丁寧に結ってくれた髪型だ。できるなら崩したくない。しかし一度部屋に戻って整え直す時間もないし、無理矢理直すと逆に不自然になる。

仮面の青年は思案するようにルイリをじっと見つめていた。仮面の奥の、瞳の色を認知できそうなほど。

「原因を作ってしまったのは私だ。ぜひお詫びを」

「お詫びだなんてそんな、気にすることは……」

「いいや。亜麻色の姫君、すぐに終わるのでしばし動かないでいただきたい」

言うや否や、余分に零れていた髪を彼の手が掬った。目を丸くしているうちに、彼はひどく器用な動作でその髪を纏め上げていく。そっと、彼はその長身を屈める。薄い唇が、ルイリの耳元にまで運ばれた。

ざ、と風が起こった。葉と葉が、お互いを擦らせて音を打ち鳴らした。

「――不必要な言質を与えず、魂を縛る呪を取らせぬために名も呼ばない。……どうやら諸々を弁えた侍女殿のようだ」

端から見れば、髪を整えているようにしか見えない上に、唐突に巻き起こった風の音。囁くような声量は、ルイリにしか届かない。

「大事にされているようで……安心したよ」

温かさで溢れた言葉。

刻まれた、慈しみに満ちた笑み。

既視感――爆ぜる閃光。

「あ……」

思わず何か口走りそうになるのを、彼はただ微笑んで制す。そして、右側から螺旋状に流れている髪の結び目の部分に何かを差し込んだ。

「……気休め程度だが、今日中は保つでしょう」

屈めていた背を伸ばし、青年は仮面をつけたまま晴れやかにそう言った。

「まぁ……」

「わ、お似合いです！」

ルイリを見たリーファは感嘆の息を漏らし、セシーヌは歓声を上げた。ルイリはそろそろと自分の頭に手をやってみる。結び目の辺りを触ってみるがしかし、手袋に包まれた手では、いまいち感触を掴みにくい。

「貴女の髪には、こちらを」

見かねた青年は、ひらりと手をひらめかせてルイリの眼前に突き出した。

その手に握られているのは、こぶりな薄桃色の花がいくつか咲いた枝。花びらはセシーヌの髪の色よりも淡く、本当にほんのりと色づいているだけ。それぞれの萼には丸い花弁が均等に五枚。薄墨色の外で浮かび上がる花はどこか儚げで、情緒を漂わせる。

ふと思い出した。確か『華宝の宴』の際、彼はこれの花吹雪を散らしていたはずだ。

「これは？」
「『桜』、という東国の花ですよ。色の名にも使われる、雅な花」
さくら、と口中で呟く。
色の名に、ということは、この色自体が『サクラ色』というものなのだろう。
「サクラ……」
「そうです。あぁ、もちろん御髪には髪飾りを。このような枝ではないので、ご心配召されないように」
冗談めかした口調がおかしくて、ルイリは微笑を零した。
「ありがとうございます。本当に……何とお礼を言えばいいか」
「礼などとんでもない。この貴重な時間で、充分釣り合いますとも」
青年は快活に笑う。そして、「では」と優雅な動作で身を引き、礼の形を取った。
「亜麻色の姫君。生涯忘れ得ぬ、夢のような時間を与えて下さったことに感謝を。願わくばこの後の演目が、貴女のお心を少しでも楽しませるものであるよう。だが……」
彼は礼の体勢を取ったまま、顔を上げてルイリを見た。そして、喉を震わさず、唇だけを動かす。
（え……？）
ルイリは目を見開くが、彼はにこりと微笑んで優雅に人差し指を

唇に当てる。聞き返すな、ということだろうか。とりあえずうなずき、礼を返す。

一連のやりとりを見届けたリーファが、先導するべくルイリの前に立つ。参りましょう、と短く声をかけて、緩やかな歩速で歩き出した。

東屋を潜り抜けて、生け垣の角を曲がる前に——今一度、青年の方を振り向いた。彼はまだルイリのことを見てくれている。口許には涼しげな微笑が浮かび、大きな手をひらひらとこちらに振りながら。

「縁があればお逢いしましょう、また」

穏やかな声に、ルイリは唇をほころばせてうなずいた。

生け垣を曲がり、彼の姿が見えなくなる。そのことに理由もない寂寥感を感じながらも、ルイリは先程の彼の言葉を頭の中で繰り返していた。

あれはどういう意味なのだろう。一体、何のために彼は言ったのだろうか。

彼は最後に、唇の動きのみでルイリに伝えた。

別に読唇術など持ち合わせていない。しかし彼は確かにこう言った。

——何かあれば、ここにおいで。私はここにいるから

……と。

４０．　幻の逢瀬、その花の名（後書き）

またも更新遅くなってしまい申し訳ありませんーーっっ！！　そして何だか、ごめんなさい（土下座）！！

仮面の男は、こんな性格でした。いや本当にすみません。書いてて楽しかったのも事実なんですが（汗）、ちょっと暴走しすぎました。

次回は登場を控えさせます。……多分。

そして……年内にもう一話行けるかな、とか思っていたのですが、無理です（泣）　年末年始、ＰＣに触れないほど忙しいようなので（号泣）　こんな中途半端な部分で終わってしまい、大変申し訳ありません……。

ここまで読んで下さった方、更にはお気に入り登録までなさって下さった方、言葉では言い尽くせないほどの感謝を申し上げます！

皆様にとって幸せなクリスマスでありますように。そして、良いお年を！

40．5．　侍女の悔恨

迂闊（うかつ）だった。

後輩と話し合い、彼女を守るがためにわざわざ別の道を経由したというのに……思わぬ伏兵が潜んでいたなんて。

よりにもよって男。

しかもあんな……身の毛のよだつような台詞ばかりを垂れ流す軟派な男。

宴の折から、よくもまぁそこまで口が回るものだと感心していた。が、それは自分達に無害かつ無関係だったからこそ、持ちうる感想であって。ああいった形で直接的に接触すれば、話は別だ。

彼女を見れば、一目で高貴な人だと分かったろうに、あの男は恐れもせずに接近してきた。あまつ、二度も彼女に触れたのだ。……いやそれもこれも、一介の芸人ごときが皇族の関係者（ひめぎみ）に手を出すはずがないと、高を括っていた自分の責任である。

（どうしてあの時、私は動けなかったの。あの男の動きが、あまりに自然だったから？　……そんなものも都合のいい言い訳だわ）

後悔の波がこれでもかと押し寄せ、反省の渦が更に深みを増していく。

「……セシーヌ。何だか、リーファの顔が険しく見えるのだけど」

「この夜闇のせいで、そう見えるんですよ」

「そ、そうなの？　でもそれにしては」
「仮に本当に険しかったとしても、そっとしておいてあげて下さいね？」
「わ……分かったわ」
不安げなルイリの声も、どこか達観したセシーヌの声も、リーファには届かない。
桃香宮、中央庭園。
『華宝の宴』の延長線上のような形でフローラ一座が演技をしているさなか、リーファは己の中で絶賛猛省中だった。
（それにしても……何者かしら、あの男）
不毛な反省をひとまず打ち切り、リーファはもう一つの懸念材料に焦点を当てた。たちまち、眉間に刻んでいた皺が更に深くなる。
異国の衣装に身を包み、巧みな話術でリーファらを翻弄した仮面の男。
妙だった。宴の際に見せた不可思議な演技。異能者か、それに類似した者であることは間違いないのに、リーファは全くそれを認知できなかった。彼を目の前にしても、だ。
魔術を持たぬ者とは、考えにくい。それに東屋で休憩していたと言う割には、ルイリにぶつかる直前まで、気配すら感じさせなかった。あれは只者ではない。芸人であるかどうかも怪しい。
リーファはそこで息を吐いた。思ったよりも深くなっていた眉間の皺を、指先で揉みほぐす。
追及するほど謎が深まる。警戒すべき相手なのだろうが……。

――私は、その姫君に危害を加えるような無頼な輩ではない。――
決して

あの言葉だけは、信憑性を感じる。
その通りに、彼は決してルイリに危険の及ぶことはしないだろうと納得した。何事にも根拠を求める自分にしては珍しい。だが、口から出まかせで言われたものとも思えなかったのだ、不思議なことに。
正体を知るためにもう一度相対したい気もするが、主（ルイリ）がまたあの毒気に当てられるのは避けたい。

「リーファ……あの」
「はい、何でございましょう？　ルイリ様」

背後で百面相をしていたのがばれていたのか、主たる少女が振り向いて心配そうに声をかけてきた。リーファはにっこりと微笑んで応答する。

「……見ないの？　一座の皆さんの演技」
「お気遣いありがとうございます。もちろん、見させていただいておりますわ」
「そ、う……？」
「えぇ。私のことはお気になさらず、どうぞご覧下さいませ」

困った笑みを浮かべたルイリが首を傾げた拍子に、彼女の右の髪に挿されている桃色をした花の髪飾りが揺れた。
思わず溜息をつきそうになる。今度は憂鬱な溜息ではなく、感嘆のそれ。

彼（か）の男が、彼女の乱れてしまった亜麻色の髪を纏める際に使用し

た、桜（サクラ）の花。

それは驚くほどルイリに似合っていた。リーファも数回しか見たことがない遥か東国からの花は、まるで彼女の引き立て役になることを望んでいたかのようにそこに収まっている。

開会式の前から、セシーヌと彼女の髪に合う花を捜したが、結局納得のいくものはなかった。暖色系で、春らしい。この花は、正に理想としていたものだ。

薄い桃色（それ自体を桜色というのだろうが）をした花は、ルイリの髪色に見事に合わさっている。薔薇のように派手な魅力はないのに、不思議と引き寄せられてしまう。

（まるで、ルイリ様のようだわ）

儚く、自己主張は決して強くないが、確かな存在としてそこにある。淡い緑の衣装（ドレス）と桜の花を身につけた彼女は、春の精霊のようだ。

……ここに必要以上の男がいなくて良かった、と心底思う。開会式の時でさえ、ルイリに気づいた騎士団や貴族の男達が、興味本位だか何だか知らないが視線を送ってきていたのだ。余計な虫は、いないに越したことはない。

（まぁ、寄りついてきたとしても追い払えばいいだけね）

自分の考えに一区切りをつけたリーファは、主の勧め通り、フローラ一座の演技を観賞することにした。

４０．５．　侍女の悔恨（後書き）

明けましておめでとうございます！（おっそ）
昨年は拙作に多大なご愛顧を賜りまして、真にありがとうございました。今年もどうぞよろしくお願い致します。

で、２０１１年初投稿は、リーファの回でした（笑）　嘘です、今日中にもう一つ更新します。一話のつもりだったんですが、あまりに内容に違いがあったので分けました。そういうの多いな自分。

ここまで読んで下さった方、新たにお気に入り登録までして下さった方、本っ当にありがとうございます！

41.　炎が呼び起こすもの（前書き）

※少々ですが、残酷描写、流血描写が含まれます。苦手な方はご遠慮下さいませ。

41. 炎が呼び起こすもの

リーファが気づいた頃には、フローラ一座の演技も佳境に入っていた。

中央庭園の真ん中には、急遽設営されたであろう円形の演台があり、その周りを観客である姫君達がぐるりと囲んでいる。演台の中心には、大木をいくつも重ね上げて作られている組み木のようなものがあった。

一座の芸人達は、『華宝の宴』と同じように流麗な演技をして観客を魅了する。だったら屋外でなくてもいいではないかとリーファは思うが、ここにしたからには他に理由があるのだろう。

日はとっぷりと沈み、庭園には前々から設置された洋燈以外の照明はない。半月をようやく超えた辺りの月が、ほのかに地上を照らしている。

月光の下浮かび上がる彼らの動作はひどく神秘的で、姫君達の溜息を誘った。

「長いような、短いような時間でした。今度こそ、皆様との時間の最後と相成ります！」

（最後になるまで気づかなかったのね……私、どれだけ自分の思考に没頭していたのかしら）

宴の際にも口上をした大柄な男、一座の団長が声を張り上げる中、リーファは自分に呆れた。

「最後の演目に使用致しますは、こちらの組み木。きっと皆様のお気に召す演目となりましょう。――さぁ皆様、手拍子をお願い致し

ます！」

竪琴や横笛を持った異国の楽団が演奏をはじめると、観客も歓声を上げて手拍子を始めた。

組み木を囲むようにして、五、六人の団員達が演台に現れる。それぞれ、手に腕の太さほどの木の棒を握り締めていた。

「あの木は、何に使うと思う？」

「さぁ……先端から紙吹雪が散るとかでしょうかね？」

「じゃああの組み木は？」

「私も気になっていました。……あ。辺りが暗いですから、火を燃やすとか！」

ルイリとセシーヌが首を傾げながら憶測を立てている。

「……火……」

その様を微笑ましく思って見守っていたリーファは、僅かに固くなったルイリの声音に気づけなかった。

「それでは、参りましょう！」

男の威勢の良い掛け声と共に、演台に上った幾人かが掲げ持っていた木の棒に火が点いた。それは本当に突然のことで、驚きと感心のどよめきが起きる。演台に登場した六つの炎が、暗かった周囲を明るく照らした。

「あらセシーヌ、予想が当たったじゃない」

「本当ですね、びっくりしました」

松明（たいまつ）を持った数名は、炎を掲げたまま舞を踊りはじめた。揺らめく炎は腕の動きに合わせて生き物のようにうねる。観衆はその様子に、火傷をするのではという懸念を交えながらも魅入っていた。角度によっては、燃える花のようだ。

残像を残しては揺らぐ松明の火。ひどく幻想的な明かりは、人々を魅了する。

やがて炎の舞は終わりを告げ、先程の男の合図で松明を持つ者達は演台の中心まで移動した。彼らに囲まれるようにして中央にあるのは、例の組み木。

「皇国の更なる繁栄と発展を祈りまして――ささやかではありますが、我々よりの供物（くもつ）であります！」

ぱんっ、という乾いた柏手（かしわで）。それを合図に、一座の団員達が持っていた松明は、組み木の中に放り投げられた。

一瞬の沈黙を置いて、先程の握りこぶし程度の大きさとは比にならないほどの火炎がごうっと燃え上がった。人々の歓声が更に強まる。木を土台にして燃える炎は、辺り一帯を煌々と照らし出す。

天上に噴き上がる熱火を見て、リーファは納得した。確かにこれは屋内では行えまい。宮殿が火事に見舞われてしまう。

隣に立つ後輩の侍女が、ほうっと息を吐き出した。鴇色の髪は炎に照らされて、橙にも見える。

「なるほど……天まで燃え上がる炎と、天まで届くと言われる皇国の威光と繁栄をかけたわけですか」

「……火は燃え尽きるものでしょう。ルイリ様も、そうお思いになりませんか？」

感服したセシーヌの言葉にあえて異を唱えながら、リーファは一歩前に出て立っている側室の少女の様子を窺った。

「……ルイリ様？」

訝しげな呼びかけにも、彼女は応じない。何も言葉を発さぬまま、燃え上がる炎を見つめていた。

そこでリーファは気づいた。

火炎を凝視している彼女の細い肩が、小刻みに揺れていることに。

†　†　†　†　†

背後で名前を呼ばれた気がした。けれど応じることはできなかった。

ルイリの視線はただ一点、組み木から溢れんばかりに燃える炎に、据えられている。

「……」

燃える――生きているように動く、火炎。

熱が頬を打ち、赤々と燃える炎は濃紺の空に吸い込まれていく。
ルイリはくっと顎を上げ、反射的に夜空を仰ぐ。上に浮かぶのは、半分より少し満ちた月。

（……違う）

ぱち、と火が爆ぜて、頂点で火の粉が吹き上がった。朱色の炎塵（えんじん）は、夜空で踊って束の間消え去る。全身に、悪寒に似た震えが駆け上った。

違う。自分の知っている、自分が見たことのある月はもっと細かった。糸のように細かった。
視線を前へと戻す。木々を焚きつけにして、上へ上へと燃え上がる炎。ルイリは違和感を感じた。

違う。あの時、自分は炎を見下ろしていたはずだ。
あの炎はもっと……もっとどす黒い煙を巻き起こし、まるでこの世を焼き尽くさんばかりに燃えていた。

そう、その炎で、たくさんの――

たくさんの、生命が散った。

「――、」

碧の双眸がはっきりと見張られた。こぼれ落ちそうなほどに開かれた瞳の焦点は定まらない。

周囲の喧騒が嘘のように聞こえない。姫君達の歓声も、賑やかしい楽団の演奏も、間近で話している侍女二人の会話さえ、聞こえな

い。今この空間には、ルイリと火炎しかいないのではないかと思うほど。

周りの風景が色褪せていく。溶けるように、色を失くしていく。後宮の姫君達が纏う色鮮やかな衣装（ドレス）も、一座の者達が纏う異国の装束も、庭園の植え込みさえ、白黒の無機質な光景へ転じていく。

音の消え去った世界で、炎だけが、音を立てて、燃える。白と黒だけの世界で、炎だけが、鮮やかに、燃える。

全てを飲み込んで、全てを奪い尽くして。

――逃げろ！！

まるでその場で叫ばれているように、切迫した叫びが耳朶（じだ）を打つ。

――脳裏の奥で閃光が迸（ほとばし）った。

夜の涼しさを奪う炎熱。
夜の静けさを奪う悲鳴。

黒煙と共に消えたもの。昼間のように明るい辺りと、嘲笑しているように細い下弦の月。

――逃げろ……子供達を守れ！

そう叫んだのは、誰。

次の瞬間に足元を染め上げた、あれは何？

「……あ」

大量の奔流。唇から、呆然とした声が零れる。

ぱち、と。

また火の粉が爆ぜた。炎の形が、また変化する。猛り狂うように、うねる。

その瞬間、せき止められていた何らかが一気に溢れ出し、ルイリに襲いかかった。

突如崩れた平穏。悲痛な断末魔。赤黒い飛沫（ひまつ）。

大量の飛沫が、地面を染める。叫びながら命を散らせた者達の骸（むくろ）が、地面に転がっている。その上を、地獄のような熱を纏った烈火が、なめるように広がっていく。

その飛沫とは違う、鮮烈な何らかが、瞼の裏で激しく明滅する。

赤い、紅い、あれは何。

（やめて、やめて――いや！）

この恐ろしい光景は、何だ。この凄惨な映像は、誰のものだ。

呼び覚まされてはいけない、呼び起こされてはいけない。

これが――自分のものであってはいけない。

ルイリは声も出せずに自分の肩を抱いた。やめて、と何度も心中で叫ぶ。だが無理だ。炎はまだ燃えている。彼女を嘲笑うかのように、更に威力を増して、燃え上がる。

目を逸らさなければ――これを見るのをやめなければ。
本能は狂ったように警鐘を鳴らすのに、ルイリの視線は未だ炎に、
ルイリの足は未だその場に縫い付けられたままだ。

頭の中を駆け巡っていく音、映像、臭気、感触。止まらない。

足元から迫る熱。
黒い夜空に奪われた命。
嗅いだこともない恐ろしい臭い。
抱きしめてくれた温かい腕。
叱責する声。
無機質な大量の金属音。

ごうごうと鳴る、あれは業火の音。

――敵が――すぐそこに！
――いい加減にしろ！

これは、誰の声？

――生きて、

これは、

「……――っ！」

急激に足場が不安定になった。それを気取られないように、できるだけ自然に顔を伏せる。

「ルイリ様、いかがなさいました？」

「まさかお身体の具合が……」

こんな時にこそ気づかれたくないのに、目端の利く有能な侍女二人は、直ぐさまルイリの異変に反応した。

「だい……大丈夫」

「ですが、顔色が」

「大丈夫だからっ……！」

普段全く声を荒げないルイリが強く拒むようにそう言ったので、リーファが言葉もなく瞠目する。ルイリは強く唇を噛んだ。心配してくれる彼女らの言動さえも煩わしく思ってしまう自分に嫌悪を抱く。

だが彼女達のお陰で、眼前の炎からどうにか視線を引き剥がすことができた。どうにか息を整えていく。

あれは違う。猛火（もうか）が見せた、何の現実味もない幻だ。実際にあったことでは、決してない。

弱く首を振って、ルイリは口を開く。

「少し、立ち疲れただけ。ここから離れれば……」

……離れれば？

息を詰めた。
再び、爆ぜる閃光。
そうだ。すぐにここから離れなければ。
逃げなければ――このままとどまっていれば、背後から、
……
甲冑の大群が、迫ってくる。
声にならない悲鳴が喉の奥で絡まった。体裁も外聞も吹き飛んで、踵を返す。
「ルイリ様！」
侍女二人の驚愕の声が、重なる。構っている暇はなかった。
衣装（ドレス）の裾を持ち、リーファとセシーヌの制止の声も振りきり、ルイリはその場から逃げるようにして走り出した。
ただあの場から立ち去りたかった。
あれ以上燃え盛る炎を見ていれば、自分の中の何かが確実に壊れる。ルイリにはその確信があったから。
だが、逃げたところで――どうすればいいのだろう？
中央庭園から、一体どのような経路で走ってきたかも分からない。ただ目の前の入り組んだ道を闇雲に走り、ルイリはいつの間にか人気のない場所に辿り着いていた。
しばし立ち尽くして、途方に暮れる。天上の月光だけが、唯一の

光源だった。白銀の光が、ルイリの剥き出しのうなじを一層白くする。

ゆっくりと自分の髪に手をやってみる。感触だけなので何とも言えないが、会場に戻れないほど乱れてしまっていることは分かった。途中まで侍女二人が追いかけて来ていた気もしたが、夢中で走っていて撒いたらしい。……別に撒くつもりはなかったが。

「どうしよう……」

思ったよりも走っていたのか、心臓はまだ早鐘を打っている。乱れた呼吸を抑えていると、夜の冷えた風が亜麻色の髪をさらった。首を縮めて、寒さをやり過ごす。

ふと、髪に添えていた指先が、固いものにあたった。

瞠目する。光が弾けて、映像が目の中に飛び込んできた。

――何かあれば

優しげに、穏やかに動く、形の良い唇。

――何かあれば、ここにおいで。私はここにいるから

この桜の髪飾りを、温かい微笑をくれた、仮面の青年。

そうだ、彼のいる……あの東屋へ、行けばいい。

目的地が明確になると、急に視界が開けた気がした。周りを見渡すと、亜麻色の髪がふわりと翻る。夜空の一角、煌々と明るくなっている……向こうが中央庭園。ならば東屋は、この近くにあるはずだ。

ルイリは内心ひどく焦っていた。あの惨憺（さんたん）たる光景が、目を離れ

ない。どうして自分が立っていられるのか、それすら不思議だった。

大丈夫だ。自分の中で、呪文のように唱える。

きっと、大丈夫。彼に会えば、この恐れも解消できる。東屋に行けば、彼が待っていてくれる。

ふぅっと大きく息を吐き、まだ小刻みに震えている足を前へ運んだ。

†　†　†　†　†

目的の場所には、案外すんなりと辿り着いた。

夕方の折に見覚えのある、蔦の絡まった四柱。月の光を受けて、白い屋根が光を放っているように見える。

屋根の下、夜闇に溶け込むようにして佇んでいる一つの人影。

ルイリはほっと息を吐き出し、一歩踏み出そうとして――目を瞠り、硬直した。

（……どうし、て）

この距離からでも分かる長身痩躯。夜の化身のような黒の装束。

こちらに背を向けていても、伝わってくる圧倒的な存在感。襟足まで覗いている髪は、夜目にも明るい黄金。

それが誰なのかを察した瞬間、ルイリは微かな悲鳴を上げてしまう。

その僅かな音が聞こえたのか。ふっと、その後ろ姿が動き、その人物の首が巡った。知らず、ルイリの身体が強張る。

ゆっくりとその端整な横顔が見えて。

紅の光が、ルイリを射抜いた。

（あ……あぁ）

全身が震える。脳は何度も、足に動けという命令を送っているのに、当の足は一向に動かない。足の裏に根が生えてでもいるのか。

紅い、紅い、何よりも恐ろしいはずの色。

その色を、どうして私は美しいと思ってしまったのか――？

思わず後ずさるように身体を仰け反らせると、突如足が自由になった。縫いとめられていたような感覚が嘘のように、自由に動く。

ルイリはすぐさま身を翻した。

が――右の二の腕を、肩掛（ショール）け越しに掴まれた。

「っ！」

どうして、いつの間に。

そう考える暇すらなかった。自分の腕を掴んでいる手を見る。手袋で覆われている、冷えた手。

それは、夕暮れの手とは、全く違うもの。

「……なぜ逃げる」

頭上から、低く押し殺した声が落ちてくる。聞き間違えようもない、その凍てついた声音にびくりと身体を震わせて、ルイリは恐る恐る顔を上げた。

氷の刃のように、冷たく研ぎ澄まされた硬質な美貌、無機質な表情。何の感情も読み取れない唇はまるで心を持たぬ人形のよう。その双眸は燃える炎のように鮮やかなのに、そこから熱さは微塵も感じられなかった。

肩の向こうに月が見える。その周囲をとりまく雲だけが、いたずらに形を変えて動き回っていた。

どうして。

どうして、彼がここに。

「……殿、下」

わななく唇を動かし、掠れた声で紡いだルイリの言葉を聞いて。

冷徹な視線を向け続けていた青年――イアンは、不愉快そうに真紅の瞳を眇めた。

41. 炎が呼び起こすもの（後書き）

ようやく二人が顔をつき合わせてくれました！　あぁ長かった。

今回は、ルイリの記憶に関してはターニングポイントになるかな、と。だから書き方も若干異なったと思います。混乱してしまったら、申し訳ございません！
フラッシュバックって本当に唐突だなと思います。それがトラウマじゃないものだとしても。

ここまでお読み下さった方、お気に入り登録までなさって下さった方、本当にありがとうございます！！

42. 自覚なき独占欲

「質問に答えろ。……なぜ、逃げる」

殿下、と呼んだことで一層不機嫌になったのか、彼は先程よりも低い声で再度問うてきた。抑揚のない冷たい声に、身体が固まる。

「申し訳、ございませ……」

「謝罪は必要ない。俺は理由を聞いている」

謝っても無駄だとは分かったが、それでも謝らずにはいられなかった。逃げるような形になったのは本当のことだ。

ルイリは、ゆっくりと彼の瞳を真正面から見た。一対の紅き光。それはついさっきの炎よりも深く鮮烈で、目を逸らしてしまう。その色彩を見るだけで、心臓が波打つのだ。

「……申し訳ございません」

その声は思ったよりも頼りなく、弱かった。顔を伏せたのでイアンの表情はうかがえないが、余計に苛立たせてしまったことは分かる。彼を取り巻く【気】が、すぅっと冷えゆくのを感じた。

ひゅう、と冷気を纏った夜風がルイリのうなじを撫でた。思わず首を縮ませ、寒さをやり過ごす。

「来い」

端的な命令が頭上に落ちると共に、強い力で右腕が引かれた。硬

直していた足は、力の込められた方向へ反射的に動く。半ばまろぶようについて行く。ルイリはこっそりと、先導する広い背中を盗み見た。

漆黒の礼服（開会式で見たものよりも作りが簡素だが）に隙なく身を包んだ長身の身体、月夜に際立つ金色の髪。彼ならば、後ろ姿だけでも、大抵の人間は膝を折るのではないだろうか。どうしてその人が今自分の腕を掴み、そして東屋へと連れて来ているのか……考えるだけで、頭痛がしそうだった。

東屋へ辿り着いてから、皇太子は再度ルイリと相対した。だが、ルイリは顔を上げることはしない。不敬だと分かっていても。あの瞳を見ることが、どうしてもできない。

「……お見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ありません」

ただ、とルイリは続ける。彼は、理由を言えと言った。どうにか不自然でなく、辻褄が合うように……ゆっくりと、言葉を模索しながら口を開く。

「逃げたわけでは……ないのです。宴の折、少し人に酔ってしまって……。ですが、ここに来たら殿下がいらっしゃったので、お邪魔をしてはいけないと……」

「……」

「私ごときが殿下の傍に寄るのは、恐れ多く存じますから。ですが、ご不快にさせてしまったのなら……深くお詫びを」

皇太子は口を挟まず、相槌すら打たずにルイリの言葉を聞いていた。少し息を吐き出す。どうにか聞き入れてくれたのだろうか。

が、次の瞬間、一つ舌打ちが降った。

視界に、手袋に包まれた手が入る。声を上げる前に、顎を掴まれて力を込められ、上を向くことを余儀なくされた。

整った顔立ちに浮かぶ表情はない。視線が絡む。いきなりそのような行動をされるとは思っていなくて、ルイリは恐怖も忘れて真紅の瞳を見つめる。

「謝罪をするのなら、相手の顔を見ろ。常識だ」

「……すみ、ません」

やってしまった、と心中で悔いた。機嫌を直すどころか、更に悪化させてしまったようだ。これでは、簡単に解放してくれそうにない。

「……付け焼き刃なら付け焼き刃なりの、もっと気の利いた言い逃れをしてみろ。子供でもまだ上手く繕える」

単調で冷淡な、ともすればそれが叱責であることも忘れてしまいそうな、感情のこもらない声。だがルイリは言葉の意味を読み取って、焦りながら首を振った。

「ちが……本当です、殿下！」

「それ以上言うな。かえって見苦しい」

それは最終通告と言っても良かったのかもしれない。ルイリは睫毛を震わせた。今この瞬間に、弁解する資格を奪われてしまったのだ。

気づけば、彼はルイリではなくルイリの上を見ていた。一体何を見ているのだろう、と首を傾げる。しばらく黙していた彼は、目を見開いたかと思うと――、

口許を歪めて、薄く笑った。

「殿下……？」

凍えた笑み。背筋がぞっとしてしまうほどの。ルイリは知らないことだが、それは彼が皇帝謁見の間で浮かべた嘲笑によく似ていた。

（な、に……？　この、表情）

笑っている――そのはずなのに、怒りの表情よりも恐ろしさを感じる。これは笑いではない。……嗤い、だ。

くっ、と、低く無機質な笑声が静寂の間隙を縫った。春の夜の空気が、彼自身を恐れるように震える。

ふと彼は、身体を反転させてルイリとの位置を入れ替えた。その拍子に、彼女は東屋の柱の一つに身体を押し付けられる形になる。顎を挟んでいた長い指先が、一層ルイリを引き寄せる。長身が屈められ、端整な顔が近づいた。ルイリの額の上に、金の毛先がかかるほど。

「逢瀬をするはずの男がここに居らず、さぞ驚いたことだろうな？」

「……え？」

思ってもみないことを言われ、瞠目する。逢瀬？　一体何を言っているのだろう。

「残念だったな。俺がここに来た時には、人一人いなかった。お前の望む相手は、元からいなかったが」

彼の言いたいことが分からない。ルイリは混乱し、今になってよ

うやく、イアンの怒りの論点がずれていると気づいた。

「お……待ち、下さい。殿下が何を仰りたいのか、全く分かりません」

「……まだ、白を切るか。往生際の悪い」

柳眉をほんの少しだけ上げる。ふと、右腕にこめられていた圧迫感が消えた。

「では、これは何だ」

手袋越しに、彼の指がルイリの首筋から目許まで一気に、しかしゆっくりとなぞった。指先の触れた部分から、電流のような微弱な痺れが、全身に奔る。それは先程の寒気のようなものではない。もっと、身体の根底が疼くような、何か。

イアンの指先が、ルイリの髪を——否、髪につけられているものを弾くように触れた。

「あ……っ」

ルイリはそこにあるものを思い出して、声を上げた。

仮面で目を覆い隠し、優雅に微笑んだ唇が瞼の裏に甦る。彼がくれた、今ルイリの髪を彩っている、異国の花飾り。

そして、皇太子がこれを見て一体どう思ったのか——それを察して、ルイリは心の中の悲鳴を聞いた。

「これは男から贈られたものだろう？　人に酔ったというのを口実にして、再びここで落ち合う予定だったか。なるほど、俺は邪魔者だろう」

「違い……ます、そうじゃありません！」
「相手は……以前お前が名を呟いた男か？　いや……」
必死な否定の声も虚しく、彼はルイリの髪に挿されているであろう花を観察し始めた。
焦りだけが胸を満たす。どうにかして、彼の誤解を解かなければ。前にも一度、ルイリは彼に誤解をさせてしまったことがある。そして先程の言葉でも分かるように、イアンはまだあの名がルイリのそういった男であると勘違いしている。
「……桜を贈る者は、この国の人間ではないな。驚いた、また一人手籠めにしたのか」
「違います、違うんですっ……！」
「何が違う？　ならば言ってみろ、これは誰からの贈呈の品だ」
「そ、れは」
核心を突かれて、ルイリは返答に窮した。それだけは、どうしても答えることができない。本当のことを話してしまえば、彼は額面通りに受け止め、確信を深めるだろう。
下手な嘘をつくこともできない。たとえばここでリーファからもらったものだと言っても、彼は侍女に真意を問い質すに違いない。それだけは絶対に避けたい。無関係の彼女を巻き込むのは、嫌だった。
だからと言って、このまま沈黙しているのも危険だと、重々承知していた。どれにしても逃げ場はない。加えて、背には冷たい柱。物理的な逃げ道すらも用意されていないのだ。
肌に刺さるような静けさが満ちた。耳鳴りのような静寂の音がうるさい。自分の呼吸の音が、脈打つ鼓動の音が、やけに大きく聞こ

える。

風が巻き起こった。雲が引き千切られるように流れ、天上にあった半分の月はそれに覆い隠された。月光が地上に届かなくなる。美しく剪定された庭の植え込みも、濃紺の闇に沈む。

すると、彼は突然ルイリの右手首を掴んできた。いきなり掴まれたこともあって、ルイリは喉の奥で細く悲鳴を上げてしまう。

月明かりのなくなった中、紅い瞳だけはやけに鮮やかに浮かび上がって見えた。すっと、それが細まる。

「……お前は」

薄い唇から零れた声は、驚くほど小さい。意図してのことではないだろうが、僅かに——恐れすら含まれている。彼の眉間に、深い皺が寄る。

ルイリは探るつもりで、彫像のような顔立ちを覗き込んだ。これは、何の表情だろう。怒りでもない、嘲りでもない。何度か、彼のこういった顔は見たことがある。

だが右手を締め付ける手の力が強くなり、顔を歪めざるを得なかった。

ゆっくりと、彼は、噛み含めるように呟く。

「お前は……俺の、ものだろう」

息が止まるかと思った。彼の台詞にでもあるが、それ以上に、そう言った時の彼の表情に。

端から聞けば告白にも酷似しているはずだ。だがそれを裏切るのは、言葉の裏に隠された恐怖にも似た響きのせい。否定されることを拒むような、断定口調。

これほど苦しげな顔は見たことがなかった。真紅の双眸にちらつくのは静かな怒りの炎なのに、時折それは揺らいで、奥に内包するのは荒れ狂う激情。常に冷然屹立（きつりつ）とした態度を保つ彼からは、想像もできない。

この瞳を見るだけで、この青年の持つ何かが――痛いほど、ルイリに流れ込んでくるような気がした。

ルイリは唐突に理解する。

（あぁ、この人は）

この人は、とても。

そのことに思い当たると、ルイリの胸に形容しようのない痛みが広がった。開会式の時など比にならない、重みのある痛覚。ふいに目頭が熱くなった。けれどそれは、雫にはならず。

何も疑問に思わなかった。更に顎を持ち上げられて、氷の美貌が接近してくることも。苦い表情を浮かべた紅の瞳が、金色の睫毛の奥に隠れることも。

思考が停止したのではないかと思うほど、何も考えられない。――拒めない。

だけどこれ以上彼の瞳を見ることは堪えられず、ルイリは強く、目を閉じた。

†　†　†　†　†

月光に照らされた繊細なつくりの顔は、恐れに染まっていた。青ざめた唇から零れ落ちた「殿下」という声。そして戦慄(わなな)いて凍りつく翡翠色の瞳は、口に出した言葉よりも雄弁に物語っている。

なぜ、ここにいるのか――と。

「質問に答えろ。……なぜ、逃げる」

生じた不快感そのままに、イアンは語調を低くした。少女の身体が強張るのが、掴んでいる腕を通して伝わってくる。

「申し訳、ございませ……」

「謝罪は必要ない。俺は理由を聞いている」

すかさず畳みかけると、彼女は決まりが悪そうに口を噤む。海の奥底を映したような碧の双眸がイアンを見た。しかし次の瞬間萎縮するように揺れて、また頭を下げる。

「……申し訳ございません」

消え入るような声量で、再度謝罪の言葉が漏れる。イアンは意図

せず、顔を歪めた。胸にわだかまる不愉快な感情が増大していく。
しばし制止した状態の二人の間に、吹き抜ける春の夜風。途端、ルイリの華奢な肩が小さく震える。イアンは素早く視線を周囲に送った。人気（ひとけ）はない。

「来い」

短く命じ、彼女の右腕を掴んだまま引きずるように歩かせた。動かないと思っていたその身体は、案外あっさりと力の方向へ傾いてくる。
数歩先の東屋まで辿り着いてから、イアンは改めて亜麻色の少女と相対した。

細い肢体を包み込む衣装（ドレス）の色は、派手な色彩の目立つ後宮では珍しい淡い緑色。高く結い上げられた亜麻色の髪。俯いたままなので顔は見えないが、耳には月の雫にも似た真珠が揺れていた。
首筋から二の腕を隠す肩掛け（ショール）と、肘までを覆う刺繍の入った手袋。露出する部分をあからさまに隠そうとするそれは、妙に露骨な牽制の臭いが漂う。

（リーファか）

イアンの間諜だった頃、女癖の悪いレンを蔑視していた侍女を思い出す。彼女がこの衣装（ドレス）を考えたならば、納得がいく。リーファがなぜ、この少女にそこまで固執をするのかは疑問のままだが……。
その出で立ちは、開会式で見た時と変わらない。だが――何かが違う。そう感じた。

「……お見苦しいところをお見せしてしまい、申し訳ありません。ただ、」

流れる沈黙が耐えられなかったのか、側室はか細く震える声で呟いた。見下ろすと、彼女は未だ顔を伏せたまま。

「逃げたわけでは……ないのです。宴の折、少し人に酔ってしまって……。ですが、ここに来たら殿下がいらっしゃったので、お邪魔をしてはいけないと……」

嘘をつけ、と声に出さずに罵った。

人ごみに酔い、たまたまこんな場所に来るとはとても思えない。加えて、あの時イアンを見た表情。あれは予想外の人物がいたことに対する驚愕、そして言いようのない恐怖。

踵を返す直前の焦りに満ちた瞳は、逃げること以外の何を考えていたというのか。

「私ごときが殿下の傍に寄るのは、恐れ多く存じますから。ですが、ご不快にさせてしまったのなら……深くお詫びを」

細く続く『理由』は止まらない。

掴む腕から逃れようともせず、しかし紡がれる言葉は、この場から開放されるための言い訳。

彼女は今、どうすればイアンの気を害さずに済むか、いかに穏便に場を切り抜けられるか……それだけを考えている。イアンは、嫌気が差すほどそういった気配を察することができるのだ。

イアンがただ静かに視線を向け続けても、ルイリは彼を見ない。顔を上げようともしない。

舌打ちをする。

ひどく、苛立った。

おもむろに左手を伸ばし、俯く少女の顎を捕らえる。そのまま強

引に顔を仰のかせた。突然のことに虚を突かれたのか、ルイリは呆然とイアンを見てくる。

「謝罪をするのなら、相手の顔を見ろ。常識だ」

「……すみ、ません」

何度目か分からない謝罪がなされた。深海の瞳に、自分の不機嫌そうな顔が映っている。

なぜ。イアンは自問する。

なぜここまで、感情が波打っている。神経が徐々に焼かれていくような感覚は、気分が悪い。

密かに息を落ち着かせる。それから、イアンは元の調子を取り戻すべく口を開いた。

「……付け焼き刃なら付け焼き刃なりの、もっと気の利いた言い逃れをしてみろ。子供でもまだ上手く繕える」

「ちが……本当です、殿下！」

「それ以上言うな。かえって見苦しい」

必死になって異を唱えてくるも、ぴしゃりと黙らせる。口が噤まれると同時に、色素の薄く長い睫毛が震えた。今思い当たったのだが、髪が亜麻色ならば睫毛も同じ色をしているらしい。髪や睫毛だけでなく、肌の色や衣装の色さえも淡い色彩ばかりだ。それでも彼女の存在が確固たるものであると思うのは、イアンを見つめる翡翠を溶かしこんだような深い双眸のためなのだろう。

ふとイアンは柳眉を跳ね上げる。細い頤を摘み上げたまま、彼はようやく違和感の正体に気づいた。

結い上げられた亜麻色の髪の右側――イアンから見れば左側。丁度結び目の付近に、この辺りでは見慣れない花が咲いていた。

五枚の丸い花弁。純白の中にほんの一滴だけ紅(べに)を混ぜた、そんな淡い色。風が吹けば今にも散ってしまいそうな、儚さを持った花。

気づかなかった。彼女自身に溶けこみすぎて――自然すぎて、分からなかった。

そして、悟る。あまりの馬鹿馬鹿しさに笑いがこみあげた。

「殿下……？」

ルイリが不思議そうに、イアンを呼んだ。しかし、怪訝そうな声音の奥には確かな恐れを潜んでいる。イアンは更に、笑みを深める。比例するように唇が歪む。

（邪魔をしてはいけない、だと？）

逆だ。

イアンが、邪魔だったのだ。

冷めた嘲りと空虚な感情を覚えて、イアンは乾いた笑声を漏らす。細い腕を強く握って、身体を反転させる。イアンの背にあった柱に、彼女の身体を押し付けた。そして、指でルイリの顎を挟んだまま、ゆるりと顔を近づけた。

「逢瀬をするはずの男がここに居らず、さぞ驚いたことだろうな？」

「……え？」

意味が分からない、そう言わんばかりに、彼女は眉をひそめる。

何と白々しい演技だろう。いや、今の今までイアンは気づかなかったのだから、大した役者なのかもしれない。

簡単なことだったではないか、彼女がここに現れた時点で。そもそも、あの時がそういった場面だったのだから。

あの時――紅煌宮の廊下からこの東屋を眺めた時、ルイリは侍女達以外の人物といた。

後ろ姿だったのでよく分からなかったが、あの上背は間違いなく男。その男と言葉を交わす彼女は、遠目から見ても穏やかな表情を浮かべていた。あまつ――彼女は男に、髪に口付けることを許していた。

東屋に来たのは、逢うはずの男がいたから。だが、ここにいるべきではない男がいることに驚き、逃げたのだ。

「残念だったな。俺がここに来た時には、人一人いなかった。お前の望む相手は、元からいなかったが」

「お……待ち、下さい。殿下が何を仰りたいのか、全く分かりません」

「……まだ、白を切るか」

イアンは、往生際の悪い、と低く吐き捨て、彼女の右腕を掴んでいた左手を離した。どす黒い感情が溢れ出しそうになる。

「では、これは何だ」

ひどく緩慢な動作で手を動かし、指先を肩、首筋、頬、目許へと伝わせた後、最終的に髪に挿されている飾りを突いた。

「あ……っ」

その位置にあるもので思い当たったのか、透明な声が震えた。それを見逃さない。イアンは目を細めた。

「これは男から贈られたものだろう？　人に酔ったというのを口実にして、再びここで落ち合う予定だったか。なるほど、俺は邪魔者だろう」

「違い……ます、そうじゃありません！」

「相手は……以前お前が名を呟いた男か？　いや……」

イアンは、手袋をはめた指で薄紅色の花弁をなぞった。紅の双眸に鋭い光を宿して、花を観察する。

昔、書庫の書物という書物を読み漁った時に同じようなものを見たことがある。あれは確か、国交を開いた東国から輸入された本。特徴も色も、目の前のものと一致する。

「……桜（サクラ）を贈る者は、この国の人間ではないな。驚いた、また一人手籠めにしたのか」

本当に、一目見た姿からは想像もつかない。誰が思うだろう。後宮の中で誰よりも影の薄そうなこの少女が、男を惑わすなど。

そういえば、夕刻に見たあの装束も、異国のものだった。

「違います、違うんですっ……！」

「何が違う？　ならば言ってみろ、これは誰からの贈呈の品だ」

「そ、れは」

問えば、少女は視線を彷徨わせて言いよどんだ。言うことができない。それはつまり、イアンの想像と違わない人物から贈られた物ということだ。

ふつり、と苛立ちが湧く。

散々予想外の行動をする側室に対してか、自分の側室に手を出した男に対してか、それとも己の感情を把握できない自分自身に対してか。原因の候補が多すぎて、何が大本であるかはもはや分からなかった。

彼女が他の男と関係を持とうが、支障はない。数週間前、この側室に関わるのをやめた。用済みだと、捨て置いたはずだ。

それなのに――これほどまで、苛立ってしまう。亜麻色の髪を、白磁の肌を、桃色の唇を、水晶の鈴の声を、そして碧の瞳を。彼女の全てを思うがままにしている男がいるのかと思うと、いかに理性で抑えこもうとしても怒りが揺らぐ。

窓の向こうで、男がこの亜麻色の髪を掬い取った時から苛立ちが生じていたことは、事実だった。

風が吹く。雲が流れて、降り注いでいた月光が遮られる。少女の淡く儚い姿が、群青の闇に浸(ひた)された。

ただでさえ華奢で儚げな身体が、夜闇に沈む。イアンは咄嗟に細い手首を掴んだ。彼女が息を呑む。

「……お前は」

イアンは不安げに揺れる碧の瞳を睨むように凝視して、きつく眉根を寄せた。知らず、手首を握る指に力がこもる。辺りに痛いほどの静寂が流れた。

「お前は……俺の、側室(もの)だろう」

ルイリがはっきりと目を瞠った。一体何を言われているのか、分

かっていないようだ。イアンとて、こんなことを口走るつもりはなかった。すぐに訂正しようとしたが、数多の言葉はふいに生じた漣（ささなみ）の奥に消え去っていく。

ただ、目の前にいるはずの彼女が、なぜか夜の闇と共に消滅してしまいそうに思えて。まるでそのまま消えてしまうような錯覚さえ覚え。

どうすれば、繋ぎ止められる。称号だけでは無理なのか。何か証でもつければ、彼女は自分のものだと認められるのか。

例えば――あの夜のように、その唇に触れれば。

指に力を込め、くい、と彼女の顎を上げさせる。碧の瞳に宿る色から恐怖は消えていた。代わりに、痛ましげな表情が浮かんでいる。

膨れ上がる感情に名前はない。苛立ちと衝動に任せて、イアンは白い面（おもて）へ顔を寄せた。

†　†　†　†　†

「――そこまで……」

ざわざわと鳴っていた風が、ぴたりと止んだ。
夜風のような声が、どこからともなく響いた。

「出過ぎた所業は止めてもらおうか、皇太子」

笑みを含んで、それでも剣呑な声音が、夜の静寂を打ち破る。

さぁ、歯車が、絡み合う。

42．自覚なき独占欲（後書き）

ヤツが好き勝手に暴走しました。

うーん、作者もびっくりです（笑）　でもよく考えれば寝込みを襲ったような男だし（語弊）、普通なのかも、と。最近私の中で株が下がっているイアン。いつ名誉挽回してくれるのか……！

そしてあんな書き方をしてしまってすみません……。一応活動報告で、言い訳はしてあります。苦情苦言不平不満クレーム等々、全て受け付けますので、鬱憤の溜まったお方は遠慮なくどうぞ。イアンへの喝でも、大歓迎です（笑）

ここまで読んで下さった方、お気に入り登録をして下さった方、評価して下さった方に、心より感謝申し上げますっ！！

43．　運命の再会　宿命の邂逅

音が聞こえる。正確な音。これを運命と呼ばずして何と呼ぶ。

音が聞こえた。残酷な音。これを宿命と言わずして何と言う。

若い男の声だ。妙に鼓膜に残る。

幻ではないその声を、確かに聴いたと耳が知覚した瞬間、皇太子の身には驚くべきことが起こった。

身体が、全く動かない。動かそうと思っても、動かないのだ。まるで見えない糸で縛りつけられたかのように。背を屈めたままの状態で、時が止められたかのように。

沈黙を不審に思い、亜麻色の少女は翡翠の双眸を恐る恐る覗かせる。少しでも首を動かせば唇が重なりそうなところにまで彼の顔が迫っていて、一瞬で頬が桃色……いや、林檎色に染まった。

さく、さく、と響くのは、軽快に草を踏む音。

「無抵抗の淑女に、何たる真似をするのか……。愚かな行為はご遠慮願いたいものだ」

溜息交じりの声は、足音と共に徐々に近づく。

「まずは、その手を離していただきたい。そうすれば動いてくれて構わない」

流麗な響きを伴い、声がする。紡がれたそれを皇太子が聞き届けると、自分の意志には関係なく右手が動いた。指が、少女の顎から離れる。そうしたや否や、彼の身体はたちまち自由を取り戻した。すぐさま、声のした方へ体勢を整える。

いつの間にそこにいたのか、数歩先のところに一つの人影が佇んでいた。目と鼻の先にいるはずの人影は、月が隠れているせいで全貌が分からない。

「何者だ」

皇太子は厳かに、低く問う。長身である彼と同じほど高いその影は、ひょいと首を傾げた。

「うん？　何者ってこの通り……あぁ、これではいけない。――雲が、邪魔だな」

何のことはない、世間話のように呟かれたその言葉。

瞬間、雲が流れた。

地上では風すら吹いていないのに、頭上の夜空を席巻していた雲が、急激に姿を変えていく。川の流れのように絶え間なく、夜の雲は流れる。それによって隠されていた、半分割れた月が姿を現した。

少女はあっと息を呑んだ。震えそうになる口許を、自分の両手を覆う。視界が潤みそうになった。

一人の青年が、立っていた。

濡れたような月光をその身に浴びて、異国の装束が幻想的に浮かび上がる。微笑みながらも、感情の読めない唇。趣向の凝らした鞣革の仮面が、一種不気味に瞳の色を隠す。

びょう、と強く風が吹く。後ろで束ねられた長髪が煽られ、うなじで括られていた髪紐がほどける。夜風に乗って髪紐はいずこかへ飛んで行った。

月光のもとに煌き、なびく、まるで絹糸の如き長い髪。灰の交じった、薄茶。

――亜麻色。

「おっと失礼。これでは質問に答えたことにはならないか」

年若い風情の男は失念したように、軽い謝罪を口にする。

砂色の袖に包まれた腕を自らの後頭部に回し、しゅっと紐をほどく。洗練された、優雅な動きだった。

ぱさり、と軽い音を立てて、仮面が芝生の上に落ちた。持ち主の目を隠すという役目を終えた仮面は、ただ空虚な二つの穴を空けて地面に転がる。

「初めまして、だな？　シェリングの気高き皇太子」

青年はゆっくりと微笑した。

深い森林のような――あるいは海の底のような碧の双眸を、細め

て。

†　†　†　†　†

身体の内側から熱い想いが湧き上がり、声が漏れそうになる。その時ルイリの身体を支配したのは、紛れもなく『喜び』という感情だった。

数歩先に佇む、月光の作り出した幻のような青年。彼はルイリを見、穏やかにうなずいた。深緑の瞳が柔らかに細まり、唇が弧月を描く。

『喜び』に突き動かされ、ルイリはふらりと足を進めた。先程、どうしても逃れられなかった皇太子の横を、嘘のようにすり抜ける。イアンが動く気配はなかった。

ルイリは夢中で、彼の元へと駆け寄った。逸る感情を抑えながら、長身を見上げる。

彼女の頭一つと半分ほどはある上背。ゆったりとした衣装に隠される、引き締まった体躯。仮面を取り去った顔は、驚くほどに美しかった。天上の光を受けて、繊細で整った顔立ちは更に精巧さを増す。笑う口許がひどく官能的であるのに対して、笑う目許はどこまでも深い慈愛を湛(たた)えている。妖しくも透明、その矛盾すら気になら

ないこの美貌を、ルイリは確かに知っていた。
そっと、異国の装束の袖に触れる。触れることができる。
ルイリのそれよりもなお深い碧の双眸が、優しく微笑んだ。

「待たせたね。――ルゥ」

低く心地の良い声が、鼓膜を震わせる。
ルイリの全身を、電撃が奔り抜けた。瞼の奥で数多の光が閃き、埋もれていたものを呼び覚ます。

ずっと逢いたかった、ずっと想っていた。
夢を見るたびに募っていった想い。けれど覚醒した時には全て霧散する。それは正しく、幻影を追い求めるがごとく。
ひどくもどかしかった。そしてその苦悩を解消してくれたのも、他でもない彼だった。あの夜を境に、ルイリは人知れず幸せを噛み締めていたのだ。

今までずっと傍にいた。そしてここに来てからも、姿が見えずとも傍にいてくれた。
いつしか、それが心の拠り処になっていた。

衣を掴む。確かに在る。幻では、ない。
夢の中でいつもルイリを包み込んでくれた温もりが、眼前に。

視界が大きく歪んだ。月光を背にしながら、それでも分かる優しい微笑を目の当たりにしてしまえば、堪えられない。大きく包容力のある腕にしがみついて、ルイリは声を絞り出した。

彼を忘れていいわけがない。名を違えるわけもない。
だって彼は。

「……ヴィン、兄様っ……！」

だって彼は、唯一の肉親なのだから。

†　†　†　†　†

――ヴィン兄様

彼女は確かにそう言った。

イアンは目を瞠り、ついで周囲の茂みに潜む存在（モノ）に神経を配った。

「まだだ――オルク、まだ手を出すな。俺の指示があるまで、大人しくしていろ」

茂みの向こうから今にも飛びかからん勢いの気配を察知して、イアンは強く命じる。ほとんど口中で呟くようにして、それでも後ろには聞こえるように。周囲を網羅しようとしていた細かな針のような空気が、少しばかり緩んだ。

「鎮めてくれてありがとう。さしもの私も、忠義を尽くす獣を抑える術は持っていないからね」

朗らかな声音に視線を戻せば、深緑の瞳はまっすぐにイアンを見ている。薄い唇に浮かぶのは、往来の友人に会ったかのような親しげな笑み。だがそれが口許だけのものであるということは、イアンも重々承知していた。

獣――蔑称のように思えて的を射た呼称に、やはり警戒を解くことはできない。

「……何者だ」

依然声を低くしたまま、イアンは再度問う。

亜麻色の髪と深緑の瞳を持った男は、口端をますます吊り上げた。浮かぶのは、嘲りか落胆か。

「今、紹介されたばかりだろう？　その耳は飾りかい、皇太子」

挑発はあからさますぎて、乗る気にもならなかった。

「……真実、お前の兄なのか？」

それは、男にではなく、側室の少女へと向けられた質問。彼女もそれを的確に受け取り、ぎこちなく首肯した。その表情はひどくば

つが悪そうである。感極まって、イアンの存在を忘れていた、とでも言いたげだ。

事態が突拍子もなさすぎて、もはや驚愕も不審も感じない。確かに容姿だけを見れば疑いようがないが、なぜここにいるのか全く理解不能だ。

イアンは微かな諦めと共に息を吐き出すと、手を剣の柄からゆっくりと離す。男は満足そうにうなずいた。

「賢明な判断だ。美しき花々が咲く後宮に、花の赤は似合えども血の赤は似合わない」

本心か否か、吟遊詩人でも言わなさそうな陳腐な台詞を易々と紡ぐ。そして、先程自分が落とした鞣革の仮面を拾い上げた。血の気が通っていないように青白い手が、表面の砂埃を叩いて払う。

「殿下……あ、あの、」

鈴の音が、弱く響いた。イアンが胡乱に視線を向ければ、碧の瞳は困ったように揺れている。大方、ついさっきの醜態を謝罪しようと思っているのだろう。今更思い当たったところで何だというのだ、とイアンは思うが、口にするのは面倒くさい。彼女はうろたえた素振りを見せながらも、男の傍を離れようとはしなかった。

何度もつかえて、それでも何か言おうとする少女を、同じ髪と瞳の色を持つ男はやんわりと遮る。

「お前は何も謝らなくていいよ、ルゥ。それよりも私は、先程の行為について皇太子に釈明を求めたいのだが……どうやらここでは無理そうだ」

ぽつりと呟いて、男は背後に深緑の視線を送った。
ばたばたと、慌ただしい足音がしてきたのはその直後である。

「ルイリ様！　……あぁ、ようやく見つかった！」
「お怪我はありませんか！？」

夜空の髪色を持つ、正式な侍女服を身に纏った女が姿を現した。
藤色の瞳は焦りに彩られていて、隙なく結い上げられた髪もところどころほつれている。彼女の後ろから、鴇色の髪をした小柄な少女も見受けられる。

「あ、あなた……！？」

女、リーファは、仮面を手に持つ男を見て絶句する。しかし、表情は一瞬の内に厳しいものになった。

「姫様をお放しなさいっ。今度こそ本当に騎士団を……」
「フィレル女官、お、落ち着いて下さい！」
「セシーヌは黙っていなさい！　怪しいと思っていたのよ、やはりあの時手を打っておけば……！」
「ま、待ってリーファ！　この人は、そんな人じゃ」
「何を仰います！？　では、姫様の背に添えられているその手は何だというのです！」
「えっと、それは」

厳しく追及されて言葉を探すルイリ。追い討ちをかけようとしたリーファを止めるように、更なる闖入者（ちんにゅうしゃ）の声が追加される。

「あーっと……これ、どういう状況？」

いつの間に来ていたのか、イアンの背後には褐色の側近が後頭部を掻きながら立っていた。イアンを探しに来たのだろう。何度か【声】を送られていたが、彼はそれを全て黙殺していた。

皇太子は立ち尽くし、側室の少女は異国の衣装を纏った男の腕に抱かれ、侍女二人は敵対心剥き出しで男を睨んでいる……。第三者の立場から見れば、さぞ不可解な光景だったことだろう。

空気が凍てつきそうになった状況を打開したのは、渦中の男だった。

「ひとまず、場所を変えないか？　女性方をこれ以上夜の外気に晒すのは、気が引けるのでね」

†　†　†　†　†

室内には月光が満ちている。

何もかもを漂白するような光の中、一組の男女が寝台（ベッド）の横で静かに佇む。男の大きな両手は、女の白い頬を挟んでいた。窓からの月光で長く伸びた影は、一つに重なる。

彼らは俯き加減に目を閉じ、お互いの額を合わせていた。二人の髪は、全く同じ色彩。極上の絹糸を思わせる亜麻色。彼らは瞳の色も同じなのだが、閉じられた瞼によって見えない。

しばらくその体勢のままでいた二つの影。やがて、男の方がゆっくりと目を開いた。持ち上げられた瞼の奥から、鬱蒼とした森のような深緑が現れた。

「また綺麗になったね、ルゥ。見ていない期間は短かったのだが」

涼しげな風のように囁くと、女――いや、少女も瞼を押し開ける。海の底を映した碧が覗く。桜色の唇が、小さくほころんだ。

「ヴィン兄様は相変わらず、お世辞が上手ね」

「これは、何ともつれないお言葉だ」

男はおどけた様子で首を縮める。少女はくすっと笑った。だが、花のような笑いはすぐになりをひそめ、真剣味を帯びた表情に取って替わる。柔らかい布地の袖を、そっと摘んだ。

「会えたのは嬉しいんだけど……どうして、兄様がここに？　こんな芸人の格好をしてまで」

「似合わないかい？」

「いいえ、似合うわ。……話をはぐらかさないで」

いつの間にか話題を転換しようとする青年に、少女は頬を膨らませて釘を刺す。彼は淡く苦笑した。

「得意のはぐらかしも、お前相手には通用しないね。……質問の回答だが、疲労困憊（こんぱい）のお前に話すのも気が引ける。明日、また改めて話すことにするよ」

「明日……明日も、兄様はいるの？」

少女は不安げに瞳を揺らした。安心させるように、年若い男は深くうなずく。

「もちろんだ。私は今、フローラ一座の厄介になっているからね。彼らがいる限り、私はいる」

「私、兄様に会ったら……聞きたいことがあったの」

「分かっているさ。だからここに来た。……だが今宵はもう、お休み」

白貝のような耳元で吹き込むように囁くと、碧の双眸は眠たげに細まり、袖を掴んでいた手から力が抜けた。

「たくさん、聞きたいことも……話したい、ことも……ある……の……」

「あぁ、たくさん聞こう。たくさん話そう。それは明日の話だ。疲れているだろう、もう眠りなさい。誰にも邪魔されない、深い眠りへと」

男が眠りを促すたびに、少女の瞼は落ちていく。再会の喜びに輝いていた瞳は、睫毛の影に隠される。男は亜麻色の細く柔らかい前髪を掻き分け、ほの白い額に口付けた。

「おやすみルゥ、良い夢を御覧」

それを合図に、少女の全身から力がふぅっと抜けた。音もなく胸にくずおれてきた肢体を難なく受けとめ、そっと寝台の上へ寝かせる。

「さて」と息を吐いてから、男は扉の方へ声をかけた。

「時間を拝借してしまって申し訳ない。どうぞ、紺青の侍女殿」

それを聞き届け、扉から夜色の髪を持った侍女がするりと現れる。
男は首を傾げた。

「おや……薄紅の侍女殿は？」

「セシーヌなら、先に休ませましたわ。今夜は彼女も疲れたでしょうから」

「なるほど、違いない」

男がうなずくと、長く垂らした亜麻色の髪が夜闇に光る。侍女は眠る少女へ歩み寄り、張り詰めた表情を崩さないままその寝顔を覗きこんだ。月光に晒されなくとも青白い顔を見て、痛ましく顔を歪める。

「よほど、お疲れになったのでございますね」

侍女は、少女の首元までを隠すように毛布をかける。男はそれを見守りながら、再度扉へと視線を向けて来た。

「君も入ればいい、皇太子。ルゥは当分起きないよ」

見透かされたようにそう言われた。これ以上隠れる必要もないと判断し、イアンは無言で部屋へ入る。
イアンの入室を音で聞き取ったリーファは、黙然と振り返った。

「何があったのかは、あえてお聞きしませんわ……殿下」

不敬に取られても仕方がないほど鋭い眼光で、リーファの藤色の瞳は静かに燃えている。凡人ならば身震いしそうな視線だが、イアンはそれを受け止め、面倒くさげに息を吐いた。

「何もないと、言っているだろう」
「まぁ、何をしらばっくれておいでです。あの状況下で何もないと考えるほうが、おかしいとはお思いになりませんか？」
「その点ならご心配なく、紺青の侍女殿。私が阻止しておいたから」
軽やかな声に、リーファとイアン、同時に声の主へと首が向けられる。寝台の向こう側、窓際にもたれて、男は月光の恩恵を受けたかのように冴えきった微笑を浮かべた。
だが未だに、リーファの薄い紫の瞳は冷え冷えとした光を浮かべている。
「勘違いなさらないで下さいませね、仮面のお方？　私は貴方を信用したわけではありませんゆえ。兄君という立場から考えても、暴挙が過ぎますわ。原則として殿方禁制の側室様の部屋にずかずかと乗り込み、あまつさえ、ルイリ様と二人きりにしてくれなどと……。本当のご兄妹（きょうだい）であるかも定かではございませんのに。ご本人の説得がなければ、今すぐにでもこの部屋から叩き出しているところですわ」
「それは怖い。では私は、ルゥに心からの感謝を捧げねばね」
男は、淀みない苦言を難なくやり過ごし、寝台で眠る少女を愛しげに見つめた。深い緑には、親愛の情が溢れている。イアンは片目を細めた。
あの後、文句を言い続けるリーファを軽くいなしながら、この男はルイリをここまで連れて来た。
彼女ならば自分達が部屋へ連れて行くから、ここは任せてくれ―

―つまりは、彼女を放してさっさとどこかへ行けと言うリーファに対して、彼は悪びれる風もなく言った。

――私はこの子の兄だ。兄が妹の部屋へ付き添うのは、何かおかしいことかな？

脈絡もない無茶な持論を展開してリーファとセシーヌが唖然としている間に、ここへ辿り着いたのである。

その後、衣装（ドレス）から夜着に着替えた頃合いを見計って、二人にさせてほしいと申し出たという。もちろんリーファは猛反発したが、結局はルイリ本人から頼まれて引き下がったらしい。

らしい、と言うのは、イアンは丁度その時、勝手に夜会を抜け出したことについてレンから懇々と説教されていたからだ。もちろん、ゼストとヴェルガに招待客の接待を任せた上で抜け出してきたのだが、共もつけずに一人で出歩くとは何事かと憤られた。あの男が命を狙ってくる逆賊だったらどうしたつもりだ、オルクが寸でのところで駆けつけたからいいものの、もう少し自分の立場の重要性を自覚しろと。

もちろんそれを真に受けて反省するはずもなく、イアンはさも当然とばかりに側室の部屋へ赴いた。

そして、今に至る。

「……それでは、ほんの一時だけ、貴方を信用することに致しましょう」

回想へ意識を飛ばしていたイアンを引き戻したのは、諦めたようなリーファの声だった。

「一度ならず二度までも、いや夕刻を含めれば三度目か？　この上ない慈悲深い御心に、感激のあまり言葉も出ない。どうお礼を言い尽くせば良いのか」

「前後のお言葉が矛盾していますわよ？」

「失礼。話が終了すれば、私はすぐに退散する。むろん、ルゥも起こさない。それでよろしいか？」

「えぇ、ルイリ様に危害が及ばないのならば」

「この命と、天上に輝く月に誓って」

「……不誠実なお方でございますのね」

侍女は深く息を吐き出し、それでも優雅に腰を折って退室した。

イアンはそれを目線で追ってから、思考を巡らせる。会話の内容から察するに、男はまたしてもリーファに下がるよう頼み込んだようだが……。

「廊下では、扉の近衛などが聞く可能性がある。人払いをしたとしても、異能者がごまんといる皇宮では完璧とは言えまい。室内の方が、断絶もしやすい」

話の前後が掴めていないイアンを見かねてか、それとも単なる独り言か。男は寝台を取り囲む天幕を下ろしてから、イアンの方へ歩み寄ってきた。

「とりあえず自己紹介をしよう。私はヴィンス。ヴィンス＝レティシア。紛れもなく、君の側室、ルイリ＝レティシアの兄だ」

「……ヴィンス？」

確か、彼女は彼のことを『ヴィン兄様』と呼んでいなかったか。数週前にこの寝台へ彼女を押し倒した時だって、『ヴィン』と呼んでいたはずだ。

イアンの疑問を汲み取ったのか、ヴィンスと名乗った男は「あぁ」と声を上げた。

「ヴィンとは、妹（ルゥ）だけが呼ぶ愛称のようなもの。私が、ルゥと呼ぶのと同様。私の名前は、ヴィンスだよ」

念を押すような言葉に、何か裏を感じる。しかしにこりと笑んだその顔は、それ以上の追及を阻む。イアンは斜（はす）に構えた。

「……イアン＝シェリング。知っているとは思うが、シェリング皇国の第三皇子であり皇太子だ」

「ご丁寧な自己紹介をありがとう」

目の前の青年は、イアンがどれほど貴い存在なのか認識したにも関わらず、口調を変えることはない。

「初めまして、イアン皇太子殿下。噂は城下で聞いてきたよ。次期賢帝、怜悧の代名詞。博学ながらも卓越した剣術。少し耳を傾けただけでも、驚くほどの支持率だ。幸か不幸か、国民は君がその階位に就いていることを、疑問に思っていないようだね。たとえ正式な名を言わぬ男であろうとも」

「……」

滔々と紡がれる言葉を聞き流しながら、イアンは目許に険しさを滲ませた。腕を組み、あえて不遜な態度で口を開く。

「いくつか質問がある」
「何なりと」
「貴殿は異能者だろう？　ならばなぜこの時期に皇宮（ここ）へ来た。もっと早くにも来れていただろう。彼女の兄というのなら、尚更。一体、何が目的だ」
男は深淵の森のような瞳を瞬かせた。
「貴公、ではなく、貴殿、か。……なるほど？　天下の皇太子殿下は、随分とご立派な性格をなさっているようだ」
すぐに回答を返すつもりはないらしく、どうでもいい部分に反応してくる。ご立派な性格はどちらだ、と心中で切り返し、溜息を喉元で抑えこんだ。
「いかにも、私はれっきとした異能者。能力（ちから）の内容については、追々説明しよう。あるいは君ほど有能な人間なら、ある程度の察しはついているかもしれないが」
何もかもを見透かしたように、男は笑う。
空気を吸うように、言葉を扱う。言葉で遊ぶ。
「時期の答えは、長くなりそうだからここでは控えておこう。何が目的か、と言ったな？　簡単なことだ、人に会いに来た」
「人？　……妹にか？」
「まさか。言ってはなんだが、ルゥに会おうと思えばいつでも逢える。わざわざクアレ・ローディン（こんなところ）にまで足を運んだりしないさ」
いっそ傲慢なほどふてぶてしい微笑を浮かべながら、すいと長い指をイアンに向ける。無作法だと咎めるものは、誰もいない。

「私はね、君に会いに来たんだよ」
「……何だと？」
「いや、……正確には、少し違うな」

自身で言った言葉に納得がいかないように首を傾げ、ヴィンスは顎に手を当てる。しばらく思案顔をしてから、黙然とイアンを凝視する。そこでイアンは気づいた。深緑の瞳は確かに彼女と似ているが、全く同じわけではない。彼の双眸が方が深く暗く、表情を読み取るのが難しい。ゆえに唇に浮かぶ表情が多彩なのだろうか。

彼の唇が動いた。やけに遅い気がした。

「――其の気を纏いし者、世界を暁へ導く誇り高き皇帝」

妙に空気を震わせる言葉に、思わず瞠目した。同時に、頭の中で妙に納得する自分がいることを自覚する。

そうか。
やはり、来たか、と。

深緑の双眸が細められ、唇に妖艶な笑みが浮かぶ。

「ようやく会うことができたな。……＜暁の皇帝＞」

音を聞いていた。錯覚と思い過ごすには確か過ぎる音を。

ようやく気づく。あれは、歯車の回る音なのだと。

再会は運命を紡ぎ出し、邂逅は宿命を呼び覚ます。

回れ、廻れ、歯車よ。

止まることさえ叶わぬならば、いっそ止まることなど忘れてしまえ。

43．　運命の再会　宿命の邂逅（後書き）

更新できましたー！　今回は、後書きを長めに。面倒な人は［戻る］もしくは［クリア］ボタンクリック推奨です。

さて。色々とてんこもりだった今回で、『幻想曲（ファンタジア）』も終了致しました！　中途半端な気もしますが、今まで『幻』のようだった彼が登場した時点で終了、というのは当初から決めていたことですので。

というわけで。５１部目にして、ようやく登場、兄・ヴィンス。あぁ長かった。ようやく名前を言える。作者がここまで思っていますから、読者の皆々様はその倍以上……ですよね。すみません！！　読者様の「引き伸ばしすぎだろドアホ！」というお怒りの声が聞こえてきそう……。いや私自身、最初から改稿したい部分ばかりです。

今までロクに出てこれなかった分、初っ端から飛ばされました。まるで後ろに乗り移られたように書いていって、気づいたら文字数が恐ろしいことに……。けれど、この男の威力はこんなものじゃないです。確信があります。……頑張れ、イアン。ともあれ、これでやっと主要人物が出揃った……と思います。

レンのお説教のシーン、一旦書いたものの、文字数削減のためカット（笑）　ゴメンねレン。気が向いたら、活動報告とかに載せるかもしれません。

ここまで読んで下さった方、もったいなくもお気に入り登録までなさって下さった方、本当にありがとうございます！　いつもいつも拝んでおりますー！

４４．　胎動（前書き）

新章開始です！　とは言っても短いですが……。
諧謔曲（スケルツォ）、とお読みくださいませ。

※都合上、蛇足補足は次話のあとがきに掲載致します。ご了承ください。

44. 胎動

白い闇は、安寧とした時間を過ごしていた。
自分で作りだした心地の良い空間に漂いながら、ただ穏やかに揺れていた。

……はず、だった。

ある時。
闇は、不穏に蠢(うごめ)く。

――何だ？

それは抽象的な感覚。
何かが起こった、何かが現れた、その程度しかない曖昧な感覚。

しかし。

それの正体に気づいた時、純白の闇は一気に気色(けしき)ばむ。
ざわり、ざわりと、普段微動だにしない純白の輪郭が歪んだ。安定していた空間が、少しずつ揺らいでいく。

――……あぁ！

――おのれっ……

感情の制御ができない。渦巻く思いが溢れそうになる。

何て、何て、何て何て何て何て。

何て、憎らしい。

――お前は、またも、邪魔をするのか……！

忌々しい敵。目障りな障壁。

闇が求めているものに対して伸ばす手を、愚かにも阻まんとするもの。

――……ふん

だが白い闇は、勝ち誇ったように鼻を鳴らした。

――所詮は、一匹の羽虫

うるさく飛び回るのは鬱陶しいが、たかが一匹が騒いだとして何の支障を来すだろう。

――せいぜい、足掻くがいい……無能な道化

誰にも邪魔はさせない。
長い間秘めてきた悲願は、すぐそこに迫っているのだから。

そこを一言で言うならば、混沌（こんとん）。

明暗の区別もつかず、暖気と寒気が入り交じり、雑然とでもいうべき雰囲気が醸されている。
平衡感覚も五感も鈍る不可思議な空間の中、彼女は己の指を組んでただ祈っていた。

首筋から肩口、そして腰元までまっすぐに流れる絹糸のような髪。
俯く、生気のない青白い面差し。二つの瞳の色は、瞼を閉じているのでうかがい知ることはできない。

どれほどそうしていたのか。
何の前触れもなく、彼女は唐突に目を見開き、顔を上げた。果てのない澱んだ上空を仰いで、ほうと息を吐き出す。

『あぁ、良かった……』

心底安堵した声が、形良い唇からほろりと零れる。ただしそれは鼓膜を震わせるような、直接的な音ではない。実際、彼女の発した声は音とならず、空間に響かない。だが認識できる。どちらかと言えば、脳内に波紋を作りだす音波のようだ。

『彼は間に合ったのね、ぎりぎりのところで』

ひとまずは安心というべきなのだろうか……いや、そのような悠長なことも言っていられまい。
今回のことで、またあれは激怒をし、行動を速めるかもしれない。

『……それでも』

彼女はゆっくりと瞳を伏せる。去来するのは、水晶の鈴の声を持ち、彼女の全てを継いだ儚い少女。

会ったのは片手の指で足りる程度だ。だがそれでも、分かる。
誰よりも清廉で穢れない魂と、華奢な身体に秘められている確かな強さを。

『あなたはまだ……何も知らなくていいわ』

運命は変えられない。宿命は避けられない。
それらはきっと、現在(いま)を生きる彼らに、残酷な判断を迫る。時に

絶望に酷似したものを。

だが。

大丈夫、あの子は一人ではない。誰よりも強力な味方である彼がいる。

何より――あの人の子孫がいる。

自分と同じ轍を、踏ませるわけにはいかないのだ。

『だから、だからね……』

優しく可愛く、何よりも大事な歌姫。

今はただ――。

――┼――┼――┼――┼――┼――┼――

噛み合う歯車の数だけ、絡み合う思惑。

創造主は、ほんの一時の暇つぶしに興を向ける。

暇つぶしたる諧謔曲（スケルツォ）を演ずるために、舞台へ新たに躍り出るは。

果たして役者か。
それとも道化か。

虚無の平穏に身を委ね、虚偽の微笑を浮かべ続けていた彼の者の、
仮面が砕ける時――

永らく止まっていた開演の音が、静かに響き始める。

45. 祭典、二日目

夢を見るのは怖かった。
特に最近は、訳の分からない映像や、誰のものとも知れない甘美な声が、目が覚めるまで絶えず視覚と聴覚を支配していたから。

けれど今、ルイリは穏やかで温かい声に揺られていた。何者かは分からないのに、あの声とは違う絶対的な安堵が、全身を包み込んでくれる。
久しく感じることのなかった母性のようなものが言葉の端々に滲んでいて、涙が溢れそうになる。

声は言う。

可愛い子。
何よりも尊いものに愛された、清らかな子。私達の愛し子(めぐご)よ。

運命があなたを求め、宿命があなたを欲する時は近い。
この先、あなたには幾多の困難や苦悩が待ち受けているでしょう。
そしてその分、たくさんの希望も待っているはず。

だけどね。まだ、それを知らなくていいの。
この言葉のことも、覚えていなくていいの。

あなたが全てを理解し、全てを受け入れるには、きっと時間がか

かると思うから。

だから、だからね……可愛い歌姫。

せめてこの時は、安らかに眠っていて。

今はただ、誰にも邪魔されずに、眠ればいいわ――。

暁夜祭（ぎょうやさい）の二日目は、初日と比べれば随分自由だ。

格式ばった式典もなければ、出席が強制されるような宴、夜会もこれといってない。招待客や後宮の姫君は、皇宮内（クアレ・ローディン）の各所で催される娯楽を好きに回ることができる。大道芸人の演劇しかり、吟遊詩人の音楽会しかり。殿方は皇宮の森林園で狩りに興じることも可能だ。

とは言っても。これらの催しは、ほぼ外交や協和を深めるために利用されている。

つまり、自由に回っていいというのは建前で、どの立場の人間がどの催しへ行くかというのはほとんど決まってしまっているのだ。

それは皇族の人間がどこに分布しているかで決められることが多い。たとえば、各国の王族や要人は皇帝や皇子達のもとへ行き、他

国の王妃や貴族夫人は皇后のもとへ行く。芸人一座や音楽隊は財力を持つ貴族、姫君の開いた会に赴く。何年もの間にできあがってしまった慣例のようなものである。

（高貴な方々も、大変だなぁ……。確かに人付き合いとかは、普通の生活よりも厄介よね）

セシーヌ＝ラグスローはのんびりと考えた。自分も子爵家の令嬢であることは棚に上げておいて。

上を見上げて青い空を眩しく眺める。今日は朝から気温が高く、天気もいい。二日目は野外の催しものも多いから、旅芸人達にとっては大助かりだろう。空気も綺麗だ。

そして今現在、彼女は自分の身分よりも棚に上げて――いや、見ぬふりをしようとしているものがある。

春の爽やかな午前中。桃香宮の屋外に設けられた少し小規模なお茶会のための庭園。いつも占領する側室の姫君は、全員吟遊詩人の音楽会で出払っている。女性のために作られた庭の植え込みや花は春の日差しを受けて美しく、白を基調としたポット等の調度品も今回の祭典のために新調したもの。

その何もかもが新鮮でいきいきとした春の光景の中。

セシーヌの傍にいる二人は、全くそれにそぐわない雰囲気を全面に押し出していた。

「あ、あの、……リーファ」

「何でございましょう、ルイリ様？」

はじめの声はまるで蚊が鳴くように弱々しく、次の声は今の青空

のように清々しい。

「えっと、その……ご、ごめんなさい」

「まぁ。なぜ謝罪をなさるのですか？」

にこにこと。

一点の曇りもない口調で、声の主――セシーヌの先輩であるリーファ＝フィレルは、滑らかに言葉を紡ぎ出していく。藤色の瞳は優しく細まり、口許も形よく引き上げられている。それは正しく女神の微笑。穏やかで、清々しくて、優しい……はずなのに。

それなのに、どうして彼女からはこんなにも怖い空気が醸し出されているのだろう？

「な、なぜってそれは……。ゆ、ゆうべ……勝手に飛び出して、心配させてしまったから……」

歯切れ悪く、ほとんど口中で呟くように唇を動かす声の主は、思わず溜息をつきそうなほど儚げで清楚な美少女。くせのない艶めいた亜麻色の髪と深海のような碧の瞳を持ち、常々薄桃の唇に浮かぶ微笑は周りを和ませる。

彼女こそ、セシーヌの自慢の主であるルイリ＝レティシア。

しかし、今の彼女はまさしく、肉食獣に追い詰められる小動物のように縮こまっている。見ているこちらが憐れみを覚えた。

リーファと目が合った瞬間の彼女といったら、どうだろう。肩を跳ね上げ、即座に視線を逸らす有様。ルイリの全身を流れる冷や汗が見えてきそうになる。

「心配……えぇ、心配。そうですわね」

にこり。更にリーファの笑みが深まった。
その瞬間、空間にぴしりと亀裂が入った音を、セシーヌは確かに聞いた。

「ルイリ様のお姿が見えなくなった瞬間、目の前が真っ暗になり、頭の中で最悪の想定がいくつもかけ巡り、そうしている間にもルイリ様に何かあるのではと気が気ではなく、考えるほどに手足は震え、もはや自害をして詫びるしかないと思い……。あの時の私の感情を心配というのならば、そうなのでしょう」

晴れ空のような笑顔のまま、しかし声は低くなっている気がする。
そして、季節は春だというのになぜだか肌寒い。

止めても無駄だ。
セシーヌがそう思った瞬間、リーファの口火は切って落とされた。

「昨夜の炎を見た時から、ルイリ様のご様子がおかしいのは分かっておりましたわ。そこで確信できなかったのは私の落ち度ですけれど。ルイリ様、私は申し上げておりますよね？　何かあれば遠慮せずに私共に言え、と。ああいった時は、いかなことがあっても私共に一声かけるべきだったとは、分かっておりますね？」
「わ、分かってる……わ」
「まぁ、あの尋常でない様子からして、強要するのは酷だったかもしれませんが……。私が申し上げていたもう一つのことは、覚えていらっしゃいますか？」

覚えているか、と聞いているにも関わらず、言わねばならない口調である。ルイリは依然としてリーファと視線を合わさないまま、小さく呟く。

「……どんな非常時でも、決して一人で出歩いてはならない」
「その通り」
ひらりと指をひらめかせて、リーファはまるで教え子にするように微笑んで見せた。……逆だ、立場が逆だ。
「ましてや夜道は、どんなオオカ……危険が潜んでいるやら。実際、あと少し遅ければ、取り返しのつかないことになっていたかもしれませんのに。どれほど理不尽な襲撃を受けたとしても、そちらが無防備だった、の一言で済まされてしまうのですよ？　あれでは、ルイリ様自ら危険な罠に歩んでいったも同然。何があっても文句が言える立場ではなくなってしまいますわ。女性が一人で夜闇の中をふらつくなんて、獣達にとっては目の前に餌をぶら下げられているようなものなのですから……」
「け、獣……！？」
息もつかせぬ言葉の羅列に、セシーヌまで息苦しくなりそうだ。
それを律儀にもうなずきながら聞いていたルイリが、最後の言葉の部分でぎょっと瞠目した。
「そんな危ないもの、皇宮には入れないでしょう？」
さりげなく聞き耳を立てていたセシーヌは、思わぬ反論に力が抜けかけた。
リーファの言った獣は、確かに危ない。特に女性にとっては。だが、ルイリの口調は、あからさまに獣（おとこ）への反応ではなく。
（『獣』の意味を……そのまま直球に受け取るなんて！）
この主は、自分達が思っている以上にそちらの知識がないのかも

しれない……それは推測から確信へ変わろうとしていた。

先輩侍女もしばらくの間絶句していたが、すぐにこめかみの辺りを指で揉み、眦を決する。しかしそれは先程よりも威圧感がない。ルイリの発言で、毒気が抜かれてしまったのだろう。

「……分からないのであれば、それもいいですけれど。ルイリ様は自覚がなさすぎるのですわ。もっとご自分が魅力的であることを分かっていただきませんと」

それは同意、とセシーヌは心中でうなずく。セシーヌとてルイリの笑顔は大好きだが、異性がそれをもろに喰らってしまえば、誤解することもあるだろう。

皇宮の男性達――つまり皇族は総じて惚れやすく、浮気性だ（セシーヌの過分な偏見が入ってはいるが）。遥か遠くから見た女性に恋心を抱き、身元を割り出し、強硬手段に乗り出す者達も少なくない。だからセシーヌは不安だった。彼女にそのようなことがあればどうしようと。

だが、ルイリが後宮に来て一ヶ月、その心配は杞憂だと分かった。全くと言っていいほど、男性との触れ合いがなかったからだ。

二、三度、そういった接触をしようとした人はいたが……あの方は書類上、ルイリの夫なわけで。彼がいざその気になれば、誰も文句を言えない。

これほどに男との接触がないことが不思議なくらいだ。他の姫君達ならそうはいかない。

実は、その裏ではとある人物の涙ぐましい奮闘が隠されているのだが、セシーヌは知る由もない。

そんな中、ルイリは突然己にくだされた評価に戸惑っているよう

だった。

「魅力的って、私はそんな……」

「謙虚な部分は美点と言えますが、これはお世辞ではなく警告でしてよ。まずはうなずくところから始めてくださいませ」

「え……えぇ」

こくりとうなずいた主だが、未だ認めてはいないらしい。その後、徐々に自分のしてきたことを思い出したのか、悄然と眉尻を下げていく。

「……迷惑かけて、本当にごめんなさい」

しおしおとうなだれるルイリを見て、リーファもやりすぎたと感じたのかもしれない。少し浅い息を吐いて、口を開く。セシーヌは目を瞬かせた。

藤色の瞳に宿るのは咎めるような色ではなく、心底安堵した色。心配であるがゆえ、大事であるがゆえに、これほどきつく言っているのだ。主もそれは分かっているのだろう。

「何より、ご無事でようございました。見失った時は、自害も覚悟いたしましたが……その点は、あの方に感謝をすべきなのやもしれませんね」

「礼を言われるほどでもない。兄が妹を命がけで守るのは、当然のことだ」

至極爽やかな声音が、辺りに立ち込めていた薄暗い空気を一蹴した。

落ち着いた男性のそれは、若葉を揺らす緑風（りょくふう）のように心地よい。深くうなだれていたルイリが、途端に顔を跳ね上げた。声のした方向へ視線を向けると、唇がほころび、白い頬に赤味が差す。まるで、一瞬にして花が咲いたかのように。

声は続ける。

「それから……昨夜の件を責めるのはそこまでにしてくれまいか、紺青の侍女殿？　一切の咎めは私が受けよう」

それを聞いたリーファの顔は、たちまち厳しく険しいものに様変わりしていく。

「盗み聞きをしておられたの？　紳士のすることとは思えませんわ」

ついさっき、ルイリを叱責する時よりも数倍鋭く尖った声音で、リーファは背後の植え込みの向こうに話しかけた。

「失礼。だが広い庭園を迷ってしまった時、妖精のように美しい女性方の声が聞こえれば、男はそれが出口へと導いてくれる救いの女神の声かもしれぬと……愚かな幻想を抱いてしまうものですよ」

穏やかで流麗な声。侍女の冷たい咎めを気にも留めず、芝生を踏み鳴らし、彼の人は姿を現す。

（わ、わぁ……っ）

そうして現れた長身の姿に、セシーヌは心の中で感嘆の声を上げた。

二十四、五程度の年若い男性。長身痩躯（そうく）を隙なく包む異国の装束に、陽光を受けて煌く亜麻色の長髪。一目で整った顔立ちと分かるが、目許は凝ったつくりの仮面で覆い隠されていた（昨夜とは違った代物だった）。しかしそれは、不気味というよりも神秘的な印象が強い。端整な唇が形作る三日月を見てしまっては、誰しもが素顔を見たいと思ってしまうに違いない。男性にしては華奢に見えるが、広い肩幅は安心感を漂わせる。

「ヴィン兄様」

透明な鈴の声が、いつになく弾む。セシーヌは横目でちらりと主を盗み見た。碧の瞳は喜色に輝き、頬は薔薇色に染まっている。今すぐにでも駈け寄りたそうな勢いだが、リーファの手前、自制しているようだ。

先輩侍女の吹雪のような視線など臆することもなく、むしろ大胆にこちらまで近づいてくる。

仮面の青年は微笑んだ。

「愛しの妹に呼ばれてしまえば、応えるほかないね」

紺の布で作られた手甲（てっこう）をはめた手が上に持ち上がり、長い指が己の後頭部にある留め紐を引いた。

ぱらりと紐がほどけ、青年はもう一方の手で落ちかけた仮面を受け止める。

「……」

数年前から皇宮で仕えているセシーヌは、言ってはなんだが美形に見慣れている。

遠目から見る皇子殿下の方々は揃いも揃って美形揃いであるし、なぜか侍従の人々も顔立ちが整っている者が多い。麻痺と言っては表現がおかしい気もするが、本当にそうなのだ。多少端整な顔の人間を見ても、悲しいかな、さして感動を覚えなくなってしまった。

が――そういった感覚を持つと自負するセシーヌでさえ、しばし言葉を忘れた。昨夜、一度見たにも関わらず、だ。

目鼻を覆う鮮やかな障壁が本人の手によって取り払われ、そうして白日の下に晒された彼の素顔。

白皙の美貌。一言で言えばそれに尽きる。

だが、その整い方を一言で言い表せようか？　人形のように整った繊細さの中に潜む、確かな精悍さ。すっと通った鼻梁。見つめられれば捕らわれそうに深く濃い、森林のような深緑の瞳。月下で見た妖しげな雰囲気は、日光の下でも変わらないらしい。細められた瞳も微笑む口許も、全ての女性を虜にするがごとく甘い。

人間離れ――咄嗟に、その言葉が頭に浮かんだ。

「やぁ、ルゥ。並びに麗しき侍女のお二方。願わくば貴女方の慎ましいお喋りの輪に、私も仲間入りしたい……と思っているのだが、どうだろうか？」

季節を先取りした、初夏の風のような囁きを唇に乗せて。

主（ルイリ）の兄と名乗る彼、ヴィンス＝レティシアは、涼やかな微笑を浮かべた。

45．　祭典、二日目（後書き）

新章開始致しました！　初っ端から、二話更新です（笑）

さて。ひとまず危ないことをしでかしたルイリには、正しくリーファのお説教が入ったので、私も一息つきました。文章のぐだぐだぶりは、もう何も言わないでください。

次話は会話文が多くなるかな……？　と推測中。春休み中に、もう一度くらいは更新したいなぁ、と思っております。

ここまでお読みくださった方、もったいなくもお気に入り登録までなさってくださった方、ありがとうございます……っ！

蛇足補足。

諧謔曲……多楽章作品中の一楽章に用いられる急速な三拍子の軽快な楽曲。明朗・軽快で調子の速い曲。イタリア語で「諧謔」の意。原義は「たわむれ、冗談」。スケルツォ。

46. 油断ならない男

断る、と言えば大人しく引き下がるのだろうか。

（その前にルイリ様がお許しになるわね）

リーファがそう思った矢先、隣で屋外用の座椅子に腰掛ける主は嬉しそうに微笑んでうなずいた。

「もちろんよ、ヴィン兄様。あ……リーファとセシーヌは、いい？」

否定されることを恐れる様子で、ルイリはリーファとセシーヌを交互に見やる。セシーヌがちらりとこちらに視線を投げてきた。琥珀の双眸が苦笑を浮かべている。リーファも思わず苦笑した。

普通、正妃や側室が侍女に意見を求めることはない。求めるとしたらせいぜい、服や宝石を身に着けたときの感想くらいだ。しかも、求められるものは必ず賛美の言葉。彼女らにとって侍女はただの道具なのだ。皇宮に仕えて十数年、リーファはそのことを思い知っていた。舐めてきた辛酸を、忘れたわけではない。

それなのに、どうして――この少女はリーファらを人間扱いしてしまうのか。側室の心得として、それもしないようにと言ったはずなのに。

「えぇ、えぇ。構いませんわ、ルイリ様」

「私達の許可を取らなくたって、お望みのままにしていいんですよ？」

セシーヌが、あまりきつい口調にならないようにそう進言した。
ルイリは苦く微笑む。確かに、彼女の性分ではしづらいことだろう。
だが、ふと違和感を感じ、リーファは首を傾げた。彼女のその笑みが、いつもよりも淡く、霞がかっている気がしたのだ。何かあったのだろうかと、リーファは口を開きかけたが――。

「では、遠慮なく失礼するよ」

涼しい声が近づく。リーファは自分の眉に皺が寄ってしまったのを自覚した。
革ではない、柔らかい素材の靴が芝生を踏み分け、ものの数歩でルイリ達が囲む（とはいえ、もちろんリーファとセシーヌは立っている）小さな卓（テーブル）に辿り着く。
主と同じ亜麻色の髪と、深緑の瞳を持つ、二十代前半の風貌をした美丈夫――ヴィンス。シェリングではあまり見かけない布で作られた異国風の衣装と、手に持った派手なつくりの仮面。筋張った、しかし武骨ではない手がルイリの隣の椅子を引き、男はそこに腰掛けた。女性用に作られたそれは、男性が座ると不自然ではないのかと思ったが――意外に様になっていることにリーファは驚く。
すかさず、セシーヌがもう一人分の紅茶の準備をし始めた。

「おはよう、ルゥ。……あぁ、薄紅の侍女殿、どうぞお構いなく」
「え？　ですが……」
「兄様、セシーヌの淹れるお茶はとても美味しいの。きっと、今まで飲んだことがないくらい、って驚くんだから」
「そうかい？　ならばお願いしようか」
「ル、ルイリ様っ！　それは褒めすぎです……！」

彼の断りを受けて一旦手を止めたセシーヌだが、ルイリから手放

しの賛辞を送られて赤面している。

「だが、私は皇宮(ここ)ではただの一芸人だ。必要以上のもてなしは要らないので」

「分かりました。では、一杯だけ、ということでよろしいですね？」

「大変結構」

「かしこまりました」

冗談めかして尊大な口調で返すヴィンスに、セシーヌは笑ってうなずき、作業を続ける。肩肘をついてくつろぐ兄を見て、ルイリが心配そうに口を開いた。

「……兄様、疲れてる？」

恐る恐るといった問いを受けて、ヴィンスはふっと愛(いつく)しむように微笑んだ。

「気遣いをありがとう、ルゥ。疲れてなどいない、私は元気だよ」

「なら……いいんだけど」

「時に、今日は随分と顔色がいいね」

「あ……実は、昨夜はよく眠れたの。変な夢も、見なくて」

「お前の安眠を邪魔するような者は現れなかった、ということか。それは良かった」

世間話をするようにそう言った青年は、そのまま何のためらいもなく妹の頬を撫でた。少し調子を乱されていたリーファだが、仰天して瞬時に血相を変えた。

どさくさに紛れて、何をやっている！

「仮面のお方！　いくらご兄妹と言えども、それを知るのは私達含

めごく少数のみですのよ！？　これを他の者が見たら誤解をしましょう、どうぞ軽薄な態度はお控えなさいませ！」

「はは、私としてはそう見られても構わないのですが。皇太子殿下の側室と旅芸人の一瞬で儚い恋。話題性としては充分でしょう」

あまりの言い種に、リーファはくらりと眩暈がした。兄であることを主張するくせに、誤解を招くような発言と行動ばかりだ。

「言うに事欠いて……。何を寝ぼけたことを仰いますか、それが困ると申し上げているのです！　噂好きの後宮の方々にはすぐに広まりますわ。それで被害をこうむるのは他でもないルイリ様。無駄な心労を増やすおつもりですの？」

「とんでもない。なるほど、どうやら私と後宮の姫君達との価値観は違うようだ。ならば控えておく方が、賢明ですね」

ヴィンスは、ルイリの白桃のような頬に伸ばしていた手を己の方に戻しながら、朗らかに微笑む。春風が穏やかに吹き抜け、二人分の亜麻色の髪を揺らした。

「来てくれたのは嬉しいけど……大丈夫なの？」

「何がだい？」

「フローラ一座として、他の方のところでの興行もあったと思うんだけど」

「演目を一番始めにしてもらって、早々に引き上げて来た。なに、気にすることはない。私はあの一座の一員というわけではないし、ずっとお前のことが気になって、招かれた宴でもとんだ失敗をしてしまったくらいだからね」

ルイリの兄を自称する男は晴れ晴れとした笑顔を浮かべて、簡単に言ってのける。リーファはぴくりを眉を上げた。

「失敗の責任を女人に転嫁しますの？　紳士的であるのは物腰だけのようですわね、仮面のお方」
「おやおや、これは手厳しい。だがもっともなお言葉だ。私としたことが、配慮に欠けた言動をしてしまった」
「……そうあっさり反省なさるのも、いかがなものかと存じますが」
侍女の余計な横槍なのだから、少しは言い返してもいいだろうに。
こほんと一つ咳払いをして、別の話題に言及した。
「本日お持ちになっている仮面は、昨日とは違う代物でございますのね」
「さすがは紺青の侍女殿だ、観察眼が非常に鋭い。仰る通り、これは先程の興行の宴で褒美としていただいたもの。主催者という公爵夫人にね」
そう言って手の内でもてあそぶ仮面。全体を銀色に塗って、両目の部分は紅い線がぐるりと縁取っている。側頭部には花やら羽根やらがどっさりと飾られていて、昨日のものよりも些か派手だが、それも彼の美貌に華を添える道具となるに違いない。
仮面を手渡されて興味深そうにしげしげと眺めているルイリの上から、リーファは側頭部の飾りに目を止めた。
（あの羽根……大陸でも希少と言われるオオルリワシのものじゃないかしら。手に入れるのに随分と苦労したでしょうに……その公爵夫人はそこまでご執心なわけね）
ふんだんに飾られている花も、王侯貴族が好んで使う高価なものだ。ここまでくると、宝石がないのが不思議なくらいである。彼はよほど気に入られたらしい。

半ば感心して息を吐いていると、ルイリが問うように首を傾げたのが目に入った。

「ご褒美が仮面なの？　どうして？」

「さて、私にも分かりかねるが……彼女は私が従来の仮面を外して、新しいものにつけかえるのを期待していたようだね。まぁつまりは、素顔を見たかったということだ。……あぁ、ありがとう薄紅の侍女殿。いただくよ」

「えぇ、どうぞ。……それにしても、随分回りくどい方法を使うんですね。素直に『顔を見せてくれ』って言えばいいのに」

セシーヌが紅茶を淹れた白いカップをヴィンスの前に置いてから、盆を自分の腕で抱き締めるようにして呟いた。彼はカップを持ち上げて香りを愉しみながら、「ごもっともですね、薄紅の侍女殿」、とうなずく。透き通った液体から立ち昇る湯気が、春先の青空に吸い込まれていく。

「他のご令嬢からは申し出られましたよ。断ったけれども。……あぁ、これは美味しい」

紅茶を一口含んだヴィンスは、形よく口角を引き上げて味わうように目を閉じた。セシーヌは恐縮して礼を言いながら、話題をずらすことなく口を開く。

「断るんですか？　意外……」

「そうせざるを得ない、という方が正しいかな。お分かりとは思うが、私の瞳の色もルゥと同じで無二の色なのでね」

のんびりとした言葉を受けて、セシーヌとリーファは同時にはっと息を呑んだ。

失念していた。海の底のように深い碧の色。今ここにいる少女と青年が持つ双眸の色は、大陸中の誰も持ちえぬ色なのだ。むろん、髪の色も。少なくともシェリング皇国内にはいない。こうして二人並んでいるのも奇跡に近いかもしれない。白皙と碧、そして亜麻色。繊細な美貌も、よく見ればそっくりだ。やはりこの二人は兄妹なのだろう。

「だから、目を仮面でお隠しになっていたんですね」

「目は当然のこと、髪の色も隠していますが？」

「髪、ですか？」

ヴィンスの発言に、後輩の侍女は蜂蜜色の瞳を瞬かせて首を傾げた。リーファも同様だ。彼は頭に衣（きぬ）を被（かず）いているわけでもないし、括っていても髪色は瞭然である。その様子で、一体どこが隠しているというのだろう。

彼は二口ほど紅茶をすすり、まだ湯気の立つカップをかちゃりと置いた。深緑の瞳を穏やかに緩め、言葉の一つ一つを紡ぎ出す。

「仮面で目を覆い隠すと、どうしても目の方へ注意が向いて髪の色はさほど印象に残らない。亜麻色と口に出せば不審になるが、たかが一芸人の髪を注意深く観察する人間などいないでしょう。実際、ご婦人方は私の瞳の色を知りたくて仕方がないようで、髪には毛ほども興味を示さなかった」

なるほど。わざと仮面を着けることで、『目が隠れている』という印象を抱かせ、他への注意を疎かにさせる。結果、瞳の色は隠され、髪の色は記憶から薄れる、ということか。

そこまで考えて仮面を装備していたことを知り、リーファは少し感心する。伊達（だて）や酔狂だけで着けていたわけではないとは。

「そうしていた方が謎めいていて、神秘的に見えるのも利点」

前言撤回。

「それに、私とルゥの瞳が同じ色だと知れたら、のちのち厄介になるだろうし」

「でも……そんな理由は、言えなかったでしょう？　だったらどうやって断ったの？」

「さぁね。お前の想像に任せるが、穏便に済ませた、とだけ言っておこう」

不安と疑問をない交ぜにしたルイリを安心させるように片目をつぶる男に呆れ返り、リーファは深々と溜息を吐いた。

「『厄介になるだろうし』……？　そう思うのでしたら余計に、あのような行動はよしていただきたいですわね、仮面のお方」

「はは、容赦のないお言葉だ。……ところで、紺青の侍女殿。『仮面のお方』という呼び名は、いささか他人行儀なのでは？　私のことは、ヴィンスと呼んでいただいて構いませんよ？」

「貴方様との関係は他人以外の何でもないと、私は思いますわ」

「これはまた、手厳しい」

端整な薄い唇に苦笑を滲ませて、ヴィンスはおどけたようにのけ反って見せてきた。

「そちらこそ……『紺青の侍女殿』、『薄紅の侍女殿』などという仰々しい呼び方をおやめになってはくださいませんの？　それこそ他人行儀ではありませんか」

「……あぁ、それは、……確かに」

リーファにしてみればもっともな反論だったのだが、ヴィンスは予想していなかったようだ。驚いたように目を瞠り、先程とは打って変わって歯切れ悪そうにうなずく。しかしすぐに口端を吊り上げ、ニコリと微笑んでくる。

「ですが……私が貴女方の名を呼ぶのは、やはりやめておくことにしましょう。この呼び名は私だけが使うものだ。私が呼んでいるとすぐに分かる」

「……」

つまりはその時だけこちらを独占しているとでも言いたいのか――リーファは鳥肌を押さえることに必死だった。

ゆえに。

「……魂の末端を無闇に縛ってしまうのは、本意ではないしね」

ヴィンスが苦笑を滲ませて呟いたその言葉を、聞き取ることはできなかった。

「兄様……？」

「うん？　あぁ、いや何でもないよ？　……おっと、もうこんなに太陽が高い。そろそろ、私は次の興行に行って来ないと」

「そうだったの？　引き止めてごめんなさい」

「何を言うんだい、ルゥ。ここに留まっていたいと思ったのは私だ。お前が謝る必要はないよ。……そういえば、私に聞きたいことがあったのではなかったか？」

椅子から立ち上がり、仮面を着けようとして――ふと、ヴィンスは思い出したように呟く。ルイリが「あ」と声を上げ、リーファも思い当たることがあり瞬きをした。

――私、兄様に会ったら……聞きたいことがあったの

月光の満ちる部屋の中、頼りなく瞳を揺らしながら、彼女はそう言っていた。もしかしなくとも、だからヴィンスはここへ来たのだろうか。

言葉を探すように沈黙していたルイリは、少し困ったように微笑んで首を振った。

「ううん……いいの。大したことではないから」

嘘だと、リーファはすぐに分かった。そんなに壊れそうな笑顔で言われても、説得力がない。

ぎこちない笑みを持続する妹をまじまじと見つめて、ヴィンスは一つ溜息を吐いた。

「何も私に対して遠慮をすることはないだろうに……。よく考えてみれば、私がクアレ・ローディン（ここ）に来た理由も言えず終いだったな」

すると唐突にぽんと手を叩き、破顔一笑。

「よし分かった。また今夜、お前の部屋に行こう」

「……はっ？」

何のためらいもない、むしろ名案だと言わんばかりに告げられたその内容に、リーファは声を上げずにはいられなかった。

今夜……今夜部屋に行くと、そう言ったのか、この男は？

「な――にを、仰っているのです！　侍女の前で堂々と逢瀬の宣言をするお人がどこにいらっしゃいますか！」
「ここにいますが、何か？」
「そういったお言葉は要りませんわ！　これ以上の譲歩をすることは、流石にできません！　夜の後宮に早々殿方の出入りを何度も許してしまっては、付け上がる連中が何人いることか」
「あぁ、そういった件ならばご心配なさらず。全く痕跡を残さずに去って行きますから」
「どうしていらっしゃる前提で話が進んでいますの？」
「駄目なのでしょうか？」
「答えは分かりきっていますでしょう！　あぁもう、セシーヌ、あなたからも何か言いなさいっ」
「え、えぇっ、私ですか！？」

半ばぽかんとして一方的な舌戦を見守っていた後輩に水を向けると、予想だにしていなかったのか過ぎるほどに驚かれた。もはや当人（イリ）（ル）は付いて行けないようで、目を白黒させて視線をうろつかせている。

リーファとしては、一人ではこの男を抑えられそうになかったのでセシーヌの援護射撃が欲しかったのだ。

それだけに、次いで彼女の口から飛び出した言葉は、リーファを更に驚愕させるには充分な効力を持っていた。

「では、あの……もしルイリ様が、兄上様とお話になる時間がほしいのなら……夜、少しだけでも時間を設けることはできませんか？」
「……は？」

先程と同じような声を上げて、セシーヌの提案の意味を咀嚼（そしゃく）するのに、数秒。

夜に時間を設ける――それはつまり。

「あなたねぇ……そちらに加勢してどうするの!?」

深く息を吸い込んで、その吸った息の分大声を絞り出す。セシーヌが肩を竦ませたと同時に鴇色の髪がふるっと揺れた。

「フィ、フィレル女官が憤るのも承知の上ですがっ……、ルイリ様はこちらに来てから、私達以外とはあまり関わりのない生活でしたし！　ましてやご兄妹ですし！　お話できる機会が増えれば、心労も軽減されるのではないかと……」

「だからって、夜に指定することはないでしょうっ。ルイリ様にあらぬ悪評が立ってしまうかもしれないじゃない！」

「そこは私達が上手く立ち回れば、どうにか誤魔化せると思うんです。問題が起こる前に、それこそ本当にお客様扱いにしてしまえば！」

怯んだように見えて一歩も譲らない。リーファは大きく肩を落として、頭痛をおさえるべく片手で頭をおさえた。

正論なのだ、彼女の言うことは。全て筋が通っていて、感情論だけというわけでもない。だが、リーファは元筆頭女官として、規律を破ってはいけないと自戒していた。旅芸人の青年を皇族の側室の部屋に（しかも夜に）招き入れるなど、ご法度だ。

しかし、しかしである。

セシーヌの言う通り、主の精神的な負担を減らすには、悔しいが彼と話をすることは有効であって……。

「……ルイリ様。兄上様とお話をしたいと、思われますか？」

「そ、それは……できることなら……。でも、リーファ達に迷惑をかけるなら、別に……」

「分かりましたわ」

主の希望を聞いてしまえば、リーファが拒む余地もなくなるではないか。彼女の主はルイリだけなのだ。

「でしたら、日が沈んで夕餉を済ませたのち、三十分だけ時間を設けましょう。仮面のお方、それでよろしいですわね？」

「宴が食い込んでいようとも、いくらでも演目の順は調整できる。全てはルゥの思し召すままに」

ヴィンスが首を縮めて受け答えた瞬間、僅かに曇っていたルイリの表情がふぅっと明るくなった。

「リーファ、ありがとう……！」

文字通り花のような笑みを向けられて、リーファも自然と頬をほころばせる。

「礼を言われることでもありませんわ。侍女が主の望みを叶えずして、どうします」

その言葉を聞き届けたか否か、ヴィンスは一度、大きく手を打ち鳴らした。

「決まりだ。では、本日の夕刻、月が夜空で光はじめる頃に部屋に訪れることにしよう。私は行くが、ルゥ、また後で逢おう」

「えぇ、兄様」

同じ色彩の瞳が交錯しあい、穏やかに微笑み合った。

そのまま立ち去るかと思われた青年は、どういうわけかリーファ

を手招きしている。不審に思ったが、ルイリには聞かれたくない内容なのかと思い、リーファは彼のもとまで歩み寄った。

「紺青の侍女殿、本当にありがとう。私もルゥに話さなければいけないことがあってね。どうすればいいか悩んでいたところだ」

「そのことでしたら、礼には及びませんが」

「しかし驚いた。てっきり私は断られると恐れていたのに」

「ルイリ様は私の大切なお方ですもの、危害がないのであれば会話程度は構いませんわ」

「ふむ、なるほど」

顎に指を添えて、少し考え込むように首を傾げてくる。

「――随分と、ルゥを優先して考えているようだ」

何かが混じる。低く落ち着いた声の中に、何か引っかかるものが、混じった。

リーファは軽く瞠目して、長身の青年を見上げる。太陽を逆光にしたヴィンスが笑っている。笑っているはずだ。だが、なぜだろう、彼の表情が見えない。

「不思議だとは思いませんか。なぜ貴女がそれほどまでにルゥに心を砕き、守り、憂いを取り除こうとするのか」

「は？　だから、それはルイリ様が、私の主であるから……」

「本当に、それだけだと思っていますか？」

穏やかな口調そのままに、彼の声はリーファの言葉を遮った。

「突如現れた、正体も知れぬ少女に施す親切にしては、あまりに常軌を逸していると考えたことはないですか？」

「何を……」

「それとも、疑問にも思わぬままそうしてきたのでしょうか。男の好奇な目に触れさせてはならない、穢してはならない――そう思いながら」

「当然でございましょう。貴方とてそう思っていらっしゃるのではないですか、……ヴィンス様？　大切な妹君ですもの」

くすり。

青年の微かな笑声が鼓膜を震わす。

「その通りだ。私は妹を何よりも、誰よりも大切に思っている。だからこそ……リーファ＝フィレル殿。あえて問おう」

――名、を。彼の声に名を、呼ばれた。

それを認識した瞬間、リーファの背筋に、悪寒に似た冷たい感覚が駆け上る。まるで、見えない手で足元を絡め取られたような――あの皇太子以外に感じたことのなかったその感情は、畏怖。

嫣然とした微笑を崩さないまま、長身が近づく。身構えようとするが、素早く腕を掴まれる。右耳に吐息を感じた。

「貴女が……いや、私を含めた皆が、それほどまでにルゥに執着する理由を……考えたことがおありかな？」

リーファは、意図せず身震いをしかけた。耳元に吹き込まれた氷のような吐息と、囁かれた低く耽美な声音に。

（何ですって？　――理由？）

その言葉の真意を問い質そうとリーファが口を開く前に、ヴィンスは屈めていた背を伸ばして社交的な笑みを浮かべていた。

微笑む瞳は、側室の少女と同じだと思っていた。だが違う。彼女の双眸が海の底の碧ならば、彼の双眸は深淵の森の碧。鬱蒼とした枝葉（えだは）が幾重にも重なり、本当の感情が隠されているようだ。

「分からぬのなら……それで良いのですよ。そうあるのが最も幸せだ。貴女にとっても、ルゥにとっても――ね」

リーファは咄嗟に、そう言って立ち去ろうとするヴィンスの道を塞ぐように、彼が行く方向へ立ちはだかった。ルイリとセシーヌからは、他愛ない会話をしているように見えるだろう。こちらを気にする様子はない。

作りものじみた――いや、実際に作った微笑を顔に貼りつけている青年を睨み、リーファはゆっくりと口を開く。

「貴方は……何を知り、何を企んでおられるのです？」

「企む？」

剣呑な問いかけも、表情一つ、口許一つ歪まない。気味の悪いほど整いすぎた笑顔を見せたまま、彼は喉を震わせた。

「はてさて、何のことやら私にはさっぱり」

リーファの障壁などまるであってないように、ヴィンスはすっと横をすり抜ける。

「ただ一つ事実であるのは……私は貴女（ルゥ）の主の兄であり、これまで

もこれから先も、絶対的な味方である。それだけですよ」

それが答えなのか。

尚も言い募ろうとしてリーファは振り返るが――そこには、銀塗りの仮面で目を覆った一座の青年が立っていた。

「薄紅の侍女殿、とても美味しい紅茶をありがとう。あれほど美味なジャリス茶は初めてだ。紺青の侍女殿、その椅子に座ることを許していただいたこと、心より感謝申し上げる。……亜麻色の君、またとない夢のような時間を共有できたこと、実に光栄に思う。願わくばお礼の証として、皆様のたおやかな指先に口付けをしたいところだが……またの機会とさせていただこう」

口端を薄く引きあげて、誰もが溜息をつきそうになる微笑を浮かべて。

「では、私はこれで」

貴族の子息も顔負けするほど優雅な礼をして、一人の芸人はくるりと身を翻して庭園を立ち去っていく。

彼の名残のような、春にしては少し涼しげな風がひゅうっと吹き、植えられた色とりどりの花々が、惑うように揺れた。

46. 油断ならない男（後書き）

何だか色々てんこもりな回でした……（笑）
時間がないので、言いたいこと諸々は活動報告に詰め込んでおきますっ。

ここまで読んでくださった方、お気に入り登録までなさってくださった方、本当にありがとうございます！

47．不必要な、（前書き）

※作中で少しだけ、動物に危害を加えるシーンがありますが、決してそのような行為を推奨するつもりはございません。

47. 不必要な、

きりきりと、弦を極限に引き絞る。

それ以上伸びなくなるまで強く引いたのを確認してから、遥か前方で動く物体へ焦点を当てた。相手がこちらに気づく様子はなく、呑気に歩いている。そして幸運にも、狙いやすい位置で止まってくれた。

万全だ。確実に対象の息の根を止めることができる。即死は間違いない。

「……」

呼吸音すら殺し、その手に凶器を持って佇む、一人の青年。

森の冷気を孕んだ微風が金色の髪を揺らす。長い前髪の奥から、刃物のように鋭い紅の双眸が覗いている。同じ構えのまま、崩れぬ長身。冴え冴えとした美貌。その青年から発せられる空気に触発されるように、木々が少しざわついた。

しばらく沈黙を置いて——肩の力を抜く。そのまま、彼は体勢を立て直すこともなく、右手を放した。

ひゅん、と空間を切り裂く音が遠くなり、半瞬後に鈍い音と独特な動物の鳴き声が重なった。

辺りが水を打ったように静まり返る中、彼——イアンは幾本もの樹木の向こうへ目を凝らす。左手に握る弓をすっとおろした。

「死んでいない。悪あがきをする可能性もある、注意して捕獲しろ」

言いながら右手を上げると、近衛団が迅速な動きで射かけた獲物へと走り寄る。ややあって、近衛の一人がこちらへ手を振ってきた。命中、の合図だ。

その瞬間、息をひそめていた背後の群衆が、わっと歓声を上げた。

「お見事っ！」

「命中だ！」

「素晴らしい、さすがは皇太子殿下だ！」

「あの距離で命中とは！」

「素晴らしい、素晴らしい！」

「天才と呼ばれる所以（ゆえん）も分かる！」

重ねられる称賛の嵐。割れんばかりの拍手が耳に突き刺さる。イアンは無言でやり過ごしていく。

こういう時、本当に王族や貴族というものは厄介だ。些細なことでこれでもかと褒めそやし、手を叩き、言いたい放題。特に最後の声。何が言いたいのかさっぱり分からない。

（たかが一度矢を射ただけで、所以（そんなもの）まで分かられてたまるか）

イアンは息をつき、持っていた弓を傍仕（そばづか）えの侍従に託した。

しかし、不機嫌な表情を浮かべていては外聞が悪い。微笑を作り、軽い礼を述べていく。

「素晴らしい腕前です、イアン皇太子殿下！　何と鋭い矢の一閃、目に焼きついて離れませんとも！」

二番手である隣国ヴィクトールの王太子が、目を輝かせながら賛辞を述べてきた。確か、自分よりも二つ年下だ。

高貴な身分を感じさせる、歳の割には線の細い身体。質の柔らかそうな鋼色の髪と、紫紺の双眸。イアンと同じ時期にその座に就いた彼は、どうやらこちらに親近感を抱いているようで、よくこうやって話しかけてくる。協調性がないと自覚しているイアンとしては、どうして親近感を持たれたのか甚だ疑問なのだが、貴重な外交の対象をむげにすることはしない。

「ライティス殿、過分な褒め言葉を感謝する。だが、あれは運良く風が吹いただけだけのこと。私の実力などではない」

「はは、遠き異国の地には『運も実力のうち』、という言葉がございます。しかし困りましたね、これでは私はもちろん、他の方々もこれ以上の成績は出ないでしょう」

「まさか。貴殿が私より先にしてしまえば、それこそ私の出る幕はない。だから一番手に回してもらったというのに」

「何と。そのように卑下をされては、こちらの立つ瀬がございませんよ！」

ご謙遜なさるな、と王太子は笑う。イアンも同様に笑った。上手く笑えたかどうかは、定かではないが。

某（なにがし）かの貴族が労いの言葉をかけてくるのを適当に受け流しながら、狩猟用の鋼の手甲を外す。イアンが歩を進めるごとに、まるで蜘蛛の子が散るように、貴族達は道を譲る。目の前には自然と道が形成されていった。

向けられる畏怖と羨望の眼差しが鬱陶しい。聞きたくもない会話を、耳が勝手に拾ってくる。

「いやはや、何と素晴らしい……。皇太子殿下は弓の腕も卓越されておるようで」
「あの距離から、俊敏な緋鹿(ひじか)の動きを封じるとは」
「まこと、あのお方には欠点というものが見当たらない。完璧という言葉は殿下のためにあるのでしょうや」
「ご自分の才能を無闇に自慢せぬ謙虚な部分も、御歳からは考えられないほど落ち着いていらっしゃる」
「皇帝陛下も、これほどご立派な後継ぎがいるとなれば、いつでもご隠居ができますなぁ」

何度もこの祭典に招かれている古参の貴族が声を大にしてそう言うと、辺りに明るい笑いが広がる。

（くだらない……）

そう思っていても、表情に出るほどイアンは愚かではない。だが、ふと頭痛と眩暈を覚え、一度だけ強く目を閉じた。
すると、その群衆に囲まれるようにして設(しつら)えられている簡易の輿(こし)から、低い笑声が聞こえた。

「皆、あまりこれを調子に乗せないように」
「皇帝陛下？」
「我が国の皇太子ならば、一発で仕留めなければ意味があるまい。……そうであろう？」

問いかけが誰に向けられたのか。それを証明するように、イアンの目の前から一気に人垣が消えた。左右に別れていく人の道は、自然と一人の男のもとへ導かれていく。
簡易とはいっても、充分豪奢な造りの輿に座っている壮年の男。こちらを射抜く夕日の双眸が、傲慢な光を宿している。尊大な口調

で答えを求めてくる皇帝に対し、イアンは口許に薄い笑みをはいた。

「仰る通りでございます。今、私もそれを悔いておりました。私など、陛下の全盛期の頃に比べれば足元にも及びますまい」

ただ従順にうなずくのは性に合わないので、さりげなく嫌味を折り混ぜた。ジルダスはふんと鼻を鳴らして、面白くなさそうに目を逸らす。

だが、その意図は本人にしか伝わっていないらしい。貴族達は余分な肉の詰まった頬を揺らしながら、昔話に花を咲かせはじめた。

「確かに、若かりし陛下の弓の腕は素晴らしかった」だとか、「一撃で獲物を仕留める雄姿は今でも鮮やかに思い出せる」だとか。

中身のない会話を、よくもまぁ続けていられるものだ。

イアンは持続する頭痛を悟られぬよう、浅く息を吐いて前髪を掻き揚げた。その時だった。

「そういえば……弓の腕がお上手だったのは、あの方もそうでしたなぁ」

一人の貴族が、顎に手を当てて呟いた。思い出したように。

いくら自分の中で律しても、その言い回しに反応して、動きを止めてしまう。

「おぉ、おぉ、そうでしたな」

「いやはや懐かしい。まるで魔法をかけているように、矢が獲物へと一直線であった」

「そうだ。私が見た中で最も優れた弓の使い手は、あの方だったや

もしれませぬ」

「皆様……！　だからといって、今この場でそのような話題を……」

弓に矢を番えようとしていたヴィクトールの王太子が、気色ばむ。

だがお喋りな貴族の口が、塞がれるはずがない。

言葉が妙に耳の奥で反響する。あらゆる方面から聞こえる声が、毒のよう。

「今の殿下に負けず劣らず、大変有能な方でありましたなぁ」

ひどい頭痛だ。吐き気がする。

「有能というお話は、大陸の隅々にまで伝わっておりましたからな」

無意識に、手の平に爪を食い込ませた。ぶつ、と、皮膚が裂ける音がした。

「皇国のために、まさしく身を粉にして働かれるお姿は忘れることができぬというもの」

意図せず剣呑な【気】が漏れる。あの光景の断片が、よみがえろうとする。

「それが、あのような事態になってしまわれて……」

聞くな。耳を傾けるな。何も感じるな。

何も思い出すな。

「……まことに、あの件は残念でございました」

感情を――心を、殺せ。

揺らぐモノなど、要らない。

死んでしまえ。

辺りがしんと静まり返った。流れる空気は、どんよりと重い。

そんな中、フッと空気が揺れる。視線を上げると、皇帝が笑っていた。緋色の双眸を挑戦的に光らせて、こちらを試すように。さぁ、この状況をどう対処する、とでも言いたげだ。

イアンも微笑した。その笑みを見たものがいたならば震え上がりそうな――酷薄で残忍な微笑。顔立ちが整っているだけに、凶悪さの増す微笑みだった。

「だからと言って……憂えてばかりいられないことも、また事実」

ゆっくりと口を開くと、その場にいた全員の視線がイアンへと向いた。

紅の瞳を真摯に煌かせ、有能で怜悧な皇太子ならではの、涼しい笑みを浮かべて見せる。

「あの方の意志を継いだ以上、私はこの身も命も惜しまず、皇国の繁栄に尽力する所存でございます。皆様も、そうご理解いただければ」

感嘆の声がそこここで聞こえ、どこからともなく拍手が起こった。先程漂っていた不穏な空気など微塵もない。誰も彼も、改めて決意表明をした皇太子に尊敬の眼差しを向けるばかりだ。

「それでは陛下、私はこれで。他の方々も、引き続き狩りをお楽しみになられれば幸いです」

未だ気遣いの色を見せる同世代の王太子に礼を言い、型枠通りの口上を述べて。

イアンは、自国及び他国の要人が一堂に会する森林園に背を向けた。

†　†　†　†　†

クアレ・ローディン内の森林園の面積は広い。

その広さは敷地全体の八分の一を占め、紅煌宮や桃香宮の庭園とはわけが違う。使用用途は主に、余興の狩りや果樹栽培。紅煌宮の裏手に作られているが、徒歩で向かえば日が暮れる。

イアンは皇宮へ戻るため、会場の脇にある厩（うまや）に辿り着いた。革靴が地面を踏みしめる。

すると、そこに繋がれている数ある馬の中でも取り分け目を引く、体躯が黒毛で鬣（たてがみ）だけが銀色の馬が、ゆっくりと首をもたげた。星の瞬かない夜空のような漆黒の瞳がイアンをとらえる。突出した聴力は、主の足音を聞き分けたらしい。

更に歩み寄っておもむろに手を伸ばすと、黒馬は鼻をそこにすり寄せる。甘えるような仕草に、軽く笑みを漏らした。

「大人しくしていたか、オルク」

問うと、軽い嘶き（いなな）が返ってきた。是、ということなのだろう。

イアンは柵に繋いでいた手綱を解き、愛馬をゆっくりと自分の方へ引き寄せた。従順な馬は、蹄（ひづめ）の音を響かせる。

（これで、狩猟大会の参加はこなした）

黒い背に鞍（くら）を取り付けながら、淡々と考える。ちなみに、この一連の動作は本来、下働きの小間遣いがやるべきなのだが、イアンはそれを拒んでいた。他人に、オルクの扱いを任せてはいけないのだ。

（午後には、これといって重要な会談もなかったな……今のところは義務を果たしたか）

午前中の宮内会議も滞りなく進んだ。内容は普段と変わらない儀礼的なものだ。

その後、義務づけられている狩猟大会に出場するため、この人工の森林園へ赴いた。大会の内容は案外大雑把で、森林園で放牧している緋鹿を、より遠くの距離からより正確性をもって射かけた者が勝者である、という単純なものだ（それらの緋鹿も、大会のために用意される）。明日に開かれる武道大会とは違い、本当に貴族の暇つぶしのために作られたようなもので、勝者にもこれといった褒美はない。つまり、長居は無用ということ。

とはいえ毎年、狩猟大会の後の貴族達の談合に顔を出すのも習慣

だった。いつどこでどのような情報が流れているか、それを把握するのもイアンの仕事のうちである。
が。今回は、全く気が乗らなかった。普段以上に、森林という空間に居たくなかった。

それもこれも、ここに足を踏み入れた途端に視界へ入る、この色のせいだと分かっているのだが。

「……」

足を踏み入れただけで太陽の光を遮る、幾重もの枝葉を睨みつける。
全てのものを隠し、隔て、その奥にある真意を見えなくさせる色――深緑。

その色は、否が応にも昨晩の男を連想させた。

48. 忠告に次ぐ忠告

「何かの間違いではないのか。……俺は皇帝ではない」

いきなり飛び出した的外れな呼称に、イアンは呆れた声で応答した。

いや、実際は――呆れた振りをした。

聞いたことがあったからだ。その響きを、その呼び名を。

耳の奥で、少女の軽やかな声が響いたのは、きっと錯覚だ。

くすっ、と静かな笑みが漏れる。異国の装束は闇に紛れず、月夜に鮮やかに浮かび上がる。イアンと同等の長身痩躯。亜麻色の髪を持った男は、深緑の双眸を不敵に細めた。窓辺から注がれる月光が、イアンとヴィンス、二人の長い影を床に伸ばした。

「落胆するほど、額面通りに受け取るのだね。皇太子を皇帝だと勘違いして会いに行くほど、私は愚かに見えるのだろうか？」

男はますます笑みを深めていく。空気がぴりぴりと緊迫感を増した。普段から【気】を使って場の空気を支配するイアンにとって、その変化はすぐに察知できた。

少女の微かな寝息が部屋に広がる。イアンは緩慢に腕を組んだ。

「『暁の皇帝』……それが、俺を指しているとでも言いたいのか」

「勿論だ。君以外には有り得ない」

疑いの余地がないほどに潔く、彼は言い切った。濃色の緑の視線

は、常にひとところに留まらない。ゆらりゆらりと彷徨って、月の光を妖しく映す。

「……根拠が分からない。その確信はどこから来る？」

「ふむ。予想以上に頭が固いようだ。そもそも私とこうして話している時点で、君の心のどこかでは、これが然るべき邂逅なのだと分かっているのだろうが」

床を踏む音が聞こえない。まるで水の上を滑るように、亜麻色の男は室内を移動した。

「これぱかりは、理論で説明できるものではない。感覚だ」

「随分と、不確かな根拠で物を言う」

「おや？　案外饒舌（じょうぜつ）のようだな、皇太子。無口だ無愛想だと思っていたが……それは飾りの仮面だったのか」

イアンよりも十倍饒舌と推測される男に言われても、説得力がない。

「おっとすまない、話が脱線した。私もここに長居するつもりはないし、君とルゥを同じ空間に置いておくのは非常に腹が立つから、さっさと済ませよう」

ヴィンスは台詞とは裏腹な、実に爽やかな微笑を唇に刻む。同じ空間も何も、彼女はとっくに眠りの底だ。

「と、言ったはいいが……私が話せるのはこの程度かな。ある程度の手がかりは伝えたつもりだ。しかし……君の方は接触が薄いようだな。それが意図してなのかそうでないのかは、私に計り知れるものではないが」

この男は、本当にイアンと話している自覚があるのだろうか。一方的に訳の分からないことをべらべらと、頼みもしていないのによく喋る。

一瞬だけだが……傲慢な語り口の声を思い出した。目の前に眠る彼女であって彼女でない、あの不可解な存在を。

「……うん？　何だか不愉快なことを考えていなかったか、皇太子？」

「これと言っては、何も」

「そうか。疑り深くて申し訳ない。妙なところで勘が働く性分なものだから」

「それよりも、肝心なことへの回答を」

一度口を開くとしばらく喋り続ける。彼の特性をようやく理解したイアンは、ヴィンスが言葉を続ける前に素早く口を開いた。森林に似た瞳が、すぅとイアンに向けられる。その双眸はいつもさざなみのように揺らめいていて、表情を判別するのは困難だ。

「貴殿は俺に会うのが目的と言った。ならば、その意図は何だ。何が理由で俺に会った？」

「あぁ、何だそれか」

まるで、そのこと自体はさして重要でもないと言わんばかりの口振りだ。これ以上自分の調子を狂わされるのはごめんだが、それでもイアンは表情を歪めざるを得なかった。

「そう眉間に皺を寄せないでくれ。納得いくように答えるから」

くっくっと、ひとしきり押し殺した笑いを続けた後、ヴィンスは

亜麻色の髪を揺らして顔を上げた。

「私が君に会った目的はね。敵はなるべくなら少ない方がいいと思ったからだ」

「敵？」

「そう」

ちなみに、先程からイアンを射抜く視線には、敵意以外の何物も感じられない。

「気に入らない存在であるにせよ、その辺りは弁えておかないと。あちらで手一杯な状態の時に、君と小競り合いをしている場合ではないからね」

棘のある返答だ。不服を唱えようとする前に、彼はつと視線を落とした。その先にいるのは、寝台に横たわって眠る一人の少女。

「……事態が、起こってからでは遅すぎる」

イアンもつられてそちらに視線をやる。

華奢な身体と繊細な美貌。碧の双眸を隠す青白い瞼。淡い桃色の唇は半開きで、密やかな呼吸が漏れている。存外長くここで会話をしているが、目覚める様子どころか、声に反応して唸る様子もない。長い睫毛は月明かりの影響で、光の粒子を撒き散らしたように煌いて見えた。

寝台に広がる亜麻色の髪は見るからにくせがない。そしてそれは見た目通り、イアンの指に抵抗なく絡まるのだ。艶やかで流麗な、極上の絹糸のように。

「違(たが)えるなよ」

低い声が突然耳に入ってきて、イアンは弾かれたように顔を上げる。いつの間にか、深緑の双眸はイアンに向けられていた。自分が思ったよりも長く、彼女に視線を送っていたことに愕然とする。

「決して、違えるな。己の感情の――己の意志の在り処を。たとえ本物の自分が暗黒に埋もれていようと、凍りついていようと、それが自分自身だ。偽りを真実にするな。でなくば」

ふぅっ、と。

深緑の瞳が、何か風を帯びたように強い灯（ともしび）を宿した。

「後悔するぞ」

抑揚をつけて話すヴィンスを凝視しながら、イアンは静かに呼吸を繰り返した。

この男の声は、どこか妙だ。音の一つ一つに質量があるような、声が波長となって周囲に広がるような感覚さえ覚える。

重みのある静寂が満ちた。それを、イアンは自らの声で破らんとする。

「……一つ確認をさせてもらえるか」

「仰せのままに」

「貴殿は、皇国（われわれ）にとって害を為す存在ではない。それは確かか？」

「君の選択次第だ。そういった存在でない、という絶対の約束は不可能だな」

微笑んで紡がれたその言葉は、意味不明だった。それではまるで、疑ってくれと言っているようなものだ。

「言っておくが、貴殿が皇国に……ましてや皇帝陛下に刃を向けようものなら、俺は即刻貴殿を切り伏せる」

「……尊き皇帝陛下の御為に、か」

独り言のような声量で呟いて、ヴィンスはゆるりと視線をイアンに合わせた。口許に浮かぶのは、苦笑か嘲笑か。

「あまり粋がるなよ。中身のない忠誠心は見苦しいだけだ」

どこまでも口の減らない男だ。冷酷の代名詞たる皇太子を相手に、ここまで渡り合うのは片手の指でもなおあり余る。イアンは片方の口の端を引き上げた。

「好きなだけ喋りに喋って、どの言葉が真偽かも分からない男に言われる筋合いはない」

深緑の瞳が、初めて剣呑な光に煌く。ヴィンスは空気に溶けそうなほど小さく、もっともだな、と言った。

そして彼は唐突に、「さて」と声の調子を変えて身を翻した。

「そろそろ私は一座の馬車に戻るとしよう。きっと皆も私の帰りを待ち侘びている」

「……大層な自信だな」

嘆息しながら、イアンは無意識に握っていた拳をほどく。

「話は終わったのだから、君も早く戻るといい、皇太子。というよ

り、これ以上ルゥの安眠妨害をするのは私が許さない」
「最後にもう一つ」
自分はどうなんだ、と問い詰めるのはやめることにした。どうせ飄々とかわされるに決まっている。
「今までそちらが言ってきた、回りくどい暗号めいた言葉は、とりあえず俺に伝えたかったことだろうと推測している」
「そこまではっきりと評価されると、いっそ清々しくあるものだ」
「だが、思わせぶりな発言をされ、焦点だけをぼかされるのはこちらとしては気分が悪い。……独自に調べを入れても構わない、ととらえていいのだろうな？　ある程度の手がかりを与えられた、俺の権利だと思うが」
「……皇太子殿下は、実に慧眼であらせられる。そこまで先回りをするとは感服だ。確かに、次期賢帝と言われるだけの頭脳は持っているのだろう」
その言葉は嫌味のようだったが、響きに馬鹿にしたものはない。薄闇に佇む端整な青年は、夜風のような笑声を漏らした。
「……まぁ、書庫にあるようなものでは、おいそれと目ぼしい結果は得られないだろうがね」
端整な面立ちが、月影に淡く沈む。その一瞬、彼の唇を彩った微笑は、哀愁に似たものだった。
「＜暁の皇帝＞の情報ならともかく……。私達の記録は、表社会からは抹消されているだろうから」
そして、最後にイアンに一つ忠告をしてから、己の側室と同じ髪

色と瞳を持つ喰えない男は、夜闇に紛れて歩き去って行った。

†　†　†　†　†

実際、彼の言ったことは真実だった。

イアンはあの後、紅煌宮にある書庫で夜通し調べたのだが、それらしき資料は見つからなかった。一度、全ての本を渉猟（しょうりょう）したことがあり、関連のあるものだけを選び取るのに苦労はしなかったが、結果は芳（かんば）しくなく。気づいた時には、窓から朝日が差し込んでいた。

（もし、俺がどう手を回しても得られない情報なら、あんな思わせぶりな発言はしなかったはずだ）

いや、この上なく性格の曲がった者ならば、嫌がらせと称してそれもやりかねないが。……その説を否定できない部分もある。

とりあえず、誰もが手に取ることのできる書物には何も記されていないことは分かった。今から暗部に調査をさせたとして、この短期間であの男の素性が分かるとは思えない。それは直感に似たもの。

（となると、残る道は……）

一度だけ行ったことのある、あの場所しかないだろうか。少々の面倒はあるが、得るものがあるかもしれない。

そこまで考えて、イアンはこの案件の解明に取り組んでいる自分を嗤った。一体何を躍起になっているのか。あんな男の戯言など、放っておけばいいのに。

だが彼に言った通り、含みのある発言をされたままにしておくのは性に合わないのだ。元より探求は嫌いではないし、ここまで来れば見つけるまで諦めないことにする。

心当たりのある場所はもう一つ。本当なら今すぐにでも行きたいところだが、どうも頭痛が続き、身体もだるい。適当に仮眠を取って、今夜にでも赴くとしよう。

「飛んだ茶番でございましたねー、皇太子殿下」

鞍の安定を確かめ、飛び乗ろうとしたその瞬間、イアンの耳にゆったりとした声が滑りこんだ。

紅の瞳が鋭利に輝く。イアンは腰元の剣に手を添え、俊敏な動きで振り返った。

が、声の主の正体を知ると、浅く息を吐いて臨戦体勢を解く。

「……ヴェルガか」

低く呟くと、くすくすという笑声が密やかに届いた。軽快な足音とともに、ひょろりとした体躯の青年が森の奥から姿を現す。濃い茶髪と赤銅色（しゃくどう）の双眸、浮かぶ笑みは常以上に軽薄。

会場にいた時と寸分違わぬ笑みを浮かべている直弟（じきてい）を、イアンは

冷ややかな目で見返した。

「何の用だ」

「うわ、ご挨拶。誰も見送りに来てくれないイアン兄さんを不憫に思って、健気な弟(おれ)がこうして来てあげたのに」

「それは、ありがたいことだな」

毒のない微笑で毒を吐くヴェルガに対し、イアンはどこまでも感情のこもらない声で受け答えた。

「あれ、レンは？」

「皇宮周辺の警備に就かせている」

「そうなんだ。大丈夫なの？　最も信頼を置く護衛を傍に置かなくて」

「暗部ならそこらじゅうに、頼まずとも控えている。それに……俺は誰も信頼していない」

ヴェルガの声を聞くたび、自分で声を発するたび、微細な頭痛が身体を襲う。

「ふぅん」

弟はただ一言、興味深そうに相槌を打っただけだった。だがその瞳に宿るものは、興味の色だけではない。探ろうとするような眼光が鬱陶しく、イアンは赤茶の双眸を睨み返した。

不穏な空気を感じ取ったのか、傍らの黒馬が鼻を鳴らす。どうもこの馬は、気配を敏感に察知しすぎるきらいがある。イアンは首の辺りを叩いて安心させてやった。その様子に、ヴェルガがおかしそうに噴き出した。

「相変わらず、オルクはイアン兄さんが大好きだな。もしかしたらお互い様？　でもそれで言ったらオリスが黙ってないよねー」
「下らんお喋りに付き合う義理はない。お前はさっさと会場へ戻れ」
言いながら、今度こそ黒馬の背にひらりと跨った。ヴェルガは依然、最寄りの木に身体を預けて笑っている。向こうが立ち去る気がないのならこちらが去るだけだと、イアンは馬の腹を蹴ろうとするが。
「ねぇ兄さん。何でわざと外したわけ？」
それを阻むように、一字一句、はっきりと発音された問いに、思わず動きを止めた。高くなった目線からヴェルガを見下ろす。
「何のことだ」
「しらばっくれ方があからさますぎ」
一体何がそこまでおかしかったのか、ヴェルガは噴き出してしばらく笑っていた。ようようその笑いをしずめ、赤銅の瞳を挑発的に光らせる。
ヴェルガはイアンが会場に行く前からずっとそこにいた。各国の貴族達と談笑していた様子を見かけたが、会話をする必要はもちろん、目を合わす必要も感じなかった。
その弟が、一度だけ目の色を変えた瞬間。それが、イアンが緋鹿を射た時だったのだ。
「射る直前にあれほど均衡を崩すとか、素人でもありえないでしょ。そのままいけば即死だったはずなのに……中途半端に射られちゃ、逆にあの緋鹿がかわいそうだよ」

表面だけを聞けば、まるで獲物である緋鹿に情けをかける、慈悲深い言葉のようだ。その実、イアンに対する非難だった。

「イアン兄さんは、いっつもそうだ。本気を出すことを厭う。どこかしら不完全な皇太子であろうとする。それがあの人への気遣いだって思ってる」

笑みを浮かべていた精悍な面立ちが、少しずつ歪んでいく。ヴェルガは笑おうとしているようだが、顔に浮かんだものはそれとは程遠いものだった。

「俺は、兄さんのそういうところが大嫌いだよ」

頭の鈍痛が強くなった。手綱を強く握り、つい先程爪で食い破った皮膚を、もう一度抉る。鋭い痛みで脳内が覚醒した。

「……だから、どうした」

口から零れた声は、予想以上に冷えていて。

「兄さん……」

「お前がどう思おうと、関係ない。俺は誰にも気遣いなどしていない。本気を出そうと出さなかろうと、事実が変わることはない」

そう、変わらないのだ。

どれほど有能を演じようとも、怜悧と讃えられようとも。

「俺が……人殺しである事実はな」

罪の刻印が消えることはない、永遠に。

「……ゼスト兄さんならともかく、俺がイアン兄さんを諭せるとは思ってなかったから、仕方ないか」

張り詰めた表情をしていたヴェルガは頭を振り、濃茶の髪を揺らした。赤銅色の瞳は苦笑の色に染まっていた。

「弟のくだらない愚痴は聞き流してよ。俺、そろそろ射る番だろうから会場に戻っとく。あ、でも一つだけ忠告」

身を翻しかけた弟は、手を叩きそうな勢いでまたも振り返った。忠告、という単語に若干気分を悪くしながら、イアンは弟を見下ろす。

「あの会話を持ち出したのはギルゼム大公だよ。それだけは覚えといて」

にやり、その言葉が当てはまりそうな笑みを唇に浮かべて、ヴェルガは告げる。イアンも鼻先で笑って応じた。この弟のもたらす情報は、親切とお節介の区別がつきにくい。

黒馬の腹を蹴る。漆黒の毛並みを持つ馬は声高く嘶き、森を去りたいと強く思う主を乗せて疾走した。

†　†　†　†　†

一頭の馬が黒い風のように走り去っていくのを、その場に残った濃い茶髪の青年は見送る。幾本もの木々の向こうに、黒い巨体と、その上に跨る鮮やかな金糸が見えなくなるまで。

「事実が変わることはない……か」

今の今まで、軽薄で挑発的な光を宿していた赤銅の瞳には、物悲しげな表情が滲んできていた。ふっと浅く息を吐いて、彼は首の辺りを軽くさする。

「でもさ。……兄さんは間違ってるよ」

本来ならば当事者に言わなければならなかった台詞を、青年は今になってようやく呟く。

「俺は心配なんだ。そんな空っぽな状態だったら……いずれは大事なものまで見失ってしまうんじゃないかって」

語りかける声に、応答する声はない。

「誰も……今のイアン兄さんを、望んじゃいないさ」

流れる風が言葉をさらい、奏でる梢が言葉を消していく。

忠告と呼ぶにしては哀しい響きを含んだ彼の言葉を、聞くものはいなかった。

４８．　忠告に次ぐ忠告（後書き）

少し時間軸が左右してしまいました。お分かりかとは思いますが、前半は「４３．」の後のお話です。
ここまで読んでくださった方、お気に入り登録までもなさってくださった方、本当に本当にありがとうございます！

※大変申し訳ありませんが、十月中旬までしばらく更新を停止いたします。詳しくは活動報告に。

４９．　思わぬ遭遇（前書き）

大変長いこと活動を停止していて申し訳ありませんでした。
ようやく更新です。

※ちょっと痛い表現がありますので、ご注意のほど。

49. 思わぬ遭遇

『かように心を逸らせて、如何(いかが)した、主(あるじ)』

その低い声は、風か、森か、はたまた空か。森羅全てが発しているかのように、四方から声が響く。

「別に」

不可思議な声に応答したのは、熱のこもらない若い男の声。恐らく、青年と言える年齢の。

『まさか、弟君の言動を気になされておいでか。きっとあれは主を思っての』

「うるさいぞ。俺がいつ、意見を許した」

『これは出過ぎた真似を致した。その慈悲深い心でお許しを』

「無駄口を叩く前に、……さっさと、森を抜けろ」

『……先程も思ったのだが、主よ。僅かに呼吸が乱れておいでだ。よほどお疲れになっているように見受けられる』

正体の見えぬ声に、気遣いに似た響きが含まれた。青年の反応はない。

『完全に否定をしないということは、やはりどこかしら御身の調子が悪いのであろう。紅き宮(みや)へお戻りになった方が』

先程とは違った沈黙が流れる。言葉をなきものとして扱うという

よりも、その言葉を受けて思案するような間。

「……いや――」

†　†　†　†　†

「ではルイリ様、部屋の準備が終了次第お呼びいたしますので。もし万が一何かございましたら……」

「えぇ、大声を出すから安心して」

「お願いします。……じゃあ、ゆっくりとお過ごしください」

「ありがとう」

にっこりと笑って礼を言うと、侍女二人は複雑そうな表情で互いに顔を見合わせていたが、仕方ないと言わんばかりにその場を去る。

ルイリはふっと肩を落とした。

ヴィンスが興行へ行くと言って立ち去ったあと、ルイリたちはその場で簡単な昼食を摂った。開放感溢れる庭園で食事をすることもあまりないだろうから、というリーファの進言のもとだ。

食事を済ませてしまえばいよいよ本格的に今後どう動くかを考えなければならず、セシーヌが宴に参加するかなどを提案してくれた

のだが、実はあまり気が乗らなかった。

そこで、一か八かで、少しだけでいいので一人にしてくれないだろうかと頼んでみた。

当然猛反対をくらったが、最終的にルイリの意志を尊重してくれる結果となった。夜のヴィンスの訪問のために部屋を整える間、ルイリはここに残ることになったのだ。

必要以上に歩き回らないこと、危険が及ぶ場合には叫び声を上げることを厳命されて許された。

むしろ交渉には一時間以上かかると思っていたので、これほどあっさりと許可が下りたことに拍子抜けしたくらいだ。

理由は、少し思うところあって、とぼかした。

リーファとセシーヌはいつも気遣ってくれるが、必要以上の干渉はしてこない。それならば、と引き下がってくれた。

「……」

椅子から立ち上がり、そろそろと足を進める。祭典の最中とは思えないほど、長閑（のどか）で穏やかな空気が満ちている。

碧色の双眸をすぅと細め、ルイリは目を閉じた。

頬を撫でる春風、柔らかい陽だまり、木の葉が絡まりあって奏でられる梢――。まさしく、自然の恩恵。何と清々しい。

ルイリは無意識に口角が持ち上がりそうになったのを、慌てて押し留めた。

「違う。……駄目だわ」

言い聞かせるように呟いて、ふるふると首を振った。
彼女の周りにはわざとすぎるほど苦しそうな空気が取り巻いている。優しげな眉を下げて、詰めていた息を吐き出した。緩くまとめられた亜麻色の髪が柔らかく揺れる。

ぎゅっと、瞼を更に強く閉じる。ルイリはうずくまる手前まで華奢な身体を丸め、しばらくその体勢のままでいた。
呼吸を十から十五ほど数えた頃、ゆるゆると瞼を押し開ける。覗いた碧の瞳には明るい表情はない。深い双眸は憂いを浮かべていた。

（……どうして、私は）

思考の海に浸かりそうになったルイリの耳に突如、がさっという不自然な物音が聞こえた。
驚いて身体を揺らし、音の発信源を探るように辺りを見回す。まさか、こんなところに人がいるのだろうか。人気（ひとけ）がないからということで、リーファがここを選んだと言っていたのに。

ルイリは息を殺しながら植え込みで作られた道を歩き、さっきまでいた場所の真横に位置する開けた空間に出た。

「！」

そこにあったのは、樹齢百年はあろうかという一つの大木。幹は太く、枝を広げ、葉を茂らせて堂々と根を張っている。
だが彼女の目を引いたのはその大樹ではない。大樹の脇に静かに佇んでいる一頭の黒馬だった。
雄雄しい体躯は漆黒の毛並みに覆われ、瞳も同色。ただ一点、風に僅かに揺れる鬣（たてがみ）だけが、月の光が糸になったような白銀である。
毛並みと同じ夜闇の瞳は、凪いだ表情でルイリをじっと見つめてい

る。

（立派な馬）

手綱がどこかに括りつけられているわけではない。ルイリは歩み寄るが、嘶（いなな）くことも鼻を鳴らすこともしない。恐れているわけでもなさそうだ。よほど人間に慣れているのか、それとも。

「あなた……ずっとここに？　ご主人様はいないの？　まさか、この樹の守護霊とか」

肯定なのか否定なのか、黒馬はぶるると鼻を鳴らした。

結局どうなのだろう、と首を傾げた彼女の疑問に答えるかのように、蹄を鳴らして数歩歩く。今まで馬の身体に隠されて見えなかった樹の向こう側が見え、そしてルイリは目を瞠った。

足がある。投げ出された腕がある。

人が倒れている。

ルイリは血相を変え、我を忘れて駈け寄った。

大丈夫ですか、と声をかけようとしたその直前、倒れている人の顔を見て口を閉じる。

正確には、眠っている人の、であったが。

遠くから見ても確信できた長身。葉の合間からの木漏れ日が、金髪に影の濃淡をつけている。瞼を閉じた姿は造りもののように精巧であるのに、上下する胸が彼を血の通った人間であることを裏付けた。

瞼の奥には、一度見たら忘れられない鮮やかな紅が隠されている

のだ。

心臓が、突然強く脈打った。

どうして彼がここにいるの。

「もしかして殿下があなたの――、って……え？」

背後にいるであろう黒馬に話しかけようとして振り向いたルイリだったが、そこに馬はいなかった。それだけではない。彼（性別は分からないが一応）が歩いて刻んだはずの蹄の跡が、地面に一つも残されていない。

まるで幻であったかのように。

必然的に、ルイリは眠る彼と二人きりになってしまう。

どうしよう。

こわごわと距離を縮めて、ルイリは横たわる長身の真横にすとんと腰を下ろしてみた。

傍にいても彼が起きる様子はなく、自分の存在が邪魔になっていないことにほっとする。頬に当たる風を受け止め、改めて彼の寝顔を見つめた。

眠っていてもなお損なわれない、整った容貌と毅然とした雰囲気。けれどもやはり起床時よりも無防備に感じる。礼服の襟がはだけられて覗く鎖骨と薄く開いた唇がいやに官能的で、一人胸を高鳴らせてしまう。

彼が眉根を寄せて微かに唸る。何か悪い夢でも見ているのかもし

れない。
ルイリは吸い寄せられるように、端整な寝顔に手を伸ばした。
指先がほんの少し、金の前髪に触れた時――。

カッと瞳が開かれた。紅の光がルイリを射抜く。
息を呑んだ瞬間、伸ばした手首が掴まれて有無を言わさず引き寄せられた。

視界を席巻する若い男の顔。太陽の光を受け、輪郭が金色に輝く。
血のように紅い瞳に見下ろされて、ルイリはようやく自分が地面に転がされたのだと知った。

「――っ！」

頭から冷水を浴びせられたように、全身が冷えていく。

殺意。
彼の目に浮かんでいるのは、紛れもなくそれだった。

目の前の対象を抹殺せんとする、純然たる意志。猛禽類のごとき視線に貫かれ、身体が硬直する。狂気めいたぎらぎらとした紅の眼光は、ルイリをただの獲物としか判別していない。
腕が、上空に振り上げられる。そこに握られる鋭利な閃き。
悲鳴が喉で絡まり、それでも身動ぎをすると、手首を締めつける力が強くなった。

「っあ……！」

ぎり、と指が食い込む。あまりの痛みに声が漏れ出る。

ルイリが目を閉じたその時、彼の瞳に理性が戻った。

空気を裂く音と微かな金属音が重なった。

来るだろうと覚悟していた鋭い衝撃が来ず、ルイリは恐る恐る目を開ける。眼前には、切迫した表情をした青年がいた。

「……お前、どうしてここに」

呆然とした掠れた声で問われた。それはこちらが聞きたいことである。

しかし、ルイリはそれを思うことも忘れていた。

複雑に歪む紅の双眸。そこに先程までの凶暴な色はなかった。だが端整な面差しは、太陽を背にしていても分かるほど苦痛に塗れている。薄い唇からは絶えず荒い息が吐き出され、こめかみには汗が伝っているようだった。

彼がこれほど取り乱しているのを見るのは初めてだ。ルイリはしばらく言葉が出ない。

「……どうなさいましたか、殿下？」

ためらいつつも口を開くと、紅の双眸が、まるで夢から醒めたかのように見開かれた。手首の圧迫感がなくなる。

イアンは彼女をぐいと引き、起き上がらせてくれた。「怪我はないか」と消え入るような声で確認され、何とか「はい」と返した。

――と。

彼の手が近づき、ルイリの髪に触れた。

「っ！？」

全身に電流が走ったように背筋が伸びる。イアンが怪訝そうに眉をしかめたが、どうにか誤魔化す。動くなよ、と低く命じられて、こくこくと首を縦に振る。

何も不思議なことではないのだ。倒されたときに乱れた髪を直してくれているだけ——そう思いながらも、ルイリはどうしても意識せざるを得なかった。

長い指がゆっくりと、ルイリの絡まった髪を梳いていく。思った以上に繊細で丁寧な手つきだ。時折、熱い指先が地肌に触れる。そのたびに強くなる心臓の音を押さえこむのに精一杯だった。

赤くなった頬を悟られないために、ルイリは下を向いた。それでも毛先は目に入る。

ルイリの髪は、昨日のように複雑に編みこまれているわけでも、綺麗に巻かれているわけでもない。両の横髪を一房ずつ後ろに回し、雫形の髪飾りで留めただけである。ほとんど背中に流しているので、梳くのは楽だろう。

だが、見るうちに艶を取り戻していく亜麻色の髪を見て、彼の手腕に感嘆する。セシーヌやリーファには及ばないが、それでも充分上手い。

慣れて、いるのだろうか。

ちくりと胸が痛んだ。

他の女性にもこうしているから。

例えば——あの、黒髪の美姫に。

思ってもみない考えと痛みが自分の中で生じ、ルイリは驚く。他の女性？　そんなことはルイリが気に留めることではない。自分がそんなことを思う必要はない。

微かに芽生えた『何か』は、ルイリの中で強く押さえつけられる。

そうこうしているうちに彼の指先は離れていた。

「あ、ありが――っ、殿下！？」

礼を告げようとしたルイリだったが、突然イアンの身体がぐらりと前のめりに傾いで彼女に迫ってきたので、中断されてしまう。

驚いて硬直したルイリを尻目に、彼はゆっくりと、華奢な肩口近くまで顔を項垂れてくる。身を引きかけたが、身体の横に腕がつかれ、どうしようもなくなる。

「あ、あ、あのっ……！」

は、とイアンが呼吸をするたびに、熱のこもった吐息が彼女の白い耳元を震わせた。びくんと身体が震え、背筋の痺れに直結する。

場所が屋外であるため（そうでなくても信じがたい光景だが）、とにかくルイリは慌てた。

（お、落ち着かないと。殿下は正気じゃないのよ。まだ夢うつつかもしれないし、もしかすると熱が……そう、熱があるんだわ！　そうじゃないとこんなに熱いはずが……）

はた、と動きを止める。

（……熱い？）

ルイリは少し頭を冷静にしてみる。

服越しに伝わってくる体温。耳に届く不規則な呼吸、上下する肩。

「まさか、御身の具合が？」

問うてみると、彼はぴくりと身体を反応させ、おもむろに離れた。そのままだるそうに大樹の幹に身体を預ける。こめかみから汗がにじみ、呼吸は速い。見るなと言うように、ルイリから顔を背けた。

「殿下？」

「……何でも、ない。さっさと、どこかに行け」

何でもないわけがない様子で言われて、立ち去ることができようか。ルイリは彼の傍まで歩み、そっとしゃがんだ。

「あの、失礼いたします」

断りを入れて額に手を伸ばす。イアンは煩わしそうにそれを振り払って立ち上がろうとする――が、すぐに力が抜けてしまったようで、身体を幹にもたれさせる。

その隙に、ルイリは素早く金の前髪を掻き分け、額に手をあてがった。そして目を見開く。

「熱が、おありに……！」

それもひどく高い。これほどの高熱では動くことも辛いだろう。

焦るルイリを見て、気だるげな紅の瞳が眇められた。

「別に支障はない。仮眠も取ったから、すぐに下がる」

「そんな……今のを仮眠とは呼べません。できるなら、お部屋に戻って安静に」
「お前には関係ない」
「ですが、ここで無理をしてしまえば悪化なさいます」
「……案外しつこいな」

少し意外そうな調子が声に含まれる。そんなことを言われたのは初めてで、ルイリ自身も驚いた。
けれど今はその評価にあやかろうと、更に食い下がる。

「体調を崩されたままでしたら、他の皆様が心配なさると思います。どうか、ご自愛ください。殿下は皇宮になくてはならない方なのですから……」

ルイリは、それを何の他意もなく口にした。

何の他意もない、つもりだったのに。

彼女がそう言った次の瞬間、紅の双眸が、冥く澱んだ。

４９．　思わぬ遭遇（後書き）

痛いっていうのはあれですよ。リアルな痛さのことですよ（いらんわその補足）。

ｗｅｂ拍手でメッセージを下さった方々、活動報告で返信をしていますので心当たりのある方はどうぞ。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました！

50. 白昼夢（前書き）

※若干の流血表現ありです。

50．白昼夢

フッと、イアンが吐息のような笑声を漏らす。
そのとき彼に浮かんだ表情は、一体何だったのだろうか。

「なくてはならない――か」

自嘲か、侮蔑か、諦念か、それとも哀惜か。
あまりにも様々なものが混じり合い、ルイリには判別もつかなかった。
紅の瞳は輝きがなく、濁っている。唇をいびつに曲げ、笑い声とも溜息ともつかぬものを吐き出し、彼は低く沈んだ声を出した。

「あいつらにとってなくてはならないのは、皇太子だ。　俺じゃない」
「……あ……」

思わず凍りついた。ようやく、自分の言動が何と浅薄だったかを思い知る。だが、口を開く前に、彼は手を振る。

「下手に謝るな、むしろ的を射ている。皇族というのはそういうものだ。重視されるべきは地位と能力。個人は必要ない」
「私は、そんなつもりで言ったわけでは……！」

思わず声を上げてしまって、胡乱な視線が向けられる。発熱していてもなお鋭い眼光に気圧されながら、ルイリは続けた。

「ただ、その、……皇太子殿下ではなく……。あなた様自身が、必要な存在だと思ったから」
「詭弁だ。お前に何が分かる」

暗い。
鮮やかなはずの紅が、暗黒に侵されている。

「誰も、俺を必要とする者なんていない」

違う――そんなことはない。
そう叫んだとして、一体どうして彼が信用するだろう。たかが小娘の根拠も何もない主張を、どうして聞き入れるだろう。

深い深い闇の底へ沈んでしまっている彼の心を感じた瞬間、ルイリの胸はどうしようもなく掻き乱された。

喉に何かがせり上がってくる。
その衝動のまま、息を吸った。

あぁ哀れなり　泡沫姫（うたかた）
己の想いを告ぐ術（すべ）は失せ　瞳から零るる真珠の泪

あぁ惨めなり　泡沫姫
邪（よこし）まな人間の欲望が　清らな姫へ魔の手を伸ばす

あぁ愚かなり　泡沫姫

自らの願いを捻じ曲げて　唯一（ゆいつ）の真実（まこと）はあぶくの朝へ

遺された者の慟哭（なげき）も知らず
潰えぬ悲しみすら　海に還して

あぁ　哀れなるかな　泡沫姫

†　†　†　†　†

始終どこにいようが命を狙われてきたイアンにとって、今回の襲撃ほど察知しやすいものもなかった。
愚かにも額へ伸ばしてきた手を捻り上げ、芝に押し倒すなど、彼にしてみれば造作もないこと。そのまま靴にある仕込み刀を抜き去り、息の根を留めようとした。

水晶の鈴の音が、痛みを訴えてくるまでは。

本能的な狂気が去り、白い首筋が赤く染まる前に短刀を止めることができたとき――
イアンの胸の内に生じたのは、確かに安堵だった。

哀愁に満ちた歌詞とは裏腹に、紡ぐ旋律はどこか苛烈ささえ感じた。まるで何かを訴えかけようとするような、強い音調。しかしあくまでも透明な歌声が、梢の音と相まって辺りを包みこんでいく。

身体を苛んでいた気だるさと頭痛がなくなった頃、呆然としていたイアンは、はっとした様子で彼女の手首を掴んだ。

ぷつりと歌声が途切れる。碧の瞳が視線を合わせてくる。思わず頭が熱を帯びた。つい先程までのものとはまったく違う、怒りという熱を。

「何故だ――何故、お前はそうやって唄う！」

今しがたルイリが唄った唄よりも遥かに激しい語調で、イアンは詰問した。いや、その勢いたるや、もはや糾弾と言っていい。

ルイリは碧の瞳を揺らがさず、その初めて見る彼の一面を受け止めた。

「俺が、いつ唄えと命じた。この程度の熱でどうにかなるほど俺は脆弱じゃない！　どうして自分の能力（ちから）の異端さを自覚しない？　その場限りの情に流されるならそれでいいのかっ」

「……私ができることは、これしかありませんから」

切れ長の瞳が見る間に険しくなる。ルイリは一度ふるりと睫毛を震わせて、ぽつぽつと続ける。

「これ以外には、何もできませんから。せめて……少しでも苦痛を取り除ければ、それで……」

「綺麗言だ。お前の言うことは、世間知らずの吐く戯言に過ぎない」
「えぇ、分かっています。――それでも私は、こういうことしか言えないのです」

引っかかりを覚える言葉に、イアンは片眉を跳ね上げた。深い碧の双眸は、イアンに叱り飛ばされて萎縮しているというより、何か他のことに関して沈んでいるように見えた。

「お前……？」

違和感の正体を問いただすべく口を開いたと同時に、彼女の華奢な身体がいきなりぐらりと傾いだ。すかさず二の腕を捕えて支える。亜麻色の髪の合間から覗く小さな唇から、ふっと吐息が漏れる。

「申し訳、ありません……少し……目眩が……」

ルイリは僅かに苦しそうにして顔を伏せた。ますますイアンが眉間に皺を寄せ、おいと声をかけようとした瞬間――、

ニィ、と。

桃色の唇が裂けそうなまでに吊り上がった。

「愚かな男」

冴えた氷のような声が、イアンの耳に滑りこんだ。

瞠目し、咄嗟に身動きが取れない彼を知ってか、くっくっという

押し殺した笑いと共に細い肩が揺れる。そのまま、彼女はイアンを見上げる。

顔にかかった艶やかな亜麻色の髪を、優雅な指先が後ろへ払う。海の底の色の瞳に浮かぶ、あからさまな嘲笑の色。気味が悪いまでに整い、艶然とした笑み。

「この娘が真に恐れるものを知りもせず、一方的に罵声を浴びせるとは。己を中心にしか考えられぬ、なんとも利己的な男よなァ」

傲慢な語り口も、独特な口調も、忘れようもない。

忘れられるはずがない。

「お前っ――！」

「ふふ、どうした？　感動的な再会に言葉も出ぬか？　驚くことはない、これの望んだ結果だ」

「望んだ、だと？」

「いかにも」

クスクスと、楽しそうに、愉しそうに、少女は――少女の形を象った何らかは笑う。

「わらわが現れたときこそ、この娘の願い、望みの具現。優しい小鳥は……己の宝玉を捧げることを躊躇わぬ。――あぁ、そうそう」

全てを見透かすように囁いたあと、何か重大なことを思い出したように呟いた。

「どうせわらわをこの娘の名で呼ぶつもりはないのであろ？　お主らにとっては、『呼び名』という記号があった方が便利のようだの。

わらわのことは、そうさなァ……」

細い指先を顎にあてて真剣に悩む素振りを見せ、彼女は愉快そうに笑みを浮かべた。

「アラルナ、とでも呼ぶがよい」

「……アラルナ？」

眉根を寄せて反復するイアンを見て、彼女は、……アラルナは、満足そうにうなずいた。

「うむ、それでよい。これから先、お主と顔を合わせる機会も多くなるやもしれぬしのう」

「何だと」

「おっと、あまり詮索するでない。真実も事実も、後々明らかになるもの。今、無闇に暴こうとしたとて……」

アラルナはうっとりと目を細め、白い繊手を滑らせてイアンの頬から顎へと這わせる。

「それは醜い悪あがきというものよ」

首筋に、鋭い痛みが走った。爪を立てられたらしい。

彼女は手を己の口許まで持って行き、細い指先にこびりついたイアンの血を、舌でちろりと舐め取る。瞬時に指先の赤い穢れが消え去った。

厳しい表情を崩さないイアンへと、アラルナは歩み寄る。妖しく嗜虐的な笑声が漏れた。

「お主はただ、この短き愉悦をありがたく受け取っておけばよい。

だが、ゆめゆめ忘るるでないぞ？」

ひらりと手をひらめかせ、自分の胸元を軽く押さえて、彼女は嗤う。碧の瞳を艶麗と濡れさせて。

「この娘の身も、心も――？白き唄？さえも。はじめから全て、わらわのものだ」

勝利の確信に満ちた言葉。イアンは舌打ちして、彼女の両肩を荒々しく掴む。

「どういう意味だ、……っ」

強く問おうとしたその瞬間。

彼女の瞳の中の感情が劇的に変化した。妖艶な表情は、一瞬にしてぼうっとしたそれへ変わる。ややあって、掴んだ肩がびくりと震えた。

「……え、え？　あの、私？」

居丈高（いたけだか）な口調など微塵も残っていない、戸惑った声。

細い両肩を掴んでいた手をほどく。きつい視線は、まだ彼女に据えたままだ。

「何も覚えていないのか」

「えぇと……何を、でしょうか。さっき、一瞬意識が遠くなって……」

困惑しきりに忙しなく目を瞬かせていたルイリは、イアンの首筋に浮かぶ数本の赤い線を見てはっきりと目を見開く。

「殿下っ。ど、どうなさったのですか！？」

動転した様子で、さきほどと同じく白い手が首筋へと伸びた。

イアンははっと息を呑んだ。心配そうに曇る少女の顔と、嘲る少女の顔が、重なる。

とっさに、伸ばされた手を振り払う。

碧の双眸が怯えて揺れる。その瞳を見て、イアンの胸中に黒い感情が渦巻いた。それは後悔とでも言うべきなのか。

自分の中に生じたものを否定するように、イアンは目の前の少女を睨みつける。

闇に沈んだイアンを、無遠慮に引き上げようとする無垢な手。無垢ゆえに無知で――残酷な、穢れなき手。

暗がりに慣れた自分にとって、この存在は、あまりにも。

「近寄るな。――俺に、構うな」

深海の双眸が衝撃にひび割れた。

花びらのような唇がわななないて、何かを言おうとしたが結局声にはならない。差し出していた手を自分の胸元へ戻して、きゅっと握りこむ。俯いた面差しは亜麻色の髪に隠され、どのような表情を浮かべているのかさえ、分からない。

今なら、その華奢な身体を引き寄せて、己の腕の中に閉じ込めることもできるだろう。もともと、彼にはそれだけの権利があり、彼女は受け入れる義務がある。

だが、それは決して許されない。許してはならない。動いた指先を誤魔化すように、拳を作る。

俯いて直立したまま動かない側室を一瞥して、イアンは身を翻した。

『……主（あるじ）』

足早に桃香宮の庭園を突っ切るイアンの耳に、声なき声が届く。

「オルクか」

『駆けつけること叶わず、申し訳ない。よもやあの華奢な少女が、主に血を流させようとは……！』

悔しさと驚愕、そのどちらにも振り切れない声色が反響する。イアンは緩く首を振った。

「いや……お前の判断は正しい」

もし――と、イアンは推測する。

もし、イアンが首筋に傷を立てられたときにオルクが飛び出そうものなら、あの女はそれこそ瞬き一つの間にオルクを消し去っていただろう。それほどの威圧感を持っているのだ、あの存在は。

己の命を捧げる忠誠心は構わないが、犬死にされるのはごめんである。

「お前は引き続き、オリスと共に皇宮周辺の警備に戻れ。俺なら心配は無用だ」

『御意』

短く低く、了承の意が聞こえると、イアンの後ろに付き従っていた黒馬は一瞬にして姿を消した。風に紛れて駆けるそれの残滓を追い、イアンはようやく首筋を押さえる。

傷はさほど深くはなかった。あれほど細い指なのだ、全力だとしても高が知れている。だが、傷の軽度以上に疼く何かを覚えて、知らず顔をしかめた。

「泡沫姫……か」

それは、大陸ラルスヴァーナに伝わる御伽噺（おとぎばなし）の一つである。

海の種族の娘が、あるとき人間の男と恋に落ち、自らの声と尾ひれとを引き換えに二本の脚を手に入れる。だが結局それが原因で男から拒絶されてしまい、絶望の中でその身を泡へと還すという救いようのない物語。

消える直前、月の下で娘は嘆く。

『どうして人間は上辺を愛するのだろう、どうして私は人間（あなた）を愛してしまったのだろう』、と。

目に見えぬものしか愛さない、人間の愚かな性癖が生み出した悲劇。

ルイリがあの唄を唄ったのは単なる偶然かもしれない。だが、イアンを苛立たせるには充分すぎた。

彼女の存在は、イアンがとうの昔に捨てたはずの感情を呼び起こそうとする。

感情（それ）を持ったせいであれほど愚かしい罪を犯した自分が、今更その元凶を取り戻せようか。

それならば、最初から拒絶をする方が、よほどいい。

イアンは凍った光を紅の瞳に宿し、抱える胸の燻りを抑えつけながら桃香宮を去った。

彼は――気づいていても認めたくない事実だっただろうが――恐れていた。

幾年もの歳月をかけ、苦心と苦悩の末に積み上げてきた己に歩み寄ろうとする、一条の光を。

実はその己自身が、容易に突き崩せる砂上の楼閣であるかもしれないことを、疑うことすら。

しかし、彼は後に、目を背けた自分の過ちを深く悔いることになる。

あのとき少しでも、自分の変化を受け入れ、彼女に心を開いていたら。

いじらしいまでに真っ直ぐで献身的な唄声に、向き合うことができていたら。

そうしていれば、――彼女を失うことにはならなかったのだ、と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2292k/

神の愛した白い唄

2011年11月22日01時15分発行